博士論文　　2021 年度

第二神殿時代後期のユダヤ人の石切墓
－形態・分布が示すヘレニズムに対する相克

慶應義塾大学大学院文学研究科

史学専攻　民族学考古学分野

長尾琢磨

目次

序章　本研究の目的と視座　1
第 1 節　本研究の目的　2
第 2 節　ユダヤ人の埋葬から考えるヘレニズム化　3
第 3 節　本研究の構成　7

第 1 章　第二神殿時代のユダヤ人の埋葬に関する研究　9
第 1 節　第一神殿時代～第二神殿時代前期におけるユダヤ人の埋葬に関する研究　10
1　当該期の埋葬の概要
2　鉄器時代の埋葬の研究
第 2 節　第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬に関する研究　18
1　当該期の埋葬の概要
2　埋葬方法の研究
3　墓の形態の研究
4　ユダヤ地域のロクリ墓の起源の研究
第 3 節　第二神殿時代のユダヤ人の埋葬に関する考古学的研究の課題　28

第 2 章　第二神殿時代後期のエルサレムにおける埋葬の変遷　30
第 1 節　はじめに　31
第 2 節　対象遺跡　31
1　エルサレムの墓地
2　マレシャの墓地
3　アレキサンドリアの墓地
第 3 節　対象資料の年代決定について　42
第 4 節　ヘレニズム時代におけるエルサレムとヘレニズム都市のロクリ墓の比較　46
1　墓の内部形態による比較
2　墓に入るまでの構造による比較
3　考察
第 5 節　エルサレムにおける初期ロクリ墓とベンチ墓の比較　56
1　墓の内部形態による比較
2　考察
第 6 節　エルサレムにおけるロクリ墓の変遷　62
1　墓の内部形態による比較
2　考察
第 7 節　おわりに　68

第 3 章　パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布　70
—ユダヤ・サマリア地域間の事例から
第 1 節　はじめに　71
第 2 節　パレスチナ自治区における文化財管理—墓地の事例から　72
1　パレスチナ自治区における考古学的調査の状況
2　パレスチナ観光・遺跡庁による墓の調査・管理状況
第 3 節　パレスチナ自治区の墓に関する考古学的踏査　78
1　調査目的・調査方法
2　アブードの墓地
3　キルベト・クルカッシュの墓地
4　シンジルの墓地
5　アイン・シニヤの墓地
6　テル・エン・ナスベの墓地
7　パレスチナ自治区における考古学的踏査の結果と課題
第 4 節　パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布　118
—ユダヤ・サマリア地域間の事例から
第 5 節　おわりに　123

第 4 章　第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬のヘレニズム化　126
第 1 節　はじめに　127
第 2 節　第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における領域の変遷　127
第 3 節　地形、地質、居住地、街道からみる墓地の立地　132
第 4 節　前 2 世紀から前 1 世紀の東地中海岸南部地域における墓の分布　139
1　前 2 世紀における墓の分布
2　前 1 世紀における墓の分布
3　1 世紀における墓の分布
第 5 節　おわりに　158

終章　結論　160

参考文献　167

序章　本研究の目的と視座

序章　本研究の目的と視座

第 1 節　本研究の目的

本研究の目的は、第二神殿時代後期[1]においてヘレニズムに直面することになったユダヤ人が、どのようにそれと向き合い自らの文化・思想を形作っていったのかを、埋葬に関する考古学的研究によって明らかにすることである。

現在、ユダヤ教徒はイスラエルにおいて多数を占めており、外務省が提示している「イスラエル国の基礎データ」[2]によれば人口の 74%がユダヤ教徒である。また、大規模なユダヤ教徒のコミュニティがあるアメリカのように、世界各国にユダヤ教徒のコミュニティは存在している。キリスト教・イスラム教はユダヤ教と共通する背景を持っている宗教であり、ユダヤ教の影響を受けている一神教徒の人口は世界の大部分を占めているといえる。

一般にユダヤ教は律法を順守した生活を行うことが知られており、宗派によりその様相は異なるがタナハ（旧約聖書）やミシュナ、タルムードの規定を重視している。しかし、特に後者は元々口伝律法であったこともあり、その成立時期と口伝律法であった時期にはギャップが存在する[3]。そのため、現在の律法がどのくらい当時の口伝律法に則しているのかは、古代ユダヤ教に関する文献史料研究のテーマの一つとなっている。

古代ユダヤ教研究におけるもう一つの大きなテーマとして、「ユダヤイズムとヘレニズム」が挙げられる。バビロニア捕囚から帰還したユダヤ人はモーセの律法を順守する誓約の下で共同体を再建し、ユダヤ教徒としての思想や生活様式を確立させていった。一方で、アレクサンドロス大王の東征を契機としてユダヤ人が居住するユダヤ地域[4]はマケドニア王国の支配下となり、ギリシア文化の影響を強く受けることになった（ヘレニズム化）[5]。これはディアドコイ戦争の後、マケドニア王国が分裂してからも同様

---

[1] バビロニア捕囚からユダヤ人が帰還し、エルサレム第二神殿が再建されてから、ローマ帝国によってエルサレムが陥落するまでを指す。第二神殿時代は大枠の時代呼称であり、時代区分はさらに細分される（表 1）。第二神殿時代前期と後期は明確に区別されているわけではないため、本研究で第二神殿時代後期と表記する場合はセレウコス朝時代以降を指すこととする。

[2] 外務省，「イスラエル国（State of Israel）基礎データ」，令和 3 年 8 月 3 日, 2021

[3] ユダヤ教の聖典はタナハであり、これは聖書を構成する「律法」「預言者」「諸書」のヘブライ語名の頭文字をとった呼び名である。このうち「律法」が最も重要視されている。タナハ全体がユダヤ教の正典として確定したのは 1 世紀末であると考えられている。タナハの解釈や生活への適用の仕方などについては、タナハが正典として定められるよりも前からラビ（ユダヤ教の学者）によって議論されてきた。議論の内容はミクラ（朗読するもの）として師から弟子へと口伝され、その口伝律法は 2 世紀頃にミシュナとして文書化された。また、ミシュナにも記載されていない解釈や議論が後の時代にも研究され、5 世紀にはそれらすべてを含めたタルムードが編纂された。ミシュナとタルムードはユダヤ教の第二の正典として重要視されている。

[4] ユダヤ人が中心的に居住していた地域の名称は、本論で取り扱う第一神殿時代から第二神殿時代にかけて、ユダ、イェフド、ユダヤ、シリア・パレスチナなど時代毎に異なる呼称が使われている。本論では、第一神殿時代の文脈で利用する場合はユダ地域またはユダ王国、第二神殿時代の文脈で利用する場合はユダヤ地域の呼称を用いる。

[5] プトレマイオス朝、セレウコス朝の治世に受けた影響をヘレニズム化、ローマ帝国の治世に受けた影響をローマ化と区別する考えもあるが、一方でローマ帝国もヘレニズムに連なる文化体系を持っているため、ユダヤイズムに対置するギリシア・ローマの文化の総体としてヘレニズムという用語を使う場合もある。本論では、前 1 世紀半ばから第二神殿時代が終わるまでの影響をローマ化とは区別せず、ギリシア・ローマの文化から影響を受けたことをヘレニズム化と定義する。なお、影響を受けた対象が明確である場合は、例えば「セレウコス朝より影響を受けた」といったように個別に指摘する。

である。既に鉄器時代の段階で輸入土器（Gitin 2015）などがギリシア様式の物質文化として流入していたが、支配下に置かれる中で物質文化のみならず思想や文化的背景の面でも影響を受けたことは鉄器時代とは大きく異なる点である。ユダヤ人はヘレニズムに対する中でそれに影響を受けると同時に、改めてユダヤ人独自の思想・文化をユダヤイズムとして自覚していくことになった。また、ユダヤ人の中でヘレニズムを推進する派閥と伝統的な思想、生活様式を維持する派閥といった分派が生じるようになり、ユダヤ教のあり方がユダヤ人共同体の内部で議論されるようになっていった。このようなユダヤイズムとヘレニズムのせめぎ合いの結果が、前述のタルムードなどの文書化された律法に表れていることは明らかであり、よって文献史料を読み解くことで当時のユダヤ教がどの程度ヘレニズムの影響を受けていたのか検討することが可能である。そのため、このテーマも文献史学の立場から盛んに研究が行われている（Hengel 1981; Veltri 1998; Scurlock 2000; Gruen 2016）。

ユダヤイズムとヘレニズムの相克を研究することは単に歴史的事象を明らかにするだけでなく、現在のユダヤ教の再解釈にも繋がる。また、冒頭でも述べたように、ユダヤ教に連なるキリスト教、イスラム教もこの研究とは無関係であるとはいえない。古代ユダヤ教におけるヘレニズムの影響を検討することは、現在の様々な宗教の理解にも通ずるのである。このように、このテーマの研究には過去・現在を問わず宗教が強く関係していることから、それらの教典、律法書でもある文献史料に軸足を置くことは当然といえる。豊富な文献史料があるためか、現在の研究では考古資料は文献史料を補完する役割が強く、そもそも考古資料からユダヤイズムとヘレニズムの関係を探る研究の数は少ない。しかし、同時に、現在のイスラエル・パレスチナ自治区では膨大な考古学的調査が行われており、考古資料による情報も多量に蓄積されている。そこで、本研究では考古資料に軸足を置いた研究によってユダヤイズムとヘレニズムの相克を検討していきたい。それは文献史料研究の立場を否定するわけではなく、具体的な物的証拠と定量的なデータに基づく考古学的研究からもユダヤイズムとヘレニズムとの関係に対し、異なるアプローチをすることが可能だと考えられるからである。

次節では、考古資料に基づくヘレニズム化へのアプローチの仕方と埋葬の研究の有効性について述べる。

第 2 節　ユダヤ人の埋葬から考えるヘレニズム化

前節で述べたように、アレクサンドロス大王の東征を契機にユダヤ地域のヘレニズム化は進んでいくが、沿岸部や南に位置するイドマヤ地域と比べるとその進度は緩やかである。アレクサンドロス大王の死後、プトレマイオス朝がエジプト、セレウコス朝がシリア・イランを支配することになり、その中間に位置する東地中海岸南部地域は両王朝の係争の地となった。中でもフェニキアを含む沿岸部は交易や軍事的な観点から重要視されており、同時期のアシュケロンやドルに火災の跡が残されていることは、様々な将軍たちが沿岸部の領地を重要視し争っていたことを示している（Berlin 1997, 4）。沿岸部の都市は港として整備され、例えばアシュケロンでは 3 棟の巨大な大邸宅、紫色染料を製造するための多くの設備を備えた豪華な住宅地が建てられ、食卓には輸入された高級食器が並び、食料庫にはワイン用の水差しが置かれ、住民は金や銀、ファイアンス製のペンダントを身に付けていたことが発掘調査より分かっている（Berlin 1997, 5-6）。このように沿岸部は前 4 世紀頃から発展していき、それと同時に沿岸部の都市

への陸路を支える都市も発達していくことになった。イドマヤ地域のマレシャはその代表例であり、沿岸部の大きな港であったガザとの近さからアシュケロンやドルと同等の経済的・文化的地位を築いていった。

一方で、中央山地では、少なくとも前 4 世紀から前 3 世紀の間はほとんど人がいない状態が続いていた。エルサレムはユダヤ地域唯一の都市で、YHD（Yehud）スタンプが押された壺などから地域内で現物課税の徴収を行っていたことが分かっており、ある程度の都市経済が保たれていた。しかし、考古学的証拠から、エルサレムは 3 世紀を通じて小規模で物質的にも貧しかったことが示されており（Avigad 1984, 135; Magness 2012, 71-73）、出土土器をみても実用的な機能を持つ在地の土器が中心である。サマリア地域に関しても前 4 世紀の段階でマケドニア軍が配置され要塞化が進められたが（Magness 2012, 70）、物質文化としてはユダヤ地域と同様の水準である。ユダヤ地域は約 100 年間プトレマイオス朝の支配下に置かれるが、プトレマイオス朝はユダヤ人の文化には寛容であり、プトレマイオス朝の支配によってもたらされる経済制度や言語、ギリシア哲学などに対するユダヤ人の反応は好意的ですらあった（Hengel 1981, 29）。ただし、おそらく経済的な状況に加えて、清貧さを好むユダヤ教の宗教的特徴が物質文化の貧しさに繋がっていたものと思われる。考古学的な記録によれば、エルサレムの住民がより大きな物質的な繁栄を手にしたのは、前 3 世紀後半から前 2 世紀前半にかけてのことであり（Berlin 1997, 9）、考古学的情報からユダヤ人のヘレニズム化を考えるにはセレウコス朝時代以降が主となる。

前 198 年にセレウコス朝がエルサレムを征服し、中央山地の支配者がプトレマイオス朝からセレウコス朝に変わると、ユダヤ地域のヘレニズム化は強まっていった。セレウコス朝のアンティオコス 3 世はプトレマイオス朝と同様にユダヤ人の文化・宗教に寛容であり、ユダヤ人が独自の律法に従うことを容認した（Magness 2012, 68）。このような寛容な施策もあってか、プトレマイオス朝時代に増して富裕層を中心にヘレニズムに順応していくユダヤ人が増えていった（Berlin 1997, 16; Magness 2012, 93）。一方で、一般民衆を中心としたユダヤ人の間では、ヘレニズムを受け入れた祭司たちは堕落したとみなされ、これに対してユダヤ人の伝統的な文化を維持する派閥が生まれ、両者は対立関係となっていった。アンティオコス 4 世の治世になると、前 167 年にギリシアの慣習や習慣を取り入れることを求める勅令が出され、安息日の遵守、割礼などのユダヤ教の習慣が禁止された。エルサレム神殿はオリュンポスのゼウスに捧げられ、豚の生け贄や聖なる売春が行われた。これに従うユダヤ人も多かったが、伝統を維持するユダヤ人の反発は強まっていき、反乱が興りユダヤ人独立王朝であるハスモン朝[6]が成立することとなった（Magness 2012, 94-95）。ハスモン朝の成立後もヘレニズムに迎合する派閥と伝統を維持する派閥の対立は続くことになるが、例え後者であってもヘレニズムの影響を全く受けていないというわけではなく、前 2 世紀にはヘレニズムはユダヤ人と強く結びついていたと考えられる。

---

[6] ハスモン朝の成立を契機とした「ハスモン朝時代」の時代区分は大別すると 2 種類存在する。一つは、前 167 年に起こったマカバイ戦争を開始とし、もう一つは前 142 年にシモンが大祭司となりセレウコス朝がエルサレムから撤退した年を開始とする。また、考古学的時代区分ではプトレマイオス朝時代からセレウコス朝時代を初期ヘレニズム時代、ハスモン朝時代を後期ヘレニズム時代と区別し、両者を合わせてヘレニズム時代と呼称するが、この場合でも同様にハスモン朝の成立年代は分かれる。これはセレウコス朝からハスモン朝への移行が長期間に渡っており、幾度となくユダヤ人側とセレウコス朝側でエルサレムの支配権が入れ替わっていることに起因すると考えられる。

本研究では、時代区分について歴史学的時代区分（表 1）と考古学的時代区分を併用する。考古学的時代区分ではユダヤ人に対する姿勢の異なるプトレマイオス朝とセレウコス朝の区別を付けることが難しい場合があると同時に、例えば「ヘレニズム時代」とまとめた方が適している場合もあるためである。その際にはハスモン朝時代の開始は前 142 年とする。また、同時代の研究では時代区分ではなく、例えば「前 2 世紀」といった表現を用いることが多く、本研究でも考古学的な分析を行う際には「世紀」単位での区分を併用する。

表 1. 第二神殿時代の時代区分及び関連する出来事

（Lipschits and Oeming 2006; Magness 2012 に基づく）

時代区分	関連する出来事の概要
バビロニア捕囚～ペルシア時代 (前586年～前332年)	分裂王国時代に**ユダ王国**として発展したが、前586年に**新バビロニア帝国**に征服される 人々はバビロニアに捕囚されるが(**バビロニア捕囚**)、それを契機に律法順守の考えを持つようになり、ユダヤ教を確立していくようになった 前539年に**ペルシア帝国**のキュロス２世が**新バビロニア帝国**を滅ぼし、人々はユダに帰還することを許された エルサレムの破壊された神殿の修復(第二神殿)が行われたが、当時の人々は非常に貧しかった
プトレマイオス朝時代 (前332年～前198年)	アレクサンドロス大王がペルシア帝国を征服したことにより、前332年にユダヤ地域は**マケドニア**の支配下に置かれた アレクサンドロス大王の死後、遺領を巡るディアドコイの争いの中で、ユダヤ地域を含む東地中海沿岸地域についてはセレウコス朝とプトレマイオス朝が支配権を争ったが、ユダヤ地域は前198年までは**プトレマイオス朝**の領有となり支配下に置かれた
セレウコス朝時代 (前198年～前142年)	前198年に**セレウコス朝**がエルサレムを征服し、東地中海沿岸地域はセレウコス朝の領有となった アンティオコス4世による神殿の略奪やユダヤ教の律法に従うことの禁止などの行いはユダヤ人との対立を生じさせ、前167年には反乱が起こることとなった(**マカバイ戦争**) マカバイ戦争の中で争乱は続き、エルサレムの支配者は幾度も変わることになるが、前142年にはセレウコス朝から半独立しユダヤ人独立王朝である**ハスモン朝**が成立することとなる
ハスモン朝時代 (前142年～前37年)	ハスモン朝はあくまでセレウコス朝に従属しており、完全な独立王朝ではなかった 前110年、セレウコス朝がパルティアとの戦争に敗れたことを契機にヒルカノス１世は領土を大いに広げた その後、前63年までは独立王朝として勢力を広げていたが、ハスモン朝の王位争いの結果**ローマ**の介入を許すことになる 前63年にエルサレムはローマにより占領され、ハスモン家の王位は剥奪されたが、ハスモン家は反ローマ活動を行ったため、ローマは親ローマ派である**ヘロデ**をユダヤ人の王として認める 前37年、ヘロデがアンティゴノス２世を殺したことにより、ハスモン朝は終わった
ヘロデ朝時代 (初期ローマ時代) (前37年～70年)	ローマの支援を受けながらヘロデは前例のない規模の建築事業を行った しかし、これらの事業のための税制や親ローマ的な政策・行動には多くの反発があった 前4年にヘロデが死んだあとは、息子たちに領土が分割され支配された(**テトラルキー**)が、6年にはユダヤ地域はローマ帝国の属州となった ローマの統治下において、ユダヤ地域はしばらく穏やかであったが、宗教的な対立・緊張をきっかけとして１世紀の後半には暴動や反乱が起きるようになった 結果として、第一次ユダヤ・ローマ戦争が起き、70年にはエルサレムが陥落した

考古資料を見ると、セレウコス朝時代はプトレマイオス朝時代と比べて物質的に豊かであるといえる。エルサレムでは、ハンドルに刻印がされたロドス島からの輸入アンフォラが 1000 点以上発見されており、ダビデの町の発掘では 477 点が見つかっている（Berlin 1997, 17）。また、沿岸部より 2 世紀ほど遅れる形でユダヤ地域でもヘレニズム様式のテーブルウェアが利用されるようになり、現地の陶工たちが「ギリシア風」の土器を作るようになっていった（Gitin 2015, 629）。土器以外ではゲリジム山やエルサレム、エリコなどでギリシア建築の影響を受けた建築装飾が利用され始めたことが明らかになっている（Fischer and Tal 2003; 20-21）。加えて、各地域でギリシア人、フェニキア人、ユダヤ人が地域の支配を強固にするため、都市の要塞化を進めていたことが、例えばストラトンの塔やエルサレムの市壁の一部などの考古学的調査の成果から読み取られる（Berlin 1997, 24）。一方で、プトレマイオス朝よりも豊富であるとはいえ、セレウコス朝時代とハスモン朝時代の考古学的情報が多いわけではない。遺跡がテルとして後の時代に改築・破壊され層状に堆積していくため、ヘレニズム時代の遺構そのものが残存している事例は多くはない。また、同時代には都市部に人口が集中する傾向があることから遺跡数自体が少ないことも理由の一つである。そのため、これらの時代の情報は、前節で示したように大半が文献史料から復元されることとなっている。

物質文化のヘレニズム化を読み解くことについては、要塞などの建築や建築装飾、土器などからある程度可能であるが、問題点もある。ユダヤ人のヘレニズム化といった場合、それは物質文化のみならず思想・宗教・生活様式・言語・経済制度・学問など多岐に渡るギリシア文化による変化を合わせたものとなる。これを踏まえると、物質文化の変化または新しい物質文化の出現はヘレニズム化の一側面であるが、それだけではヘレニズム化ひいてはユダヤイズムとヘレニズムの関係の全体像とならないからである。要塞や市壁の拡張などの建築や建築装飾の変化から、当時のセレウコス朝・ハスモン朝の軍事的戦略や富裕層の人々の建築装飾による権威の誇示などを解釈できるかもしれないが、思想・宗教・生活様式について多くを明らかにできるとは考え難い。

そのなかにあって、土器に関してはより多くのことを読み取れるかもしれない。アバディとレゲブはユダヤ地域で輸入品・高級品が激減していることから、ハスモン朝時代になり特定のヘレニズム的特徴がユダヤ地域で拒絶されはじめたことを指摘した（Abadi and Regev 2020）。また、鉄器時代より続く系統である一つ折りランプとピットを持つ墓の共伴がエルサレム周辺で同時代に顕著になったことから、ユダヤ民族を確たるものとする文化的特徴として鉄器時代の文化を意図的に強調したとも指摘している（Abadi and Regev 2020, 260-264）。とはいえ、土器型式の変化や遺構との共伴関係などから物質文化の背景にある思想や生活様式の変化に迫ることができても、それだけではユダヤイズムとヘレニズムの関係のわずかな部分しか検討することはできない。また、土器の利用そのものがユダヤ教の律法で規定されているわけではなく、その解釈の際に文献史料と絡めた議論をすることも難しい。

ユダヤイズムとヘレニズムの関係を考古資料から考えるためには、変化や継続を考古学的分析によって捉えることと同時に、結果を文献史料研究の成果によって補い解釈することで、その背景にある思想や宗教の変化を読み取ることが必要になるだろう。このような条件を満たす考古資料として、ユダヤ人の墓が挙げられる。ユダヤ人の墓または埋葬は、三つの理由からユダヤイズムとヘレニズムの関係を考えることに適していると考えられる。

一つ目の理由は、ユダヤ人の埋葬についてミシュナやタナハのような文献史料に多くの記載が存在するからである。ミシュナには埋葬規定が記載されており、それは実践的で墓を作る際の構造や寸法、棺の

利用方法などが明確に定められている。例えば、ミシュナのババ・バトラ 6:8 では、「ある人が彼（被葬者）の家族（仲間）に墓を作るための土地を売り、被葬者と契約した人が墓を作る。彼（契約者）は墓の内部（埋葬室を指す）を四キュビット×六キュビットで作り、八本の壁龕（ロクリを指す）を作る。左右の壁に三本ずつ作り、入口の向かいに二本を作る。壁龕の長さは四キュビットで，高さは手幅で七，幅は手幅で六で作る。…（略）」[7]のような記載がある。ミシュナのオホロット 2:3 には棺の利用に関する記載がある。また、タナハにも死生観に関する描写が含まれており、ユダヤ人の埋葬研究は考古資料と文献史料を密接に関連付けて議論することが可能である。

二つ目の理由として、ユダヤ人の墓を構成する要素の多さが挙げられる。墓は他の遺構と比較して、埋葬が行われた当時の文化的要素が凝縮されやすい遺構であると考えられる。墓の形態にはじまり、副葬品（土器、装飾品など）、棺、建築装飾、人骨、言語（名前）、家族構成、死生観、宗教観など、ユダヤ人の墓から得ることのできる情報は多岐にわたる。墓は被葬者がいなければ成り立たず、その被葬者は生前の文化に基づいて埋葬されるのであり、結果的に墓に文化的要素が集約されることは当然ともいえるだろう。つまり、ユダヤ人の墓は一つの遺構でありながらその内部に様々な文化的要素を持つため、考古資料の持つ一面性の問題点を解消できると考えられる。

三つ目の理由は、十分な数の資料が第二神殿時代において継続して確認されているからである。例えば、前述の建築装飾などはその数が非常に少ない。これは富裕層の中でも特に身分の高い人々に利用が限られるということが要因であり、そのため、導き出される解釈も特権的なユダヤ人に限った内容となってしまう。一方で墓は身分を問わず利用されるものであり、例えば土坑墓と横穴墓のように、その種類や質に差異はあるが、建築装飾と比較して多くの人々の埋葬の結果が考古資料として確認されている。例えば、エルサレムでは数百基の墓が確認されており（Kloner and Zissu 2007, 30）、これは第二神殿時代の遺構の数として考えれば最も多いといえる。この点は土器も同様であり、当時の人々が必ずといっても良いほど利用する物質文化は現在に至るまでに数多く残存することになり、この資料の豊富さは考古学的分析を行う上で重要であるだろう。また、一部の特権的なユダヤ人や富裕層だけでなくより広い階層のユダヤ人を対象とした研究を行える点も資料数が多いメリットである。

よって、本研究では本章の冒頭で述べたように、第二神殿時代後期のユダヤ人の埋葬におけるヘレニズムの影響を考古資料から検討し、当時の人々が埋葬に関してはどのようにヘレニズムに向き合い、自らの文化・思想を形作っていったのかを明らかにする。次節ではこの目的を達成するためにどのようなプロセスで研究を行っていくのか概観を述べる。

第 3 節　本研究の構成

第 1 章ではユダヤ人の埋葬の変遷を明らかにするため、①第一神殿時代～第二神殿時代前期、②第二神殿時代後期に時期区分を大別したうえで概観する。合わせて、埋葬方法の変化やその背後にみられる思想や社会の変化について研究史を整理し、その課題を明確にする。

第 2 章では前章で明確になった課題を踏まえた上で、第二神殿時代後期のエルサレムにおける埋葬の

[7] https://www.sefaria.org/Mishnah_Bava_Batra.6?lang=bi，筆者訳，参照：2021 年 7 月 23 日

変遷を明らかにする。そのために、これまで考古学的調査がなされたマレシャ、アレキサンドリアの墓の情報を資料として用い、前 2 世紀及びそれ以前のエルサレムにおける埋葬とヘレニズム都市の埋葬をそれぞれ比較する。これによって、エルサレムにおけるユダヤ人の埋葬に対するヘレニズムの影響、それ以前の時代（鉄器時代～プトレマイオス朝時代）から継承された要素を明らかにすることができる。また、第二神殿時代後期にあたる約 300 年間の時間軸に沿ってエルサレムの埋葬の時間的変化を検討し、比較した結果と合わせることでエルサレムのユダヤ人が埋葬に関してどのようにヘレニズムに向き合ったのかを読み解いていく。

第 3 章と第 4 章では、より広く第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における墓の分布状況、墓の種類、埋葬方法を把握し、ユダヤ人の埋葬のヘレニズム化を考察する。まず第 3 章では、パレスチナ自治区における墓の分布の一端を明らかにする。現在、第二神殿時代後期にユダヤ人が居住していた範囲はイスラエルとパレスチナ自治区に分かれている状況であり、イスラエルと比べてパレスチナ自治区は情報に乏しく、パレスチナ自治区における墓の分布状況は明らかでないためである。その際には、まず、パレスチナ観光・遺跡庁に聞き取り調査を行い、墓の調査・管理状況を把握する。次いで、第二神殿時代後期のパレスチナ自治区の墓に関する資料調査を行うとともに、パレスチナ自治区において考古学的踏査を行い、パレスチナ自治区の第二神殿時代後期の墓に関する情報を収集する。

第 4 章では、第 2 章と第 3 章の結果を踏まえ、第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬のヘレニズム化について考察する。まず、第二神殿時代後期におけるユダヤ地域を含める東地中海岸南部地域の支配領域の変遷を整理し、地形、地質、街道から都市と墓の立地を考えることで、実際に墓が分布しうる立地を把握する。そして、第二神殿時代後期の墓の分布と時期的変遷を追うことでユダヤ人の埋葬の広がりと傾向を明らかにし、第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬のヘレニズム化を読み解く。

終章では、これまでの議論を振り返り、改めてユダヤ人の埋葬のヘレニズム化について総括する。そのうえで、考古資料から捉えるユダヤ人の埋葬研究の可能性について展望する。

なお、章に関わらず本研究で用いる図、写真、表は、とくにことわりがない場合は筆者が作成、撮影したものである。

第１章　第二神殿時代のユダヤ人の埋葬に関する研究

第 1 章　第二神殿時代のユダヤ人の埋葬に関する研究

第 1 節　第一神殿時代～第二神殿時代前期におけるユダヤ人の埋葬に関する研究

1　当該期の埋葬の概要

本論では第二神殿時代後期の埋葬を対象とするが、ユダヤ人の埋葬におけるヘレニズム化を考えるためにはそれ以前の時代の埋葬を把握する必要がある。第二神殿時代後期の埋葬をみるだけでは、何がヘレニズムに影響を受けた要素で何がユダヤ人独自の要素であるのかを区別することは困難だからである。そこで、本章ではそれに先行する鉄器時代Ⅱ期から第二神殿時代後期に至るまでのユダヤ人の埋葬を概観しながら、各時代の埋葬に関する考古学的研究を整理することで、ユダヤ人の埋葬におけるヘレニズム化を考える上での課題を明確にしたい。本項ではまず、第一神殿時代[8]～第二神殿時代前期の埋葬について概要を述べる。

東地中海岸南部地域、とくに中央山地は良好な石灰岩の岩盤が広がっており、古くから石切墓[9]が利用されてきた。青銅器時代にはシャフト墓（shaft tombs）と呼ばれる竪坑墓や単純な横穴墓、洞窟墓などが基本的な墓形態であった。鉄器時代になると、遺体を安置する棚構造を持つ横穴墓が南部や沿岸地域で利用されるようになる。このような墓はいくつかの種類に区分されるが、最も一般的なものはベンチ墓（図 1）と呼称されるもので、方形の埋葬室の床面にピットが掘り込まれ、それによって入口を除いた三方向に棚が形成される墓である。ベンチ墓では、伸展葬で一次埋葬を行い、遺体が白骨化した後に集骨と呼ばれる再埋葬が行われていた。ベンチ墓は分裂王国時代の半ばにユダ王国で利用されるようになり、急速に普及していきユダ王国の人々の典型的な埋葬形態となっていった。しかし、分裂王国時代の末になると、この状況は変化せざるを得なくなる。分裂王国の北、シリア・メソポタミアにはバビロニア帝国、新アッシリア帝国といった南レヴァントの支配を目論む強大な帝国が勢力を広げており、イスラエル王国とユダ王国もその支配下に置こうとしていた。前 722 年には新アッシリア帝国によってイスラエル王国が占領され、滅亡した。ユダ王国は、しばらくの間占領されることはなかったが、新バビロニア帝国によって前 586 年にエルサレムが陥落させられ、人々はバビロニアに捕囚されることになった（バビロニア捕囚）。これによりイスラエル王国と同様にユダ王国も滅び、ユダ王国内でのベンチ墓の製作、利用はほとんど行われなくなる。

ユダ王国の人々がバビロニアに連行された後は、少ないながらもエルサレム近辺でベンチ墓の再利用の痕跡が確認されている（Kloner and Zelinger 2007, 219）。一方で、新規にベンチ墓、または石切墓を構築した事例は確認されないことから、バビロニア捕囚時代のユダ地域の人口は少なく、石切墓の構築を行えるような状況ではなかったことが推察される。バビロニア捕囚時代の考古学的情報は、以前「バビロニア・ギャップ」と呼称されていたように乏しく、埋葬も含めてこの時代の状況は明確には分かっていな

---

[8] 第一神殿時代は、前 10 世紀にソロモンによってエルサレムに神殿が建てられてから、バビロニア帝国によって破壊されるまでの時代を指す。第二神殿時代と同様に大枠の時代呼称であり、時代区分はさらに細分される。考古学的な区分では鉄器時代I期（前 1200 年～前 1000 年）、IIA 期（前 1000 年～前 830 年頃）、IIB 期（前 830 年頃～前 721 年）、IIC 期（前 721 年～前 586 年）に区分され、歴史学的時代区分ではIIA 期は統一王国時代からオムリ王朝まで、IIB 期は分裂王国時代となる。

[9] 岩盤を掘り込んで作られる墓の総称。「rock-cut tombs」を筆者が訳した用語。竪坑墓、横穴墓が含まれる。

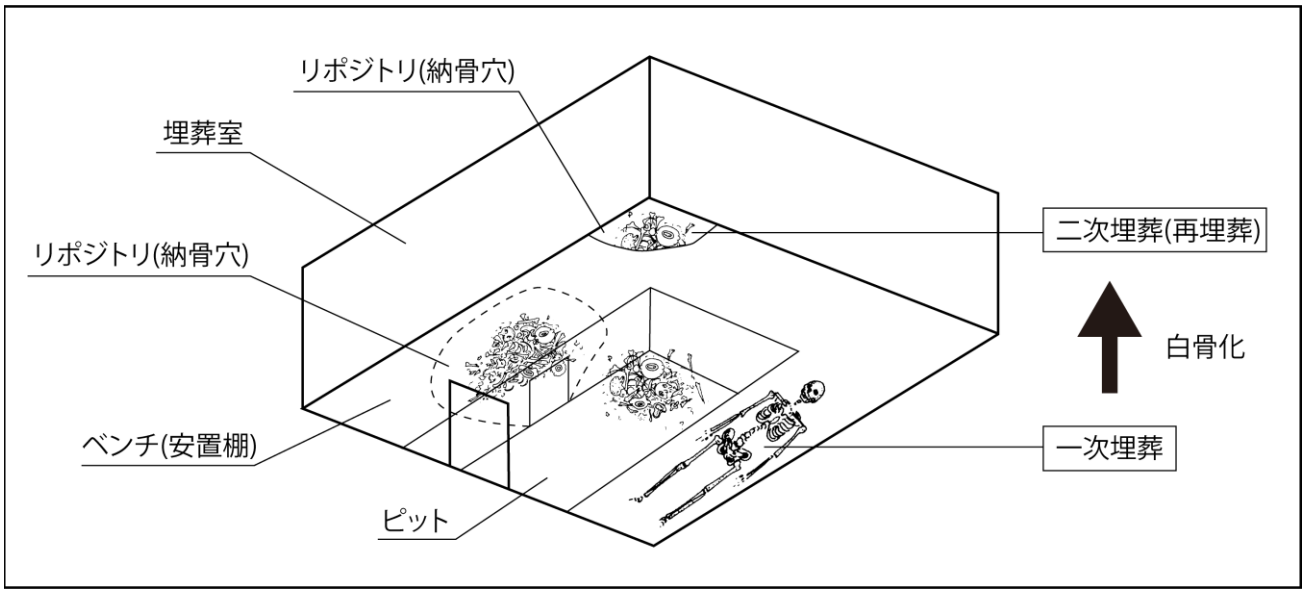


図 1. ベンチ墓の形態及び埋葬方法

（人骨は Hachlili and Killebrew 1999, fig. II.62, II.71 改変）

い。捕囚生活は、前 537 年にペルシア帝国が新バビロニア帝国を滅ぼしたことにより終わりを迎え、キュロス 2 世の布告によってユダヤ人のエルサレムへの帰還が許された。しかし、帰還したユダヤ人はかつての都市に定住できるようになったものの、その社会状況はバビロニア捕囚時代以前と比べて貧しかった（Lipschits & Oeming 2006, 27-28）。そのため、バビロニア捕囚時代と同様にペルシア時代も新たにベンチ墓が製作されることはなく、ベンチ墓を再利用し埋葬を行う状況はプトレマイオス朝時代の終わりまで続くことになる（Kloner and Zissu 2007, 139）。

プトレマイオス朝時代には、埋葬に関しても他の物質文化と同様に、前章で述べたような様々な要因からヘレニズムの影響はほとんど確認されない。ウォルフが指摘しているように、ペルシア時代の東地中海岸南部地域における埋葬は全体的に簡素で貧弱であるが、ユダヤ地域の周辺では新しい墓、例えば石棺や人形棺を利用した墓などの構築が行われており、プトレマイオス朝時代になると一部の都市では大規模な墓が利用されるようになる（Wolff 2002, 136-137）。ユダヤ地域の埋葬については、周辺地域と比べるとペルシア時代からプトレマイオス朝時代にかけて考古学的情報に乏しく、不明瞭な部分が多いといえるであろう。また、石切墓や納骨容器を用いる埋葬と比較して、土葬は残存しにくい埋葬方法であり、考古学的調査でその痕跡を捉えることも困難な埋葬である。おそらく、同時期のユダヤ地域の人々はベンチ墓の再利用と合わせて土葬を行っていた可能性がある。

このように、バビロニア捕囚時代からプトレマイオス朝時代のユダヤ地域における埋葬は、基本的に鉄器時代Ⅱ期に作られたベンチ墓の再利用であり、埋葬方法なども含めて鉄器時代の埋葬習慣を踏襲している。再利用の事例も非常に限られたものであるため、第二神殿時代前期の埋葬習慣を理解するためには鉄器時代の埋葬習慣を参照する必要がある。次項では、鉄器時代の埋葬の研究を整理し、バビロニア捕囚時代より前のユダ王国の人々の埋葬習慣を把握する。

2　鉄器時代の埋葬の研究

鉄器時代のイスラエルにおける埋葬の研究は、ベンチ墓の出現とその分布に関する研究が中心である。「鉄器時代Ⅱ期に多様な埋葬のタイプが存在するのは、聖書などの文献史料から知られている異なる文化集団によるものである（Bloch-Smith 1992, 55）」と述べられているように、東地中海岸南部地域には様々な民族による多様な埋葬が確認されているが、バビロニア捕囚後のユダヤ人に繋がるユダ王国の人々の埋葬の主流はベンチ墓であったことが考古学的調査の成果から明らかとなっている（Faust and Bunimovitz 2008, 150）からである。よって、本項ではベンチ墓が出現し広がっていくという時系列に沿いながら、ベンチ墓に関する研究を整理する。

ブロック・スミスは、鉄器時代Ⅰ期にラキシュやゲゼルなどの南部の遺跡や沿岸地域で棚構造を持つ石切墓が利用され始め、それが鉄器時代ⅡB 期にベンチ墓に発展したと述べている（Bloch-Smith 1992, 142-143）。しかし、鉄器時代Ⅰ期からⅡB 期初期の墓はほとんど確認されておらず、考古学的情報の不足と編年のギャップが生じてしまっていることから、イェゼルスキとハゼリムは、ユダ王国に見られるベンチ墓と鉄器時代Ⅰ期からⅡB 期初期の墓を関連付けることは困難であると指摘している（Yezerski and Hatzerim 2013, 71）。実際に、鉄器時代Ⅰ期からバビロニア捕囚時代に至るまで一つの遺跡で通時的に埋葬の変化を追うことができる遺跡はテル・エトン（Faust 2009）のみであり、鉄器時代Ⅰ期から鉄器時代Ⅱ期の半ばにかけてのユダ王国における墓形態の変遷は明瞭であるとはいえない。ファウストとブニモビッツが指摘するように、鉄器時代Ⅰ期からⅡ期の初期の墓が少ないことは同時期の埋葬が考古学的な痕跡をほとんど残さない単純なものであったことを示唆しており（Faust and Bunimovitz 2008, 151）、石切墓がこの段階では主な墓形態ではなかったことが読み取れる。ヒルバト・エン・ナムラ（Zertal 1992）やラキシュ（Tufnell 1953）での簡素な埋葬で構成される鉄器時代の墓地の偶然の発見は、これを証明する考古学的な証拠である。

統一王国時代からベンチ墓が成立していたかどうかは不明瞭であるが、少なくとも鉄器時代に入ってから石切墓に棚構造が設けられるようになったことは明らかである。ブロック・スミスはこのような墓を「アルコソリア墓（arcosolia tombs）」と呼称しているが、アルコソリアはアーチ状に作られた壁龕を指す用語であるため名称として適切でない。イェゼルスキとハゼリムはこれを棚型壁龕墓（benched-niche tombs）と呼称し、ベンチ墓とは異なるタイプであると明確に区別している（Yezerski and Hatzerim 2013, 54-57）（図 2）。前述のように、棚型壁龕墓は鉄器時代Ⅰ期から利用が確認されており、鉄器時代Ⅱ期になると南部や沿岸地域以外へも広がっていく（Yezerski and Hatzerim 2013, 68）。鉄器時代Ⅱ期の半ば、前 9 世紀にはユダ王国内でベンチ墓が確認されるようになり[10]、前 8 世紀以降はユダ王国内で急速に普及していく（図 3）。このころには棚型壁龕墓の利用が減少する一方で、ベンチ墓はユダ王国における主流の埋葬タイプとなった（Bloch-Smith 1992, 41-52; Faust and Bunimovitz 2008, 150; Yezerski and Hatzerim 2013, 68）。ベンチ墓が前 8 世紀以降に急激に増加[11]していく傾向は考古資料の豊富さから明らかであり、この点については研究者の意見も一致している。

前項で述べたように、ベンチ墓では集骨が大半の墓で行われており、火葬などの異なる埋葬方法はベン

[10] ユダ王国内で確認されるベンチ墓の最古の事例は、シルワン村の墓地（Ussishkin 1993）である。

[11] 鉄器時代Ⅱ期には 300 基以上の石切墓が確認されており（Yezerski and Hatzerim 2013, 50）、そのうちの大半はベンチ墓である（Faust and Bunimovitz 2008, 152）。

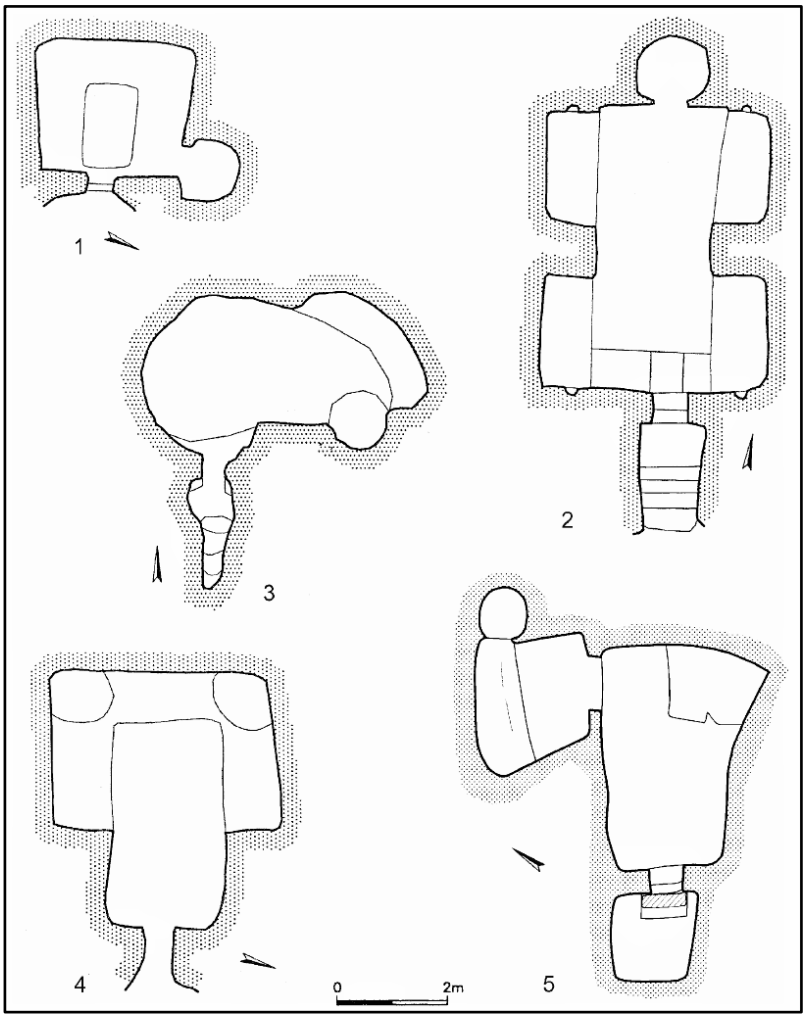


図 2. ベンチ墓と棚型壁龕墓の例（Yezerski and Hatzerim 2013, Fig.2）

1．ベンチ墓　2－5．棚型壁龕墓

チ墓では一例も確認されていない。例えば、火葬はフェニキア由来の埋葬方法であり（Bloch-Smith 1992, 52）、ユダ王国内ではこのような周辺地域由来の埋葬方法はほとんどみられない（図 3）。集骨の手順は 2 つに分けられ、まず一次埋葬では遺体はベンチ（安置棚）に安置され、遺体が白骨化するまで伸展葬が行われる（Bloch-Smith 1992, 42）。ベンチは埋葬室の中央に入口からピットが掘り込まれることで作られるため、その数はほとんどの墓で共通して 3 つであり、一つの墓内で同時に一次埋葬を行うことが可能な人数には限りがある[12]。また、ベンチには頭の部分を少し掘り下げた、または盛り上げて作られた単純なヘッドレストを持つタイプや人型に内部を掘り下げたタイプも確認されている[13]（図 4）。一次埋葬で遺体

[12] ベンチの幅を通常より広く作ることによって、3 人以上の一次埋葬を行っていたことが推測される墓が数例確認されている。エルサレムのヒンノムの谷に位置する Burial cave 24（Barkay 2000, 93-95）の埋葬室 13 は、埋葬室の幅が通常より広く、入口正面のベンチも奥行きがある作りとなっている。ベンチの左右にはそれぞれ 2 つずつ人型のヘッドレストが設けられており、埋葬室全体で 6 人の一次埋葬を行うことが可能である。加えて、埋葬室 25（図 4）は入口右のベンチが極端に広い作りとなっており、同様に人型のヘッドレストが 6 つ設けられ、8 人の一次埋葬が行える。バーカイは副葬品の豊富さから、この墓がエルサレムの裕福な一族の墓であると述べており（Barkay 2000, 93）、このような多人数の一次埋葬を行うためのベンチを持つ墓は、大規模で裕福な一族にのみ利用されていたことが推察される。

[13] 例えば、ギベオン（Eshel 1987）、ヒンノムの谷（Barkay 2000）、聖エティエンヌ修道院（Barkay et al. 2000）。

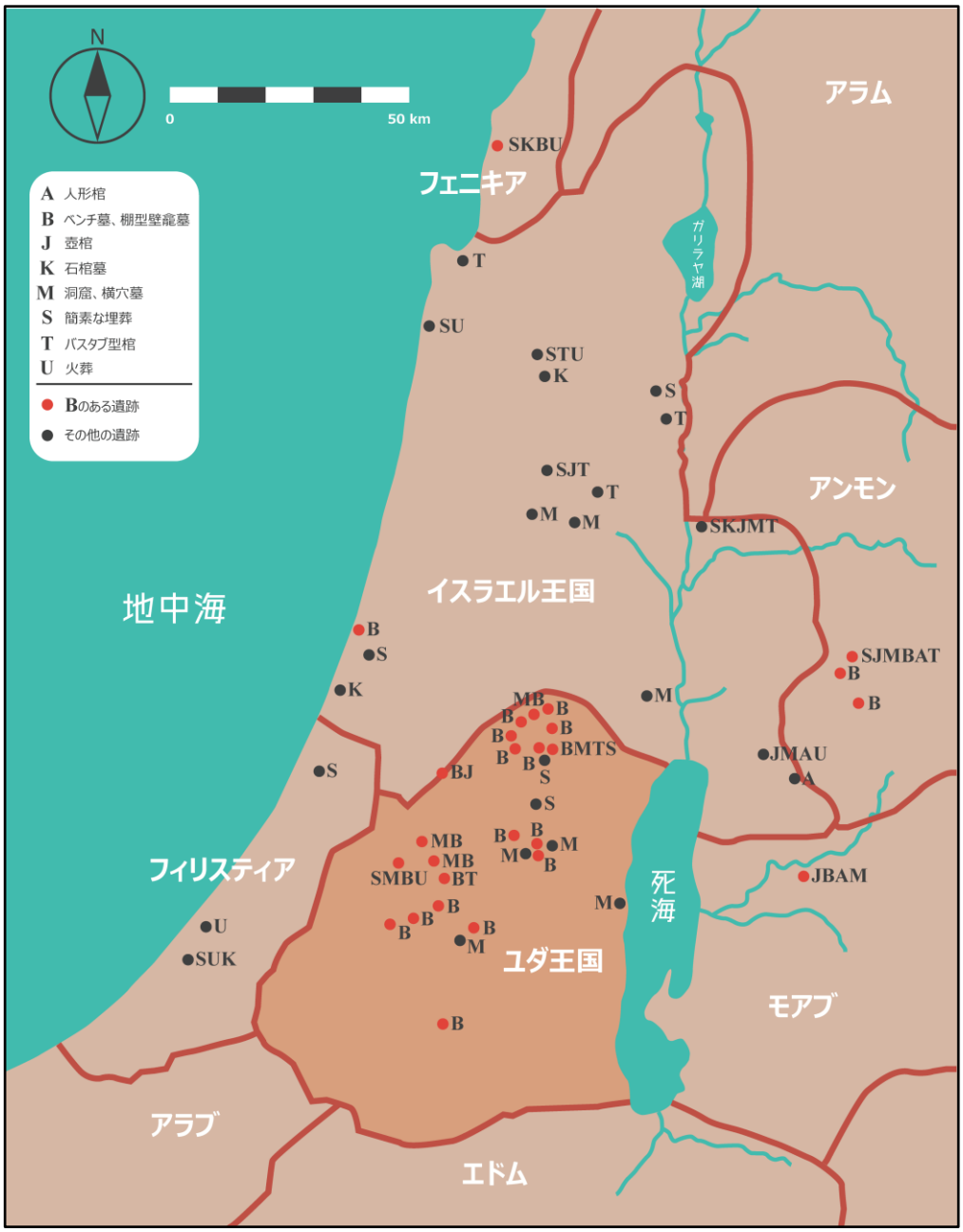


図 3. 前 8 世紀末から前 6 世紀における埋葬タイプの分布（Bloch-Smith 1992, Fig.18 より作成）

が白骨化した後は二次埋葬（再埋葬）が行われ、遺骨は副葬品と共に集められ、多くの場合はリポジトリ（納骨穴）に納骨される。リポジトリはピットの内部や埋葬室の四隅に作られ、複数設けられる場合もある（Bloch-Smith 1992, 42）。リポジトリがない墓、また、リポジトリがある墓であっても、ピットの床などに遺骨や副葬品は集められる[14]。再埋葬、または一度埋葬した遺骨に対する再接触は、この地域では青銅器時代から確認されているが、リポジトリはベンチ墓における顕著な特徴であるといえる（Meyers 1970, 10）。メイヤーズは、このような納骨空間を新たに採用したことで、これまでの再埋葬とは異なり、ベンチ墓では一次埋葬・二次埋葬を同時に、同じ墓室内で行うようになったと指摘している（Meyers 1970, 11）。

集骨の主たる特徴は複数人の遺骨がまとめられることである。その手順の中で、一次埋葬の際には被葬

[14] 例えば、シオン山（Kloner and Davis 2000）。

者個人がある程度区別されるが、集骨を行う際には個人が区別されることはない。このような埋葬方法は共同墓地では考えられないことであり、複数人の遺骨が同じ納骨場所にまとめられることから、ベンチ墓は家族墓であると考えられている（Barkay 1992, 359-360; Faust and Bunimovitz 2008, 151; Yezerski and Hatzerim 2013, 53）。ユダ王国の社会は家父長制であり、性別や年齢によって優先順位が決まり、年配の男性に最高の地位を与えていたが、ベンチ墓における集骨をみると老若男女の区別がなく、平等的である（Faust and Bunimovitz 2008, 153-154）。集骨を行うことでベンチ墓は長期間使用され、家族の数世代が継続して共に埋葬された。集骨は伸展葬と比較して大人数の埋葬が可能であることから、一つの墓には数十人から数百人が埋葬される場合もあった（Bloch-Smith 1992, 48; Faust and Bunimovitz 2008, 154）。このように集骨の埋葬方法からは家族の連続性を読み取ることが可能であり、埋葬されたすべての人々が最終的に納骨場所に移され、祖先と交わったという事実は、個人よりも集団的なアイデンティティの重要性を強調しているといえる（Faust and Bunimovitz 2008, 154）。

このような集骨の埋葬方法と定形の墓形態は、これまで数世紀の間行われていた単純な埋葬とは全く異なるものであり、なぜ新しい墓が突然出現し前 8 世紀以降急速に広まったのかはベンチ墓研究において重要な問題である。しかし、ベンチ墓の由来に関する研究（Bloch-Smith 1992; Barkay 1994）は、この問題について触れておらず、前 8 世紀の普及の要因について研究されるようになったのは 2000 年代に入ってからである。最も詳細な研究はファウストとブニモビッツの研究であり（Faust and Bunimovitz 2008）、ファウストとブニモビッツは当時の社会的変化と住居形態からこの点を解釈した[15]。

鉄器時代になり人口が増加していったことは広く知られており、鉄器時代Ⅱ期が進むにつれて人口の規模と密度は着実に増加し、前 8 世紀にはピークを迎えた（Broshi and Finkelstein 1992）。鉄器時代の人口増加の傾向は、核家族に利用されていた二部屋式住居・三部屋式住居に加えて、鉄器時代Ⅰ期の段階で拡大家族に利用される四部屋式住居（図 5）が鉄器時代Ⅱ期に定形化し支配的になったこと（Faust 2003, 30）などから読み取ることができる。人口の増加に合わせて都市化が進んでいき、これも同様に前 8 世紀にピークに達した。このような人口の増加と都市化はベンチ墓の出現・普及の一因ではある（Faust and Bunimovitz 2008, 162）が、こうした変化は同時に問題も生じさせていた。

都市化による大量生産と貿易の増加、それによる雇われ労働者の増加は都市部に劇的な変化や不安をもたらし、家族構成にも大きな影響を与えた。鉄器時代から続く、社会を支配していた大規模な親族集団の維持が困難になり、弱い集団は崩壊していった。産業社会により大規模な親族集団や家族が機能しなくなり、個人や核家族が主要な形態になったのである（Faust and Bunimovitz 2008, 157-158）。特に都市の居住地では、基本的な社会単位としての拡大家族の必要性が低下していった。こうした影響から、鉄器時代Ⅱ期には都市化と同時に、しばらく作られていなかった農村集落が形成されることになった（Faust 2003）が、このような家族の在り方の変質は、農村部の拡大家族にも及んでいたと考えられる（Faust 2000）。加えて、新アッシリア帝国の政治的・軍事的圧力による社会不安は、特に前 8 世紀後半に大規模な親族集団の崩壊をもたらした（Faust and Bunimovitz 2008, 158）。このように拡大家族の社会的意味が様々な要因から弱まっていくなか、逆に家族の継続性と永続性の維持が強く意識されていき、拡大家族的な関係が崩壊しないように、埋葬という場で家族の成員同士を一体化させることで、埋葬に関わる諸行為に参加する個々人の家族への帰属意識を高めることが求められていくことになったと解釈できる。

[15] 同様の研究として Osborne 2011 が挙げられる。

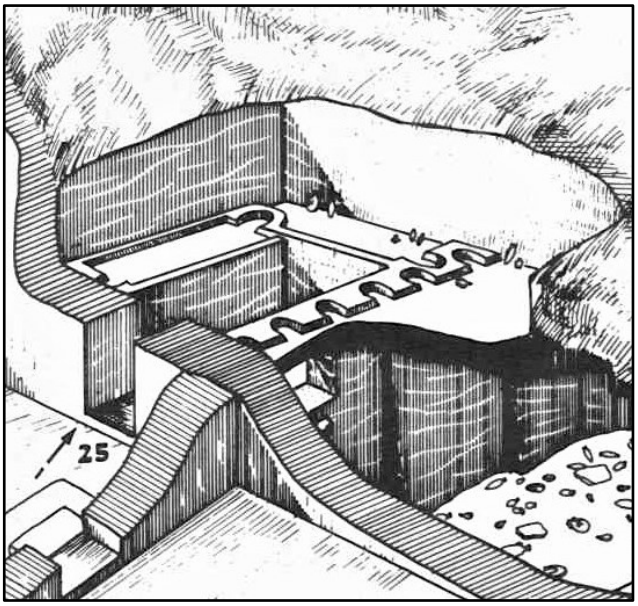


図 4. 人型に作られたベンチの例, ヒンノムの谷, Burial Cave 24, Chamber 25（Barkay 2000, 96 改変）

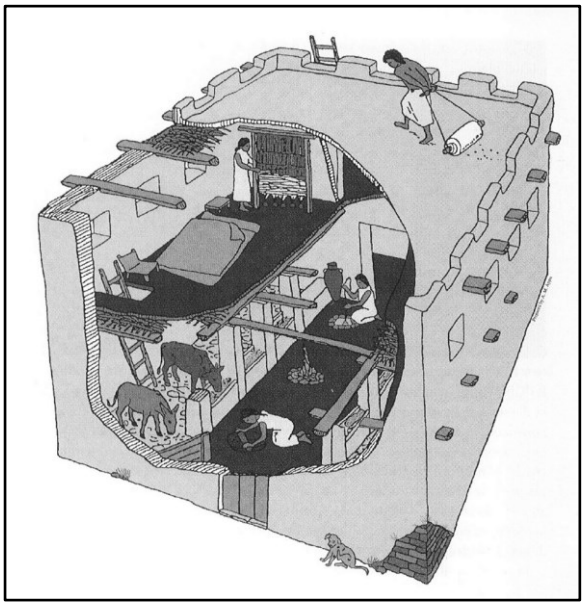


図 5. 四部屋式住居復元図（Faust 2003, 24）

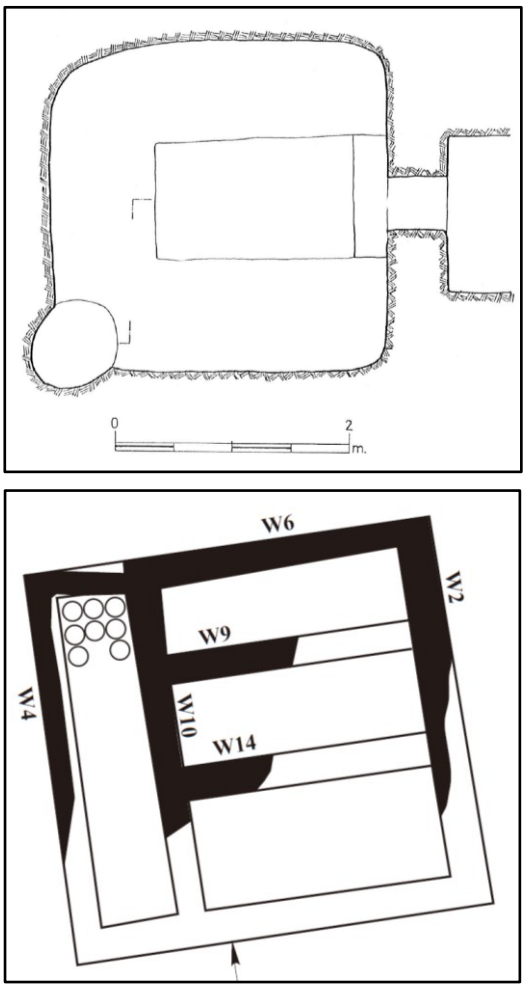


図 6. ベンチ墓と四部屋式住居の平面図, 上：ヘルツルの丘（Kloner 2001-2002, Fig.10 改変）、下：エル・ラス（Feig 2016, Plan.3 改変）

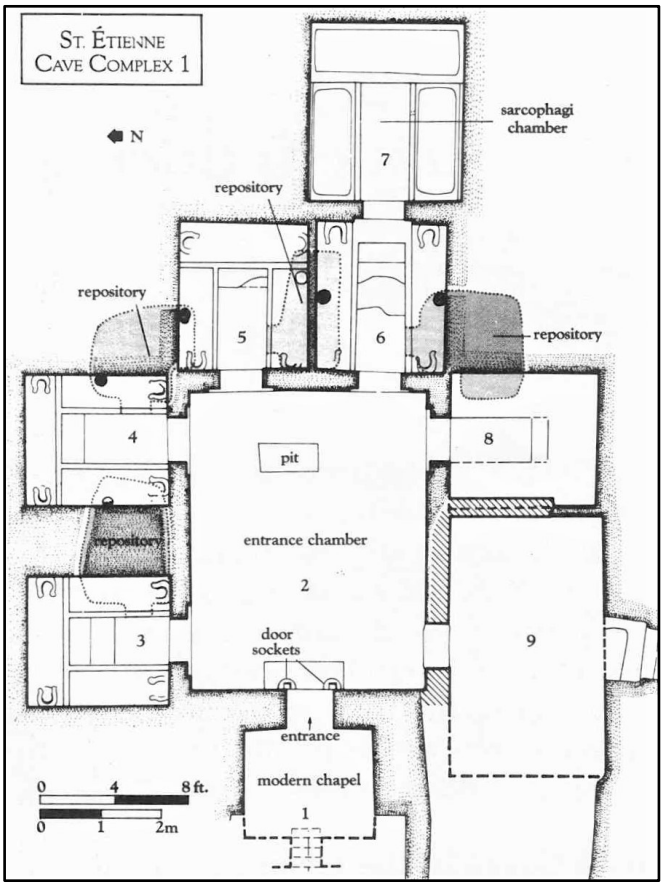


図 7. 複数の埋葬室を持つベンチ墓の例, 聖エティエンヌ修道院（Barkay et al. 2000, 120）

ファウストとブニモビッツは、ベンチ墓はこのような人口増加、都市化、大量生産、外部圧力による不安などの社会変化に対応し、「家族の継続・永続」の表象として拡大家族が採用したものであると述べている（Faust and Bunimovitz 2008, 158）。その根拠として、ファウストとブニモビッツはベンチ墓と四部屋式住居の形態の一致[16]（図 6）を挙げている。その規模や付随する生産設備の大きさから、前述のように四部屋式住居には拡大家族が居住し、二部屋式住居・三部屋式住居には核家族が居住していたことが分かっている。従って、鉄器時代のイスラエル社会においては、構造（住居）が概念（居住する親族集団）を象徴しており（Faust and Bunimovitz 2008, 161）、「家」という存在に二つの意味があったといえる。これは言語の面でも同様であり、聖書のヘブライ語では、「家」という言葉に「定住者の普通の住居単位」、「家系」という二つの意味が存在する。ファウストとブニモビッツは、この「家」の意味合いを踏まえた上で、社会の変化によって社会的な意味での家（家族）の変質が進んでいたため、そうした流れに抗する象徴として構造的な意味での家（四部屋式住居）が採用されたと指摘している。つまり、四部屋式住居はすでに家族の象徴であったため、「家族は存続する」という意識の維持には最適な手段であり、ユダ王国の人々は構造としての家を意味する四部屋式住居の形態をベンチ墓に表すことで、拡大家族の継続・永続を表現したのである（Faust and Bunimovitz 2008, 162）。また、そこで行われる集骨も家族が継続的に同じ空間に埋葬されることで、生きている人々に家族の永続性のメッセージを伝えているのだと考えられる。つまり、ユダ王国において定形的なベンチ墓が出現し普及していったのは、家族を石の中で永遠にする人々の試みの結果だったのである（Faust and Bunimovitz 2008, 162）。

また、ベンチ墓には人々の死生観も反映されている。バーカイの研究（Barkay 1999）によれば、ユダ王国の人々は故人が死後の世界で存在し続けることを信じていた。ユダ王国の人々は墓を死者の家とし、死後に家族全員がそこに行くと考えており、そのため、墓とその供物は死者が生前に享受していたのと同じ住居と生活環境を提供するためのものであった（Barkay 1999, 97）。ファウストとブニモビッツの研究と合わせて考えると、ベンチ墓にはこれから生きていく人々への家族の継続というメッセージと共に、死後も家族が共に生前と同じように生活するという死生観が込められているのである。

一方、考えなければならないのは、ユダ王国の人々全てがこのような埋葬習慣や考え方に従っていたのかということである。ベンチ墓は富裕層の家族墓であることが分かっており（Bloch-Smith 1992, 49; Barkay 1999）、都市の貧困層などは土葬などの簡素な埋葬を行っていたことが明らかになっている（Barkay 1999）。つまり、都市部の貧困層の核家族や農村部の保守的な家族にとっては、ベンチ墓のような墓は象徴的な意味を持たなかったうえに、石切墓を製作しメッセージを伝えていくような経済的な余裕はなかった（Faust and Bunimovitz 2008, 156）。社会的階層による埋葬の違いは、富裕層の墓であるベンチ墓にも表れている。これまで述べてきたように、ベンチ墓は定形的な石切墓であり、大半の墓でその形態に差異は見られない。しかし、壁や天井が滑らかで精密に作られている墓もあれば、粗い作りの墓もある。また、多くの墓は単一の埋葬室であるが、入口に続く前室を持ち内部に複数の埋葬室を持つ大規模な墓（burial complex）（図 7）も確認されている[17]。この墓は精巧な作りであり、複数人の一次埋葬が可能であるベンチ、枕や人型の掘り込みが施されるベンチを持つ場合が多い。オズボーンはベンチ墓が家族を表してい

[16] ベンチ墓と四部屋式住居の形態の一致について過去に指摘している研究（Mazar 1976; Barkay 1994）はあるが、ベンチ墓の普及の要因に絡めた議論はこの研究以外に行われていない。Osborne 2011 や Yezerski and Hatzerim 2013 は、ファウストとブニモビッツの見解を支持しており、現在は定説となっている。

[17] ヒンノムの谷（Barkay 2000）、聖エティエンヌ修道院（Barkay et al. 2000）など。

るのに対し、複数の埋葬室を持つ大規模な墓は複数の拡大家族を含む一族を表していると指摘している（Osborne 2011, 52）。このような違いは明らかに社会的階層を表しており、墓の質の違いは富裕層の中での差を表すものでもあったと考えられている（Barkay 1999）。ベンチ墓を研究することで富裕層の埋葬を理解することは可能であるが、貧困層の埋葬についてはほとんど理解することできない。また、貧困層が行う単純な埋葬は、前述のように考古学的痕跡をほとんど残さないものであり、それを研究すること自体も困難であるだろう。これは鉄器時代の埋葬研究のみならず後の時代に関しても同様であり、あくまでも石切墓の研究は富裕層の人々の埋葬を示すものであるという点には留意しなければならない。

第 2 節　第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬に関する研究

1　当該期の埋葬の概要

前節で述べたように、バビロニア捕囚時代からプトレマイオス朝時代のユダヤ地域では、鉄器時代Ⅱ期に製作されたベンチ墓が再利用されており、人々は同時代の埋葬習慣を継続していた。しかし、前 2 世紀の初めにユダヤ地域の支配者がプトレマイオス朝からセレウコス朝に変わるとこの状況は一変し、新しいタイプの石切墓であるロクリ墓（loculi tombs）（図 8）がエルサレムに出現した（Kloner and Zissu 2007, 71）。ロクリ墓はベンチ墓と同様の横穴式の石切墓であるが、ロクリと呼ばれる壁龕が埋葬室の各壁に設けられる点で異なっており、ユダヤ地域でこれまで確認されなかった墓である。類似した形態的特徴を持つ墓は、ユダヤ地域にロクリ墓が出現した前 2 世紀以前にフェニキアのシドンやアムリット（Perot and Chipiez 1885）、エジプトのアレキサンドリア（Venit 2002）、イドマヤのマレシャ（Peter and Tiersch 1905; Oren and Rappaport 1984; Kloner 2003a）などの都市で既に利用されているため、エルサレムのロクリ墓は周辺地域から取り入れられた墓であると従来の研究では考えられることが多い。ロクリ墓は前 1 世紀にはエルサレムで主要な墓となり、次第に地域内の他の都市へと広がっていき、1 世紀にかけて数を増加させていく。ロクリ墓は第二神殿時代後期のユダヤ人の典型的な墓となるが、ローマ時代に第一次ユダヤ・ローマ戦争が起こり、後 70 年にエルサレムが陥落すると、エルサレム近辺での構築・再利用はほとんど確認されなくなる。ユダヤ人は各地に離散して共同体を作り、ロクリ墓が作られていくこととなった。本研究では第二神殿時代の終わりまでを対象としているが、それ以降のローマ時代・ビザンツ時代までロクリ墓は広く利用されており、ベンチ墓と同様に長期間利用された墓であることを確認しておきたい。

第二神殿時代後期のユダヤ地域では、ロクリ墓以外の墓もある程度利用されていたことが知られている。ベンチ墓と同様にロクリ墓も富裕層の家族墓であり、それ以外の埋葬としてシャフト墓や土葬、石棺墓などが第二神殿時代になっても確認され、庶民や貧困層はこのような単純な埋葬を行っていたようである（Kloner and Zissu 2007, 95）。犯罪者や非ユダヤ人の場合は、個人墓や共同墓地に埋葬され、一般的なユダヤ人とは異なる方法で死者を弔っていた（Kloner and Zissu 2007, 121-123）ことも分かっている。また、数は少ないがロクリ墓以外の石切墓も利用されており、ベンチ墓は再利用のみならず新たに構築され（Hachlili 2005, 4）、アルコソリア墓と呼ばれる墓も新たに出現した。第二神殿時代後期には、より社会が複雑化しており、埋葬の違いは単純な身分や階層の差によらない場合もある。例えば、ユダヤ教のエッセネ派の集落であると考えられているクムランではロクリ墓は確認されておらず、大規模なシャフト

墓の墓地（Avni 2013）が確認されているが、これは身分の差ではなくユダヤ教の宗派による違いである可能性がある。

このように、第二神殿時代後期のユダヤ地域には、これまでよりも多様な埋葬が確認されているが、ロクリ墓が同地域の墓の大多数を占めていることは考古学的調査の成果から明らかとなっている（Hachlili 2005, 2; Kloner and Zissu 2007, 39）。また、ロクリ墓がユダヤ人の主な墓であったことは文献史料からも読み取れる。序章で述べたように、口伝律法を文書化したミシュナには埋葬規定が記載されており、ミシュナのババ・バトラ 6:8 の墓の形態と寸法を規定する文章で示されている墓はロクリ墓である。考古資料・文献史料からロクリ墓がユダヤ人の典型的な墓であったことは明らかであり、そのため、第二神殿時代のユダヤ人の埋葬に関する研究はロクリ墓に関する研究が中心である。また、単純に数が多いだけでなく、被葬者の名前や身分・親族関係が分かる銘文が施される場合がある石棺や、ギリシア建築の影響を受けた建築装飾が見られるなど、ロクリ墓には様々な文化的要素が集約されることも多くの研究が積み重ねられてきた一因ではあるであろう。

よって、次項ではロクリ墓に関する研究を中心に、第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬に関する研究を整理する。前述のように、ロクリ墓には様々な要素があり、その研究も多岐にわたるため、主として考古学的研究の成果について三つのカテゴリに区分して述べる。

2　埋葬方法の研究

ロクリ墓の埋葬方法は 3 種類に区分される。一つ目は木棺を用いる埋葬であり、この埋葬方法はエリコ、エン・ゲディでのみ確認されている。木棺の中には個人もしくは個人と近親者の遺体が入れられ、墓のベンチやロクリに安置される。前時代の集骨とは異なり、安置された木棺は移動されず、その中の遺骨も再埋葬されることはない。ハクリリとキルブルーは、エリコとエルサレムの気候の違いからエルサレムでは木棺が残存しなかっただけであり、エルサレムでも木棺を用いた埋葬が行われていたことを指摘したが（Hachlili and Killebrew 1999, 172）、木棺を留める釘や木棺の残滓が状態の良い墓であっても一例も確認されていないことから、エルサレムでは木棺による埋葬は利用されていなかったと考えられている（Kloner and Zissu 2007, 103-106）。木棺は、エリコ以外にクムラン（Vaux 1956; Humbert and Chambon 1994）において確認されている。しかし、クムランの墓地はエリコやエルサレムとは異なり、シャフト墓を主として利用している墓地であり、埋葬習慣も異なっている。これらの木棺の利用については、宗派の違いなどによって解釈されることもあるが、木棺を利用する要因や意味合いについては今のところ明確になっていない（Hachlili 2005, 462-472）。

二つ目は、ベンチ墓でも行われていた集骨による再埋葬（図 8）である。埋葬の手順及び方法は同様であるが、異なる点として、ロクリがあることによって埋葬される場所が増加したことが挙げられる。ベンチ墓における一次埋葬の場所はベンチであり、再埋葬の場所はベンチ、埋葬室の四隅、リポジトリ、ピットであったが、ロクリ墓では一次埋葬の場所はベンチまたはロクリであり、再埋葬の場所はベンチ、埋葬室の四隅、ピット、ロクリである。集骨は前 1 世紀末になるまで、ロクリ墓の主な埋葬方法として各遺跡で用いられ、前 1 世紀末に後述する三つ目の埋葬方法であるオシュアリが出現した後も、オシュアリと併用して利用されていた。オシュアリを用いる埋葬も同様に再埋葬であり、イスラエルにおいては青銅

器時代から第二神殿時代に至るまでの長期間、再埋葬が広く用いられていたことになる。

三つ目はオシュアリを用いる再埋葬（図 8）である。オシュアリは、木棺やサルコファガス（大型の石棺）のように遺体をそのまま安置できる大きさの棺ではなく、長辺が人間の大腿骨ほどの小型の石棺である。そのため、オシュアリに納骨するためには必ず再埋葬を行わなければならない。埋葬方法は遺体を白骨化させるまでは集骨と同様であるが、遺骨はオシュアリに納骨される。集骨と異なる点として、複数人の遺骨の再埋葬を同じ場所で行うのではなく、個人もしくは個人と近親者の骨のみを 1 つのオシュアリに納骨する点が挙げられる。そのため、オシュアリには被葬者の名前や職業、血縁関係などが彫られる場合もある。集骨の埋葬方法からロクリ墓も家族墓であると考えられているが、オシュアリの銘文によって被葬者に明確な血縁関係があることが分かる場合もある。オシュアリは前一世紀末に出現した新しい埋葬方法であり、ロクリ墓の利用が激減する 70 年まで最も多く利用される方法となった。

ハクリリとキルブルーは、これらの埋葬方法が個々の墓の副葬品の年代や切り合い関係から、エリコにおいては木棺から集骨、オシュアリの順に変化していくことを指摘し、これがエルサレムの墓にも適用できると述べている（Hachlili and Killebrew 1999, 167-172）。この見解は、後のハクリリの研究においても踏襲されるが、エルサレムの墓の分類（Hachlili 2005, 450-457）では、一つ目を伸展葬であるタイプIに変更している。一方で、クロナーとジスは、第二神殿時代後期のエルサレムの墓地では一次埋葬と二次埋葬が合わせて行われる再埋葬が一般的であり、ベンチ墓と同様の集骨が初期のロクリ墓において継続していたと指摘した（Kloner and Zissu 2007, 106-107）。ロクリ墓でみられる伸展葬は集骨の際の一次埋葬であり、伸展葬のみが行われている墓はエルサレムでは確認されていない。また、前述のようにエルサレムでは木棺は利用されておらず、一部の墓でサルコファガスが利用されている事例もあるが[18]、その場合もオシュアリと同様に伸展葬ではなく再埋葬に利用されている（Kloner and Zissu 2007, 114-115）[19]。つまり、エリコとは異なりエルサレムにおける埋葬方法は、集骨が初期に行われ、前 1 世紀末以降にオシュアリが利用されるようになったという順に変化した。前述のように木棺は限られた遺跡でしか利用されていないため、ユダヤ地域のほとんどのロクリ墓でエルサレムと同様の埋葬がなされていたことは明らかである。これらの埋葬方法のなかでもオシュアリについての研究は最も盛んに行われている。なぜなら、オシュアリはそれ自体の形態・装飾や付随する被葬者の名前・職業・血縁関係などの銘文、その起源など、他の埋葬方法と比較して得られる情報が多いからである。

家族が共に埋葬される集骨とは異なるオシュアリは、一見異文化から導入されたもののように思われるが、オシュアリと形態・機能の面で一致する小型石棺は他地域には確認されていない。そのため、オシュアリの起源はエルサレムであり、ユダヤ人が独自に利用し始めた埋葬方法ではないかとラフマニは指摘した（Rahmani 1994, 56-59）。オシュアリが利用されるようになった背景として，肉体の復活を目的とした復活信仰と関連付ける説がある。ラフマニは、他人の遺骨と混じらないように特別な容器（オシュアリ）に遺体を入れるのは、個人の肉体の復活を待つためであると述べている（Rahmani 1994, 53-55）。この復活信仰はユダヤ教の中でもファリサイ派の信仰であるため、オシュアリはファリサイ派の埋葬方法

[18] 例えば、ナジル人の家族の墓（Avigad 1971）、王の墓（Kon 1947）、アケルダマ（Avni and Greenhut 1996）。

[19] エルサレムでは一次埋葬で伸展葬を行う際に棺を用いた痕跡は確認されていないが、遺体をそのまま安置していたわけではない。セマホート 12:10 では死者に衣服を着せる、または布を巻くことについて述べられており、シャバット 114a では死者に服を着せることの重要性を説き、裸の人間を埋葬することを禁止している。その湿度の高さから布や衣服は腐敗してしまい、これらの証拠が考古学的に残存している例は少ないが、王の墓（Kon 1947）では刺繍入りの衣服、ヤソンの墓（Rahmani 1967）では綿のネットの破片、アケルダマ（Avni and Greenhut 1996）では数枚の麻布が出土している。

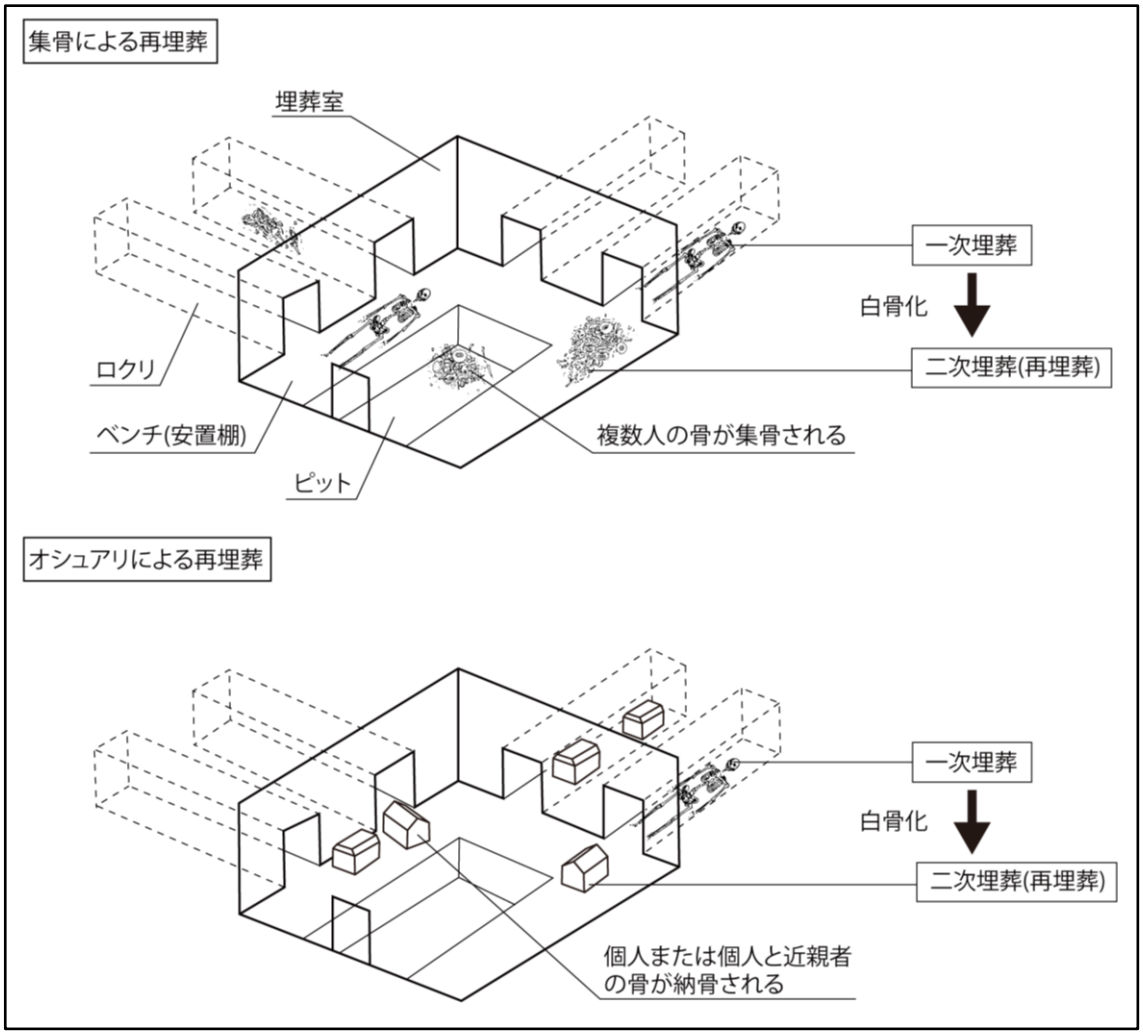


図 8. ロクリ墓の形態及び埋葬方法

（人骨は Hachlili and Killebrew 1999, fig. II.62, II.71 改変）

であり、サドカイ派は集骨を行い続けていたとラフマニは指摘している。一方、近年はこの見解を否定する研究がみられる。ファインはオシュアリを用いた埋葬と死者の復活を関連付けることに疑問を呈し、オシュアリの出現とヘロデ朝時代の富の蓄積や建築プロジェクトとの関連性を指摘した（Fine 2000）。クロナーとジスも同様にこの説を否定している（Kloner and Zissu 2007, 116-119）。前 1 世紀末以降のロクリ墓では、ほとんどの墓でオシュアリが利用されており、建築装飾のあるロクリ墓や単純なロクリ墓を問わずオシュアリは確認されている。そのため、もしオシュアリがファリサイ派の復活信仰を反映しているものであるならば、1 世紀にはほとんどのユダヤ人がファリサイ派に属することになってしまう。一般に、サドカイ派は裕福であり、庶民の多くはサドカイ派ではなくファリサイ派であったことが知られている。また、建築装飾のあるロクリ墓の多くはサドカイ派の家族墓であることも明らかとなっている（Rahmani 1994, 53-55）。オシュアリの銘文からサドカイ派の墓であると明らかになっている建築装飾のあるロクリ墓でもオシュアリは利用されているため、クロナーとジスはファリサイ派とサドカイ派が異なる埋葬を行っていたと仮定することは困難であり、オシュアリは社会的要因と宗教的要因から出現したものであると述べている（Kloner and Zissu 2007, 117）。

このように埋葬方法については様々な研究が行われているが、埋葬の手順やその位置など判明してい

ない部分も多い。イスラエルの墓は基本的に盗掘の被害を受けており、当時の遺骨・副葬品の位置が保たれていない場合も多く、墓の状態は非常に悪い。また、それに加えて過去の調査の精度が良好ではないため、遺骨・遺物の出土位置が分からず、その位置的・時期的関係を把握することが困難であることも一因である。埋葬方法について研究する際は、これらのことを考慮する必要性がある。

3　墓の形態の研究

ロクリ墓の形態に関する研究は、ロクリ、埋葬室、ファサードの 3 つに大別される。まず、ロクリの形態については、その寸法に関して多くの研究者が指摘している。ロクリを含めたロクリ墓の寸法や製作方法などはミシュナの埋葬規定に記載されており、その数値と実際のロクリ墓の寸法を比較する研究が行われてきた[20]。しかし、第二神殿時代の一定でない尺度や掘り方の違いなどから確たる結論は得られていない。特殊な形態を持つロクリについて発掘報告書内で指摘される場合はあったが、ロクリの形態のバリエーションは暫く体系化されておらず、クロナーとジスは 2007 年時点でのエルサレムの全てのロクリ墓のデータを集成し、そのデータを元にロクリの形態及び機能について分類し考察した（Kloner and Zissu 2007, 61-68）。この研究によると、エルサレムのロクリは、①通常のロクリ（ordinary loculi）、②幅が広いロクリ（broad loculi）、③2 人用のロクリ（double loculi）、④二階層のロクリ（two-story loculi）、⑤2 倍の長さのロクリ（Double-Length loculi）、⑥二階層に配置されたロクリ（loculi arranged in stories）、⑦収集用のロクリ（Collection loculi）の 7 つに分類される。

①については、前述のミシュナに記載されている寸法と近似している一般的なロクリである。長さが約 2m、高さ約 70ｃｍ、幅約 50ｃｍが平均的な寸法とされている。このタイプは入口の幅と内部の幅が等しく、特徴的な構造も見られない。②は、入口の幅は①と同様であるが、内部の幅が入口の幅よりも大きいタイプである。その機能としては、①よりも集骨が行われる場所やオシュアリの貯蔵場所としての役割が強いと考えられている。③は②の派生形であり、②の中心に溝が掘り込まれ、区分けがされるタイプである。③の機能は②とは異なっており、この中心の仕切りによって同時に 2 人を一次埋葬することができる。これは 2 人の近親者を同時に埋葬する際に利用されていたと考えられている。④は二層の空間が作られるロクリであり、ロクリの床面が掘り下げられて下層にさらに空間が形成される。下層には壁面にふちが設けられ、その上に石板が置かれ上層の空間が作られる場合が多い。この石板があることによって、上層にもう 1 人分遺体を安置することが可能であるが、実際に石板の上に埋葬されている例はエルサレムには存在しない。そのため、二層構造をもつが実際に埋葬に利用されているのは下層のみである。⑤は、ロクリが 2 つ繋がっているタイプである。その機能については明確でないが、限られたスペースの中での埋葬空間の拡張であると考えられている。⑥は、埋葬室の壁面の上下にロクリが配置されるタイプである。これも⑤同様に埋葬空間の拡張であると考えられている。⑦は、小型のロクリであり、これまでのロクリとは異なり 1.2m以下の長さのロクリである。その大きさから一次埋葬に利用することは不可能であり、集骨の納骨場所やオシュアリの貯蔵場所として利用されていたと考えられている。クロナーとジスは、これらの中でもタイプ①と②が最も一般的であり、それ以外のタイプは数が少ない

[20] 例えば、Stern 1962; Grafman 1970 など。

図 9. ギリシア建築要素を取り入れたファサード,
サンヘドリンの墓

図 10. ネフェシュの例, アブシャロムの墓

と指摘している。

同じ墓内の構造である埋葬室に関しては、その形態に特徴がないと考えられてきたため研究は少ない。全体的な形態としては、ロクリ墓が小型と大型の 2 種類に大別されることが指摘されており （Tal 2003, 291）、また、ベンチ墓にもみられたように複数の埋葬室を持つ大規模な墓も確認されている。埋葬室について注目されている部分は、ベンチ墓と同様にそこに掘り込まれるピットである。ハクリリはロクリ墓の基本的な形態に指摘したうえで、墓の高さが低い場合には埋葬室にピットが掘り込まれると指摘している（Hachlili 2005, 55-56）。一方で、クロナーとジスは墓内で立って作業するためピットが掘り込まれる（Kloner and Zissu 2007, 90）と述べている。墓の高さを低く製作しているのは墓の製作者であり、ハクリリの指摘はこの点で適していない。むしろ、全体の墓の高さを低く作りピットの部分のみ立つことが出来るようにすることで、作業がしやすいベンチを得ると同時に墓製作の手間を抑えていた可能性が高い（Kloner and Zissu 2007, 89）。また、メイヤーズが指摘しているように、ピットには集骨の際に遺骨を安置する機能もある（Meyers 1971, 9）。エルサレムではピット内に集骨やオシュアリが安置されている事例が確認されていること（Kloner and Zissu 2007, 90）からも、ピットが二次埋葬の場所の一つであることは疑いない。このようなピットのある埋葬室とその機能はベンチ墓と同様であり、ベンチ墓との関連について近年議論が進んでいる（詳細は後述する）。

墓の外部形態に関しても、研究が行われている。ベンチ墓には建築装飾を伴うファサード[21]が存在せず岩壁に簡素な入口を設けるのみであったが、前述のようにロクリ墓にはギリシア建築の影響を受けたフ

[21] 建築物の正面部分（入口部分）を指す用語。石切墓においては、墓の入口が設けられる箇所を指す。

ァサード（図 9）が作られる場合がある。ファサードについて、ハクリリが柱やペディメントなどの建築装飾から分類を行ったが（Hachlili 2005, 43-54）、エルサレム・エリコなどの墓を全て対象としたわけではなかったため、ハクリリの分類項目に当てはまらないファサードも存在していた。そのため、後にクロナーとジスによって新たにファサードの分類が行われた（Kloner and Zissu 2007, 45-51）。この研究によれば、ロクリ墓のファサードは、ベンチ墓と同様の簡素な装飾のないタイプとギリシア建築要素を取り入れたタイプに大別される。さらに、簡素な装飾のないタイプは①装飾のないファサードと簡素な入口、②玄関付ファサードと簡素な入口に分類され、ギリシア建築要素を取り入れたタイプは③玄関付ファサードと装飾された入口、④付柱間に二柱を配置する（distylos in antis）玄関付ファサード、⑤付柱間に一つの柱を配置する（monostylos in antis）玄関付ファサード、⑥三つの入口があるファサード、⑦アーチ状の枠が付いた入口を持つファサード、⑧切石で作られるファサード、⑨埋葬を想起させる建造物（ネフェシュ）（図 10）によって飾られるファサードに分類される。また、これらのタイプは建築装飾の違いによってそれぞれサブタイプが設けられている。エルサレムのロクリ墓のほとんどは①のサブタイプである「入口の周りに封石をはめるための窪んだ枠があるファサード」であり、それ以外の各タイプは数例のみしか確認されておらず数は少ない。ロクリ墓は富裕層に利用される墓であるが、ギリシア建築様式の大規模な装飾を伴ったファサードを作ることができたのは、富裕層の中でも一部であったことがこのことから伺える。ギリシア建築様式のファサードを持つ墓の多くはヘロデ朝時代に作られた墓であり、前 1 世紀以前に作られている墓はまれである。つまり、ギリシア建築様式のファサードを持つロクリ墓の数は少なく、その利用期間も短期間であり、クロナーとジスはこれらのことからファサードについて正確な編年を決定付けることは難しいと指摘している（Kloner and Zissu 2007, 51）。

また、ファサードによって墓の年代決定を行う試みも行われている（Forester 1978）。しかし、ドリス式などの大まかな建築様式による年代決定は可能であるが、細部の装飾による年代決定は行われていない。オシュアリも同様であるが、植物などの装飾は第二神殿時代及びそれ以降の時代に普遍的なものであり、銘文などがなければ特定の時期を示すことは難しいからである。クロナーとジスの分類からも分かるように、ロクリ墓の大半は建築的な構造を持たない簡素なファサードであり、これによって一般的な墓の年代決定を行うことは困難であるといえる。

ロクリ、埋葬室、ファサードは程度に差はあれ全てのロクリ墓に存在する要素であるが、これ以外にもロクリ墓には補助的な要素が存在する。例えば、ピットとは異なる溝や、別の墓に繋げるためにピットの内部やロクリの内部に設けられる階段である。これらは個々の墓の状況によって設けられるものであり普遍的にみられるものではないが、中にはアルコソリアのように一定数確認されるものもある。前述のように、第二神殿時代後期にはアルコソリア墓と呼称される石切墓が利用されるようになるが、アルコソリア墓として完全に独立しているタイプとロクリ墓の追加の埋葬室としてアルコソリアが設けられるタイプに区別される。また、アルコソリアがロクリと同一の埋葬室内に設けられる場合（図 11）もあり、アルコソリアが作られる墓の中では、ロクリとアルコソリアが共に利用される墓がエルサレムでは最も多い（Hachlili 2005, 70）。アルコソリアの出現はロクリよりも遅く、1 世紀にユダヤ地域で利用されるようになったことが分かっている（Avigad 1976, 259; Kloner and Zissu 2007, 85-86）。アルコソリアはロクリと同様に壁龕構造であるが、ロクリとは異なり横に長い棚型の壁龕であり、その開口部はアーチ状である。一般的なアルコソリアは壁を単に掘り込むものであるが、アルコソリアの棚部分を掘り下げ納骨空間を作り、その上部に石板で蓋をするサルコファガス型アルコソリア（図 12）と呼称されるタイプも確

図 11. ロクリとアルコソリアが共に利用される例,
アケルダマ, Cave2（Avni and Greenhut 1996, Fig.1.33）

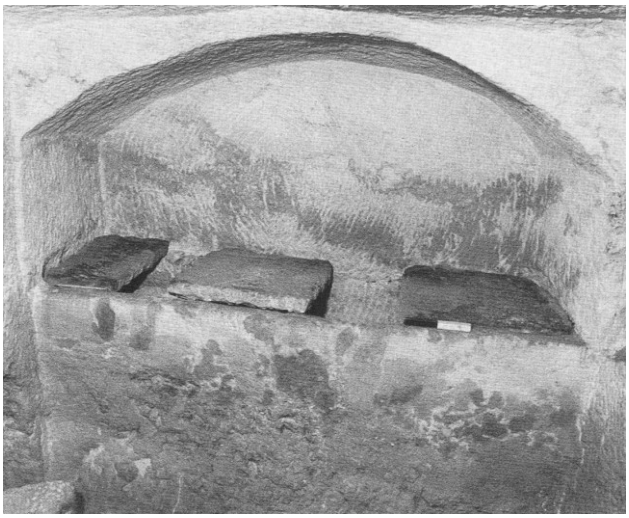


図 12. サルコファガス型アルコソリア, アケルダマ,
Cave2（Avni and Greenhut 1996, Fig.1.34）

認されている。ロクリ墓に補助的にアルコソリアが付されるのではなくアルコソリア墓として作られる場合は、埋葬室の入口を除いた 3 つの壁面にアルコソリアが設けられる。ハクリリは平均 6〜9 本作られるロクリよりもアルコソリアは埋葬場所が少なく、この点で高級な埋葬であると述べている（Hachlili 2005, 69）。また、アルコソリアが確認される墓はいずれも大規模で丁寧に作られている墓であり、エルサレムのより裕福な家族のためのものであったと考えられる（Hachlili 2005, 71）。

アルコソリアの役割は、その棚のような形態から一次埋葬の場所、とりわけ一族の有力者の一次埋葬の場所としてかつては考えられていた（Avigad 1954, 48-49; Mazar 1973, 56-57）。しかし、近年の研究ではアルコソリア上で一次埋葬を行っている墓がエルサレムで確認されていないことから、アルコソリアはオシュアリの安置場所であったと指摘されている（Hachlili 2005, 70; Kloner and Zissu 2007, 84）。エルサレムではアルコソリア上にオシュアリが安置されている墓は数多く確認されており、このことからクロナーとジスはロクリとアルコソリアが共に利用されている墓では、ロクリが一次埋葬、アルコソリアが二次埋葬の場所であったと述べている（Kloner and Zissu 2007, 84）。一方で、エルサレムのアケルダマ（Avni and Greenhut 1996）のみで確認されているサルコファガス型アルコソリアは、これらとはまた異なる機能を持っていたと考えられている。アビガドは、サルコファガス型アルコソリアは石棺と同様の機能を果たしていたと指摘しており（Avigad 1954, 118）、このタイプの場合は納骨空間内で一次埋葬が行われていたと考えられている（Avni and Greenhut 1996, 32）。また、アルコソリアが一次埋葬の場所として考えられていた時期は、ブロック・スミスが鉄器時代の棚型壁龕墓をアルコソリア墓と呼称したように、その起源を鉄器時代のベンチやマケドニアの墓にみられる寝台（kline）に求める研究（Galling 1936）もあった。しかし、クロナーとジスはどちらも数世紀もの編年のギャップがあることから、アルコソリアの出現は、埋葬の機能的な問題を解決するために第二神殿時代に発達した形態であると述べている（Kloner and Zissu 2007, 85）。

4　ユダヤ地域のロクリ墓の起源の研究

この節の冒頭で述べたように、ロクリ墓はユダヤ地域にはセレウコス朝時代まで確認されていなかった墓であり、ロクリ墓の起源は周辺地域に求められた。ユダヤ地域の南に位置するイドマヤ地域のマレシャでは、前 3 世紀から前 2 世紀にかけてロクリ墓が構築されており、この墓地の発掘調査が行われたことをきっかけにロクリ墓の起源に関する研究は進んでいった。マレシャのロクリ墓は、エルサレムよりも出現が早く、その形態や埋葬習慣もユダヤ地域とは異なるものであった（図 13）。マレシャの墓地の発掘調査を行ったピーターとターシュは、長方形の大きい左右対称の埋葬室や切妻屋根構造のロクリ・埋葬室、多数のロクリを設け個人の伸展葬を行うといったマレシャのロクリ墓の特徴が、エジプトのアレキサンドリアのロクリ墓と同様であることを指摘し、マレシャのロクリ墓がアレキサンドリア起源であることを述べた（Peter and Tiersch 1905, 81-84）。後に再調査を行ったオレンとラッパポートは、マレシャのロクリ墓がユダヤ地域のロクリ墓のプロトタイプであることを指摘し、その起源がアレキサンドリアにあることに同意したが、シドン人（フェニキア人）入植者によってアレキサンドリアからマレシャへこの構造がもたらされたと述べている（Oren and Rappaport 1984, 149-153）。このようなエジプト起源説は、ピーターとターシュの研究から始まり多くの研究者が賛同している[22]が、一部の研究者は、アレキサンドリアのロクリ墓がそもそもフェニキアのロクリ墓の影響を受けていると指摘している（Schreiber 1908）。これはフェニキアのシドンやアムリットのロクリ墓[23]が前 4 世紀、もしくはそれ以前から利用されているためである。

タルは、エジプト起源説を明確に否定している（Tal 2003）。アレキサンドリアのロクリ墓とマレシャのロクリ墓の成立がほぼ同時期、もしくはマレシャの方が早い可能性があること、エジプトとは異なりユダヤ地域､イドマヤ地域では偽扉タイプの封石[24]を用いず火葬を行わないためである（Tal 2003, 298-299）。また、エジプト由来とされている切妻屋根構造は、既に青銅器時代にエジプトから東地中海岸南部地域へと伝わり利用されていたため、直接・間接的にエジプトの影響があったとしても、この時代のロクリ墓の切妻屋根構造の起源をエジプトに求めることは難しいとも述べている（Tal 2003, 299）。タルは、フェニキアのロクリ墓が最も古いこと、この時代のフェニキアと東地中海岸南部地域では火葬を行わず、埋葬方法が伸展葬もしくは再埋葬という点で共通していること、両地域とも偽扉タイプの封石を用いないこと、フェニキアと東地中海岸南部地域の文化的、政治的、社会的、経済的な繋がりから、フェニキアがロクリ墓の起源であると指摘している（Tal 2003, 299）。オレンとラッパポートが指摘していたように、ロクリ墓の拡散にフェニキア人が重要な役割を果たしていたこと（Oren and Rappaport 1984, 149-153）は明らかであり、フェニキア人のエリート集団との各地域における交流がロクリ墓の広がりの要因の一つとして考えられている（Tal 2003, 299）。

---

[22] 例えば、Barag 1978; Kloner 1980; Kuhnen 1990 など。

[23] 例えば、Renan 1871; Jidejian 2000; Contenau 2000 など。

[24] 墓の入口は再埋葬を行う場合を除いて封石によって閉じられており、入口に封石をはめ漆喰を塗り込むなど完全に密閉状態にしていることが分かっている。また、墓の入口のみならずロクリの入口についても封石で閉じられている場合が多い。クロナーとジスはロクリの場合は一次埋葬の際の腐敗臭を和らげる役割があったのではないかと指摘している（Kloner & Zissu 2007:70）。盗掘された墓はこの封石が外されているが、未盗掘である場合は封石が原位置で残っている。

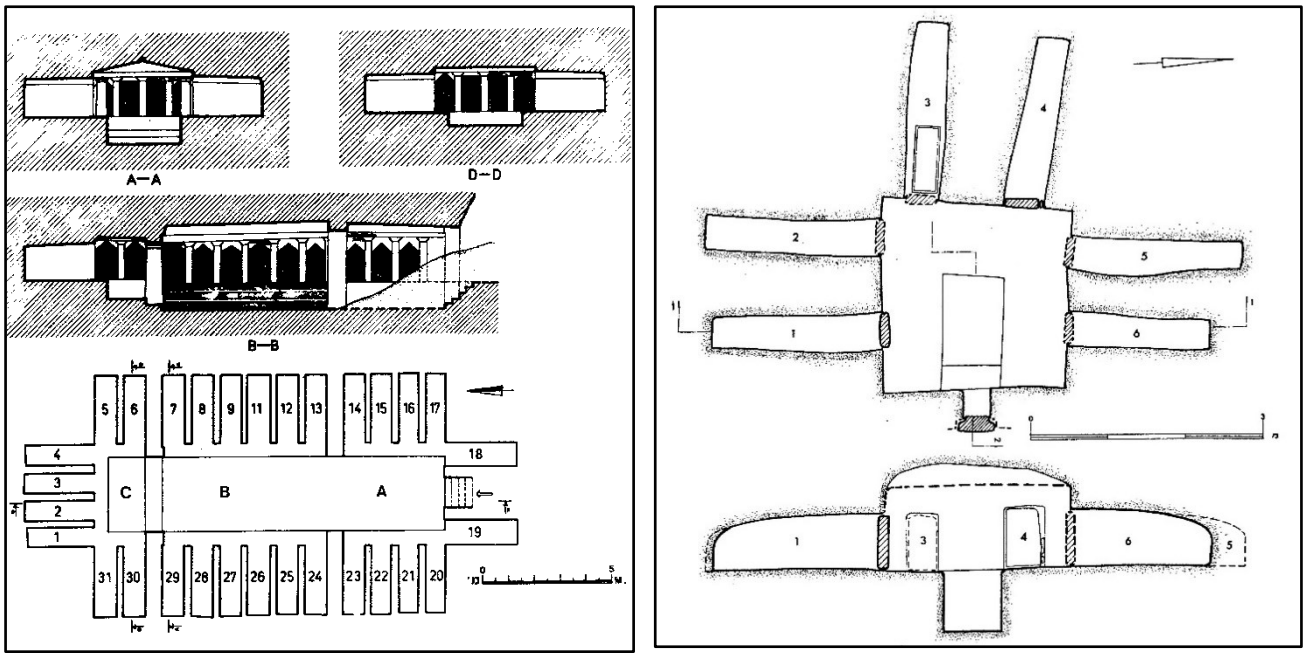


図 13. マレシャとエルサレムのロクリ墓, 左：マレシャ, Tomb E8（Oren and Rappaport 1984, Fig.11）
右：ギヴァット・シャピラ, エルサレム（Kloner and Zissu 2007, Fig.355）

これらの研究はいずれもユダヤ地域のロクリ墓が周辺地域由来の全く新しい墓であるという考えが根本にある。しかし、近年はこの考えについて疑問を呈する研究が行われている。ユダヤ地域のロクリ墓は周辺地域のロクリ墓とその形態が大きく異なることから、ハクリリは基本的な形態の違いを考慮する必要性を指摘した（Hachlili 2005, 69）。また、クロナーとジスは、ユダヤ地域のロクリ墓にみられるピットを持つ埋葬室とその機能はベンチ墓と同じであり、ロクリ墓がベンチ墓の影響を受けていると述べている（Kloner and Zissu 2007, 87-88）。ただし、クロナーとジスは鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓と第二神殿時代後期のピットのある墓の差異についても指摘している。鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓は、入口の床が直接埋葬室の床につながっている、または数段の階段を下りて床にたどり着く構造であり、ベンチは入口の床面より高い位置にあるが、第二神殿時代後期のベンチ墓やロクリ墓は、埋葬室の床面からピットが掘り込まれるためベンチは床面と同じ高さとなる。このベンチの違いに加えて、鉄器時代Ⅱ期と第二神殿時代後期の間にベンチ墓がほとんど新たに構築されていないというギャップから、クロナーとジスはベンチ墓とロクリ墓を直接的に結びつけることは難しいと指摘している（Kloner and Zissu 2007, 88）。また、クロナーとゼリンガーはこの類似をベンチ墓からロクリ墓への段階的な進化であると述べている（Kloner and Zelinger 2007, 219）。前節で述べたように、ペルシア時代からプトレマイオス朝時代には鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓が再利用されていたが、前 3 世紀末から前 2 世紀の初めには新たにベンチ墓に類似した墓が構築され始めた。クロナーとゼリンガーは第二神殿時代に入ってから構築されたこれらの墓を、前述のように鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓とは構造に差異があるものと位置付け、これらの墓をスタンディングピット墓（standing-pit tombs）と呼称し、ベンチ墓とは異なる墓とした。そして、このスタンディングピット墓にロクリが前 2 世紀に導入されることで、初期のロクリ墓が成立したと結論付けている（Kloner and Zelinger 2007, 219）。

しかし、この見解には大きな問題がある。例えば、クロナー自身が調査し報告を行っているエルサレムの鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓（Kloner 2001-2002）は、クロナーとゼリンガーがスタンディングピット墓の

特徴であると指摘していた「ベンチが床面と同じ高さになる」形態的特徴を有している。また、前 2 世紀のロクリ墓であるエルサレムのブネー・ヘズィルの墓（Barag 2003）は、クロナーとゼリンガーが鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓の特徴として挙げていた「ベンチが入口の床面より高い位置」になっている。つまり、鉄器時代Ⅱ期・第二神殿時代後期のどちらにおいても石切墓のベンチの高さにバリエーションが存在するのであり、この点を基準として分類をしたとしても、鉄器時代Ⅱ期と第二神殿時代のベンチ墓を明確に区分できるわけではない。そもそも、前 3 世紀末から前 2 世紀に製作されたスタンディングピット墓は数例に過ぎず、それらにも形態的差異が認められることからすると、墓の形態は鉄器時代Ⅱ期と基本的に同じであったと考えるべきである。これらの墓の埋葬方法や墓の機能がベンチ墓と同じである（Kloner and Zissu 2007, 87-88）ことを踏まえ、本研究では第二神殿時代後期のこのような墓をベンチ墓と呼称することにする。

このようにユダヤ地域のロクリ墓の起源についてはこれまでの研究で明らかになっているとは言えず、クロナーとゼリンガーの研究以降は新規の議論も見られない。しかし、ロクリ墓またはロクリがエジプト起源、フェニキア起源のどちらであっても両者は既にヘレニズム化した地域であり、アレキサンドリアはプトレマイオス朝の首都、それに関連するマレシャはマケドニア軍人の入植地である。ユダヤ地域へのロクリ墓の拡散はどのような形であっても、ヘレニズム化の流れに位置づけられるといえる。一方で、ユダヤ地域のロクリ墓には前の時代のベンチ墓の要素がみられる。それぞれの要素のあり方には、ユダヤ地域におけるヘレニズムとユダヤイズムの相克、そしてその時間的・空間的展開の一端が表れているはずである。

第 3 節　第二神殿時代のユダヤ人の埋葬に関する考古学的研究の課題

この章では、第一神殿時代から第二神殿時代後期の埋葬に関する先行研究を整理してきたが、ロクリ墓とベンチ墓はユダヤイズムとヘレニズムの相克の一端を捉えうる重要な考古資料であると考えられる。しかし、そうした議論を進めるためには様々な問題が存在する。

一つは、ロクリ墓の内部形態に関する研究の不足である。前述のように、ベンチ墓の定形化や分布の変化などは概ね明らかになっており、埋葬室の形態に込められた死生観についても研究が行われている。鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓の埋葬室の形態は当時の人々の死生観の重要な物的証拠だといえるが、ベンチ墓との類似が指摘されているロクリ墓の埋葬室に関して同様の観点での研究は行われていない。また、ベンチ墓とロクリ墓の平面形態の類似が初期のロクリ墓に限定されるものであるのか、利用期間の全てにおいて確認されるものであるのかも十分に検討されておらず、ロクリ墓の埋葬室の変遷も明らかになっていない。この点は、単純な形態の変遷の問題だけではなく、ベンチ墓に込められた家族的な死生観が継続しているのか、それともヘレニズムの影響で新しい死生観へと変化したのかという問題とも関わってくる。ロクリ墓のギリシア建築様式のファサードの研究は盛んではあるが、これはあくまで外部形態であり、死生観よりも権威や富を表象として理解しようとする方向性の研究が多い。一方、ロクリ墓の内部形態はベンチ墓の事例を鑑みると、単なる形態としてではなく、被葬者となる集団の死生観が反映される重要な物的証拠として捉えることができるだろう。第二神殿時代後期のユダヤ人の死生観を考えるためには、より内部形態に注目する必要があるといえる。

二つ目は、ベンチ墓とロクリ墓共に定量的な研究が行われていないことである。ベンチ墓と四部屋式住居の形態の一致が指摘されているが、全ての墓が四部屋式住居と一致しているのかどうかの検討はなされていない。また、ベンチ墓の編年研究は行われているが、四部屋式住居との比較をはじめとする埋葬室の形態に注目した研究も行われていない。同様に、ロクリ墓もエルサレムのように悉皆的な墓の集成（Kloner and Zissu 2007）が作られているにも関わらず、ロクリやファサードの分類が行われているのみで、それらの時間的変遷が実数で示されていない。これは埋葬室に関しても同様である。ユダヤ人の要素とヘレニズムの要素を分類に基づいて区別し、それぞれの要素の時間的、空間的動態を定量的に捉えることが重要である。

最後に、ユダヤ地域のロクリ墓の研究がエルサレムとエリコを中心とした議論になっていることも問題である。その資料の豊富さと政治的・宗教的な中心地であったことから、これまでの研究はエルサレムのロクリ墓に集中し、次いで墓の数が多いエリコがその比較対象となっている。ハクリリがこれ以外のユダヤ地域やサマリア地域の墓地の代表例をまとめており（Hachlili 2005. 1-27）、ロクリ墓の分布について全く触れられていないわけではないが、墓の有無以上の指摘はほとんどされていない。地域全体のロクリ墓の分布は十分に議論されておらず、その時間的、空間的な動態は不明瞭であるといえる。しかし、ロクリ墓は少なくとも前 1 世紀にはユダヤ地域全体へと広がった墓であり、ハスモン朝時代以降は領土拡張・発展によってユダヤ人の居住地が各地へと作られたため、それに伴ってユダヤ人の墓地はさらに広範に分布していったことが推測される。ユダヤ人の埋葬の変遷とそのプロセスにおけるヘレニズムの影響を検討するためには、ユダヤ地域全体に目を向ける必要がある。

これらのユダヤ人の埋葬に関する課題は、ヘレニズムの影響を考古資料から検討するために解決しなければならないものである。この課題を解決することで、第二神殿時代後期のユダヤ人が埋葬に関してどのようにヘレニズムに向き合い、どのように自らの文化・思想を形作っていったのか明らかにしていきたい。すなわち、ユダヤイズムとヘレニズムの相克をユダヤ人の埋葬から考えていきたい。次章では、墓の平面形態を中心に定量的な分析を行ってエルサレムの埋葬の変遷を明らかにし、エルサレムのロクリ墓へのヘレニズムの影響・鉄器時代Ⅱ期から継承する要素を検討する。

第 2 章　第二神殿時代後期のエルサレムにおける埋葬の変遷

第 2 章　第二神殿時代後期のエルサレムにおける埋葬の変遷

第 1 節　はじめに

これまでの章では、ユダヤイズムとヘレニズムの相克を考古学的に考えるにあたって、ユダヤ人の埋葬、特にロクリ墓が適していることを示してきた。一方で、ロクリ墓に関する研究には問題点も多く、これらの課題を解決する必要があることも浮かび上がってきた。これまでの内容を踏まえ、第 2 章では、ユダヤ地域のエルサレム、イドマヤ地域のマレシャ、エジプト地域のアレキサンドリアの墓地の情報を集成し、前 2 世紀におけるエルサレムのロクリ墓と同時期のヘレニズム都市のロクリ墓、鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓との墓の形態を中心とした比較を行う。これによって、エルサレムにおけるユダヤ人の埋葬に対するヘレニズムの影響、前の時代からの継続的な要素を明らかにすることが可能となる。そして、第二神殿時代後期にあたる約 300 年間の時間軸に沿ってエルサレムのロクリ墓の時間的変化を明らかにし、エルサレムのユダヤ人が埋葬に関してどのようにヘレニズムに向き合ったのか読み解く。

第 1 章で述べたように、エルサレムのロクリ墓と周辺地域のロクリ墓は起源に関する研究の中でたびたび比較されてきたが、それは埋葬方法や封石などの限られた遺物が中心であった。また、切妻屋根構造のように墓の内部が比較対象となる場合もあったが、それらは装飾的な意味合いが強く、実際に埋葬が行われた埋葬室やロクリなどの基本的な内部の形態的特徴は比較の中で詳細に検討されてこなかった。これまでの研究で埋葬方法や建築装飾、一部の遺物などについては、ユダヤイズム要素・ヘレニズム要素の区分がなされているといえるが、墓内部の形態的特徴に関しては、こうした系統的整理がほとんど進んでいない。そのため、この章では、新たに墓の内部形態を中心とした地域間・時代間の比較を行う。その際には定量的に分析を行う。これまでの研究成果に墓の形態を加えることで、より詳細にユダヤ人の埋葬における両系統の要素の関係を把握することができるであろう。

ユダヤ地域のロクリ墓の研究が特にエルサレムを中心としたものになっていることは問題点ではあるが、同時に、エルサレムがユダヤ地域のロクリ墓の利用の開始地点であり、最も盛んにロクリ墓が利用されていた都市であることは明らかである。ユダヤ地域のロクリ墓の分布・変遷が現時点では明らかでないため、これを解釈するためにも一定の資料数のあるエルサレムの傾向をまず把握する必要があるだろう。

第 2 節　対象遺跡

1　エルサレムの墓地

エルサレムは標高約 800mの中央山地の上に位置する都市である。統一王国時代にはダビデ王によって都とされ、ソロモン王の時代にはエルサレム神殿が作られるなど最盛期を迎えた。その後の時代もエルサレムは政治的、宗教的な中心地としての役割を果たし続け、現在に至るまでに町は破壊と改築、拡大を繰り返し、様々な時代の遺構が混在している。町全体が遺跡でありながらも、その上には人々が現在も生活しており、部分的な発掘調査が現在も進められている。エルサレムの市外には、東にはオリーブ山、北

東にはスコープス山が位置しており、市壁の東側はキドロンの谷、南側にはヒンノムの谷が位置している。谷部分には水路や貯水槽が多数作られており、大規模な水利施設が存在していたことが明らかになっている。市街の東部、キドロンの谷とオリーブ山に面した市壁内の丘にはかつてはエルサレム神殿が建てられており、その南部・西部に市街が広がっていた。エルサレムの墓地は、市街の外周部に位置しており、現在に至るまで時代を問わず同様の範囲に墓が作られ続けてきた。

多数の墓地が位置するスコープス山には 1925 年にヘブライ大学のキャンパスが開校され、それもあってかエルサレムの墓の分布調査は古くから継続的に行われ続けてきた。第二神殿時代のエルサレムの悉皆的な墓の分布調査の成果はクロナーによってまとめられ（Kloner 1980）、後にクロナーとジスによって未報告資料を含めたエルサレムの墓の集成が作られた（Kloner and Zissu 2007）。これらの研究によれば、エルサレムの墓は、市壁を囲むように一定の範囲でリング状に存在しており、街道や居住地に近い場所よりも墓を作りやすい岩壁沿いに分布している。また、市街の西側よりも東側に分布が集中していることも分かっている。分布調査で確認されている墓のほとんどは石切墓であり、793 基の石切墓が確認されている（Kloner and Zissu 2007, 30）。

未報告資料も含まれていることに加えて、墓の出土遺物や年代決定の基準についてもまとめられており、近年の土器編年などに照らし合わせた墓の年代の改定も行っていることから、本研究ではエルサレムについてクロナーとジスの集成を基礎としたい。この集成を用いるにあたって、本研究で取り扱うことのできる正確な墓の数を把握する必要がある。まず、本研究ではロクリ墓の形態を主として検討していくため、遺構図面が存在しない、もしくは遺構図面を含めた調査成果が公表されていない、遺構図面があっても崩落が著しく形態を把握できない墓は対象外となる。これらの多くは踏査の結果発見されたもので、そもそも墓の開口部のみが確認され、石切墓としか同定されていない。また、前述の 793 基という数は踏査と発掘調査を合わせたものであり、年代決定が行われていない墓も多く含まれている。本研究ではロクリ墓の変遷を検討するため、このような年代が不明瞭なものは対象外となる。さらに、この集成ではエルサレム陥落以降の時代に作られた墓も一部取り扱われているが、本研究の対象とする年代は第二神殿時代後期であるため、そのような墓は対象としない。墓の形態を把握することのできる遺構図面のあるロクリ墓はクロナーとジスの集成の中では 266 基あり、発掘調査により第二神殿時代後期のいずれかの年代に明確に同定されるロクリ墓はその中の 171 基となる。遺構図面のある墓で対象外となった墓は、その過半数が盗掘の被害によって出土遺物がなく年代決定が行われていないロクリ墓であり、それ以外はエルサレム陥落後、特にビザンツ時代の墓であった。年代決定が行われていないロクリ墓の中にも第二神殿時代後期に属するロクリ墓があることは予測されるが、同時にエルサレム陥落後のユダヤ人が利用したとは限らないロクリ墓が含まれている可能性もあるため、本研究でこれらの年代不明の墓を取り扱うことは難しい。

また、クロナーとジスの集成が作られた 2007 年以降もエルサレムではロクリ墓の発掘調査は行われているため、2007 年度以降に調査が行われたロクリ墓は本研究で整理を行った。キルバト・アダッサ（Baruch and Ganor 2008）、ディスキン通り（Solimany et al. 2011）、ナハル・アザル（‘Adawi and Baruch 2012）、シェイク・ジャラ（Kagan 2012）、エン・ヤール（Abu Raya and Weissman 2013）、ヒルバト・エル・マグラム（Adawi 2013）、サンヘドリア（Baruch and Eirkh-Rose 2014）、オリーブ山（Be’eri 2015; Goldenberg et al.

表 2. 対象とするエルサレムのロクリ墓（区画番号は Kloner and Zissu 2007 に基づく）

区画番号	区画名称	前2世紀	前1世紀	1世紀
1	スコープス山西斜面	2	16	7
2	スコープス山東斜面	3	19	5
3	オリーブ山	0	1	1
4	オリーブ山東斜面	0	1	8
5	ナハル・キドロン上層部	0	0	4
6	キドロンの谷	3	0	2
7	ナハル・キドロン	0	3	16
10	ベン・ヒンノムの谷下層部	0	0	3
11	ナハル・アザル、アルモン・ハナチーヴ山陵	0	4	1
12	アルモン・ハナチーヴ山陵とタルピオット東近傍	0	3	1
13	タルピオット、ラマトラヘル、ベイトサファファ、ギロ	1	6	2
14	旧市街西部及び南西部	1	0	0
16	バイト・バガン山陵東斜面、ギヴァット・モルデハイ	0	1	0
19	ロメマ、メコールバルークとその周辺部	0	1	1
21	十字架の谷、ザッハー公園とその周辺部	1	4	0
22	ヘブル大学ギヴァット・ラムキャンパスとネヴァ・シャアナン	0	2	0
23	レハヴィア近傍、キルヤットシュムエル、タルビヤ	2	2	4
24	テルアズラ、シュムエル・ハナヴィ西部のアズラ	1	0	2
25	サンヘドリア	0	2	14
26	ラマト・エシュコルとエシュコル通りの西部	0	4	2
28	ギヴァット・ハミバター、ナハル・ゾヒム	2	6	1
29	ギヴァット・シャピラ(フレンチヒル)	1	9	1
合計		17	84	75

2020）、ワディ・エル・ジョズ（Yegar 2016）、アケルダマ（Klein et al. 2017）、ウム・トゥバ（Baruch and ‘Adawi 2017）、平和の森（Goldenberg et al. 2020）が 2007 年以降に調査がなされた第二神殿時代後期のエルサレムの墓地であり、その中で同様の基準を満たしている墓は、ディスキン通り、サンヘドリア、アケルダマの計 5 基であった。クロナーとジスの集成と同様に、盗掘の被害によって出土遺物がなく年代決定が難しいロクリ墓が多くみられた。よって、本研究では、エルサレムのロクリ墓について、クロナーとジスの集成に基づく 171 基とその後の調査で確認された 5 基を合わせた 176 基を対象資料とする（表 2、図 13）。なお、複数の埋葬室を持つ墓である場合は、埋葬室毎に 1 基として数えている。複数の埋葬室を持つ墓は、一つの入口や前室を共有しているが、各埋葬室は一つの墓として形態的に独立しているためである。後述する他の対象遺跡についても同様の取り扱いを行う。

また、冒頭で述べたように、本節では鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓を比較対象として用いる。第二神殿時代後期とは異なり、鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓はエルサレムに極端に集中しているわけではなく、ユダ王国全体に広く分布している。例えば、ナビ・ダンヤル（Amit and Yezerski 2001）やギブオン（Eshel 1987）のように 10 基以上のベンチ墓が確認されている中規模の遺跡や数基の墓を有する小規模な遺跡がユダ王国の各地に点在する。そのため、地域全体の分布が明らかになっている一方で、エルサレムの分布状況は十分に把握されていない。

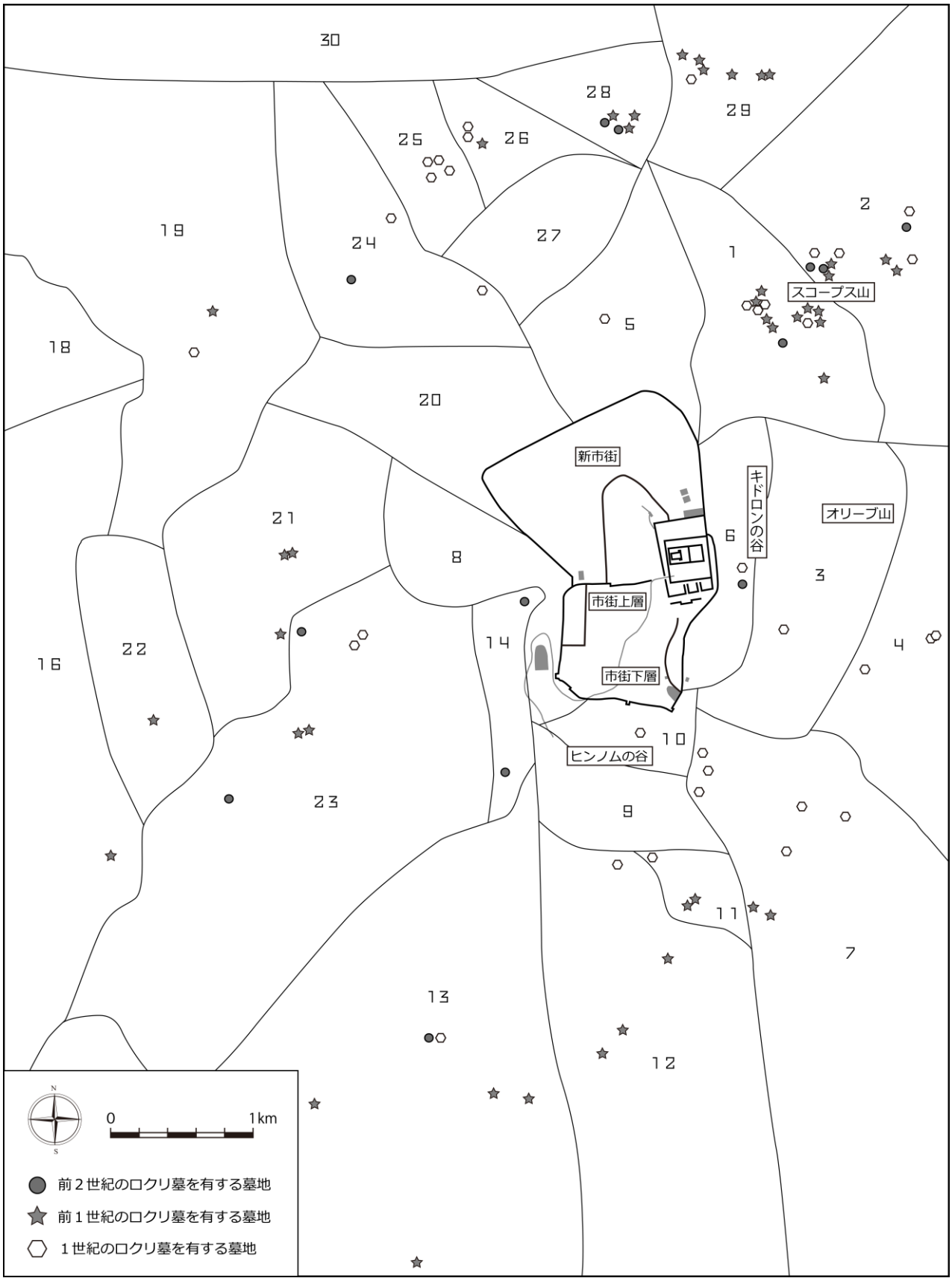


図 14. エルサレムにおけるロクリ墓を有する墓地の分布図

（Kloner and Zissu 2007, Fig. 1; Seligman 2014, Fig. 1 を元に作成、区分け及びその番号は表 1 と対応）

本研究では、ロクリ墓と同様の基準を満たしている鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓として、ダマスカス門北（Mazar 1976）、ヒンノムの谷（Barkay 2000）、聖エティエンヌ修道院（Barkay et al. 2000）、スルタン・スレイマン通り（Barkay et al. 2000）、マミラ（Reich 2000）、旧市街西壁（Broshi and Gibson 2000）、マロット・ダフナ（Kloner 2001-2002）、ギヴァット・ラム（Kloner 2001-2002）、ヘルツルの丘（Kloner 2001-2002）、ナビ・サムウィル（Kloner 2001-2002）、シオン山（Kloner and Yezerski 2020）の 44 基を対象とする。なお、これらの大半は前 8 世紀に作られ、数百年間利用されていた墓であり、ヒンノムの谷のベンチ墓のみ前 7 世紀に作られたものである。また、マミラの墓はペルシア時代に再利用されており、ヒンノムの谷の墓はバビロニア捕囚時代を経てペルシア時代まで継続的に利用されている[25]。ベンチ墓については、ロクリ墓のように年代は区切らず、総じて鉄器時代Ⅱ期として一括して扱う。

2　マレシャの墓地

鉄器時代にユダ王国の都市であったマレシャには、バビロニア捕囚時代からエドム人が定住していた。初期ヘレニズム時代になると、アレクサンドロス大王の東征によってマレシャは征服され、退役したマケドニア軍人の入植地となった。加えて、アポロファネス一族を首領とするシドン人などのフェニキア人やナバテア人もマレシャに入植した。これを契機にヘレニズム化したこの地域はイドマヤと呼ばれるようになり、マレシャとその周辺は発展していった。マレシャは、イドマヤ人、ギリシア人、フェニキア人、ナバテア人の様々な文化が混在する都市となり（Oren & Rappaport 1984:114-115）、その発掘調査の成果から、初期の人口は約 1 万人ほどであったと推定されている（Kloner 2003a, 154）。マレシャは上層と下層に分けられ（図 15）、上層は分厚い市壁と門に守られた都市（テル・マレシャ）であった。市壁の四隅には見張り塔が設けられ、一部には鉄器時代Ⅱ期の壁を再利用している痕跡も確認されている（Kloner 2003a, 12）。上層の都市は中心に大きな通りがあり、そこに横道が直交しグリッドを形成するギリシア由来のヒッポダミア・プランであり、建造物にもギリシア様式の建築装飾が確認されている。エルサレムとは異なり初期ヘレニズム時代に都市が建設されたため、そのプランや構造物にはギリシア文化の影響が多くみられる。一方で、下層は地下の街であり、上層の外周部の地下には、住居や店、工房など様々な機能を持った洞窟が張り巡らされていた。巨大な鳩小屋（columbarium）やオリーブプレスなどの生産施設も下層に作られており、街の広さとしては上層よりも大きい。マレシャは良好な石灰岩の産地でもあり、多くの石切場も下層に確認されている。

セレウコス朝時代になると、マカバイ戦争の際にマレシャはユダヤ人の反乱に対する拠点として利用され、それをきっかけに衰退し始めることになった。ハスモン朝時代には、マレシャはヒルカノス 1 世により前 112 年に征服され、ユダヤ人の入植地として利用されるようになった。前 63 年にはマレシャを含めたイドマヤはハスモン朝下から分離されるが、最終的には前 40 年にパルティアによって滅ぼされることになった。マレシャの滅亡後は隣接するベト・グヴリンが新たな都市として発展していくことになる。

---

[25] バーカイはヒンノムの谷のベンチ墓の事例は、バビロニア捕囚時代にエルサレム周辺にコミュニティが保たれていた証左であると指摘している（Barkay 2000, 105-106）。ヒンノムの谷のベンチ墓の利用がユダ王国の人々によるものであると証明することは困難であるが、バビロニア捕囚時代に行われていた埋葬も家族埋葬であり、それはベンチ墓と同様の手順で行われていた。コミュニティがなければ、このような墓を保つ必要のある埋葬は行われないはずであり、バーカイはシェケムやサマリアから逃げ延びた人々を含めたコミュニティが発達していた可能性が高いと述べている。

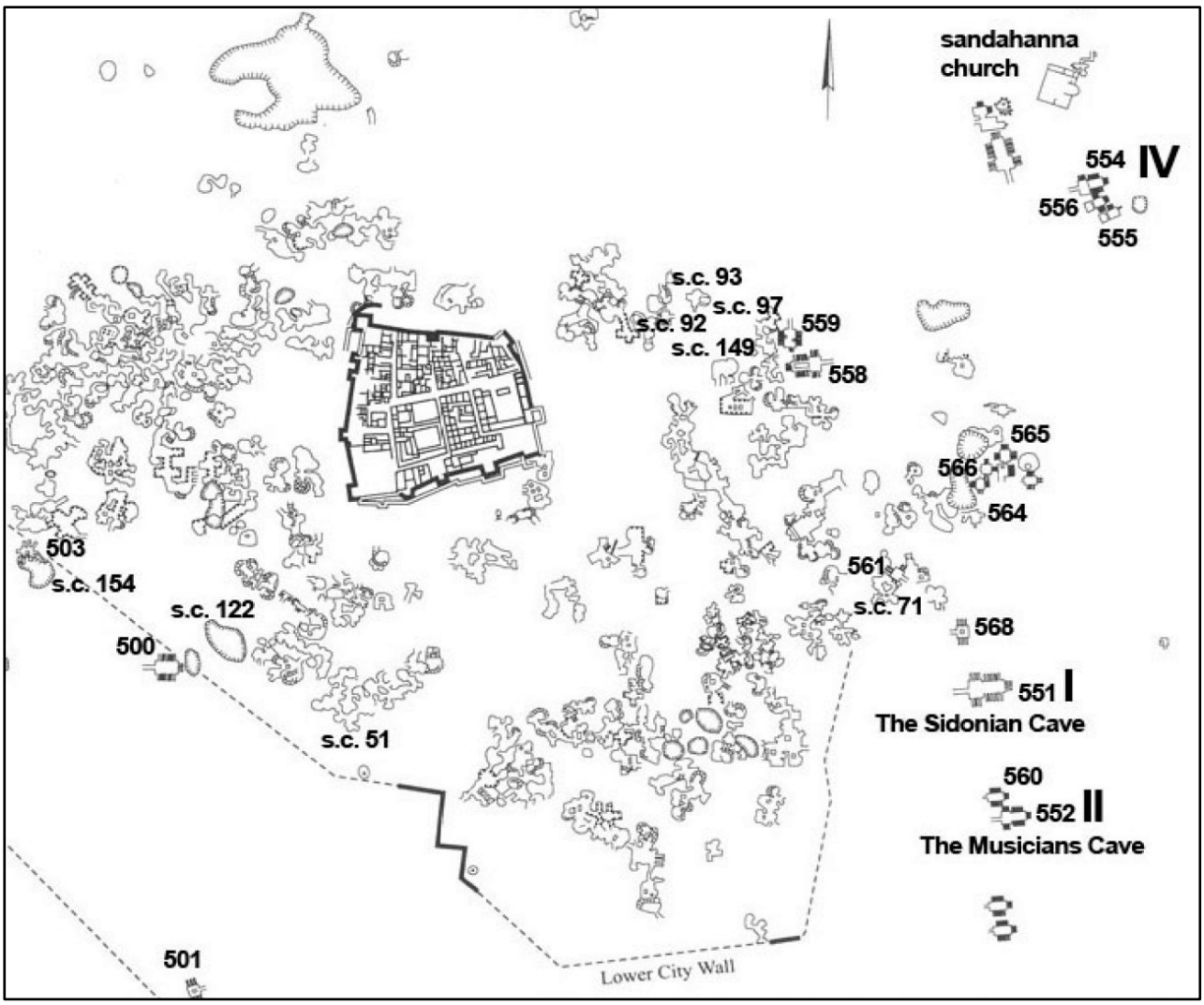


図 15. テル・マレシャと下層の街及び墓地の分布図（Zissu and Kloner 2015, Fig.1）

マレシャは東地中海岸南部地域の中でも利用されていた期間が短い都市であり、また、主として初期ヘレニズム時代に利用されていた都市である。そのため、他のテル型遺跡ではヘレニズム時代の全体的な都市区画が明らかになることはほとんどないが、マレシャでは初期ヘレニズム時代の都市の大部分が明らかになっている。

マレシャの墓地もエルサレムと同様に市街の周辺に位置し、これまでの発掘調査で東部、北部、南西部にそれぞれ墓地が確認されている（図 15）。初期ヘレニズム時代のマレシャの墓はいずれもロクリ墓であり、他のタイプの石切墓は利用されていない。マレシャのロクリ墓の形態的な特徴は、入口から奥に伸びる長方形の部屋、数十本作られる切妻屋根構造のロクリとそれらが左右対称であることである。墓によっては比較的作りが粗雑なものもあるが、「シドン人の墓」（Kloner 2003a, 21-24）に代表されるように、長方形の部屋から直角にロクリが掘り込まれ、定形的な左右対称構造を持つ墓が多い。それ以外の特徴として、壁画が挙げられる。例えば、シドン人の墓ではロクリの間に柱、上部にはエンタブラチュアが描かれ、ギリシア建築の装飾が壁画によって再現されている（図 16）。フリーズには象やライオンなど様々な動物が描かれ、闘争図や幻獣のような題材もみられる。全ての墓でシドン人の墓のような装飾が見られるわけではないが、ギリシア建築装飾を壁画として再現している事例はマレシャの複数の墓で確認さ

図 16. ロクリ上部の壁画と銘文, シドン人の墓

れている[26]。

また、壁画に加えて、ロクリの上部には銘文が施される場合も多い。銘文には被葬者の名前が書かれており、埋葬された年代や父親の名前が併記されている場合もある（Regev 2017, 38-39）。マレシャのロクリ墓は人骨の残存状況が悪い場合が多いが、一つのロクリに一個人の名前が記されていることから、マレシャでは個人埋葬、かつ伸展葬がロクリ内で行われていたことが分かっている（Oren & Rappaport 1984, 117）。銘文に記された被葬者同士の諸関係から、マレシャのロクリ墓は、マレシャに居住していた人々の家族墓であると考えられてきた（Oren & Rappaport 1984, 117; Berlin 2002:139-140; Zissu and Kloner 2015, 101）。一方で、被葬者間の関係が明瞭でない、または銘文が存在しない場合も多く、家族墓であることが明らかな墓はシドン人の墓など一部の墓に限られる。埋葬方法から家族墓か共同墓地であるかを区別することは難しいが、マレシャのロクリ墓の中に共同墓地として利用されていた墓があった可能性は十分に考えられるであろう。テル・マレシャと比較して、マレシャの墓地は盗掘の被害が大きく、その埋葬習慣にはエルサレムと比べて不明瞭な点が多いことには留意する必要がある。

エルサレムに居住している人々は基本的にユダヤ人であり、エルサレムのロクリ墓がユダヤ人の墓であることは明らかである。一方で、前述のように、マレシャにはイドマヤ人、フェニキア人、ナバテア人、ギリシア人が居住しており、マレシャのロクリ墓がどの民族の墓であるかを同定することはエルサレムと比較すると困難である。初期ヘレニズム時代のマレシャのロクリ墓では、装飾の差異はあっても埋葬方法は同様であるため、埋葬方法によって民族を特定することは難しい。銘文があれば、言語や記名から

[26] 例えば、Tomb E8（Oren & Rappaport 1984）、Tomb Ⅱ（Peter and Thiersch 1905）、Tomb 500（Kloner 2003a）、Tomb 557（Zissu and Kloner 2015）など。

被葬者を特定することは可能であるが、その場合でも全ての被葬者を同定し得るわけではない。例えば、銘文はギリシア語が多いが、これは被葬者がギリシア人であることを示しているわけではなく、イドマヤ人やフェニキア人がギリシア語で書かれたギリシア人名、イドマヤ人名、フェニキア人名などの名前を利用していたからである。この場合、その名前が特徴的であれば民族も判別できるが、広い範囲の地域で使われる一般的な名前である場合は詳細に特定することは難しい。シドン人の墓は銘文から、マレシャのシドン人コミュニティの長であったアポロファネス一族が埋葬されていたことが明らかとなっているが、このように被葬者の民族や身分、家族関係が詳細に明らかになるのは特殊な事例だといえるであろう。しかし、マレシャのロクリ墓の民族が明確に同定できない点は大きな問題ではない。マレシャは様々な地域の文化が混在する都市であり、シドン人の墓に埋葬されるアポロファネス一族の系譜にイドマヤ人の名前が見られること（Zissu and Kloner 2015, 103）からも分かるように、各民族のコミュニティは独立していたわけではなく相互に関係していたのである。マレシャの人々はヘレニズムと各民族の文化を合わせたマレシャの文化を形成していたともいえる。つまり、マレシャのロクリ墓の被葬者については、どの民族かということよりか、マレシャの人々という総体で考えた方が良いだろう。

マレシャのロクリ墓は銘文と副葬品などの考古学的情報から前 3 世紀の初めに利用され始めたことが明らかとなっている。多くの墓は数百年間利用されたが、ハスモン朝時代にマレシャがユダヤ人の入植地となったことで、前 1 世紀以降（特に 1 世紀以降）はユダヤ人がこれらの墓を再利用している（Oren & Rappaport 1984, 151-153）。これは歴史的背景と集骨やオシュアリなどの二次埋葬が前 1 世紀以降に行われ始めることから明らかである。マレシャのロクリ墓自体は 2 世紀まで利用されるが、マレシャの人々の埋葬は約 200 年間に限られるといえるだろう。また、マレシャの 6km ほど東のキルバト・ザクカでは、1 基のみであるが前 4 世紀に作られたロクリ墓が確認されている（Kloner et al. 1992）。その形態や壁画と銘文がある点はマレシャと同様であり、これらの情報からギリシア人入植者の墓であると考えられている。マレシャの情報と合わせると、前 4 世紀から前 3 世紀の初めにはフェニキア人・ギリシア人入植者によってイドマヤ地域にロクリ墓がもたらされたと考えられる。

エルサレムと同様に、マレシャに関しても墓の形態を把握することのできる遺構図面が存在し、かつ墓の年代が明らかであるという基準を設定する。これを満たしているロクリ墓として、本研究では 21 基を対象とする（表 3）。

3　アレキサンドリアの墓地

アレキサンドリアは､アレクサンドロス大王によって前 332 年に建設された比較的新しい都市であり、プトレマイオス朝の首都として発展した。これまでの二都市とは異なり沿岸都市であるアレキサンドリアは、プトレマイオス朝時代には商業・文化の中心地であった。アレキサンドリアは海風と季節風を通すために碁盤の目のように道が張り巡らされた計画都市であり、北の地中海と南のマレオティス湖を繋ぐ運河が作られ、堤防や大港、大灯台が作られるなど、大規模な都市であった。都市の構造は、マレシャと同様のヒッポダミア・プランであり、中心には大通りが十字にはしり、それによって居住区が分けられていた（Venit 2002, 9）。アレキサンドリアには東地中海全域から移民が集まり、ギリシア人、エジプト人、フェニキア人、ユダヤ人など様々な民族が居住していたが、アレキサンドリアを建設したのはギリシア

人であり、人口は多く、地中海に面した最も良い居住区であるブルケイオンに居住していた（Venit 2002, 9-10）。そこには神殿や王宮、劇場などの重要施設が設けられていた。元来この地域に居住していたエジプト人の居住区は、都市の南西部である運河が通るラコティスに位置する。この居住区にはフェニキア人など地中海沿岸部の人々も居住していた。イスラエル王国の滅亡やバビロニア捕囚の際にそれを逃れたユダヤ人の中にはエジプトに向かった人々もおり、アレキサンドリアにはエジプトに住んでいたユダヤ人の居住区も存在していた。ユダヤ人の居住区は都市の南東部のコム・エル・ディッカに位置しており、また、これとは別に東端のカノポス門周辺に居住区があったようである。

アレキサンドリアの墓地もこれまでの二都市と共に都市の郊外に位置している（図 17）。都市は時代を経るにつれて拡大していったため、古い時代の墓が都市の内部で確認される場合もある（Fedak 1946, 129）。主要な墓地は、都市の東部・西部とファロス島に作られており、海に面した墓があることもアレキサンドリアの特徴である。アレキサンドリアの墓は、ランドバターによれば、大型の地下埋葬室とそれが複数集まった複合体、個人墓（石切墓や墳墓、土葬など）、葬祭用モニュメントが設けられる墓に分類される（Landvatter 2013, 64-65）。個人墓を除いて、ほとんどの墓にはギリシア建築様式のファサードやロクリ、場合によっては地上部に葬祭用モニュメントが設けられており、ベニットはこのような墓を「大型墓（monumental tombs）」と呼称している（Venit 2002）。本研究ではこれまでの二都市の呼称に倣い、これらの墓をロクリ墓と呼称する。アレキサンドリアに居住したギリシア人は、当初自分たちの習慣に従った墓を利用したと推測されるが、例えばマケドニアで利用されていた型式の墓はアレキサンドリアではほとんど確認されていない。フェダクは、エジプトに存在していた墓やアナトリアやキュレネ地方の墓の影響を受けて、アレキサンドリアの墓の形態や埋葬習慣はすぐに変化したと述べている（Fedak 1946, 130）。ロクリ構造がアレキサンドリアよりも前にフェニキアで利用されていたことを踏まえると、アレキサンドリアの墓は様々な文化の要素を取り入れたものであるといえるであろう。

アレキサンドリアのロクリ墓の形態は、入口から奥に伸びる長方形の部屋と多数作られるロクリという点でマレシャと類似している（図 18）。一方で、切妻屋根構造のロクリはマレシャほど作られておらず、また、アレキサンドリアのロクリ墓は精巧でありながらも左右対称に作られてはいない。加えて、アレキサンドリアでは寝台（kline）[27]や供物台が設けられる場合があり、とりわけ寝台はほとんどのロクリ墓に作られている。寝台は埋葬に関連する宴席で参列者が寝そべり、食事をするためのものであると同時に、埋葬儀礼の際に被葬者が一時的に安置される場所でもある（Venit 2002, 18）。寝台の中にはサルコファガス型と呼ばれる内部が掘り下げられているタイプもあり、この場合は後者の機能に適している。供物台も埋葬儀礼に用いられるものであり、アレキサンドリアのロクリ墓には宴席・儀礼のための施設がロクリなどの被葬者を埋葬するものとは別に作られている。また、動物やギリシア建築の装飾壁画、被葬者の銘文もマレシャと同様に確認されているが、アレキサンドリアでは実際のギリシア建築様式の構造物として柱などが墓内に作られる場合が多い。

アレキサンドリアのロクリ墓では、火葬と伸展葬、ミイラの 3 つの埋葬方法が確認されている。これらはロクリ墓を含め、アレキサンドリアではどの時代、どの墓地にもみられるものであり、ロクリ墓ではこれらの埋葬が混在している状況である。火葬はギリシア由来の埋葬方法であり、火葬がされた遺骨は骨壺（urn）に納骨されるか、ロクリの内部にそのまま安置される。ミイラと伸展葬は防腐処理の有無が大

[27] 寝台は前 6 世紀頃のアナトリアが起源であり（Baughan 2016）、初期ヘレニズム時代にはマケドニアやキプロス、ロドスなどの地中海世界に広がっていた（Venit 2002, 18）。

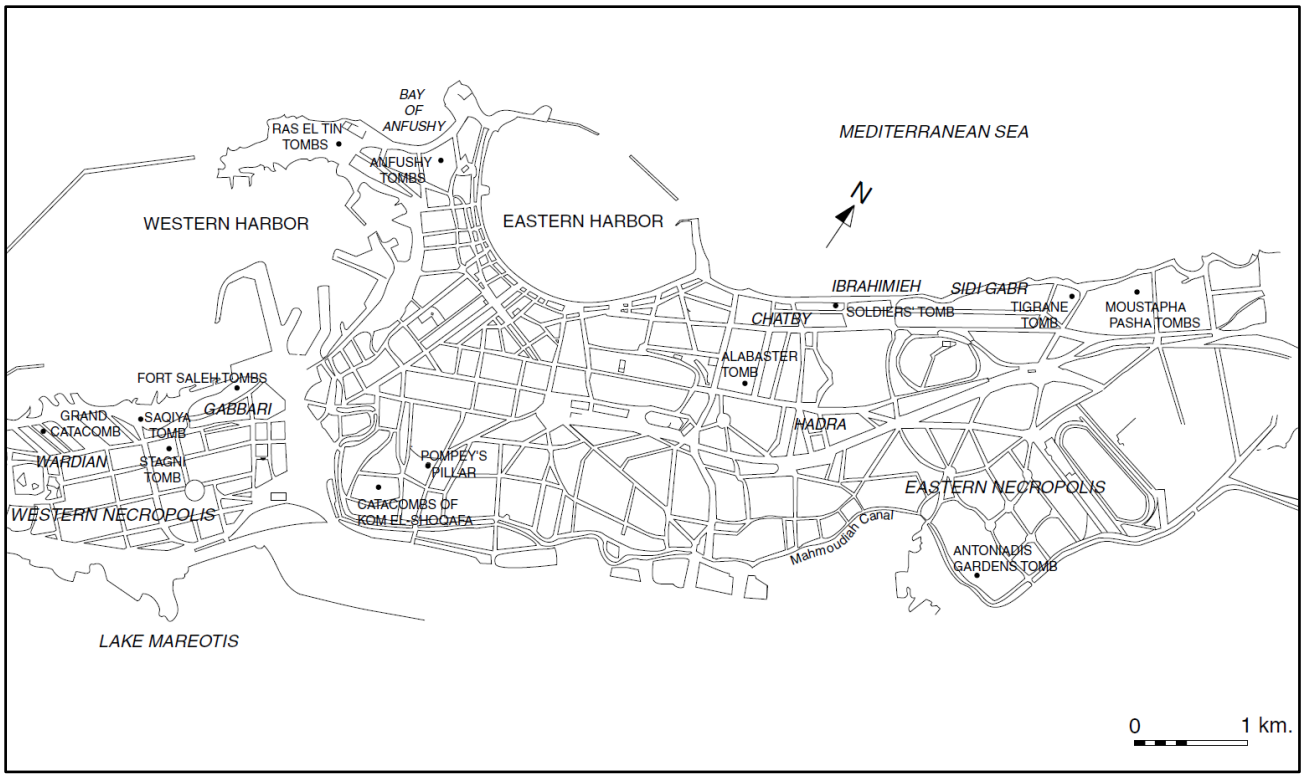


図 17. アレキサンドリアの都市と主要な墓地（Venit 2002, Fig.1）

きな違いであり、火葬も含め基本的にロクリが最終的な遺体の安置場所である点は同様である（Venit 2002, 16）。火葬とミイラは高価な遺体の処理方法であり、この中では伸展葬が最も一般的な埋葬方法であった（Landvatter 2013, 72）。マレシャと同様に一つのロクリには個人が埋葬されていたが、少数ではあるものの複数人の火葬骨がまとめられた事例も認められている（Landvatter 2013, 72-73）。

前述のように、アレキサンドリアには多様な民族が居住していたが、中でもギリシア人とエジプト人が主要な民族であった。アレキサンドリアの行政権・軍事権を握っていたのはギリシア人であり、ギリシア人と異民族の結婚は公には禁止されていたが、実際には結婚していたことも分かっている（Venit 2002, 11）。また、結婚の有無に関わらず、アレキサンドリアに居住する人々を例えばギリシア人とエジプト人といったように区別することは困難であるといえる。なぜなら、アレキサンドリアでは名前や言語、特定の神々への崇拝さえ民族を示すものではなくなっており、人々は意図的に混ざり合っていたからである（Venit 2002, 11）。これはアレキサンドリアの埋葬からも読み取ることができる。例えば、火葬はギリシア人の埋葬方法でありエジプト人が行うことはないが、エジプトの伝統的な埋葬方法であるミイラはギリシア人も盛んに利用していたことが分かっている（Venit 2002, 11）。さらにいえば、火葬とミイラ、伸展葬は一つの墓で同時に利用されることも多く、埋葬方法のみから民族や文化的背景を判別することは難しい。ランドバターが指摘しているように、アレキサンドリアの埋葬習慣は、大まかな民族的アイデンティティというよりも、地域的なアイデンティティの表現として理解する方がはるかに理にかなっている　（Landvatter 2013, 109）。アレキサンドリアでは、墓に限らずヘレニズムを軸にしながらも様々な民族の文化がお互いに混ざり合っており、マレシャも合わせて考えると、それこそがヘレニズム都市の特徴といえるであろう。

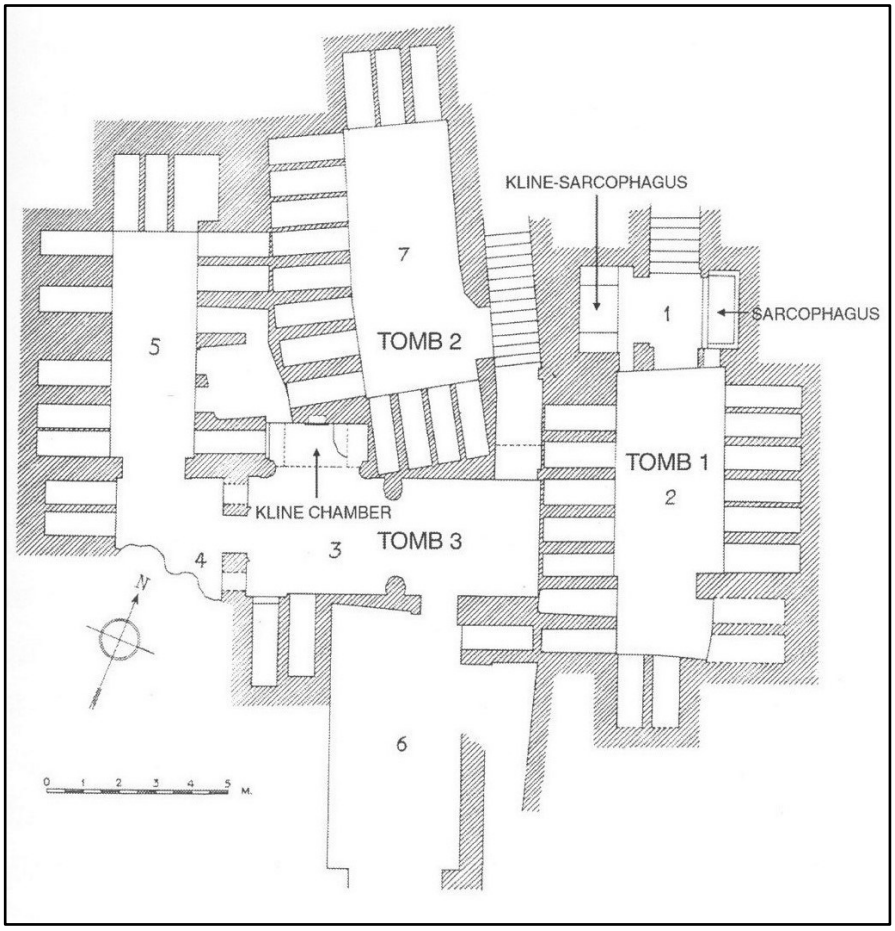


図 18. ミネト・エル・バッサルの墓（Adriani 1956, Fig.18）

ロクリ墓の被葬者に関して民族の判別が難しいということは、同時に家族墓か共同墓地かを区別することが困難なことにも繋がる。ランドバターは、都市が誕生して間もない時期に大家族が存在しなかったにも関わらず大型の複数の部屋を持つロクリ墓が存在すること、同じ墓の中でも被葬者によって副葬品の差があることなどから、アレキサンドリアの初期の墓は共同墓地であり、時代を経るにつれて家族的な利用がされるようになったと述べている（Landvatter 2013, 99）。また、ベニットもあらゆる民族の人々が一般的に墓を共同利用していたと指摘している（Venit 2002, 21）。これらの議論からも分かるように、その墓が家族墓であるか、共同墓地であるかを直接的に示す考古学的証拠はなく、直接的な銘文がある場合を除いてほとんど区別を付けることはできないといえであろう。加えて、全く異なる埋葬方法が同じ墓の中でみられ、それらが埋葬方法の種類でまとまっているのではなく、ロクリ毎に異なっていることも区別が難しいことに繋がっている。このような状況は個人が異なる埋葬を個人の裁量で行う共同墓地である可能性を示しており、仮に家族墓であっても個人が埋葬方法を選ぶことができたという可能性をも示唆しているからである。いずれにしても、マレシャの墓地と合わせて考えると、ヘレニズム都市のロクリ墓が個人の区別を明確に意識していることは、多数のロクリを設けることと銘文から明らかだといえる。

アレキサンドリアのロクリ墓は前 3 世紀からローマ時代以降まで広く利用されているが、ここではエルサレムの初期ロクリ墓と近い年代の墓に限定するため、前 3 世紀から前 2 世紀に作られた墓を対象とする。これまでと同様の基準を満たしているロクリ墓として、本研究では 16 基を対象とする（表 4）。

表 4. 対象とするアレキサンドリアのロクリ墓

区画名称	前３世紀	前２世紀	発掘報告
東部墓地	8	0	シャットビー(Breccia 1912); ハドラ(Adriani 1934); ムスタファ・パシャ(Adriani 1963)
西部墓地	4	3	ミネト・エル・バッサル(Venit 2002); ワーディアン(Venit 1988)
ファロス島	0	1	アンヒュジー(Adriani 1952)

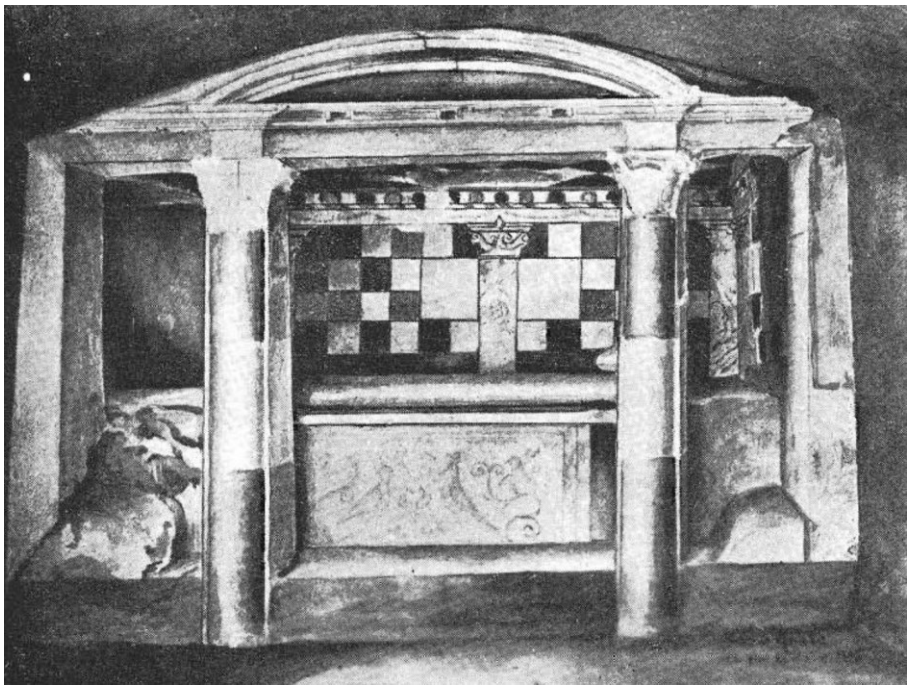


図 19. 寝台, ラス・エル・ティン, Tomb 8（Venit 2002, Fig.55）

第 3 節　対象資料の年代決定について

ロクリ墓の年代決定は主として出土土器から行われる。土器はロクリ墓に普遍的にみられる遺物であり、盗掘の被害を受けている墓であっても残存している場合が多いからである。残存状態が良い墓であれば、装飾品やガラス製品が副葬品として出土する時もあり、これらも土器と同様に年代推定の根拠となる。銘文があれば、より限定的な年代決定が可能となり、コインが出土すれば銘文と同様に年代を絞り込みやすい。エルサレムの場合、マレシャやアレキサンドリアとは異なり、装飾品やガラス製品、コインの出土事例は少ない。また、墓のために特別に作られた副葬品は、ユダヤ人の埋葬にはほとんど見られず、日用品の土器がユダヤ人の副葬品の大半を占めている（Hachlili 2005, 375-401）。

エルサレムでは集骨とオシュアリによる再埋葬を行うことによってロクリ墓には大人数が埋葬される、マレシャやアレキサンドリアでは大規模な墓と多数のロクリを設けることで大人数が埋葬される。その

ため、個人墓とは異なり、墓が被葬者で満たされるまで継続的に長期間利用され続けることになる。マレシャとアレキサンドリアのロクリ墓では、ロクリの本数とほとんど等しい数が被葬者の上限となるが、エルサレムのロクリ墓には被葬者の定められた上限はないといえる。なぜならば、エルサレムではロクリは個人の埋葬区画ではなく、集骨によって遺骨が混じり合い、石棺は隣り合って安置されるからである。このため、エルサレムではマレシャやアレキサンドリアよりも被葬者の数が多く[28]、墓の利用期間も両遺跡より長くなる傾向にある。マレシャやアレキサンドリアは基本的に数十年から百年間の利用であるが、エルサレムでは百年から数百年間の利用が一般的である。70 年にエルサレムが陥落したことによって、1 世紀に作られた墓の利用は短期間となるが、前 2 世紀や前 1 世紀に作られた墓は 1 世紀まで利用されている例もあり、短期間の利用に留まる墓は数が少ない[29]。

ロクリ墓が利用期間の中で何度も利用されることから、ある一つの年代ではなく、墓が作られてから放棄されるまでのプロセスとして考える必要があるといえる。しかし、このプロセスを実際に捉えることは困難である。エルサレム、マレシャ、アレキサンドリアの墓は基本的に盗掘の被害を受けており、残された遺物から年代が同定できたとしても、遺物や遺骨の位置が保たれていない墓がほとんどであることが最たる理由である。また、発掘調査報告書には、遺物の出土位置の情報が記載されないことが多いことも理由の一つである。そのため、墓が作られてから放棄されるまでのプロセスを追うことは現実的に困難である。

よって、分析に用いるロクリ墓の年代については、発掘報告書の記述内容に概ね準拠し「前 2 世紀から前 1 世紀に利用されていた墓」というような、出土遺物の総体から決定される幅のある利用年代とせざるを得ない。しかし、墓の形態を研究するにあたっては、墓が利用されていた年代よりも、墓が作られた年代の方が重要である。例えば、ロクリの形態を分析するにあたって必要になるのは、ロクリが作られた年代であり、その墓で利用されていた年代ではない。そこでここでは、利用年代のうち最も古い年代を墓が作られた年代に近いものと考え、以後の分析を進めていくことにする。ただし、この場合も墓の増改築の可能性は考慮しておかなければならない。墓の利用期間の中で形態が変化していたならば、分析の結果に大きく影響するからである。マレシャとアレキサンドリアについては、ここでは前 3 世紀・前 2 世紀のように百年単位で年代を区分するため、結果的に分析する上では問題は生じ得ないが[30]、エルサレムの場合、墓が作られてから放棄されるまでの期間が長く、利用時期が複数の年代区分にまたがることに

---

[28] 例えば、エルサレムのスコープス山の墓では 88 人が埋葬されており（Zias 1992）、ハクリリの被葬者の人数に関する集成によれば、エルサレムでは一つの墓に 50 人以上が埋葬されることは珍しいことではない。また、エルサレムの人骨の残存状態は悪く、実際には報告されている人数よりも多くの被葬者が埋葬されていた可能性も高い。マレシャやアレキサンドリアに関しては、エルサレムよりも人骨に関する報告がなされておらず、また、エルサレムと同様に人骨の残存状態も良くはないが、埋葬区画が明確であるため被葬者の人数をロクリの本数から推定することが可能である。ロクリの本数からは、マレシャ、アレキサンドリアの一つの墓の被葬者の上限は 20～30 人であることが分かる。また、いずれの遺跡でも複数の埋葬室あるいは部屋を持つ墓が利用されており、これを一つの複合施設として数えれば数百人が埋葬される場合もあるといえるであろう。

[29] 本研究で対象とするエルサレムのロクリ墓では、前 2 世紀に作られた墓で前 2 世紀にのみ利用されている墓は一例もなく、前 1 世紀に作られた墓では、例えばスコープス山（Vitto 2000）、ナハル・アザル（Avigad 1967）、タルピオット東（Kloner and Gat 1982）、ギヴァット・モルデハイ（Kloner 1980）など、前 1 世紀にのみ利用されている墓が一定数存在する。

[30] 前述のように、マレシャのロクリ墓は前 2 世紀に一度放棄され、その後ユダヤ人によって 2 世紀頃まで再利用されている。ユダヤ人の埋葬が行われた場所は、マレシャの人々の埋葬場所とは異なっており、副葬品やオシュアリ・集骨などの埋葬方法から、その特定は容易である。Tomb N3 や N4 では、ユダヤ人が部屋に小型のロクリを作っており、小規模な増築も行われていたようである（Oren and Rappaport 1984, 121-127）。本研究ではヘレニズム時代のマレシャの人々の埋葬について取り扱うため、ユダヤ人の再利用に関する埋葬と増築は報告書の情報を基に区別したうえで除外して考える。

なるため、墓の増改築について念のため考慮しておく必要がある。

ミシュナのババ・バトラ 6:8 の記載では、墓を利用期間の中で増改築するのではなく、墓を作る際に 8 本のロクリを設け、墓として完成された形で作るように指示がなされており、墓の増改築は律法で規定されていない行為であることが読み取れる。対して、考古学的に墓の増改築を判断することは現実的には難しい。エルサレムにおいて、増改築の痕跡が明確に確認されている墓はスコープス山（Kloner and Zissu 2007, 171-172）の一例のみであり、この墓は床に漆喰が塗られていたことによって、漆喰の剥がれと不自然な埋葬室の形態から埋葬室の拡張を判断できたという稀な事例である。単純に利用期間の中でロクリを増やす、あるいは埋葬室にピットを作るといった増改築が行われていても、その痕跡が残ることはごく稀である。

一方で、間接的に墓の増改築を検討することは可能である。まず、利用期間の中で最も増改築の可能性が高い構造と考えられるロクリについて述べていく。前述のように、文献史料に従えばロクリの本数は 8 本であるが、実際には埋葬室の一面にのみ 2 本作られる場合もあれば、入口を除く壁面に 9 本作られる場合もあり、ロクリの本数にはばらつきがある。前者を未完成のロクリ墓と考えれば、利用期間の中でその数が増加していく可能性が想定されるであろう。しかし、例えばスコープス山　（Kloner 1982）やギヴァット・ハミバター（Tzaferis 1970）の墓のように、埋葬室の数面にしかロクリが作られていなくても、その状態で数百年間利用されている墓が確認されている。これらの事例は、ロクリの本数が少ない墓がその状態で完成形であることを示唆している。入口を除く全ての壁面にロクリが作られる墓の方が、このような墓よりも多くみられるが、おそらくロクリの本数が少ない墓は小規模な家族に利用されていたものだと考えられる。また、ロクリの本数は、考古学的情報からみれば文献史料に必ずしも従っているわけではなく、地質・地形や隣り合う墓との関係に影響を受けるようである（Kloner and Zissu 2007, 73）。例えば、墓の右側面が別の墓と隣接していたならば、必然的に全ての壁面にロクリを作ることは不可能である。これらの情報を合わせて考えれば、ロクリの本数が少ない墓はその状態が完成形である可能性も考えられ、これは間接的に利用期間の中でロクリの本数が増加しない可能性を示している。

また、1 世紀のロクリ墓の形態はこの推測を補強する。前述のように、1 世紀のロクリ墓は、本来であれば数百年間利用されていたはずのロクリ墓が、後 70 年のエルサレム陥落によって突然に放棄されたものである。そのため、ロクリ墓が被葬者の人数に応じて利用期間の中でロクリの数を増やしていくということであれば、1 世紀には利用途中でありロクリの本数が著しく少ない墓が多数みられるはずである。しかしながら、本研究で対象とする 1 世紀のロクリ墓にはそのような傾向は確認されず、これまでの研究でも 1 世紀のロクリ墓が他の時代と比べてロクリが少ないという指摘はされていない。つまり、1 世紀のロクリ墓の本数の傾向が他の時代と変わらないということは、ロクリは墓の製作時に全て作られた、あるいはロクリの増築は数十年以内には完了したことを示唆している。ここでは百年単位で年代を区分するため、ロクリの増築が数百年にわたって行われるものではないとすれば、分析を進めるうえで問題は生じ得ない。

埋葬室についても、間接的に墓の増改築を検討することは可能である。例えば、ピットのある埋葬室をピットのないものに利用する中で変えたならば、埋葬室全体を掘り下げる必要があるため、ロクリの開口部の位置が床面から浮くことになる。反対に、ピットのない埋葬室にピットを加える場合も同様の変化は表れる。ピットは墓内で立ち、作業するための構造であるため、そもそも墓内で立つことのできるピットのない埋葬室で改めてピットを設ける必要性は薄い。もしピットを新たに墓内で作ったならば、墓

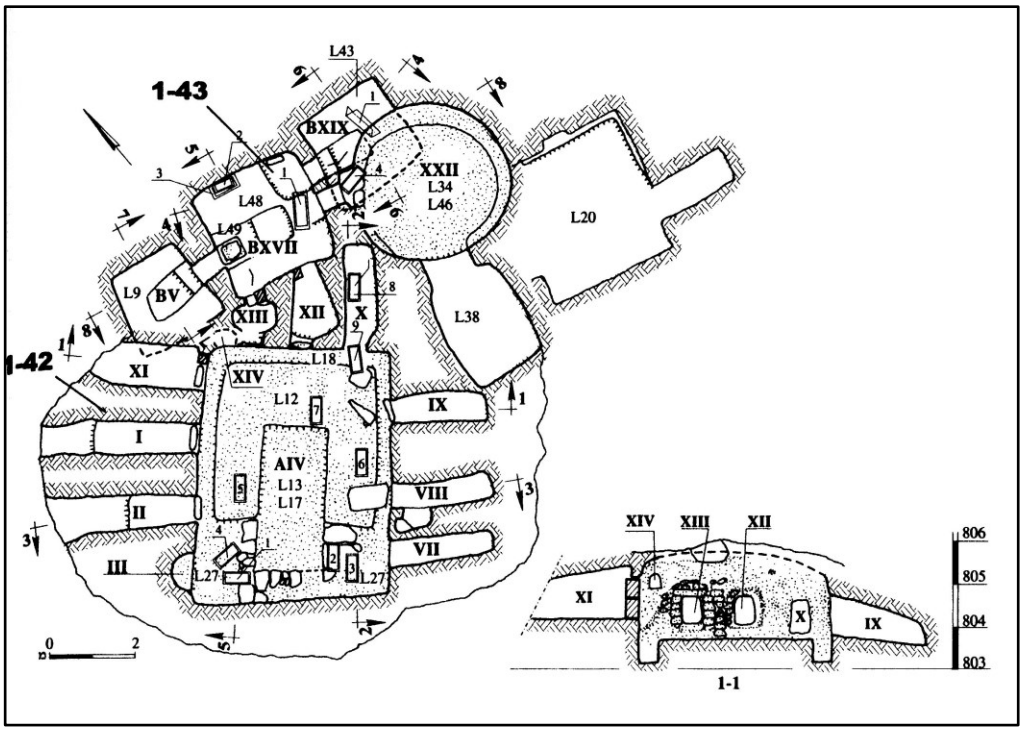


図 20. 埋葬室の拡張が行われた墓, スコープス山　(Kloner and Zissu 2007, Fig.65 改変)

の高さは人の高さとピットの高さを合わせたものとなり縦に長い埋葬室となるだろう。このように埋葬室を大規模に変更するような増改築は、結果として他のロクリ墓とは異なる形態を示すことが推測される。少なくとも、増改築の痕跡と考えられるこのような形態を持つ墓は、本研究で対象とする墓の中には見られず、また、他の研究でも指摘されていない。墓を大きく変えるような増改築は、利用期間の中では起こっていない可能性が高いと考えられる。

ロクリ墓の増改築について直接的に検討することは困難であるが、これまで述べてきた間接的な情報から考えれば、利用期間の中で大きな増改築が行われていた可能性は低いといえる。ロクリについては、増築が行われていた可能性は否定できないが、前述のように百年単位で年代を区分する際には問題は生じ得ないものとして考える。以上のことから、本研究では報告書・集成で同定されているロクリ墓の年代の中で最も古い年代を墓が作られた年代に近いものとして仮定する。例えば、前 2 世紀から 1 世紀に利用されていた墓と報告されていれば、その墓が作られた年代を前 2 世紀として取り扱う。

また、歴史的背景を考える上で、前 2 世紀をハスモン朝時代とセレウコス朝時代に区別して考えることは重要である。しかし、ロクリ墓の年代をこれ以上細分することは難しい。なぜなら、ロクリ墓の年代決定の核となる土器の編年が、ロクリ墓と同様の年代幅を持っているからである[31]。調理鍋のように前 2 世紀の半ばで型式を区切ることが可能な土器（Gitin 2015, 636-636）もあるが、ロクリ墓には様々な器種の土器が副葬品として用いられるため、前 2 世紀の半ば頃に一度利用があったことは指摘できるが、同時期に墓が作られたかどうか判断することは難しい。加えて、このような議論が可能であるのは副葬品がある程度残存している墓のみであり、大半の墓は年代をさらに細分するための議論すら困難であるといえる。このような状況から、ロクリ墓の年代をさらに細分することはできないが、墓の形態や埋葬習慣

[31] ヘレニズム時代の土器編年は Gitin 2015 に詳しい。

は王朝が変わったと同時に即座に変化するものではないと考えられるため、前 2 世紀のような年代幅で分析を進めていくことへの影響は少ないと思われる。

第 4 節　ヘレニズム時代におけるエルサレムとヘレニズム都市のロクリ墓の比較

1　墓の内部形態による比較

この節では、墓の内部形態と外部形態の分析を通して、ヘレニズム時代におけるエルサレムのロクリ墓とヘレニズム都市のロクリ墓の比較を行う。これによって、エルサレムのロクリ墓におけるヘレニズムの影響を検討することが可能となる。まず、墓の内部形態に関して分析を行う。

本研究では、墓の内部形態を母室とロクリに分けて取り扱う。これまでの研究では母室とロクリに相関関係があることは指摘されておらず、独立して扱われているためである。この点については、分析の結果を踏まえて改めて検討することにする。また、これまでの章では、ロクリが作られる内部の部屋を先行研究に倣って、エルサレムでは埋葬室、マレシャ・アレキサンドリアでは部屋や埋葬室と呼称していたが、この章からは「母室」と呼ぶことにする。埋葬室という呼称には、機能的意味が含められており、形態を分析していく上では形態的特徴に基づく呼称の方が適しているためである。本研究では、ロクリが作られる部屋を母室と定義し、ロクリやベンチ墓にみられるリポジトリなど母室に作られる小さな空間を総称する場合は子室と呼称する。分析にあたって、まず、ヘレニズム時代におけるエルサレム・マレシャ・アレキサンドリアのロクリ墓の母室とロクリについて、平面形態からそれぞれ分類を行う。以下、母室・ロクリそれぞれの分類について述べる。

母室については、その規模によって長方形と方形、円形の母室に区分することが可能である。ここでは、母室の長辺が短辺よりも 1.5 倍以上長いものを長方形の母室と定義する。母室の床の構造については、大分類として母室はピットのあるもの、ピットのないものに分ける。ピットのあるものは、ピットと掘り残された棚部分との関係に基づき、以下のように細分する。入口からピットを掘ることで棚部分が「コの字」になるコの字型、母室の中心にピットを掘ることによって残存する棚部分が「ロの字」になるロの字型の 2 種類である（図 21、表 5）。これらのピットのあるタイプは、方形の母室にのみ確認される。ピットのないものは、床面が壁面まで同じ高さである平坦型、壁面に幅の狭い段が作られる段型の 2 種類に細分する（図 21、表 5）。段型の段はピットによって作られるベンチとは異なり、遺体を安置できるほど広くはない。加えて、段が埋葬室に占める割合が小さく、形態上明確に区別できる。ピットのないタイプは主に長方形の母室であり、平坦型のみ円形の母室にみられる。墓の掘り方の精度でさらに細分することも可能であるが、ここでは細分は行わない。遺構図面のみで墓の掘り方の精度を評価することが難しいからである。

次いで、ロクリの分類について述べる。第 1 章 2 節で詳細に述べたように、ロクリの分類はクロナーとジスによって既に行われている（Kloner and Zissu 2007, 61-68）。対象とする遺跡にはこの分類項目から逸脱したタイプは確認されなかったが、クロナーとジスの分類には形態分類上の問題が存在する。クロナーとジスの分類には平面形態で分類されているタイプもあれば、溝や配置場所で分類されているものもあり、体系的な分類になっていない。よって、ここではクロナーとジスの分類を参考にしつつも、新

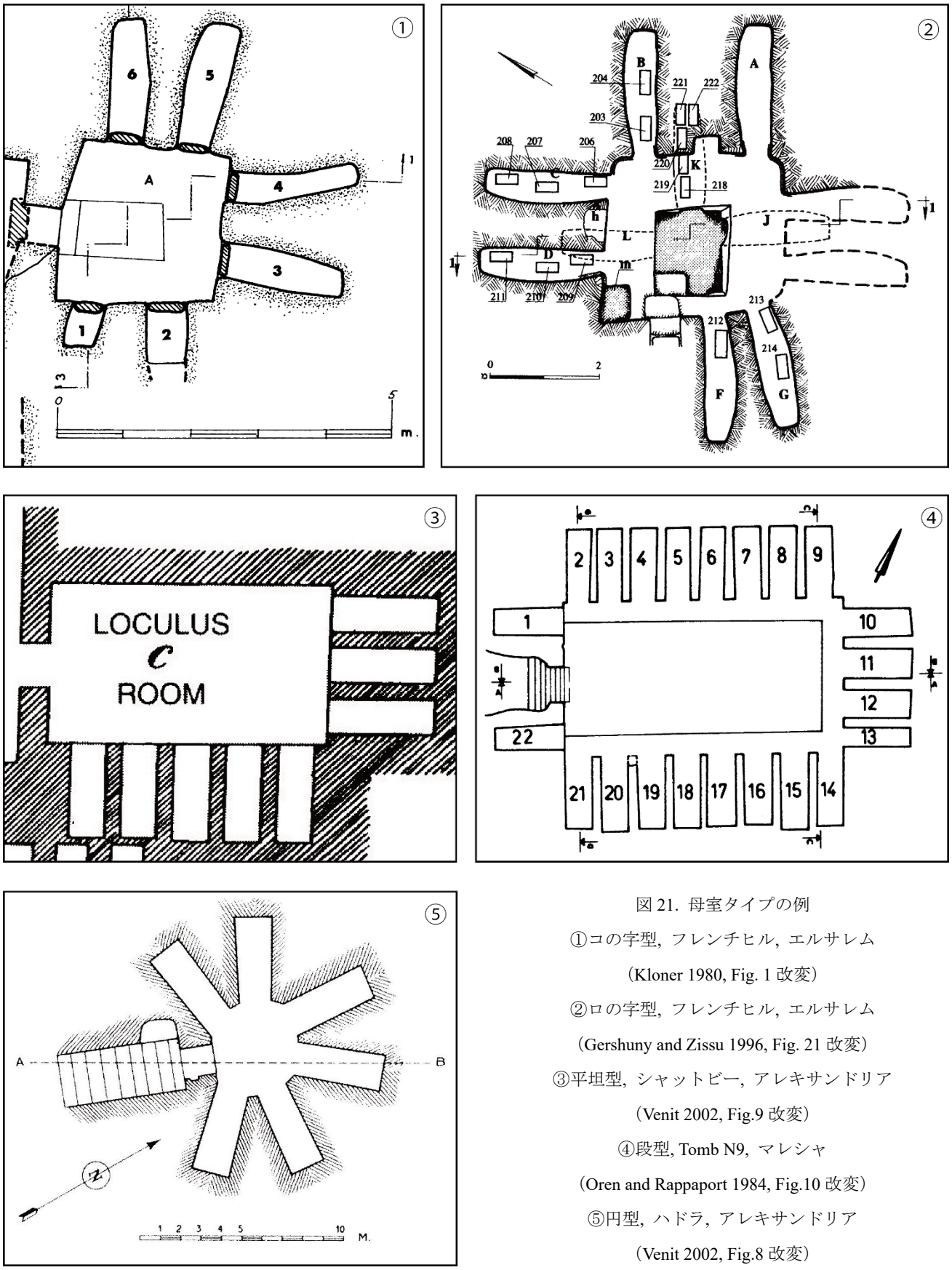


図 21. 母室タイプの例

①コの字型，フレンチヒル，エルサレム

（Kloner 1980, Fig. 1 改変）

②ロの字型，フレンチヒル，エルサレム

（Gershuny and Zissu 1996, Fig. 21 改変）

③平坦型，シャットビー，アレキサンドリア

（Venit 2002, Fig.9 改変）

④段型, Tomb N9，マレシャ

（Oren and Rappaport 1984, Fig.10 改変）

⑤円型，ハドラ，アレキサンドリア

（Venit 2002, Fig.8 改変）

表 5. 母室の分類項目

形状	大分類	小分類	特徴
方形	ピットあり	コの字型	ピットが入口から掘られ、平面形がコの字になるもの
		ロの字型	ピットが中心に掘られ、平面形がロの字になるもの
長方形	ピットなし	平坦型	床面が壁面に至るまで同じ高さであるもの
		段型	段が作られ、母室に占める段の割合が小さいもの
円形	ピットなし	円型	母室の形状が円形であるもの

表 6. ロクリの分類項目

大分類	小分類	特徴
標準型	Ⅰa	入口と内部の幅が同じもの
	Ⅰb	内部が二層構造であるもの
幅広型	Ⅱa	内部の幅が入口よりも広いもの
	Ⅱb	内部が二層構造であるもの
小型	Ⅲ	長さが短いもの

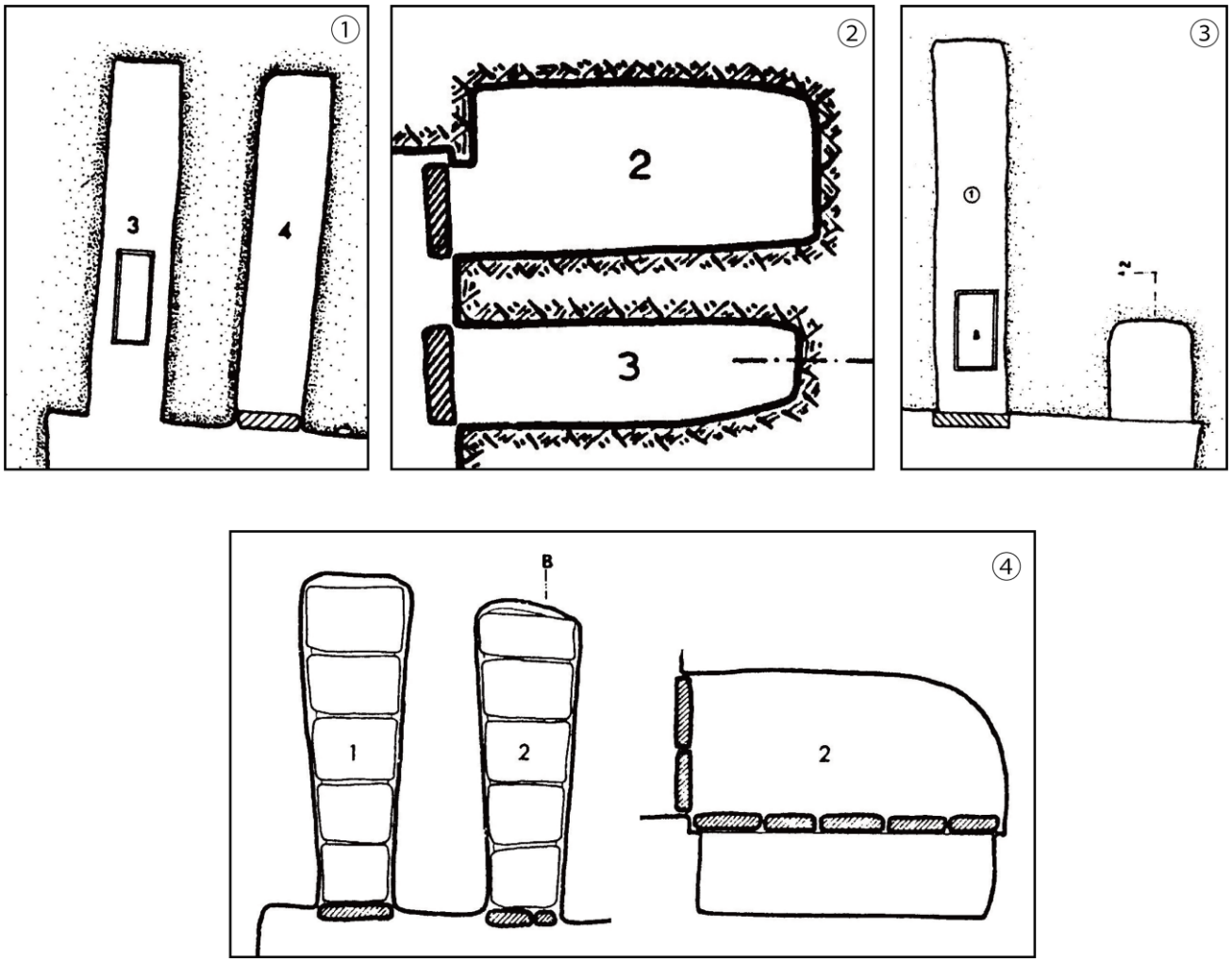


図 22. ロクリタイプの例

①標準型，スコープス山西斜面，エルサレム（Sussman 1982, Fig.1 改変）　②上：幅広型，ナハル・アザル，エルサレム（Kloner and Zissu 2007, Fig.212 改変）　③右：小型，フレンチヒル，エルサレム（Kloner and Zissu 2007, Fig.347 改変）　④二層構造のロクリ，ギヴァット・ハミバター，エルサレム（Tzaferis 1970, Fig.3 改変）

たに平面形態で大分類を行い、その他の構造は各形態のバリエーションとして小分類を行うことにした（図 22、表 6）。なお、クロナーとジスの挙げている「⑥二階層に配置されたロクリ」に関しては、ロクリの形態ではなくロクリを作る場所が基準であるため、ここでの分類には加えていない[32]。幅広型は、内部の広がり方で片ソデ、両ソデ、ソデなしにさらに細分することが可能であるが、ここでは一括して幅広型として扱う。また、母室と同様に掘り方の精度での細分も行わない。

これらの分類方法に基づいて、各都市のロクリ墓にどのタイプが主要であるのかを比較し、エルサレムにおけるヘレニズム都市からの影響を検討する。なお、一つの母室に複数のロクリが存在する場合、個々のタイプの数については考慮しないことにした。

分析の結果、エルサレムとヘレニズム都市のロクリ墓の母室には明確な差が確認された（図 23）。ヘレニズム都市の母室は全てピットのない母室であり、アレキサンドリアでは平坦型、マレシャでは段型が過半数を占めている。一方で、エルサレムの母室は全てピットのある母室であり、コの字型が過半数を占める。仮にロクリがヘレニズム都市から導入された要素であったとしても、母室の形態についてはヘレニズム都市との関係は希薄であったと考えてよいであろう。また、アレキサンドリアとマレシャはその共通性が議論されていたが（Peter and Tiersch 1905, 81-84; Oren and Rappaport 1984, 149-153）、アレキサンドリアは平坦型、マレシャは段型の母室が過半数を占めていること、アレキサンドリアには円型が存在することから、ヘレニズム都市の間にも母室の形態に関しては違いがあったことが明らかになった。

ロクリについては、全ての遺跡でⅠa、Ⅱa が共通して確認されるが、その頻度には差がみられた（図 24）。エルサレムではⅠa、Ⅱa はほぼ同じ割合で確認されるが、アレキサンドリア・マレシャではⅡa のロクリは少数しか確認されなかった。また、アレキサンドリア・マレシャでは前 2 世紀になるとⅡa は利用されなくなった。また、エルサレムにはⅠb、Ⅱb、Ⅲといった独自のタイプが存在することが明らかになった。特にⅢはⅠa、Ⅱa に近い頻度で確認されるタイプである。これらのことから、ヘレニズム都市ではⅠa を主体として補助的にⅡa が用いられ、エルサレムではⅠa、Ⅱa、Ⅲを主体として、補助的に b 類が用いられるといったように、利用されるロクリに違いがあることが読み取れる。つまり、エルサレムのロクリについては、初期の段階でエルサレム独自の形態が生み出されているのである。本項の冒頭で述べた母室とロクリの相関関係については、結果を見る限り確認されなかった。ロクリのバリエーションは母室の形態の違いによるものではなく、両者を独立して取り扱うことで問題は生じ得ないであろう。

[32] 二階層に配置されたロクリは、エルサレムでは前 2 世紀、前 1 世紀共に確認されず、1 世紀に 1 基のみ存在した。二階層に配置されたロクリが確認される墓は、サンヘドリアの墓（Rahmani 1961）と称される墓であり、石製のベンチを有する前庭を持つ極めて大規模なロクリ墓である。また、母室の大きさも一般的なロクリ墓の約 3 倍の 6m×6mであり、ロクリの本数も同程度に多い。加えて、この墓だけでアルコソリアが 6 つも設けられている。二階層のロクリの上層は、このアルコソリアの壁面からさらに掘り込まれており、2 つの構造は組み合わされている。他に類例はないため、二階層のロクリは当時権力を持っていた一族のものと推測される大規模な墓に限定された構造であるといえるだろう。また、墓の規模やアルコソリアと共伴していることから、二階層に配置されたロクリが同時に埋葬できる被葬者の人数を増加させる構造であることが読み取れる。

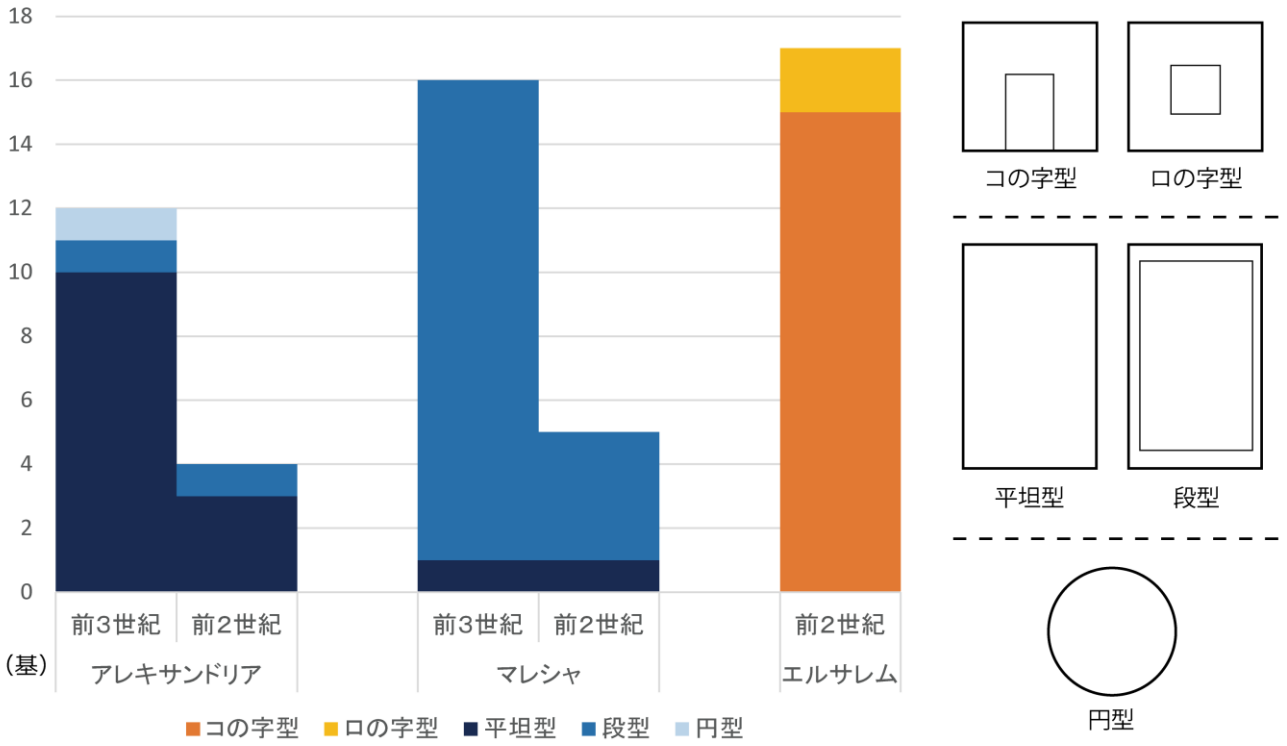


図 23. ロクリ墓の母室形態の地域差

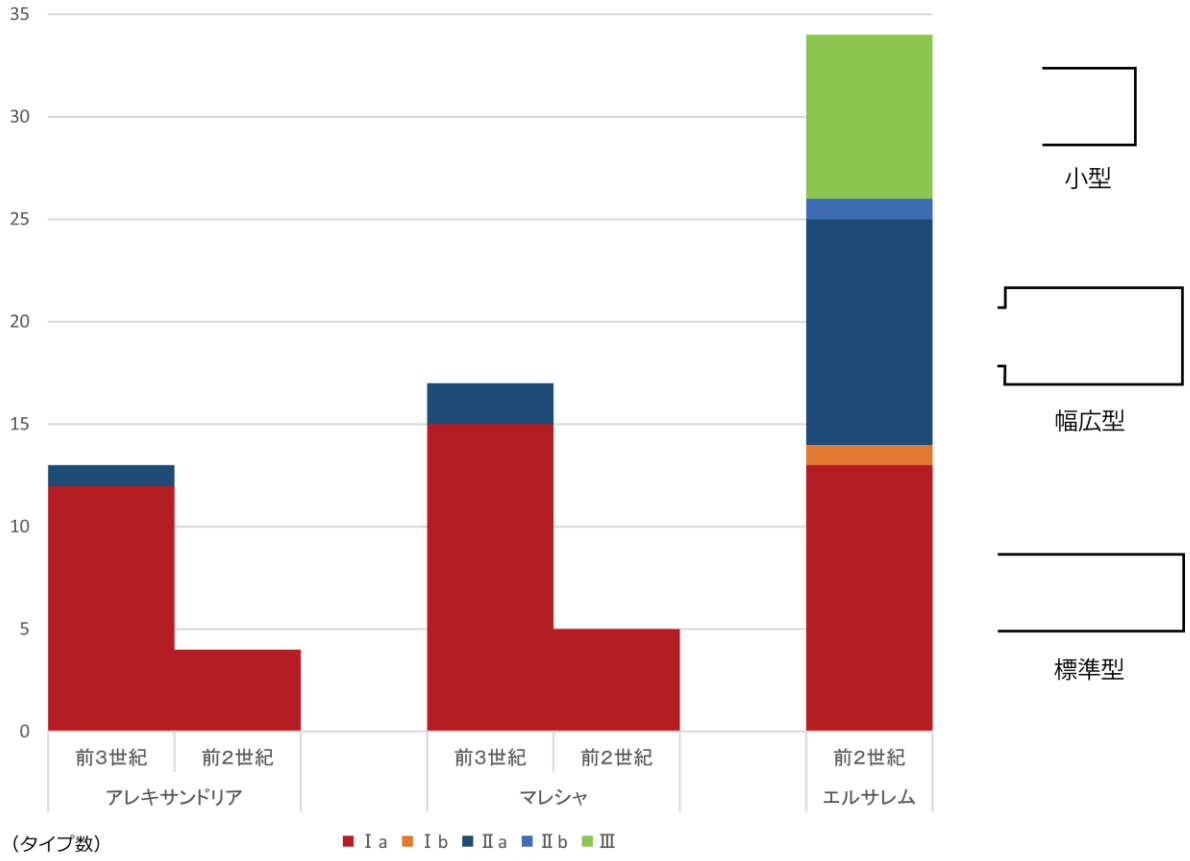


図 24. ロクリ墓のロクリ形態の地域差

2　墓に入るまでの構造による比較

内部形態に次いで、本項では墓に入るまでの構造について分析する。墓の外部にはファサードや入口が存在しており、これらは第 1 章 2 節で詳述したように既に分類が行われている（Hachlili 2005, 43-54; Kloner and Zissu 2007, 45-51）。エルサレムでは岩壁に簡素な入口が設けられるタイプが一般的であることが明らかになっているが（Kloner and Zissu 2007, 45-51）、地域間での比較はこれまで体系的になされていない。また、従来の研究では建築装飾を基にした分類が中心であり、例えば、階段や中庭などの墓に入るまでの構造を取り扱ったものは少ない。建築装飾が施されたファサードや入口を持つ墓は一部に限られるが、一方で墓に入るまでの構造は墓を作る限り必ず存在するものであり、ヘレニズム都市と比較を行う上で、全ての墓に関して比較することが可能である。本研究では、墓に入るまでの構造を対象として、建築装飾ではなく主として断面形態から分類を行う。

まず、墓に入るまでの構造は、階段があるものと階段がないものに分類することが可能である。階段があるものは、地中へと下る階段が設けられるものであり、階段がないものは、地表面に入口が設けられるものである。どちらのタイプも中庭の有無や階段の形態によってさらに細分される（図 25、表 7）。なお、本研究では、周囲を壁や建造物で囲まれた吹き抜けの平らな場所を中庭と定義する。階段があるものについては、階段をもち地中に中庭をもつ地中中庭型（図 26）、階段をもち中庭をもたない階段型、階段をもち中庭はもたないが、その先に外に開いた柱廊を持つ柱廊階段型の 3 種類に分類する。階段がないものについては、入口の前の地表に中庭をもつ地表中庭型、階段や中庭をもたず、岩壁上に入口が設けられる地表型の 2 種類に細分する。これらの分類方法に基づいて、内部形態と同様にその割合を確認する。なお、複数の母室を持つ墓の場合、墓に入るまでの構造を共有しているため、例えば 3 つの母室を持つ墓

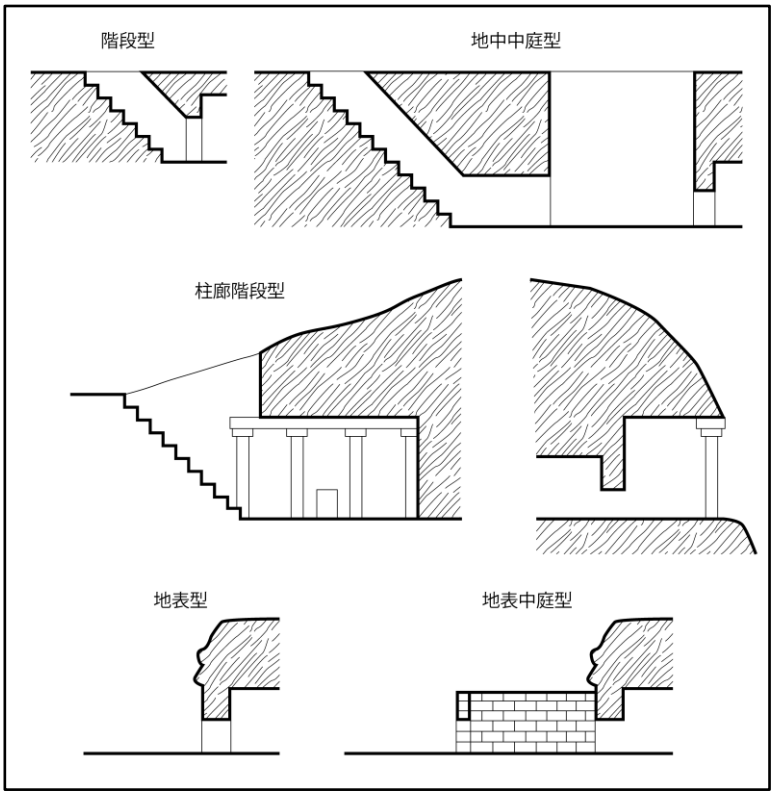


図 25. 墓に入るまでの構造の模式図

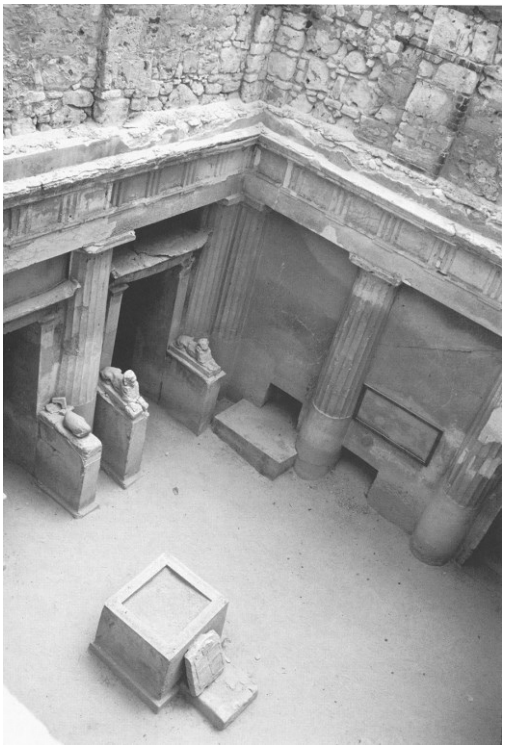


図 26. 地中中庭型, ムスタファ・パシャ, アレキサンドリア（Venit 2002, Fig.36）

表 7. 墓に入るまでの構造の分類項目

大分類	小分類	名称	特徴
階段あり	中庭あり	地中中庭型	地下に降りる階段を持ち、地中に中庭を持つ
	中庭なし	階段型	地下に降りる階段を持ち、中庭を持たない
		柱廊階段型	岩壁を下る階段を持ち、その先に外に開いた柱廊が設けられる
階段なし	中庭あり	地表中庭型	階段を持たず、入口の前の地表に中庭をもつ
	中庭なし	地表型	階段・中庭を持たず、岩壁上に入口が設けられる

図 27. 柱廊階段型，ブネー・ヘズィルの墓，エルサレム

図 28. 階段型，音楽家の墓，マレシャ

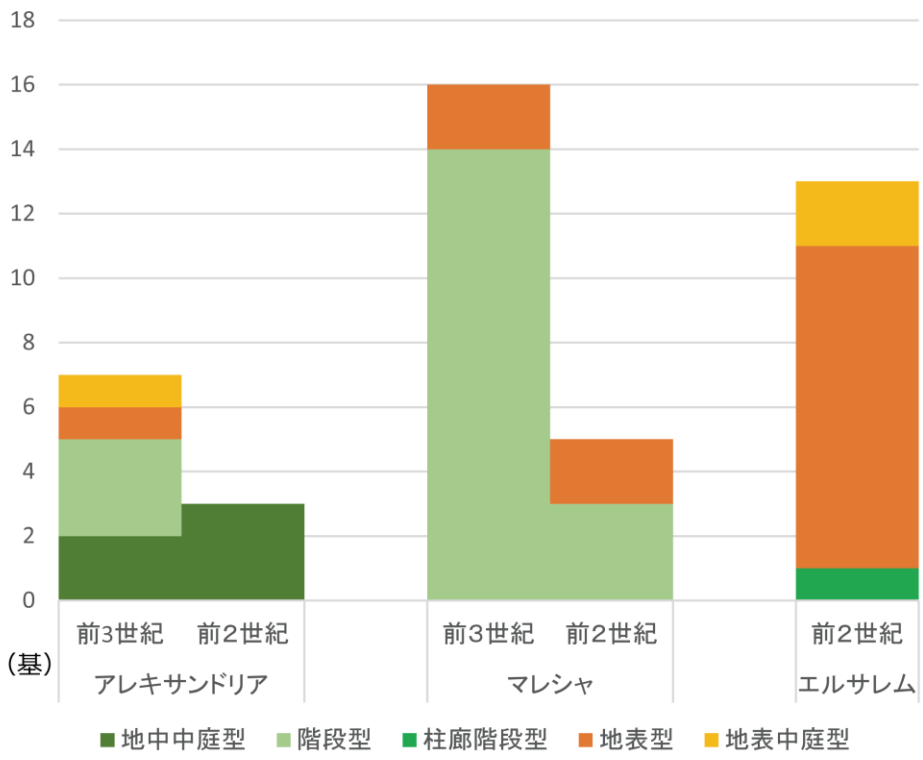


図 29. ロクリ墓の墓に入るまでの構造の地域差

であっても墓に入るまでの構造の数は 1 つとなる。よって、母室やロクリの分析よりも資料数は減少する。

分析の結果、エルサレムとヘレニズム都市の墓に入るまでの構造には違いがみられた（図 29）。アレキサンドリア、マレシャではほとんどが階段を持つものであるが、エルサレムは大多数が階段のないもの、特に地表型であった。また、エルサレムにも階段をもつものは 1 例確認されたが、ヘレニズム都市にはみられない地表に露出する柱廊階段型であることが分かった。加えて、ヘレニズム都市間にも違いがみられ、アレキサンドリアには中庭をもつ地中中庭型や地表中庭型の外部構造が一定の割合で確認されるが、マレシャは中庭のない階段型が大多数を占めていた。

3　考察

墓の内部形態と墓に入るまでの構造の分析結果から、エルサレムとヘレニズム都市のロクリ墓には明確な差があることが明らかになった。先行研究により明らかとなっている埋葬方法などの情報と合わせてこの差について考察する。

分析結果と先行研究の成果を合わせると、ヘレニズム都市のロクリ墓については、ピットのない長方形の母室、多数の標準型のロクリ、地中にある墓の入口という形態的な特徴に加えて、ロクリ内での個人埋葬、家族墓に加えて共同墓地的な性格を持つ可能性があること、装飾壁画や銘文があることが特徴である。ヘレニズム都市のロクリ墓の母室は、埋葬が行われる場所ではない。第 2 節で述べたように、マレシャとアレキサンドリアのロクリ墓における埋葬のプロセスや状態には不明瞭な部分があるが、ロクリの上部に個人名が記載されること、いずれの墓も後代の再利用の例を除き母室ではなくロクリでのみ埋葬が行われていること（Oren & Rappaport 1984, 117; Venit 2002, 16）から、母室が埋葬以外のために利用されていたと考えられる。ベニットが指摘しているように、アレキサンドリアのロクリ墓では、死者のために神々に生贄を捧げる儀式、墓内での埋葬儀礼や宴席が行われており（Venit 2002, 14-34）、母室は墓内で活動するための通路、あるいは服喪の空間であったといえるであろう。ヘレニズム都市のロクリ墓の上部に被葬者の銘文が彫りこまれることからは、母室が被葬者を識別し、喪に服することができた空間であることは明らかである。

また、墓に入るまでの構造の分析結果から明らかになったように、大多数のヘレニズム都市のロクリ墓には地表部分に空間が設けられず、この結果は地表ではなく地中の中庭や母室が服喪の空間であったことを示している。マレシャとアレキサンドリアの母室形態の違いは、おそらく墓に入るまでの構造の違いと関係している。アレキサンドリアでは、供物台を伴う地中中庭型のように地中に埋葬儀礼に関連した施設が設けられる場合が多いが、マレシャでは中庭が設けられることはない。よって、地表に空間を持たないマレシャのロクリ墓では服喪の空間が限られており、段型のように母室にさらなる機能を持たせる必要があったのだと考えられる。段型の母室の段には遺体を安置することは難しく、この段は服喪のためのものであった可能性が高い。つまり、ヘレニズム都市のロクリ墓は、地中の外部構造や母室を通路、服喪の空間として利用し、単純な形態のロクリを多数設けることで、個人を識別した葬送儀礼、墓参を行う墓だといえる。

分析結果と先行研究の成果から考えると、エルサレムのロクリ墓は、ヘレニズム都市のロクリ墓とは

異なる特徴を持っている。エルサレムのロクリ墓は、ピットのある方形の母室、標準型・幅広型・小型のロクリ、地表にある墓の入口という形態的な特徴を持ち、複数人の遺骨がロクリや母室に集骨される家族埋葬が行われる墓である。第 1 章で述べたように、盗掘の被害を主たる要因として、エルサレムのロクリ墓における埋葬のプロセスや状態に不明瞭な部分はあるが、一部の残存状態が良い墓や残存状態が悪くとも出土している人骨の状況から、エルサレムのロクリ墓の母室は埋葬空間であると考えられる。フレンチヒルの墓（Kloner 1980）（図 21-①）は、開口部が封石と粘土によって完全に閉じられたロクリを有しており、母室の遺骨の残存状態も良好なため、前 2 世紀当時の位置を保っている可能性が高い。ルーム A はコの字型の母室であり、ロクリ 5 と 6 の前に作られたベンチでは男性 1 人の一次埋葬が行われていた（Kloner 1980, 102, 109）（図 30）。ロクリ 3 では男性 2 人、女性 2 人、子供 1 人、幼児 2 人の集骨、ロクリ 6 では女性 1 人と幼児 1 人の一次埋葬、性別不明の成人の散乱骨、ピット内では女性 1 人の集骨が確認された（Kloner 1980, 101-102; Smith and Zias 1980, 110）。この事例からは、エルサレムのロクリ墓における集骨の際の一次埋葬、二次埋葬がロクリのみならずベンチやピットでも行われており、且つロクリの利用が一次埋葬に限られるものではないことが分かる。また、フレンチヒルの墓より残存状態が悪い墓であっても、ヤソンの墓（Rahmani 1967）やスコープス山の墓（Rahmani 1980）の遺骨はロクリのみならず母室からも出土している。

ヘレニズム都市とは異なり、エルサレムの母室は集骨を行うための機能的な空間であるといえる。ピットはベンチ墓でも集骨のために利用されており、集骨の埋葬方法とピットは共に利用されるものである。加えて、ロクリについても集骨に適した形態がみられる。標準型のロクリは全ての遺跡で利用されているが、エルサレムでは標準型と近い割合で幅広型と小型のロクリが利用されていたことが明らかになった。幅広型のロクリは、その大きさから標準型と比較してより多人数の埋葬に適したロクリであり、小型のロクリは一次埋葬に利用できない二次埋葬のためのロクリである（Kloner and Zissu 2007, 61-68）。全ての墓がピット構造を持つこと、二次埋葬に適したロクリがあることから、エルサレムのロクリ墓の内部は、集骨に関する一次埋葬、二次埋葬を行うための空間であったと考えられる。

また、ヘレニズム都市とは異なり、エルサレムのロクリ墓に入るまでの構造は全て地表に露出していた。地形や地質に関しては第 4 章 3 節で詳細に述べるが、エルサレムが中央山地に位置しており、マレシャ・アレキサンドリアが平野部に位置していることは、この違いの一因として挙げられる。しかし、それ以上に、エルサレムのロクリ墓の内部は埋葬が行われる空間であり、墓外が服喪の空間として機能していたことがこの違いの主たる要因であると思われる。墓に入るまでの構造やファサード、入口前で埋葬が行われた事例はエルサレムでは 1 例も確認されておらず、それゆえに墓外は服喪の空間であったと考えられている（Hachlili 2005, 449; Kloner and Zissu 2007, 43, 51）。服喪の空間であることを直接的に考古学的情報から捉えることは難しいが、墓の外に設けられる空間が埋葬のためのものではないことは明らかである[33]。

以上のことから、前 2 世紀のエルサレムのロクリ墓は、地表の外部構造を服喪の空間として利用し、集骨に適した母室、ロクリによって家族埋葬を行う墓であり、ヘレニズム都市のロクリ墓とは全く異なっている。その一方で、ロクリが利用されていることは共通しており、エルサレムで利用されるより前にフェニキアやエジプトで利用されていることから、周辺地域からエルサレムへロクリがもたらされたこと

[33] 文献史料には、埋葬儀礼について遺体に香油を塗ることや衣服を着せること、布を巻くことなどの手順が記載されているが（セマホート 12:10）、埋葬が終わった後の喪に服することに関しての記載はない。

図 30. ベンチにおける一次埋葬, フレンチヒルの墓（Kloner 1980, Plate.9B）

は明らかである。これまでの研究では「ロクリ墓」単位でこの広がりを捉えるものが多いが、本節の分析で得られた違いを踏まえると、「母室の壁に複数のロクリを設ける構造」が広がっていったと考えた方が良いだろう。なぜなら、ロクリ墓そのものが周辺地域からエルサレムに伝わったわけではないからである。エルサレムのロクリは個人の遺体が安置される場所ではなく、集骨の際の一次埋葬、二次埋葬が行われる場所の一つであり、ロクリの形態も幅広型や小型のようにエルサレム独自の形態へと変化している。ロクリはアレキサンドリアやマレシャのロクリ墓における遺体を埋葬するプロセスを含めて採用されたものではなく、形態の借用もしくは模倣に過ぎないと考えられる。その意味では初期のユダヤ人のロクリ墓におけるヘレニズムの影響は部分的あるいは限定的であったといえるであろう。

第 1 章 2 節で述べたように、ギリシア建築様式の大規模な装飾を伴ったファサードは一部の墓に限られるものの利用されており、序章 2 節で述べたように、セレウコス朝時代にはヘレニズム様式のテーブルウェアが利用されるようになるが（Gitin 2015, 629）、これらはユダヤ人の埋葬と直接的に結びつくものではない。なぜならば、神殿や住居などの建造物の装飾におけるヘレニズム化、日常生活で用いる土器のヘレニズム化の結果が墓のファサードや副葬品に表れているのであり、埋葬習慣の変化という文脈からは外れていると考えられるためである。埋葬習慣の観点からは、母室の壁に複数のロクリを設ける構造以外はヘレニズムの影響はみられないと考えてよいであろう。しかしながら、エルサレムにのみ確認される墓の形態と埋葬習慣の由来はこの分析で結論付けることはできない。埋葬方法が鉄器時代Ⅱ期にみられる集骨であり、前 2 世紀のロクリ墓の形態の大半がベンチ墓の母室形態において典型的なコの字型であることを考慮すると、鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓との比較を行うことが必要だと考えられる。この節の分析の結果を踏まえて、次節ではヘレニズム時代のロクリ墓に対する鉄器時代Ⅱ期からの影響を検討する。

第 5 節　エルサレムにおける初期ロクリ墓とベンチ墓の比較

1　墓の内部形態による比較

この節では、墓の内部形態の分析を通して、ヘレニズム時代におけるエルサレムのロクリ墓と鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓の比較を行う。これによって、エルサレムのロクリ墓と鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓との関係を検討するためである。なお、本節と次節では墓に入るまでの構造については取り扱わない。ベンチ墓の入口は建築装飾を持たない簡素な地表型であり、第 1 章 2 節 3 項で詳細に述べたように、本研究の分類項目とは異なるが、エルサレムのロクリ墓に関する傾向は既に明らかになっているからである。また、内部形態の分析方法は前節と同様であるため、重複する部分は適宜省略して記載する。

まず、母室の分類について述べる。ヘレニズム都市とは異なり、ベンチ墓には長方形や円形の母室は確認されず、エルサレムの鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓と初期ロクリ墓は全て方形の母室であった。また、ピットのないタイプもみられず、全てピットのある母室である。ピットのある母室は、前節と同様にピットと掘り残された棚部分との関係に基づきさらに細分されるが、コの字型とロの字型に加えて新たに外周型の母室が確認された（表 8、図 31）。外周型はコの字型・ロの字型とは異なり、ピットが入口以外の 3 つの壁面からも掘り込まれる。ピットが作られる場所は様々であるため、外周型はコの字型・ロの字型のように一定の形態を持っていない。

次に、子室について述べる。ベンチ墓にロクリはみられないが、リポジトリが集骨の納骨場所として設けられている。リポジトリはベンチ墓に必ず設けられるものではなく、そこで一次埋葬は行われない。また、ロクリは一次埋葬の際に内部に入ることができるように約 70ｃｍの高さで作られているが（Kloner and Zissu 2007, 65）、リポジトリは内部に人が入る構造ではないため、約 40～50ｃｍの高さである（図 31）。これらのことから、リポジトリとロクリは、類似しながらも明確に区分が可能である。しかしながら、小型のロクリが機能と平面形態の面でリポジトリと類似していることから、リポジトリにロクリに類似する形態がどの程度確認されるのかを検討することは、ベンチ墓とロクリ墓の関係性を把握するために必要だと考えられる。よって、本項ではロクリとは別にリポジトリについて分類を行い、前 2 世紀のロクリ墓の形態と比較する形をとりたい。

リポジトリは、付設される位置によって分類することが可能である。リポジトリは、母室の四隅、壁面、ピットの壁面のいずれかに作られる（表 9、図 32―図 35）。母室の四隅に作られるリポジトリ、ピットの壁面に作られるリポジトリのいずれもそれぞれのタイプの中で形態的な違いはみられなかったが、母室の壁面に作られるリポジトリは、その寸法によってさらに 2 類に細分される。これらの分類において、平面形態についてはロクリの分類と一致するものがある。B1 はロクリのⅡa、B2 はロクリのⅢと平面形態が同一である。

これらの分類に基づき、ベンチ墓とロクリ墓の比較を行う。なお、リポジトリの分析結果に関しては、ロクリと平面形態が一致するタイプをロクリのグラフと同色で示し、それ以外のタイプは黒とグレーで示す。分析の結果、鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓と前 2 世紀のロクリ墓の母室では、どちらもピットのない母室は確認されず、全てピットのある方形の母室で、中でもコの字型の母室が大半を占めるという傾向を示した（図 36）。前節で示したように、ヘレニズム都市とエルサレムの母室形態は全く異なっており、今回の結果を踏まえると母室形態は鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓と同一であると考えられる。また、鉄器時代

表 8. 母室の分類項目

形状	大分類	小分類	特徴
方形	ピットあり	コの字型	ピットが入口から掘られ、平面形がコの字になるもの
		ロの字型	ピットが中心に掘られ、平面形がロの字になるもの
		外周型	ピットが母室の壁面からも掘られるもの

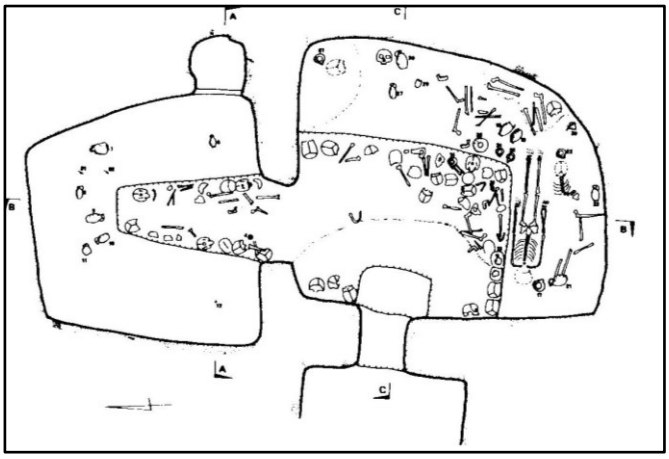


図 31. 右：外周型, シオン山, エルサレム

（Kloner and Davis 2000, 108 改変）

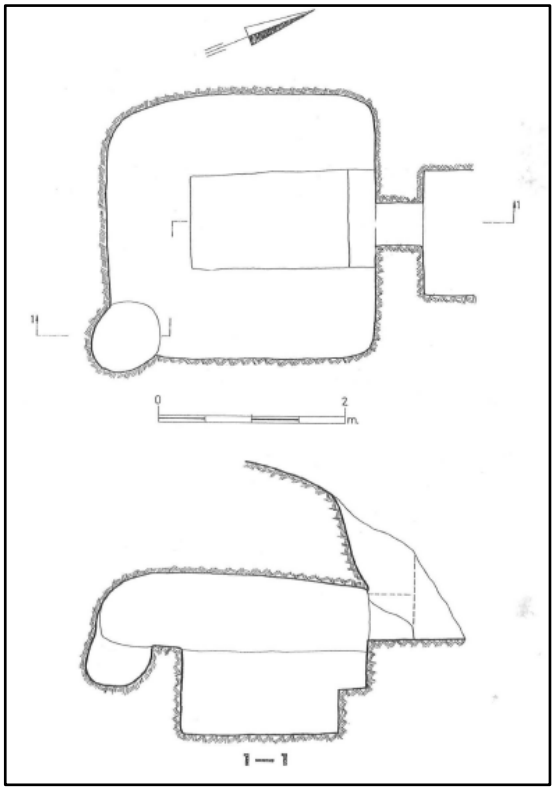


図 32. A の例, ヘルツルの丘, エルサレム

（Kloner 2001-2002, Fig.10）

表 9. リポジトリの分類項目

大分類	小分類	特徴
四隅	A	四隅のいずれかに作られるもの
壁面	B1	2m以上で幅が入口よりも広いもの
	B2	1m以下であるもの
ピット	C	ピットの壁面に作られるもの
なし	D	リポジトリがないもの

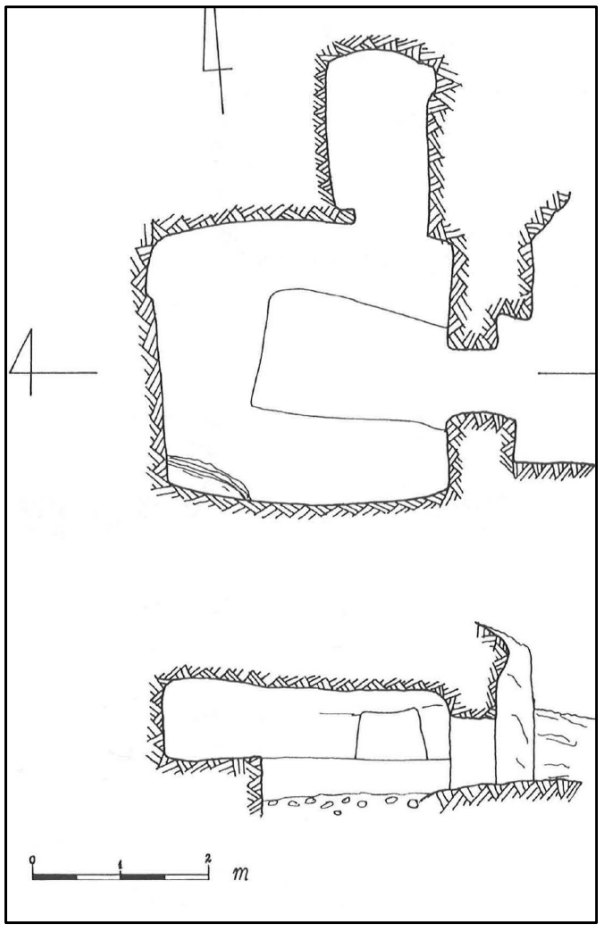


図 33. B1 の例, ギヴァット・ラム, エルサレム

（Kloner 2001-2002, Fig.6 改変）

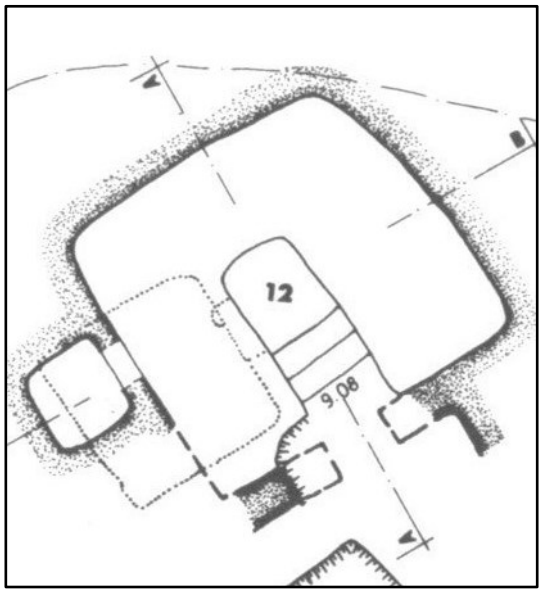


図 34. B2 の例，ヒンノムの谷，エルサレム
（Barkay 2000, 93 改変）

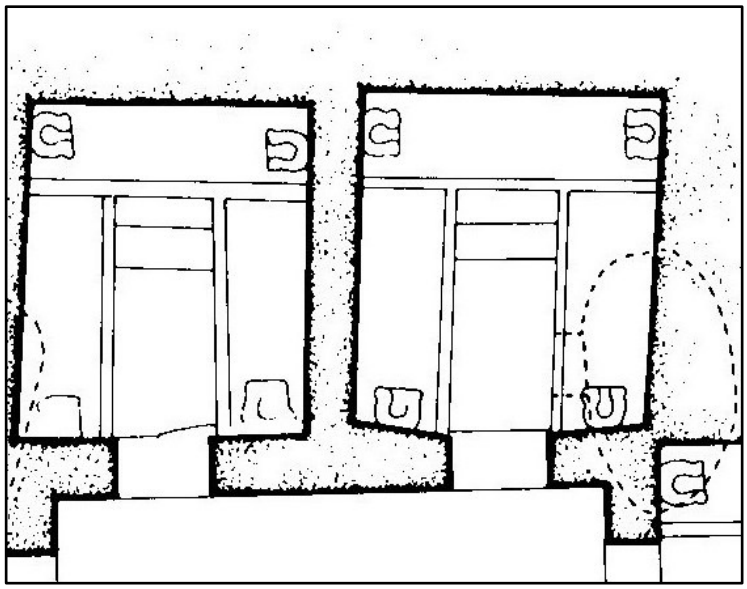


図 35. 右：C、左：D の例，聖エティエンヌ修道院，エルサレム
（Barkay et al. 2000, 123 改変）

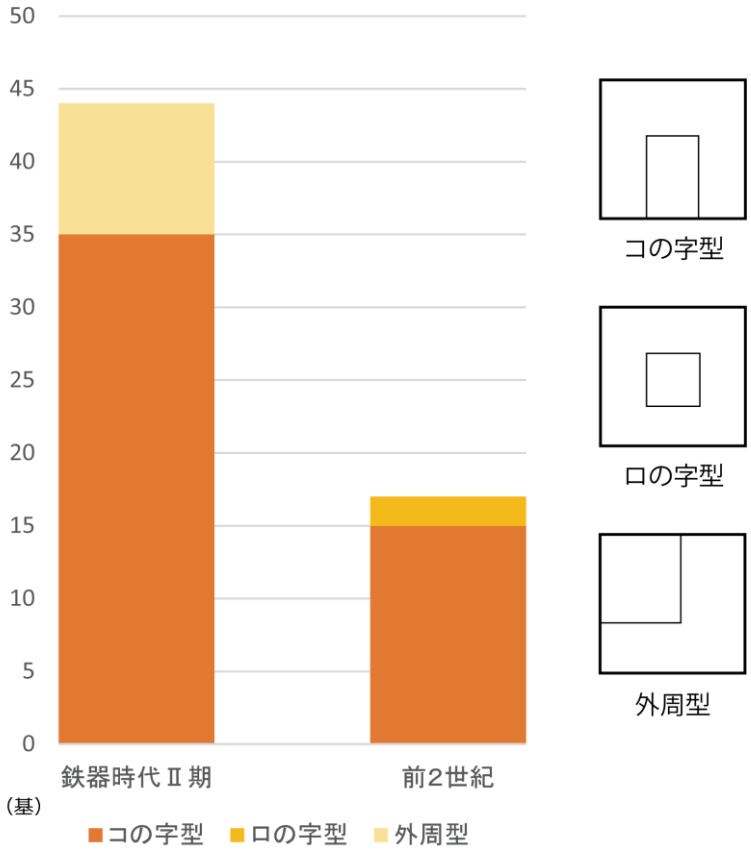


図 36. エルサレムにおけるベンチ墓とロクリ墓の母室形態

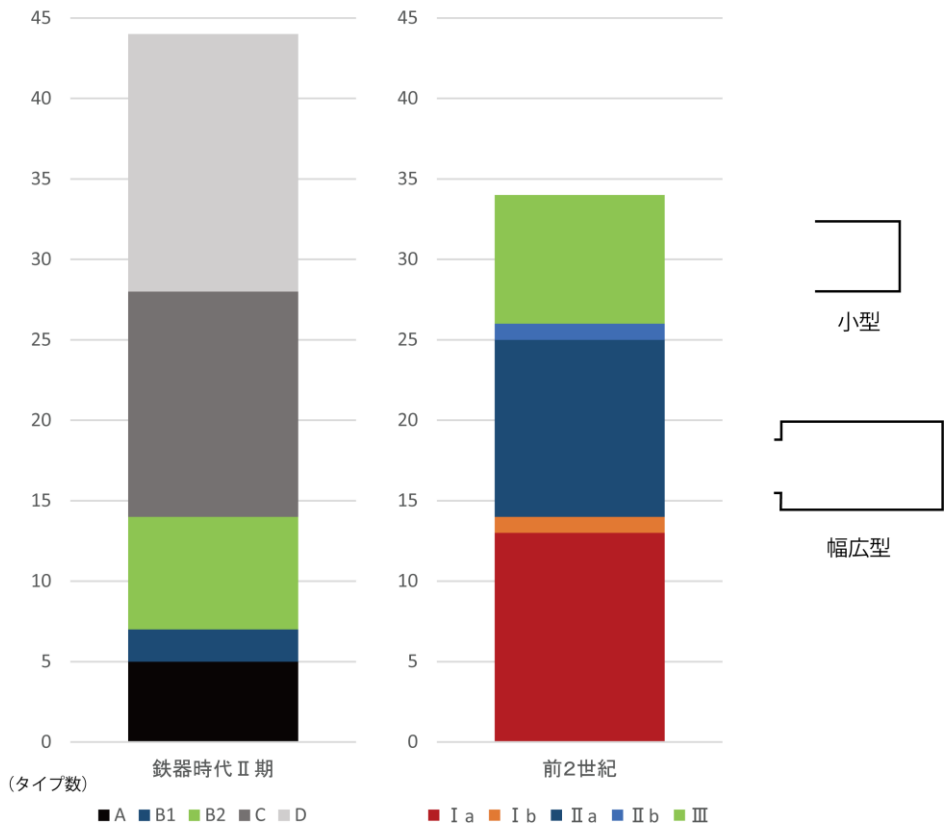


図 37. エルサレムにおけるベンチ墓とロクリ墓の子室形態

Ⅱ期では外周型、前 2 世紀ではロの字型のように、コの字型以外のピットのある母室も確認された。

リポジトリに関しては、リポジトリを持つベンチ墓が過半数であったが、リポジトリを持たないベンチ墓も一定数確認された（図 37）。リポジトリの中では、ピットの壁面に作られる C が最も多い。また、ロクリの形態と比較した結果、ロクリのⅡa と平面形態が一致する B1 は数例であったが、小型のロクリであるⅢに一致する B2 は一定数確認された。

2　考察

墓の内部形態の分析の結果から、鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓と前 2 世紀のロクリ墓の形態には強い共通性があることが明らかになった。先行研究により明らかとなっている埋葬方法などの情報と前節の内容を合わせ、この共通性について考察したい。

分析結果と先行研究の成果を合わせると、エルサレムのベンチ墓については、ピットのある方形の母室、リポジトリという形態的な特徴を持ち、複数人の遺骨がリポジトリや母室に集骨されるという特徴を持っている。エルサレムのベンチ墓に関しても、集骨のプロセスや状態に不明瞭な部分はあるが、例えばシオン山の墓（Kloner and Davis 2000）（図 31）からは、一次埋葬の場所がベンチであり、二次埋葬の場所がベンチ、ピット、リポジトリであることが分かる。ロクリの有無で埋葬場所に違いはあるが、集骨の埋葬方法と墓内の利用のされ方は、エルサレムのロクリ墓とベンチ墓でほとんど等しいといえる。前節で述べたように、前 2 世紀のエルサレムのロクリ墓は、ヘレニズム都市のロクリ墓とは多くの違いがみ

られたが、ベンチ墓とはピットのある母室、特にコの字型の母室と埋葬プロセスという点で強い共通性があるといえる。

ベンチ墓とロクリ墓が作られた年代に隔たりがあるとはいえ、ベンチ墓の利用自体はバビロニア捕囚時代からプトレマイオス朝時代まで継続していたことが明らかとなっており（Kloner and Zissu 2007, 139）、ベンチ墓の母室の形態がロクリ墓に採用されることは充分に考えられるであろう。しかし、ベンチ墓に関して従来の研究で述べられている死生観や家を模した墓を作るという考えが、前 2 世紀のロクリ墓にそのまま引き継がれているかということに関しては検討が必要である。第 1 章 1 節で詳述したように、ベンチ墓のコの字型の母室形態は、集骨を行う際に機能的であるというだけでなく、当時の住居形態である四部屋式住居を模すことによって、これから生きていく人々への家族の継続というメッセージと共に、死後も家族が共に生前と同じように生活するという死生観を込めたものであったと考えられている（Faust and Bunimovitz 2008）。ファウストとブニモビッツによるこの考えは、それ以前の研究でも提唱されているものであり、以降の研究でも広く受け入れられている。本節の分析の結果で明らかになったように、ベンチ墓の大半は四部屋式住居を模したと考えられているコの字型の母室を有しており、ベンチ墓の母室が四部屋式住居を模したものであったことは妥当であろう。また、鉄器時代Ⅱ期の周辺地域の埋葬が人形棺や甕棺、石棺墓などを用いた個人埋葬であり（図 3）、共同墓地であっても複数人の遺骨が混ざることがないのに対し、ベンチ墓で行われる埋葬のみが複数人の遺骨が合わさる集骨であることからは、ベンチ墓における埋葬が特に家族を意識したものであったと考えられる。対して、生前と同じように死後も家族が共に生活するという死生観については、それを直接的に示す考古学的情報はない。文献史料についても、タナハには来世への明確な記載は存在しないため、ファウストとブニモビッツやバーカイ（Barkay 1999）の研究のように、当時の社会状況と考古学的情報から推測するほかないであろう。ベンチ墓の母室が家を模していること、集骨の埋葬方法が家族埋葬であることは確かなことから、ここでは家族を意識した死生観が鉄器時代Ⅱ期にあったという説は支持する。

一方、ベンチ墓に家族を意識した死生観が込められていたとして、ロクリ墓については家を模した墓を作るという考えは結びついていたことは証明できない。ヘレニズム時代には四部屋式住居は利用されておらず、そもそも、ヘレニズム時代の住居はマレシャのような稀な例を除いてほとんど残存しておらず、家と墓の関係を議論すること自体が難しいためである。

しかし、ロクリ墓における埋葬が家族を意識した死生観のもと行われていた可能性は高い。ロクリ墓における集骨はベンチ墓と同様に複数人が共に埋葬されるものであり、個人の埋葬空間を区別し強調するヘレニズム都市の埋葬方法とは根本的に異なっている。前 2 世紀のロクリ墓で集骨が行われ、ヘレニズム都市にみられる個人埋葬が一例も確認されていないことからは、ユダヤ人が家族を重視していたことを読み取ることができる。また、文献史料には、家族を共に埋葬することに関する記載が存在する。セマホート 14:6 では「彼女の父親が『彼女を私の側に葬らせてください』と言い、彼女の夫が『彼女を私の側に埋めさせてください』と言った場合、彼女は父親の側に埋葬されます。しかし、子供がいる場合は夫の側に埋葬され、『子供たちの側に私を葬ってください』と言うと、彼女は夫の側に埋葬されます。」[34]と述べられている。この記載の埋葬が集骨とオシュアリのどちらであるのかを判断することは難しいが、家族が共に埋葬されることや女性が埋葬される場合の場所に決まりがあること、父親と夫が場所は異な

[34] https://www.sefaria.org/Tractate_Semachot.14.8?lang=bi, 筆者訳, 参照：2022 年 1 月 19 日

る、あるいは離れているかもしれないが同一墓内に埋葬されている可能性が高いことが分かる。第 3 節で述べたように、当時の埋葬が文献史料に記載されている内容に必ずしも従っているわけではないが、考古資料と文献史料からは、ロクリ墓における埋葬が家族を意識した死生観のもと行われていたと考えられる。

これらのことから、エルサレムのロクリ墓は、母室の形態と埋葬方法、家族を意識した死生観という点でベンチ墓と共通している。しかし、ベンチ墓とロクリ墓に共通性はあるが、鉄器時代Ⅱ期からヘレニズム時代にかけて、直接的にこの継続があったのではない。なぜなら、バビロニア捕囚時代からプトレマイオス朝時代に至るまで、ベンチ墓が新しく構築されていないからである。加えて、バビロニア捕囚によってユダ王国の人々の大半はエルサレムを離れることになったため、捕囚期間の間に埋葬習慣・死生観が保たれていたかどうかを考古学的に結論付けることは難しい。対して、クロナーとゼリンガーが指摘しているように、捕囚からエルサレムへと帰還した人々が目にした墓は鉄器時代Ⅱ期のものであり、人々がエルサレムに残存する墓をかつての伝統的なものであると認識し受け入れた可能性は高い（Kloner and Zelinger 2007, 219）。また、ハスモン朝時代に輸入品・高級品の土器が激減し、鉄器時代に主として利用されていた系統である一つ折りランプが著しく利用されるようになったことから、ハスモン朝の確立に向けてユダヤ民族を確たるものとするために鉄器時代の文化を意図的に強調した（Abadi and Regev 2020, 260-264）と指摘されているように、墓以外でも鉄器時代の文化を意識的に採用する動きが存在した。ハスモン朝が確立するまでは、バビロニア捕囚から帰還した人々が共同体を再建し、ユダヤ人としての思想や生活様式を確立させていった時代であり、意識的にベンチ墓と集骨を自らの伝統として位置付け、ロクリ墓に採用したのであろう。

このような鉄器時代Ⅱ期と共通する要素がある一方で、エルサレムの石切墓が周辺地域由来のロクリを取り入れたことは事実である。ロクリは新しい構造であり、マレシャやアレキサンドリアでエルサレムよりも前から利用されていたヘレニズム要素である。リポジトリは基本的に一つの墓に単体で設けられる構造であり、母室の壁に複数の子室を設けるという概念は、明確にヘレニズムの影響である。しかし、前節で述べたように、エルサレムのロクリはアレキサンドリアやマレシャのロクリ墓における遺体を埋葬するプロセスを含めて採用されたものではなく、個人埋葬から集骨に際しての一次埋葬・二次埋葬へと機能が変化している。この変化については、リポジトリの形態と機能から解釈することができる。本節の分析の結果、ロクリと平面形態・機能が一致するタイプが確認され、とくに小型のロクリと一致するリポジトリは複数の墓で利用されていた。つまり、既にベンチ墓においてリポジトリとして子室は存在しており、ロクリの機能の 1 つである集骨の納骨場所としての機能を担っていたのである。そのため、ユダヤ人にとってロクリは全く新しいものではなく、むしろリポジトリに類するものであったといえる。ヘレニズム都市からロクリが伝わる際に、その機能や形態に変化がみられることは、ユダヤ人がロクリという新しい構造そのものを取り入れたのではなく、それに影響を受けてリポジトリを母室の 3 辺に配置するように変化させたことを示しているのである。

リポジトリの存在を考慮すると、一見ロクリはユダヤ人の埋葬に必要不可欠でないものに思われる。エルサレムの埋葬習慣を考えると、ベンチ墓がそのまま利用されたとしても埋葬や死生観に不都合は生じ得ない。しかしながら、集骨の観点からみてロクリは明確にベンチ墓を改善していると考えられる。ベンチ墓は、リポジトリを除いて全てが一つの空間であり、一次埋葬と二次埋葬も同じ空間で行われる。そのため、一次埋葬で遺体を白骨化させるプロセスの中で生じる腐臭は、ベンチ墓で再埋葬を行う限りは

常に生じていることになる。ロクリは封石がはめ込まれることで母室とは完全に区別された空間として利用することが可能であり、クロナーとジスが指摘しているように、ロクリを設けることで遺体の白骨化による腐臭が軽減され、白骨化の速度を高めることにも繋がる（Kloner and Zissu 2007, 70）。このように、ロクリは集骨の際の一次埋葬を改善しているといえる。一方で、前節で述べたように、ロクリ墓でもベンチは一次埋葬に利用される場合があるため、密封性だけがロクリを採用した要因ではないであろう。ロクリを設けることは、一つの墓で埋葬可能な人数を増加させることにも繋がっている。既にベンチ墓では、例えばヒンノムの谷の墓（図 4）のように、ベンチを拡張し同時に一次埋葬を行うことが可能な人数を増やす試みは行われている。この点でみれば、ロクリは一次埋葬・二次埋葬に利用可能であり、ロクリを設けることで埋葬可能な人数が増加することは明らかである。つまり、ユダヤ人はロクリに影響を受けて、リポジトリを一次埋葬と二次埋葬の両方を行うことができる複数の子室へと進化させ、集骨による埋葬をより円滑に行うことができるように改善したと考えられる。

序章で述べたように、前 2 世紀はセレウコス朝時代初期の寛容な支配とその後のヘレニズムの強制、ハスモン朝時代の独立のように、ヘレニズムに対して様々に向き合ってきた時代である。前節と本節で得られた情報から考えると、ユダヤ人の埋葬については、鉄器時代Ⅱ期の埋葬を意識的に採用しており、ヘレニズム化の度合いが低いといえる。加えていうならば、寛容であった時もヘレニズムの習慣に従うことを強制された時も、ユダヤ人は伝統的な埋葬習慣を採用していたのである。ロクリが一次埋葬を行う際に個人を識別可能であることから、ヘレニズムの影響でユダヤ人の埋葬に個人性が生じているといえるかもしれないが、ベンチ墓の段階で一次埋葬の場所はベンチによって区別されており、それを強調した人型にベンチを掘り込んだ例（図 4）も確認されている。一次埋葬の際に個人を識別できる状態は一時的なものであり、遺骨は最終的に集められるため、埋葬の途上で個人が識別可能であることは個人性の強調には繋がらないと考えられる。むしろ、ユダヤ人は家族を意識した埋葬習慣を発展させるために、母室の壁に複数のロクリを設ける構造を独自の墓形態に適合させたといえるであろう。

ロクリ墓は前 1 世紀以降に増加していくため、前 2 世紀のこのような傾向がエルサレムの陥落まで継続していたのかということは、ヘレニズムとの関係を考える上で重要である。ユダヤ人の独立王朝であるハスモン朝が成立した後もセレウコス朝とは関係が続いており、ヘレニズム化の流れが独立王朝の成立で途切れたわけではないためである。よって、次節では、これまでの内容を踏まえた上で、前 2 世紀から 1 世紀におけるエルサレムのロクリ墓の変遷を検討する。

第 6 節　エルサレムにおけるロクリ墓の変遷

1　墓の内部形態による比較

この節では、墓の内部形態の分析を通して、前 2 世紀から 1 世紀におけるエルサレムのロクリ墓の時間的比較を行う。これによって、第二神殿時代後期におけるエルサレムのユダヤ人が埋葬に関してどのようにヘレニズムに向き合っていたのかを通時的に検討することができる。内部形態の分析方法はこれまでと同様であるため、重複する部分は適宜省略して記載する。

まず、母室の分類について述べる（表 10）。前節と同様に長方形や円形の母室は確認されず、第二神殿

表 10. 母室の分類項目

形状	大分類	小分類	特徴
方形	ピットあり	コの字型	ピットが入口から掘られ、平面形がコの字になるもの
		ロの字型	ピットが中心に掘られ、平面形がロの字になるもの
		外周型	ピットが母室の壁面からも掘られるもの
	ピットなし	平坦型	床面が壁面に至るまで同じ高さであるもの
		段型	段が作られ、母室に占める段の割合が小さいもの

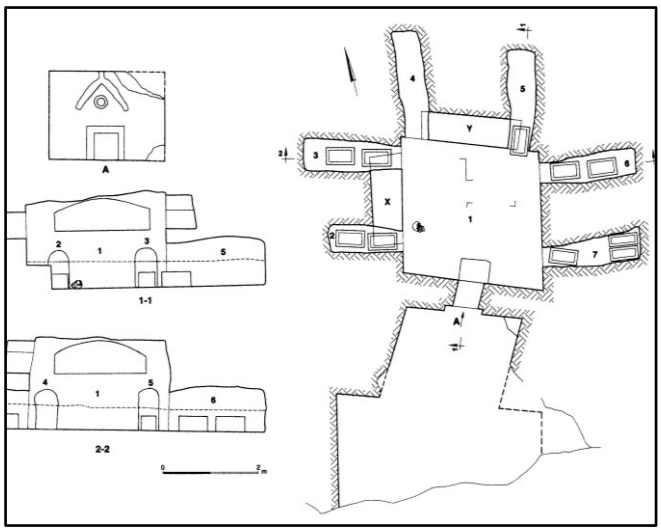


図 38. 平坦型, タルピオット東, エルサレム

（Kloner 1996, Pl.1 改変）

表 11. ロクリの分類項目

大分類	小分類	特徴
標準型	Ⅰa	入口と内部の幅が同じもの
	Ⅰb	内部が二層構造であるもの
	Ⅰc	2つのロクリが繋がっているもの
幅広型	Ⅱa	内部の幅が入口よりも広いもの
	Ⅱb	内部が二層構造であるもの
	Ⅱc	2つのロクリが繋がっているもの
	Ⅱd	中心に細長い溝が作られるもの
小型	Ⅲ	長さが短いもの

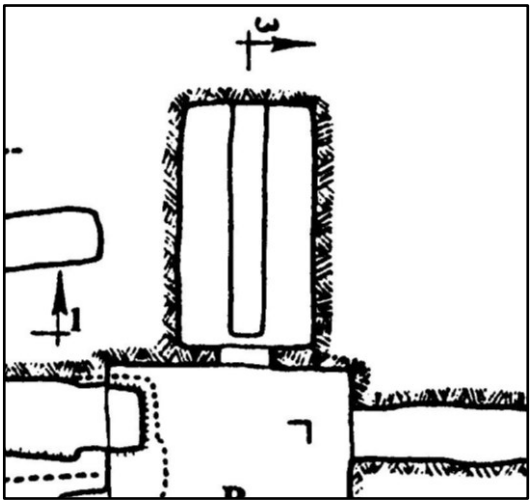


図 39. Ⅱd の例, タルピオット東, エルサレム

（Kloner and Zissu 2007, Fig.209 改変）

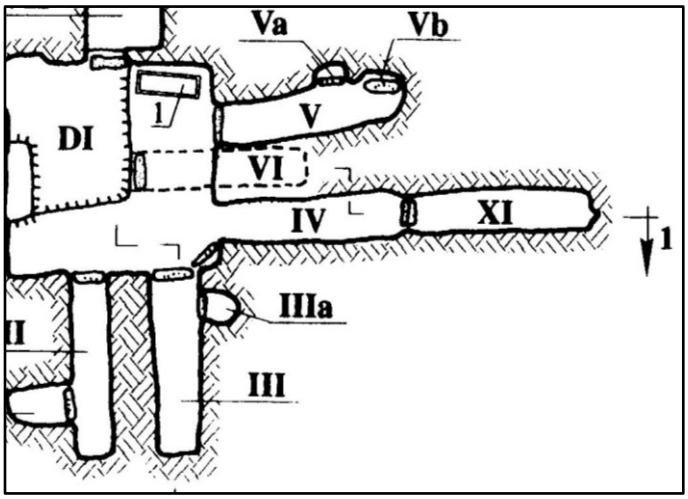


図 40. Ⅰc の例, スコープス山西斜面, エルサレム（Kloner and Zissu 2007, Fig.66 改変）

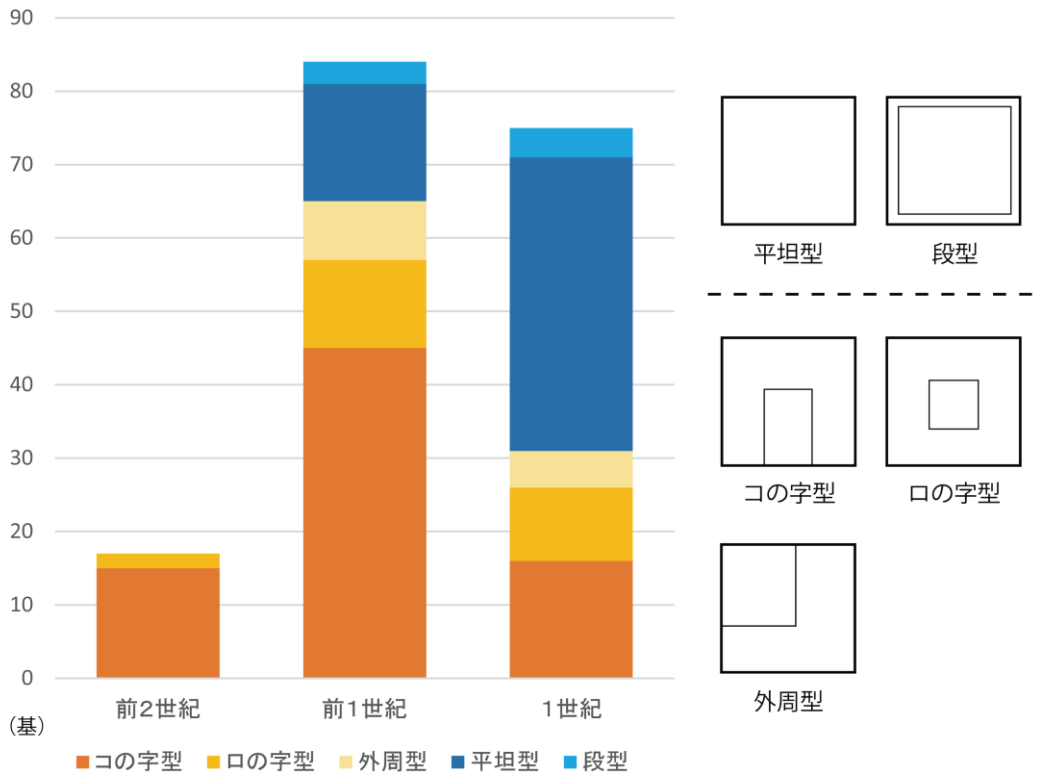
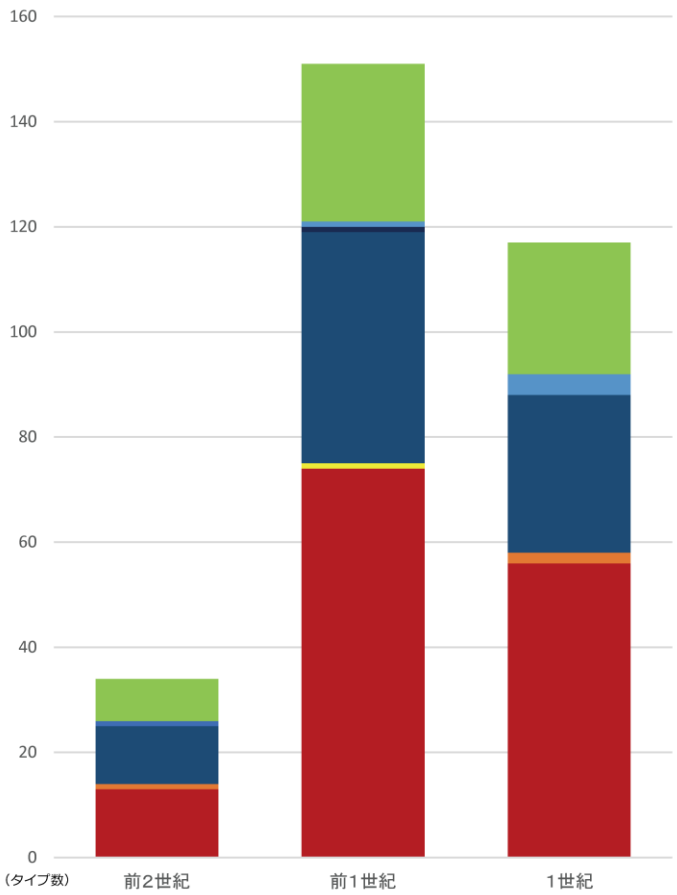


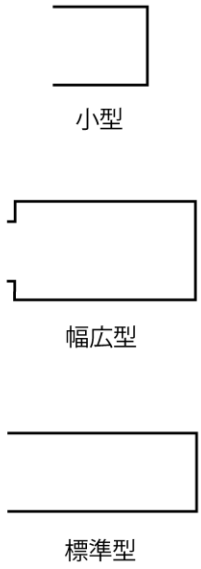
図 41. ロクリ墓の母室形態の変遷

時代後期におけるエルサレムのロクリ墓は全て方形の母室であった。前 2 世紀のロクリ墓、ベンチ墓はピットのある母室のみであったが、前 1 世紀以降のロクリ墓では方形でありながらもピットのない母室が確認された。第 4 節の分類と同様に、これは平坦型と段型に細分される。また、ピットのある母室に関しても、前 2 世紀のロクリ墓には確認されず、ベンチ墓では利用されていた外周型の母室が前 1 世紀以降のロクリ墓では利用されていた。前 1 世紀以降の母室は、これまでの分析で取り扱った時代よりも多様であるといえるであろう。

次に、ロクリの分類について述べる（表 11）。これまでの項目と同様に、ロクリはその平面形態から標準型、幅広型、小型の 3 種類に分類された。同様に、それぞれにバリエーションが確認されたが、前 2 世紀のロクリが二層構造のみであったのに対して、前 1 世紀以降は多くのバリエーションがみられた。標準型と幅広型には二層構造である b 類に加え、2 つのロクリが繋がっている c 類が確認された。また、幅広型にはロクリの中心に細長い溝が作られる d 類もみられた（図 39、図 40）。小型のロクリに関しては、前 2 世紀と同様に一定の形態であった。これらの分類に基づいて、前 2 世紀から 1 世紀におけるエルサレムのロクリ墓について変遷を検討し、第二神殿時代後期におけるエルサレムのユダヤ人の埋葬におけるヘレニズムの影響を確認する。

分析の結果（図 41）、前 1 世紀も前 2 世紀と同様にピットのある母室が過半数を占め、その中でもコの字型の母室が最も多く確認された。一方で、ピットのない母室、特に平坦型が一定数利用されていたことが明らかになった。また、ピットのある母室の中でも、コの字型に加えて前 2 世紀に 2 例しか確認されなかったロの字型が増加し、前 2 世紀には確認されなかった外周型が出現している。1 世紀になると、これまでの傾向とは異なり、ピットのある母室は数を減らし、ピットのない母室が過半数を占めるようになった。ピットのない母室の中では、とくに平坦型が過半数を占めており、段型の母室は少数であった。





Ⅲ	8	30	25
Ⅱd		1	4
Ⅱc		1	
Ⅱb	1		
Ⅱa	11	44	30
Ⅰc		1	
Ⅰb	1		2
Ⅰa	13	74	56

図 42. ロクリ墓のロクリ形態の変遷

これらの結果から、ロクリ墓の母室には前 1 世紀から変化が起こり始め，1 世紀にはさらにその変化が進んでいったと考えられる。

ロクリに関しては、前 2 世紀から 1 世紀にかけて傾向にほとんど違いはみられない（図 42）。最も標準的なⅠa、幅広型の中で最も単純なⅡa、小型のⅢがどの年代にも同じ程度の割合で利用されており、標準型や幅広型のバリエーションはかなり出現頻度の低い形態である。この結果から、母室の変化とは異なり、ロクリに関しては利用期間の中でその形態を変化させていないと考えられる。

2　考察

これまで述べてきたように、前 2 世紀のロクリ墓は鉄器時代Ⅱ期の埋葬を意識的に採用した墓であり、前 1 世紀の墓も同様の傾向を示している。分析結果と先行研究の情報から考えれば、少なくとも前 1 世紀までは、ピットのある母室と集骨の埋葬方法がユダヤ人のロクリ墓の典型的な特徴であったといえるであろう。一方で、母室に関して、ピットの消失という形で前 1 世紀から変化が起こり始め、1 世紀にはさらにその変化が進んでいったことが明らかになった。ピットのない母室が過半数を占めるようになるという母室形態の大きな変化の背景には、新しい埋葬方法であるオシュアリが前 1 世紀末から利用されるようになったことがあると考えられる。

前述のように、オシュアリは前 1 世紀末に新しく利用されるようになった埋葬方法であり、1 世紀には

オシュアリの利用は集骨を上回るようになった。集骨からオシュアリへの移行は緩やかなものであり、その埋葬手順が同様であることから多くの墓で両者は併用されている。また、前 2 世紀に製作された墓であっても、前 1 世紀末以降に利用されている墓であれば、利用の途中からオシュアリを使い始める場合があり[35]、オシュアリは利用期間の短さに反して多くの墓で出土している。第 1 章 2 節で詳述したように、従来の研究では、オシュアリの出現の経緯に不明瞭な点はあるが、ユダヤ人の中で独自にオシュアリが利用されるようになったと考えられている。なぜならば、オシュアリと完全に一致するような小型石棺は、エルサレムでオシュアリが利用されるより以前にヘレニズム都市では確認されておらず、再埋葬が行われる小型石棺は周辺地域に例がないためである。考古学的な情報からは、ユダヤ人のオシュアリがヘレニズム都市の埋葬方法に直接的に影響を受けたものではないといえるであろう。

オシュアリは個人の識別が可能であるという点で、集骨と異なっている。基本的にオシュアリには個人の遺骨が納骨され、被葬者の名前や職業が彫りこまれる場合もある。つまり、個人の識別ができなかった集骨とは異なり、墓内で明確に被葬者個人は区別されるのである。このような集骨からオシュアリへの埋葬方法の転換からは、家族が埋葬空間を共にする埋葬から、ヘレニズム都市のような個人を完全に区別する個人埋葬へと変化したと考えられるかもしれない。しかし、オシュアリの安置場所を考慮すると、この考えは当てはまらないと思われる。オシュアリは 1 つのロクリに個別に安置されるのではなく、ロクリや母室、アルコソリアなど様々な場所に他のオシュアリとまとまって安置される（図 43）。オシュアリという納骨容器で被葬者個人の埋葬空間は区別されるが、それらは集骨と変わらず隣り合って安置されており、家族は埋葬空間を共にしているのである。埋葬プロセスと埋葬空間という点で、個人の遺骨や納骨容器が 1 つのロクリという独立した空間に安置され、個人が明確に区別されるヘレニズム都市の埋葬習慣と、ユダヤ人のオシュアリの習慣は異なっている。また、エルサレムやエリコのオシュアリでは近親者が共にオシュアリに納骨される事例も確認されており（Hachlili 2005, 483）、この点もヘレニズム都市とは異なっている。

とはいえ、ヘレニズム都市の埋葬習慣に影響を受けていなくとも、ユダヤ人の考え方自体がヘレニズムの影響を受けている可能性も考慮しなければならない。前 4 世紀以降のギリシアでのポリス民主政の衰退とアレクサンドロス大王の東征を契機として、ギリシア哲学の対象や基準は集団から個人へと移り変わっていった。ポリスの枠を超えた個人の考え方、生き方を求めるような風潮はコスモポリタニズムとも呼ばれ、ユダヤ人もこのような考え方に基づくギリシア哲学や文化に向き合うことになった（Hengel 1981, 217）。序章で述べたように、プトレマイオス朝やセレウコス朝によってもたらされた経済制度や言語、ギリシア哲学、文化を好意的に受け入れるユダヤ人もおり、ユダヤ教の確立やユダヤ人の思想にヘレニズムの個人主義・世界市民主義的傾向が影響を与えている側面もある。ヘレニズムの個人に対する認識がユダヤ人の考え方へと影響を与え、その結果がオシュアリの採用に表れているとも解釈できるかもしれないが、考古資料・文献史料から直接的な根拠を持って示すことは難しい。オシュアリの採用に関して、復活信仰や富の蓄積など様々な要因が従来の研究で述べられているが、同様にそれを直接的に示す考古資料・文献史料は存在しない。ユダヤ人の家族を意識した埋葬に個人が表面化してきたことは事実であり、上記の要素がオシュアリ採用の一因であるかもしれないが、現在の情報からはあくまで推測にすぎないと考えられる。少なくとも、考古資料に基づく情報からは、ユダヤ人とヘレニズムという関係で

[35] 例えば、Rahmani 1980; Abu Raya and Zissu 2000 など。

図 43. オシュアリ安置の様子, オリーブ山, エルサレム

考えるべきではなく、ユダヤ人の再埋葬の発展として捉えるべきであろう。

このように、ユダヤ人の埋葬方法が変化したことで、ロクリ墓に変化が生じたと考えられる。これまで述べてきたように、ピットのある母室は集骨に適した機能を持っているが、オシュアリに最適な形態であるとはいえない。ピットのある母室は再埋葬に有用な構造であるが、オシュアリの場合は再埋葬の際に遺骨が混じらないように取り扱う必要がある。その際には、空間として開けており、他人の遺骨と混じる可能性のある母室は、一次埋葬を行う場所として最適ではないといえる。閉じられた空間であるロクリの方がオシュアリのための一次埋葬に向いている構造である。前 2 世紀と比べると、オシュアリが出現した後の母室は、埋葬空間としての機能が消失し始めていると考えられる。また、小さい空間で埋葬を行うことができる集骨とは異なり、オシュアリは空間に占める割合が大きい。オシュアリは蓋の部分が平らなものと屋根のあるものに大別されるが（Hachlili 2005, 361-374）、屋根のあるものは他のオシュアリと重ねることはできず、平らなものでも多数を重ねることはできない。同じ空間に対してオシュアリを置くことができる数は、集骨と比べれば遥かに少ないといえるであろう。ある程度の空間が必要なオシュアリを安置することを考えると、必然的に高低差が生じるピットはオシュアリの安置場所を減らす構造であると思われる。おそらく、一次埋葬に適した場所の変化とオシュアリの安置場所を確保することを要因として、1 世紀になると母室はピットのないものへと変化した可能性が高い。加えて、オシュアリによる変化は母室の形態だけではない。前述のように、1 世紀からオシュアリの安置場所としてアルコソリアが利用され始める。ハクリリが述べているように、アルコソリアが確認される墓はいずれも大規模で精密に作られている墓であり（Hachlili 2005, 71）、アルコソリアとロクリが共に利用される例は少ないが、このようなオシュアリのための補助構造が 1 世紀以降に利用され始めることは、ロクリ墓がオシュアリに合わせて変化していった証左であるといえる。

前 1 世紀にみられるピットのない母室が出現し始める傾向は、1 世紀の傾向と同じであると考えてよ

い。遺物の年代や盗掘による被害が多いことを要因として、前 1 世紀をオシュアリの出現前後で細分することは難しいが、実際には集骨を行っていた前 1 世紀初頭～中頃とオシュアリが出現した前 1 世紀末にその傾向は区分されることが推測される。1 世紀と同様の傾向を示すロクリ墓は、おそらく前 1 世紀末のオシュアリ出現後に作られた墓であると考えられる。

このような母室の変化がある一方で、ロクリについては利用期間を通して変化していないといえる。前 2 世紀から 1 世紀にかけて、最も標準的なⅠa、幅広型の中で最も単純なⅡa、小型のⅢが同様の割合で利用され続けているのである。前述のように、ロクリは周辺地域からエルサレムに取り入れられる段階でその機能と形態を変化させており、既に前 2 世紀の段階で再埋葬に適したものとなっている。Ⅰa とⅡa は一次埋葬と二次埋葬の両方を行うことができ、Ⅱa はより多くの埋葬を行うことが可能である。Ⅲは二次埋葬に限定された形態であり、Ⅰa とⅡa を補うことが可能である。母室の変化は埋葬方法の変化に起因するものであることを述べてきたが、再埋葬に適したロクリは集骨とオシュアリのどちらにも有用であり、埋葬方法が変化したことで合わせて形態を変化させる必要はない。オシュアリの安置場所の増加という点は、幅広型のロクリで対応することが可能であり、被葬者が多い一族の墓ではアルコソリアが補っていた可能性が高いであろう。また、1 世紀にかけて埋葬空間をさらに拡張するような b 類、c 類、d 類がわずかに増加するが、その利用は限定的であったことが分かる。これらのタイプは母室やアルコソリアなどの補助構造で必要な機能が果たせなかった際に作られるような特殊なタイプであると推測される。ユダヤ人のロクリ墓におけるロクリの形態と機能は前２世紀の段階で確立していると考えられる。

冒頭でも述べたように、エルサレムの陥落によって、エルサレムにおけるオシュアリの利用は、集骨よりも遥かに短い期間となっており、ロクリ墓の形態はオシュアリに完全に最適化されているとは考え難い。1 世紀に入ってもピットのある母室がある程度利用されていることからも、オシュアリに向けた変化が完了したのではなく、1 世紀はユダヤ人の埋葬が変化していく過渡期であったことが伺える。

本章 4 節と 5 節で述べたように、前 2 世紀のロクリ墓は鉄器時代Ⅱ期の埋葬を意識的に採用すると共に、ヘレニズムの影響で母室の壁に複数のロクリを設ける構造を取り入れ、再埋葬に適した独自の形態・機能を持つものへと変化させた墓であった。前 2 世紀に成立したこのユダヤ人の方形ロクリ墓は、本節で明らかになったように前 1 世紀に利用が増加しており、エルサレムのユダヤ人に広く受け入れられていたことが伺える。前 1 世紀末から生じたと考えられる埋葬方法、墓形態の変化に関しても、再埋葬という枠組みから外れておらず、母室の壁に複数のロクリを設ける構造がユダヤ人の再埋葬と結びついていること、ロクリが独自の形態・機能を持つことは同様であった。本章 4 節と 5 節では、母室の壁に複数のロクリを設ける構造がヘレニズム都市の遺体を埋葬するプロセスを含めて採用されたものではなく、再埋葬の改善・発展のために採用されたと述べたが、上記の傾向からも同様に、利用期間を通じてエルサレムのユダヤ人が家族を意識した再埋葬にロクリ墓を利用し続けていたといえるであろう。第二神殿時代後期のユダヤ人の埋葬は、母室の壁に複数のロクリを設ける構造という点でヘレニズムに影響を受けながらも、根幹となる「家族を意識した再埋葬」に対する影響は限られたものだったのである。

第 7 節　おわりに

本章では、エルサレムのユダヤ人が埋葬に関してどのようにヘレニズムと向き合ったのかについて検

討してきた。ヘレニズム時代におけるエルサレムとヘレニズム都市のロクリ墓の比較では、エルサレムの前 2 世紀のロクリ墓の墓形態と埋葬方法、埋葬プロセスに関して、ヘレニズムの影響が限られたものであることが明らかになった。前 2 世紀のエルサレムのロクリ墓は、地表の外部構造を服喪の空間として利用し、集骨に適した母室、ロクリによって家族埋葬を行う墓であり、ヘレニズム都市のロクリ墓とは異なっていた。新しい構造であるロクリは、アレキサンドリアやマレシャのロクリ墓における遺体を埋葬するプロセスを含めて採用されたものではなく、形態の借用もしくは模倣に過ぎないと考えられる。

次に、エルサレムにおける初期ロクリ墓とベンチ墓の比較では、ロクリ墓とベンチ墓には、ピットのある母室、特にコの字型の母室と埋葬プロセス、家族を意識した死生観という点で強い共通性がみられた。前 2 世紀のロクリ墓のロクリは集骨に適した独自の変化を遂げており、このような集骨のための子室はベンチ墓にもリポジトリとして一定数確認された。このことから、ユダヤ人は母室の壁に複数のロクリを設ける構造に影響を受けて、リポジトリを母室の 3 辺に配置するように変化させ、且つ一次埋葬と二次埋葬の両方を行うことができるようにしたことで、集骨による埋葬をより円滑に行えるように改善したと考えられる。

最後に、エルサレムにおけるロクリ墓の変遷を検討したことによって、前 1 世紀末から 1 世紀にかけてユダヤ人の埋葬に大きな変化が生じていることが明らかになった。主な埋葬方法は集骨からオシュアリへと変わり、コの字型の母室は平坦型の母室へと変化していった。オシュアリの採用に伴い、前 1 世紀末以降の母室は埋葬空間としての機能が薄まり、オシュアリの安置場所としてピット構造を失っていったと考えられる。オシュアリはエルサレムで独自に利用されるようになった埋葬方法であり、埋葬プロセスと埋葬空間という点で、個人の遺骨や納骨容器が 1 つのロクリという独立した空間に安置され、個人が明確に区別されるヘレニズム都市の埋葬習慣とは異なっている。ユダヤ人の家族を意識した埋葬に個人が表面化してきたことは事実であるが、考古資料・文献史料から復活信仰やヘレニズムの思想の影響にその要因を求めることは難しい。オシュアリの採用に関しては、ユダヤ人の再埋葬の発展として捉えるべきであろう。

以上の考察から次の結論を引き出すことができる。第一に、第二神殿時代を通して、エルサレムのユダヤ人の埋葬は、家族を意識したものであったことが挙げられる。家族が埋葬空間を共にする再埋葬という埋葬方法は、前 1 世紀末に変化を生じさせながらも鉄器時代Ⅱ期から第二神殿時代の終わりまで継続していたため、家族を重視していることはユダヤ人の埋葬の特徴と考えても良いだろう。第二に、ヘレニズムという異文化に直面したことで、様々な選択肢が生じていたにも関わらず、エルサレムのユダヤ人はベンチ墓における埋葬を伝統とみなし、伝統的な墓形態と埋葬習慣を採用したことである。ヘレニズムに影響を受け、物質文化や思想など様々なものが変化していく中で、埋葬習慣に関して伝統的な要素を採用していることは、埋葬がユダヤ人にとってユダヤ教の習慣と同様に、自らのアイデンティティを形成する重要な要素であったといえるだろう。

本章で示すことができた「ユダヤ人の埋葬の家族性」、「鉄器時代Ⅱ期の埋葬との共通性」はあくまでエルサレムに限ったものであり、ユダヤ地域における埋葬のヘレニズム化については、地域全体の墓の分布状況を明らかにし検討する必要がある。本章での分析を通して、ユダヤ人の埋葬におけるヘレニズムに対する相剋を捉える枠組みを作ることができたため、次章ではエルサレムの傾向を基礎としながら、ユダヤ地域を含めた東地中海岸南部地域の分布状況を検討する。

第 3 章　パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布
―ユダヤ・サマリア地域間の事例から

第 3 章　パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布
―ユダヤ・サマリア地域間の事例から

第 1 節　はじめに

ヘレニズム化は、エルサレムに限らず東地中海岸南部地域全体で起こった現象であり、前章で示したユダヤ人の墓形態と家族的な埋葬習慣の継続は、あくまで一つの都市におけるユダヤイズムとヘレニズムの相克の一例である。エルサレム以外の都市や町、集落でも埋葬は行われており、ユダヤ人とヘレニズムとの関係を考えるためには、ユダヤ人の居住域全体における埋葬の傾向を確認する必要がある。

加えて、第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域では多様な人々が居住し、それぞれの習慣に基づいて埋葬を行っていた。マレシャやアレキサンドリアは主たる比較対象ではあるが、ユダヤ人と周辺地域の埋葬の関係を検討するためには、ユダヤ地域以外のイドマヤ地域やサマリア地域における埋葬を把握する必要があるだろう。総じて、ユダヤイズムとヘレニズムの相克をさらに考えるためには、東地中海岸南部地域全体における埋葬を通時的に確認していく必要があるといえる。よって、本章と次章では、前章で示されるエルサレムにおける傾向を基礎として、第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における墓の分布状況、墓の種類、埋葬方法を把握し、東地中海岸南部地域における多様な埋葬にユダヤ人の居住域における埋葬を位置付けることで、ユダヤ人の埋葬のヘレニズム化を考察する。

東地中海岸南部地域における墓の分布状況に関しては、これまでにほとんど研究されていない。ハクリリがいくつかの墓地をエルサレム以外にも紹介しているが（Hachlili 2005, 11-27）、ユダヤ人の埋葬に関する議論はエルサレムとエリコを中心としたものに留まっている。クムランやエン・ゲディなどの死海沿岸の墓地が議論に加わることもあるが、ユダヤ地域ひいては東地中海岸南部地域全体に目を向けた研究は行われていないと考えてよいだろう。エルサレムやエリコについても、2000 年代に入ってはじめて莫大な調査成果にもとづく総合的な研究（Hachlili 2005, Kloner and Zissu 2007）が出版されたこともあり、ユダヤ人の埋葬に関する研究はまだ分布を検討する段階まで至っていないといえる。

加えて、現パレスチナ自治区の情報の不足も分布に関する研究が進んでいない大きな要因の一つであろう。詳細は後述するが、イスラエルと比べてパレスチナ自治区は政治的状況から情報に乏しく、パレスチナ自治区における墓の分布状況は、どの時代でもイスラエル以上に明らかでない。パレスチナ自治区では、分布状況のみならず墓がどのように調査・管理されているのか、どの程度の情報が把握されているのかということ自体も不明瞭な状況である。イスラエルとパレスチナ自治区には、情報量や考古学的調査の精度の違いがあることは明らかであり、これを検討せずひとまとめに研究を進めていくことには問題があるといえるだろう。よって、第 3 章ではイスラエルとパレスチナ自治区を区別して考え、現在のパレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布の一端を明らかにする。その際には、まず、パレスチナ観光・遺跡庁に聞き取り調査を行い、墓の調査・管理状況を把握する。次いで、第二神殿時代後期のパレスチナ自治区の墓に関する資料調査を行うとともに、パレスチナ自治区において考古学的踏査を行い、第二神殿時代後期の墓に関する情報を収集する。この章で得られた情報を次章でイスラエルの情報と合わせて考えることで、最終的に東地中海岸南部地域におけるユダヤ人の埋葬のヘレニズム化を検討する。

第 2 節　パレスチナ自治区における文化財管理―墓地の事例から

1　パレスチナ自治区における考古学的調査の状況

ヨルダン川西岸及びガザ地区は、1967 年の第 3 次中東戦争でイスラエルの占領下に入った。1993 年のオスロ合意後にはパレスチナ自治政府による一定の自治が認められたが、パレスチナ自治区では現在もイスラエルによる実効的な支配が続いている地域が多い。パレスチナ自治区はエリア A、B、C に区分され、それぞれ統制の在り方が異なっている（図 44）。エリア A は、パレスチナ自治政府が安全保障と文民統制を管轄している地区であり、パレスチナ自治区の中心的な都市であるラマッラーや人口の多い町であるベツレヘムやエリコ、ナブルスなどが該当する。エリア B はパレスチナ自治政府が文民統制のみを行う地区で、ヘブロンやエリア A の周辺の小規模な町や集落がこれに当てはまる。これら 2 つの地区よりも範囲が広い地区がエリア C である。エリア C はイスラエル軍が安全保障及び文民統制両方を管轄している地区であり、エリア A と B を分断するように設けられている。エリア C にはイスラエルの入植地が作られ、パレスチナ人の村と入植地が隣り合っていることも少なくない。イスラエルとパレスチナ自治区の境には多数の検問所や監視塔（図 45）が設けられ、これらはエリア A、B 同士を繋ぐ道にも設置されている。イスラエルは入植戦略を今も推し進めており、これらの区分は流動的であるといえるであろう。

このような状況から、文化財に関してもパレスチナ自治政府がパレスチナ自治区全体を管理しているわけではない。オスロ合意後、パレスチナ自治政府は、約 2000 の遺跡、10000 の地形、60000 以上の古代建築物からなる地域を自治することになったが（Abahre 2021, 3）、エリア C に関してはイスラエルの所管である。また、パレスチナ観光・遺跡庁職員によれば、エリア A や B であってもイスラエル側が強硬的な発掘調査・踏査を行う場合もあり、文化財に関しても二国間の係争の対象になっているといえるであろう。イスラエルとパレスチナ自治区では、文化遺産は密接に観光と結びついており、遺跡の帰属は重要な政治問題の一つである。

前述のように、パレスチナ自治政府が文化財の管理を行うようになったのは近年になってからであり、ユネスコに加盟し世界遺産条約を批准したのは 2011 年である。パレスチナ自治区の文化財管理は始まったばかりといえるが、それ以前にパレスチナ自治区の遺跡が全く調査されていないわけではない。1961 年からイスラエル古代博物館局（Israel Department of Antiquities and Museums）、1990 年からイスラエル考古局（Israel Antiquities Authority）によって出版・公開されている *Hadashot Arkheologiyot – Excavations and Surveys in Israel*（*HA-ESI*）[36]に掲載されている発掘調査・踏査の報告は、パレスチナ自治政府による管理以前のパレスチナ自治区の情報を多数含んでいる。*Israel Exploration Journal*、*Palestine Exploration Quarterly*、*'Atiqot*、*IAA report* などの学術雑誌においてもパレスチナ自治区の情報は確認されている。悉皆的になされているわけではないが、パレスチナ自治政府による管理以前は、イスラエル側の調査・記録が行われているのである。また、過去にはパレスチナ探査基金によってイスラエル・パレスチナ自治区の大規模な踏査（Conder and Kitchener 1881-1883）が行われており、加えて、欧米の研究者によって多数の発掘調査がなされている。

[36] https://www.hadashot-esi.org.il/default_eng.aspx

図 44. パレスチナ自治区の区分

（https://kiaoragaza.wordpress.com/2018/11/23/whos-next/　参照：2021 年 8 月 21 日）

図 45. 監視塔，ベイティン近郊

パレスチナ自治政府が文化財の管理を行うようになった後は、それ以前と比べて情報が少ない。パレスチナ自治政府の文化財管理を担うパレスチナ観光・遺跡庁には、定期的に独自の雑誌や報告書を刊行する体制はなく、エリコ（Taha et al. 2012）やテル・バラータ（Taha and Kooij 2014）のように遺跡公園化が行われるような大規模な遺跡は書籍化がなされているが、小規模な調査の成果はパレスチナ観光・遺跡庁の職員やパレスチナ自治区の研究者によって、その一部が海外の学術雑誌に部分的に報告がなされているのみである。また、慶應義塾大学の調査隊とパレスチナ観光・遺跡庁で共同調査が行われたベイティン遺跡（杉本 2016）のように、海外調査隊と共同で学術調査が行われた遺跡は、その調査隊が所属する大学や研究機関で報告書や中間報告が刊行される場合がある。パレスチナ自治区側からの報告に加えて、パレスチナ自治政府が文化財の管理を行うようになった以降もイスラエルによって遺跡の調査はなされている。イスラエルの所管であるエリア C では、エン・ゲディ（Hadas et al. 1994）やクムラン（Avni 2013）などイスラエルによって調査・報告がなされている遺跡が多くみられる。また、エリア A、B も含めた広

範囲の踏査と部分的な発掘調査も行われている（Magen 2008）。

このように、パレスチナ自治区における遺跡の情報は全く未解明とはいえないが、十分な情報量があるとは言い難い。まず、これらの考古学的調査では、踏査の割合が高いことが問題点として挙げられる。踏査の場合、どの場所にどのような遺跡があるのかということは読み取ることができても、年代が明らかでないことが大半である。図面やスケッチがない場合も多く、例えば「墓がある」という記述のように一文で遺構の存在を示しているだけの報告も多々見られる。また、パレスチナ自治区の遺跡に関する考古学的情報がイスラエルと比べて少ないことも問題である。イスラエルの場合はイスラエル考古局のような政府機関や大学による過去の踏査の検証と発掘調査・報告が行われているが、パレスチナ自治区では、パレスチナ観光・遺跡庁が遺跡の調査・管理を行っているが、その情報はほとんど報告されていないため、海外の研究者は限られた情報しか得ることができない状況である。パレスチナ観光・遺跡庁による調査報告が非常に少ないため、パレスチナ自治区の遺跡に関する情報の大部分は、過去の踏査と発掘調査に依存しているといえる。加えて、パレスチナ観光・遺跡庁がどのように遺跡を調査・管理し、どの程度の情報を把握しているのかということも明らかでない。

墓の遺構に関してはさらに状況が悪いといえる。テル型遺跡や教会堂、シナゴーグ、十字軍時代の見張り塔などが踏査・発掘報告の主な対象であるが、墓や住居などの遺構は積極的に調査されているとは言い難いからである。加えて、この地域では同じタイプの墓が複数の時代に渡って利用されている場合が多く、出土遺物の情報がなければ年代の概観を把握することもできない。そのため、踏査から読み取れる情報は、他の遺構と比べて少ないといえるだろう。

このように、イスラエルとパレスチナ自治区では調査量・報告量に違いがあることは明らかである。過去の調査報告に基づいて墓の分布を検討することは可能かもしれないが、その場合、分布の空白に関する評価は、パレスチナ自治区の現在の調査・報告状況の影響を強く受けることが想定される。特にラマッラーとナブルスの間の山地はエリア A、B が主体の地域であり、イスラエル側の発掘調査・報告が少なく、分布の空白が生じる可能性が最も高いと考えられる。これを解決するためには、パレスチナ観光・遺跡庁に赴き、パレスチナ自治区の墓の調査・管理状況を把握し、未報告資料を確認する必要があるだろう。その結果として、考古学的にパレスチナ自治区における墓の分布を十分に検討できない状況であったとしても、現在のパレスチナ自治区の状況を考慮した議論が分布に関して可能になるといえる。よって、次項では、2018 年と 2019 年に行ったパレスチナ観光・遺跡庁における聞き取り調査、パレスチナ自治区における考古学的踏査による情報をもとに、パレスチナ観光・遺跡庁による墓の調査・管理状況について述べる。

2　パレスチナ観光・遺跡庁による墓の調査・管理状況

本項では、2018 年 8 月 12 日から 8 月 20 日に行ったパレスチナ観光・遺跡庁における聞き取り調査、パレスチナ自治区における考古学的踏査の予備調査、2019 年 7 月 30 日から 8 月 25 日に行ったパレスチナ観光・遺跡庁における聞き取り調査、パレスチナ自治区における考古学的踏査による情報をもとに、パレスチナ観光・遺跡庁による墓の調査・管理状況について述べる。なお、パレスチナ自治区における考古学的踏査に関しては次節で詳細に述べる。

2018 年、2019 年に行った聞き取り調査に際しては、ジハド・ヤシン氏（Jihad Yasin）（パレスチナ観光・遺跡庁長官）、アウニー・シャワムラ氏（Awni Shawamra）（同庁職員）、スフィヤン・イダイス氏（Sufyan Idais）（同庁職員）、サラ・アル・フーダリエ氏（Salah Al-Houdalieh）（アル・クドス大学教員）に話を伺い、アウニー氏には考古学的踏査を含め調査全体に協力して頂いた。聞き取りを行った項目は以下の通りである。①ヘレニズム時代からローマ時代にかけての墓に関して、パレスチナ観光・遺跡庁ではどの程度の情報を把握しているか、また把握している情報は何に基づいているのか、②どのように墓に関して調査（発掘調査・踏査）が行われているか、また、どの程度の頻度で行われているか、③発掘調査が行われ、かつ報告がなされていない未報告の墓はどの程度あるのか。これらの項目に沿って、パレスチナ観光・遺跡庁による墓の調査・管理状況を説明する。なお、情報の大部分はパレスチナ観光・遺跡庁の職員によるものであるため、特別な場合を除いて情報元の個人については併記しない。

まず、①ヘレニズム時代からローマ時代の墓に関して、パレスチナ観光・遺跡庁ではどの程度の情報を把握しているか、またそれは何に基づいているのかについて述べる。パレスチナ観光・遺跡庁は、遺跡の保存・活用のため、管轄する地域の遺跡の数や状態を確認するプロジェクトを進めている最中である。そのために、過去の踏査や発掘調査の情報をまとめたデータベースを作成しており、パレスチナ自治区全域における遺跡の性格と年代の概観はパレスチナ観光・遺跡庁によって把握されている。パレスチナ観光・遺跡庁よりデータベースの基礎となっているデータを頂いたが、パレスチナ観光・遺跡庁のデータベースに基づく遺跡の分布は、空間情報システムである Geomolg[37]上で一般公開されている。Geomolg は、パレスチナ地方自治体省（Ministry of Local Government）が地方自治体および市民社会開発プログラム（Local Governance and Civil Society Development Programme）を通じて、ドイツ国際協力公社（German International Cooperation）と協力して開発したパレスチナ自治区で最初の統合的空間情報システムである。高精細な空中写真を背景として、遺跡の位置や現在の土地区画、エリア A、B、C の境界線など様々な情報をレイヤー毎に重ね合わせて閲覧することが可能である。データベースや Geomolg など、踏査レベルの情報はパレスチナ観光・遺跡庁によって把握されていると考えてよいだろう。

パレスチナ観光・遺跡庁のデータベースには約 6000 遺跡の情報が記載されており、ヘレニズム時代からローマ時代の利用期間を含み墓を有する遺跡は、過去の調査で 94 遺跡確認されている。これらの過半数は踏査によって墓の存在だけが判明している遺跡であり、墓の年代が遺跡の利用期間のどの時代に属するかは不明である。前述のように、このデータベースをもとに、管轄する地域の遺跡の数や状態を確認するプロジェクトが進められており、墓に関してもパレスチナ観光・遺跡庁による発掘調査や踏査が行われている。しかし、アル・フーダリエが指摘しているように、経済的な困難さやパレスチナ自治区における古物法の執行の弱さなど様々な要因から、パレスチナ自治区の墓は盗掘者集団の主たる標的となっており（al-Houdalieh 2014, 95-96; al-Houdalieh et al. 2017, 198）、踏査以上の情報を得ることは難しい状況である。墓には副葬品があること、墓は地表に露出しており盗掘者による発見が容易であること、墓を盗掘する作業は遺跡に広く深い溝を掘るより容易であることなど様々な要因から、墓は他の遺跡より盗掘者に狙われやすいようである（al-Houdalieh　2014, 96）。盗掘者集団による遺跡の破壊（図 46）は、墓に限らず前世紀の半ばから始まっており、テルの文化層、地下の岩窟住居、貯水池、様々な時代の石切墓、さらにはイスラム教の聖人の墓など、手の届く範囲のあらゆるものが破壊されてきた。このような行為

[37] https://geomolg.ps/L5/index.html?viewer=A3.V1。なお、個別の遺跡の情報、例えばどの時代のどのような遺構が存在するのかといった情報は Geomolg 上には記載されていない。

図 46. 重機によって破壊された市壁（右上部），テル・エン・ナスベ

により、多くの歴史的・考古学的遺跡が破壊され、何十万もの遺産が本来の文化的文脈から切り離され略奪されている（al-Houdalieh 2014, 95）。盗掘の被害は甚大であり、過去の調査をもとにパレスチナ観光・遺跡庁によって行われた発掘調査や踏査の結果、ほとんどの墓が盗掘の被害を受けていることが明らかとなっている。例えば、アル・フーダリエが行ったラマッラー西部地域における踏査では、400 基以上の墓が盗掘者によって破壊・略奪されていることが判明している（al-Houdalieh 2014, 104）。

盗掘によって、パレスチナ自治区の墓の大半は遺物がない、もしくは極めて少ない状態であり、パレスチナ観光・遺跡庁もおおよその墓の年代しか同定できない状況である。盗掘されている墓であっても、型式を判別可能な土器片が残存していれば墓の年代を同定できるが、そのような墓は限られている。パレスチナ観光・遺跡庁によれば、個々の墓がどの時代に利用されていたのか正確に判断することは困難であり、パレスチナ自治区の墓を時代毎に区別することも難しいようである。一方で、時代毎のおおよその傾向は明らかになっている。ジハド・ヤシン氏とサラ・アル・フーダリエ氏によれば、ヘレニズム時代の墓は極めて少なく、ローマ時代～ビザンツ時代の墓がパレスチナ自治区では最も多いという。アル・フーダリエが行ったラマッラー西部地域における踏査で確認された 400 基以上の墓は、土器片の情報とアルコソリア構造を持つことによって、約 95%がローマ・ビザンツ時代の墓であることが分かっている（al-Houdalieh 2014, 104）。また、発掘調査が行われているビリンやサッファ（al-Houdalieh et al. 2017）（図 47）、アタラ（Taha 2003）、ラマン（Taha 1998）の墓は、いずれもローマ時代からビザンツ時代の墓である。正確な年代が発掘調査によって明らかである墓は少ないが、これらの情報からパレスチナ自治区ではローマ時代以降の墓が多い傾向がある可能性は高いであろう。

次いで、②墓に関してどのような調査（発掘調査・踏査）が行われているか、また、どの程度の頻度で行われているかについて述べていく。パレスチナ観光・遺跡庁によれば、墓の発掘だけを目的とした調査

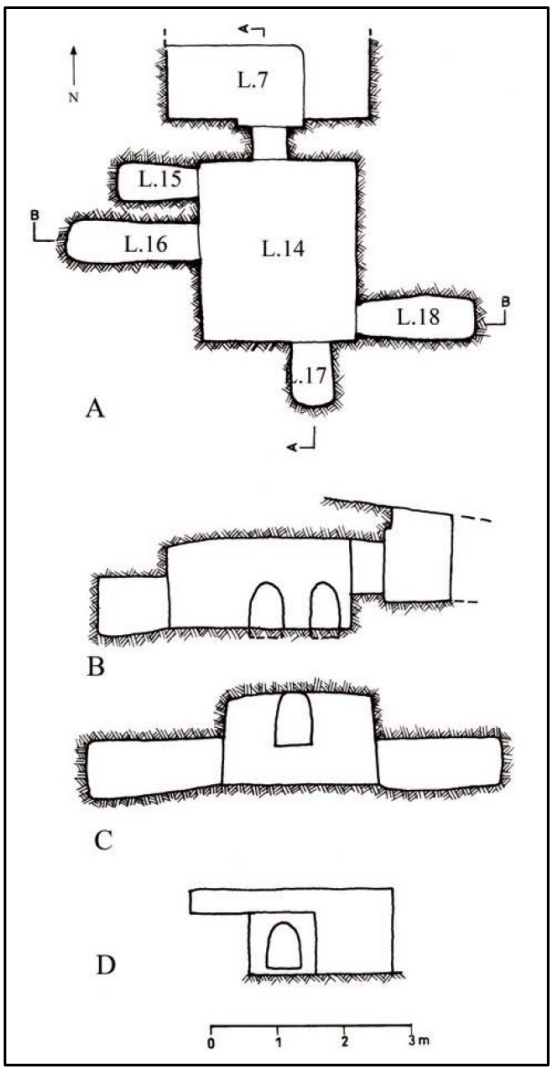


図 47. ビリンの墓

（al-Houdalieh et al. 2017, Fig.14）

はほとんど行われていないという。イスラエルでは墓地の様相を解明するために、墓地の発掘を主な目的とした調査が多数行われているが、パレスチナ自治区では、墓は発掘調査の主な対象になっていないのである。パレスチナ観光・遺跡庁による墓に関する調査は、二種類に区別される。一つは、学術調査に伴う墓の発掘調査・踏査である。パレスチナ自治区における学術調査は、テル型遺跡や教会堂などを主な対象としたものであり、その調査に際して遺跡の全容解明の一助として行われる墓地の調査がこれに該当する。フランス隊によるタイベの教会の発掘調査に伴う墓の発掘調査[38]、慶應義塾大学調査隊によるベイティン遺跡の発掘に伴うワディ・タワヒーンの墓地の発掘調査・踏査（杉本他 2015）などがある。このような調査は頻繁に行われるわけではないが、基本的に発掘報告や中間報告が調査後に刊行されるため、有用な情報だといえる。

二つ目は、墓の救出調査（salvage excavation）である。これはさらに 3 つに区分される。一つは、土地開発に伴う墓の発掘調査である。United States Agency for International Development（USAID）や独立行政法人国際協力機構（JICA）の支援による道路工事や一般的な建造物の建築が行われる際に、パレスチナ観光・遺跡庁が届け出を受け発掘調査を行う。パレスチナ自治区の人々の文化財に対する意識の問題もあり、届け出が行われず墓が破壊されてしまう場合も多いようである。二つ目は、過去の踏査・発掘調査により確認されている遺跡の再調査に伴う墓の調査である。パレスチナ自治区の墓を含めた遺跡は常に盗掘の危険性にさらされており、それらの現在の状況を確認し記録・保存することは急務であるといえる。また、過去の踏査情報が曖昧で、遺跡の正確な場所や数も分からない場合が多く、パレスチナ観光・遺跡庁が遺跡を管理していくためにも必要な調査である。再調査は貯水槽や生産施設、見張り塔など遺跡全体に対して行われるため、墓は主な対象ではない。過去の踏査に比べると詳細な調査ではあるが、踏査が多く、発掘調査まで行われる場合は少ない。三つ目は、盗掘を受けたことによる墓の調査である。墓地が位置する村や町からの通報や再調査の際に盗掘の痕跡が発見されることで行われる。盗掘の被害を確認・記録する踏査、盗掘者によって開けられてしまった墓の発掘調査などが行われ、盗掘の多さからこの調査が墓に関しては最も頻繁に行われているといえる。学術調査に伴う墓の発掘調査・踏査に対して、パレスチナ観光・遺跡庁による墓の救出調査の成果は、前項で述べたように、ほとんど外部に向けて報告されていない。つまり、パレスチナ観光・遺跡庁は未報告

[38] スフィヤン・イダイス氏より、未報告の French Archaeological Mission of el-Khadr Preliminary Report-Taybeh 2016 を提供して頂いた。

の資料を持っているということになる。

最後に、③発掘調査が行われ、かつ報告がなされていない未報告の墓はどの程度あるのかについて述べる。②で明らかになったように、墓の救出調査に関しては、発掘調査が行われているが報告されていない未報告の墓が多量に存在する。未報告であるというだけで、出土遺物や遺構図面、写真などの情報は保管されているはずであり、これらが活用できればパレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布をより詳細に検討することが可能になるだろう。しかし、未報告の墓を取り扱うことは、現在のパレスチナ観光・遺跡庁の管理体制の問題から困難であることが明らかになった。パレスチナ観光・遺跡庁の庁舎移転に際して、パレスチナ観光・遺跡庁が管理する遺物や図面が混ざってしまっており未整理であることがその最たる要因である。ある特定の墓に関する情報を探し出すことは困難な状況であり、筆者が行った調査時（2018 年・2019 年）はまだ整理作業の途中であった。今後、整理作業が進めば未報告の資料を活用することは可能であるかもしれないが、本論でこれらの資料を用いることは不可能である。加えて、未報告の墓に関しては図面が取られていないものも多いため、未報告の墓を活用するためには、その墓の実測作業を新たに行う必要があるであろう。

これらの聞き取り調査によって、パレスチナ観光・遺跡庁による墓の調査・管理状況を把握することができた。パレスチナ自治区では墓に関する様々な調査が行われており、多くの墓が分布することが分かっている。盗掘の影響で年代不明である墓が多いが、一部の墓は発掘調査・報告が行われ、踏査の結果から時代毎の傾向の概観が把握されている。墓の救出調査は頻繁に行われており、未報告の墓は多数存在するが、パレスチナ観光・遺跡庁の管理体制の問題から現在それらを活用することは難しい状況であった。総じて、パレスチナ観光・遺跡庁から現在得られる情報を加えたとしても、パレスチナ自治区における墓の分布、特にラマッラーとナブルスの間に位置するエリア A、B が主体の地域の分布は不明瞭なままであり、この状況を即座に改善することは困難だといえるであろう。

この状況を解決するためには、発掘調査とその成果の整理・報告を行うことが最適だと考えられるが、それ以前に踏査の情報も未だ不十分だといえる。パレスチナ観光・遺跡庁による再調査が現在進行中のプロジェクトであることも一因ではあるが、過去の踏査、パレスチナ観光・遺跡庁の踏査のいずれも墓の図面や地理的な情報を欠いており、墓の存在のみを示しているものが大半であるため、具体的な情報が示されていないのである。踏査レベルの情報であっても、墓の実測と遺物の表採や地理的検討などを加えることで、現在の不明瞭な状況の一端を改善することが可能だと思われる。よって、本論ではパレスチナ自治区、特にユダヤ地域―サマリア地域間の考古学的踏査を行うことで、パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布の一端を検討する。

第 3 節　パレスチナ自治区の墓に関する考古学的踏査

1　調査目的・調査方法

本研究では、2018 年 8 月 12 日から 8 月 20 日にパレスチナ自治区における考古学的踏査の予備調査、2019 年 7 月 30 日から 8 月 25 日にパレスチナ自治区における考古学的踏査をパレスチナ観光・遺跡庁と

共同で行った。2020 年にはさらなる踏査とラマッラー近郊における発掘調査を予定していたが、新型コロナウィルスの蔓延により中止された。考古学的踏査に際しては、ジハド・ヤシン氏（パレスチナ観光・遺跡庁長官）に考古学的踏査の許可を頂き、アウニー・シャワムラ氏（同省職員）とムハンマド・アルセイク氏（Mohammad Alseikh）（同省職員）と共同で行った。一部の踏査に関しては、スフィヤン・イダイス氏（同省職員）とフィラス・アケル氏（Firas Aqel）（同省職員）、シャフィーク・シャバネ氏（ShafeeqShabaneh）（同省職員）、ムハンマド・ジャラダット氏（Mohammad Jaradat）（同省職員）、カフル・アカブ市当局、藤田隆太郎氏（慶應義塾大学・修士課程）に協力して頂いた。

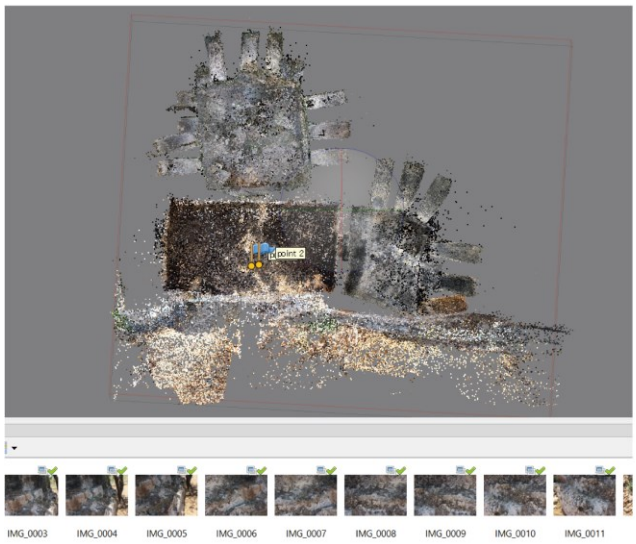
2018 年の調査は、前節で述べたパレスチナ観光・遺跡庁による墓の調査・管理状況の把握とパレスチナ自治区における考古学的踏査に際しての調査方法の検討を目的として行った。2019 年の考古学的踏査は主として、ユダヤ地域―サマリア地域間の大規模な墓地と小規模な墓地の墓の形態、大まかな年代を明らかにすることを目的として行った。聞き取り調査で明らかになったように、パレスチナ観光・遺跡庁は墓地の位置や規模を把握しているが、遺構図面が取られていない場合が多く、ほとんどの墓で位置や規模の確認以上の調査は行われていない。また、多くの墓が年代の概略すら分からない状態である。そのため、踏査に際して第二神殿時代後期に時代を絞ることは難しい状況であった。よって、2019 年の考古学的踏査では、ユダヤ地域―サマリア地域間で大規模な墓地として知られている 4 遺跡のうち 2 遺跡、墓地の存在のみ明らかになっている小規模な墓地のうち 2 遺跡、エルサレム周辺の大規模な墓地のうち 1 遺跡を対象に、これらの墓地の墓形態と年代の概略をまず明らかにすることを主な目的とした。

次に、調査手順と調査方法について述べる。調査の対象となる遺跡は、治安の悪い地域かエリア C かつイスラエルの入植地の近郊のいずれかに位置しており、調査に際しては安全面に気を付ける必要があった。盗掘者集団と鉢合わせ投石などで襲われる事件も起こっており、イスラエルの入植地の人間と遭遇しトラブルが生じることもあるため、安全の確保はパレスチナ自治区における調査の前提であるといえる。そのため、調査に際しては、墓地のある地域の市当局に調査を行う旨を説明し、調査の際もパレスチナ観光・遺跡庁の職員と共に行った。これは安全の確保と同時に、こちら側が盗掘者と間違われ通報されることを防ぐためでもある。テル・エン・ナスベの踏査の際には実際に盗掘者と遭遇し、パレスチナ観光・遺跡庁職員と共に通報を行い、警察による逮捕に立ち会った。このような事件は常態的に起こっているようであり、今後調査を行う際にも注意する必要があるであろう。

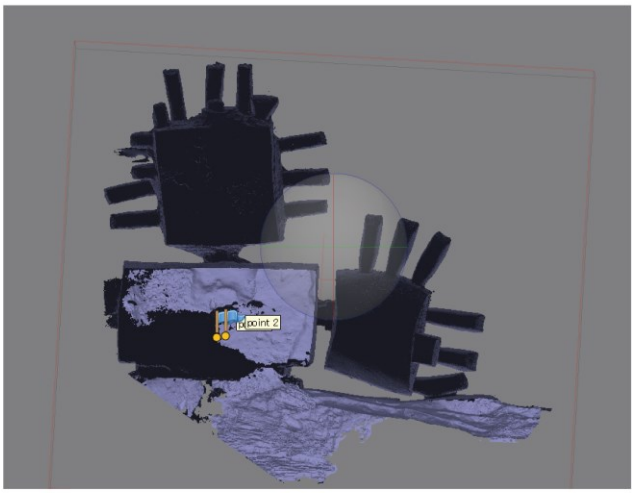
準備が完了した後は、パレスチナ観光・遺跡庁の職員と共に現地調査に向かった。パレスチナ観光・遺跡庁の本庁はラマッラーに置かれており、筆者もラマッラーを調査拠点にしていた。このラマッラーを出発地点として、まず墓地のある町に向かい、町の遺跡を巡検した後に墓地に向かうという行程を取った。墓のみならず他の遺跡も調査報告がされていない場合が多く、当時は町と墓地は離れた場所にあったため、被葬者が居住していた町と墓地の位置関係を確認する必要があったことから、一度町を経由する行程をパレスチナ観光・遺跡庁の職員にお願いした形になる。墓の正確な位置が明らかである場合、墓地の存在のみ明らかになっている場合共に、到着後は墓の踏査をまず行った。前述のように、安全面の理由から、長期間墓地に留まることはパレスチナ観光・遺跡庁の職員が同伴しているとはいえ難しく、調査時間は限られたものであった。踏査の規模によっては日を改めて二日かけて行う場合もあった。踏査の際は、墓の位置情報は GPS / GLONASS ウォッチである Suunto Traverse Alpha を用いて記録し、他の遺構についても同様に行った。踏査が完了した後は、状態が良い墓から記録作業を行った。

①墓のファサードの写真撮影及びスケールの設置

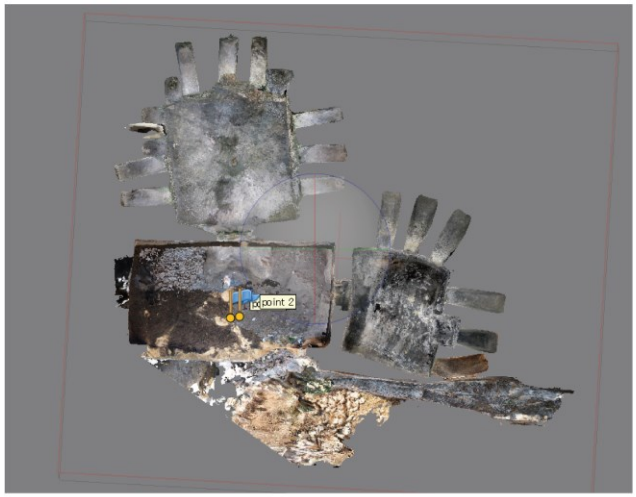
②墓の内部の写真撮影 (平均：700 ～ 900 枚)
ファサードと墓の内部を繋げたモデルを作るため、 共有する
入口部分を重複させて撮影



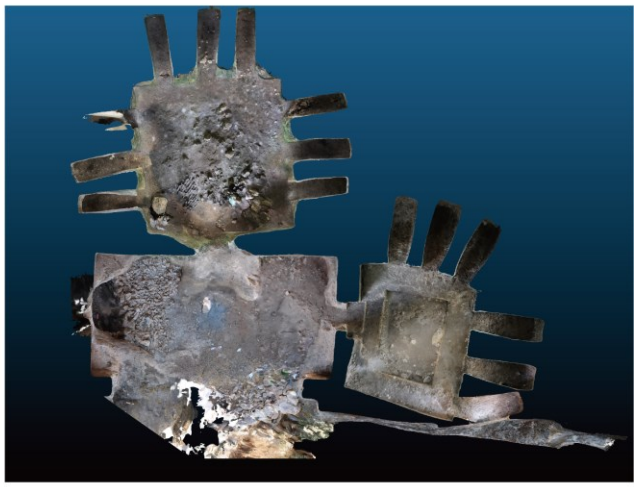
③撮影写真より、 ポイントクラウドと高密度クラウドを生成



④メッシュの生成



⑤テクスチャの生成



⑥３Ｄモデルをスライスし、 平面図・断面図のための画像を作成

図 48. 墓の図面作成までの手順, アブードの事例から

記録作業に際しては、手取りの図面ではなく、SfM（Structure from Motion）ソフトウェアである Metashape を用いて墓の 3Dモデルを作成し図化する方法（図 48）を選択した。3D化を選択した理由は、時間の短縮と共に、墓の情報をより正確且つ多量に日本に持ち帰るためである。SfM ソフトウェアは、バンドル調整法を利用して、異なる写真のピクセルマッチング（サブピクセルマッチング）を行い、重複する部分の位置情報を計算し、3 次元の情報を持つ点群（ポイントクラウド、高密度クラウド）を生成、それをもとに点群を繋いでメッシュ（モデルの形）を生成し、テクスチャを張り付けることで 3Dモデルの生成を行うものである。そのため、現場で行う作業は写真の撮影だけであり、手取りの図面と比べてかなり時間を短縮できる。図面として図化するために、方位を北に向け水平を取ったスケールをモデル内に含まれるように設置した。なお、時間が短縮されるとはいえ、全ての墓を 3D化することは調査内では難しかったため、3D化できなかった墓は写真撮影とコンベックスによる簡易的な測量のみを行った。

記録作業が終わった後は、土器の表採を行った。表採は墓内と墓の前部（墓のファサードの幅×2m）に区分して行い、口縁部や底部の区別なく可能な限り採集した。表採遺物はアウニー・シャワムラ氏の許可のもと日本に持ち帰り、器種や型式について検討した。調査の際に撮影した写真や作成した 3D データなどの情報は、パレスチナ観光・遺跡庁に全て提供している。本章で考古学的踏査を行った墓地は、ほとんどがエリア C かつイスラエルの入植地の近郊の墓地であり、パレスチナ観光・遺跡庁の職員も頻繁に赴くことはできない遺跡のようである。そのため、この調査で記録した情報は、パレスチナ観光・遺跡庁が進めている遺跡の再調査に資するものであり、本研究の目的とは直接関係はないが、パレスチナ自治区の文化財管理に貢献するという点でも有意義であろう。

このような一連の流れで、各遺跡に関してそれぞれ調査を行った。次項からは、各墓地の立地や周辺遺跡、墓の形態、大まかな年代についてそれぞれ述べる。

2　アブードの墓地

アブードは、ラマッラーからナブルスを結ぶルート 60 を約 9km 北進し、ルート 465 を約 22km 西進した山間部に位置する小さな町である。パレスチナ観光・遺跡庁の踏査では十字軍時代の塔やビザンツ時代の教会堂、オリーブプレス、石切場などが確認されており、ビザンツ時代の教会堂の一つであるアブディヤ教会は、パレスチナ観光・遺跡庁によって発掘調査（Taha 1997）が行われている。アブードの墓地（図 49）は、町から約 1km 西の谷を越えた丘に位置しており、墓地から町を望むことはできない。墓地から約 1km 北にはイスラエルの入植地であるギヴァット・ハブレハーが作られており、アブードの墓地はパレスチナ自治区の町とイスラエルの入植地の中間に位置しているといえる。このような位置関係から、アブードの町とその周辺と比較して、墓地に関してはパレスチナ観光・遺跡庁による調査はほとんど行われていない。パレスチナ観光・遺跡庁が墓地を発見した当初には、全ての墓が盗掘されている状態であり、遺物も細かな土器片を除いて存在しなかったようである。パレスチナ探査基金によって踏査が行われており（Conder and Kitchener 1881-1883, 361-364）、9 基の墓の情報とスケッチが掲載されているが、詳細な位置や分布については記載されていない。Tomb 1, 2 と 6 に関しては、イスラエルの研究者であるマゲンによって再度踏査・スケッチが行われている（Magen 2008）。

今回の踏査では 8 基のロクリ墓が確認された（図 49）。これらの墓の多くは石切場（図 50）の壁面に作

図 49. アブードの墓地の位置及び墓の分布（Mapbox、Geomolg より作成）

図 50. 墓地近辺の石切場

られており、石切場の年代は不明であるが、石切場として岩壁が利用された後に作られた可能性が高い。Tomb 3 や Tomb 4 が位置する岩壁の状況からは、石切場によって元来の地形がかなり改変されていることが読み取れる。元々の地形と石切場による段差を利用して 3 段に渡って墓が作られており、最下段はオリーブ畑を作るために破壊・埋め戻しが行われていたため、ほとんど残存していなかった。また、最上段は岩壁の突端部の限られた空間であり、中段が最も墓が作られていた空間である可能性が高いであろう。以下、各墓の情報について記載し、墓の年代や形態を検討する。

Tomb 1 と Tomb 2 は、建築装飾を持つファサードを共有するアブードの墓地で最も大規模な墓である。

ファサードはアンタ（付柱）[39]とフリーズ[40]によって装飾されており、フリーズは損傷が激しいが、中央部分に柱が付いていた形跡は見受けられない。フリーズはメトープとトリグラフ[41]に区別され、葡萄やロゼット、花輪などの装飾が施されている。ファサードの奥には玄関が設けられ、西には Tomb 1 の入口、南には Tomb 2 の入口が作られている。Tomb 2 の入口は装飾もなく粗く穴が開けられているだけであるが、Tomb 1 の入口は長方形に作られ、葡萄と幾何学模様によって構成された浮彫の枠が施されている。

Tomb 1 は、約 3m×3.5mのロの字型の母室[42]を持つロクリ墓である（図 51、図 52）。母室の天井はアーチ状であり、母室全体に漆喰が塗られ、フレスコによって装飾されている。フレスコは赤色と黒色の二色であり、ロクリの開口部の上部と側面を装飾している。北壁にはロクリが作られていないが、ロクリの開口部がフレスコとして描かれ同様に装飾がなされている（図 53）。フレスコによって装飾がされた墓は、エルサレムでは 1 世紀のアケルダマ（Avni and Greenhut 1996）や 5～6 世紀の「鳥の墓」（Kloner 2000）、マレシャ近くの 1 世紀のギヴァット・セレド（Kloner 1991）で確認されており、ローマ時代以降の特徴であると考えられる。母室の南壁・西壁には各 3 本ずつ標準型や幅広型のロクリが作られ、西壁のロクリの上部にはクアドロソリア[43]が設けられている。西壁のうち最も北に位置しているロクリは、岩壁に突き当たって穴を開けてしまっており、製作途中に内側に曲げて作られている。精巧な墓であるが、床面には一部崩れている箇所がみられ、石灰分が溶け出したことによってフレスコの一部は破損している。ピット内の残土から 7 点、Tomb 2 と共有する玄関からは 3 点の土器片を採集することができたが（図 54）、大半が胴部・把手の小さな破片であり、2 点の口縁部も型式が判別できるようなものではなかった。胎土からはローマ時代～ビザンツ時代の土器片である可能性が高いが、特定の時代に絞り込むことは難しい。クアドロソリアの存在とフレスコの装飾、表採土器から、Tomb 1 は 1 世紀以降のローマ時代～ビザンツ時代に利用されていた墓だと考えられる[44]。

Tomb 2 は、約 4.2m×3.8mの母室を持つロクリ墓である（図 51、図 52）。母室の床面には土や岩、壁面から染み出した水が溜まっており、正確な形態を判別することはできなかったが、一部露出していた部分から浅いピットが作られていることが明らかとなった。Tomb 1 と同様に壁面には漆喰が塗られているが、染み出した水によってほとんど破損している状態である。入口を除いた壁面には各 3 本ずつ標準型のロクリが作られ、東壁と南壁には上部に小型のロクリが作られている（図 55）。西壁には小型のロクリは作られていないが、同様の位置に掘削した跡があるため、おそらく掘削段階で作業が中止されたの

---

[39] 片蓋柱とも呼ばれる。構造上必要な柱ではなく装飾的に付けられる柱を指す。墓のファサードの場合は、ファサードの両端に付けられる柱がアンタとされる。

[40] 柱頭の上部に作られる水平に構築される部分はエンタブラチュアと呼ばれ、エンタブラチュアは下からアーキトレーブ、フリーズ、コーニスに区分される。

[41] 垂直方向に取り付けられた飾り板状の部分はトリグラフ、トリグラフの間はメトープと呼ばれる。メトープに装飾が施される場合が多い。

[42] パレスチナ探査基金による踏査（Conder and Kitchener 1882, 361-364）、マゲンによる踏査（Magen 2008）のいずれも Tomb 1 のピット構造について指摘しておらず、スケッチにも記載されていない。壁面のフレスコのスケッチが行われていることから、Tomb 1 の内部が埋まっていたわけではなく、おそらくスケッチや文章を記載する際に省かれてしまっていたのであろう。踏査の記載をみると、明らかにファサードや入口の装飾に重きが置かれ、墓内部の情報は軽視されていたことが伺える。これは Tomb 1 に限ったものではなく、アブードの Tomb 1 以外の墓や他の墓地でも同様の傾向がみられる。このような点からもパレスチナ自治区における踏査の情報を補う必要があるといえる。

[43] アルコソリアと同様の壁龕構造であり、開口部が広く且つ四角形であるものを指す。

[44] マゲンは Tomb 1 と Tomb 2 の母室の形態と建築装飾から、これらを第二神殿時代の墓であると同定しているが（Magen 2008, 143-146）、これまでの研究と本論の第 2 章の分析結果から考えると、墓の一般的な形態と建築装飾から年代決定を行うことは不可能である。

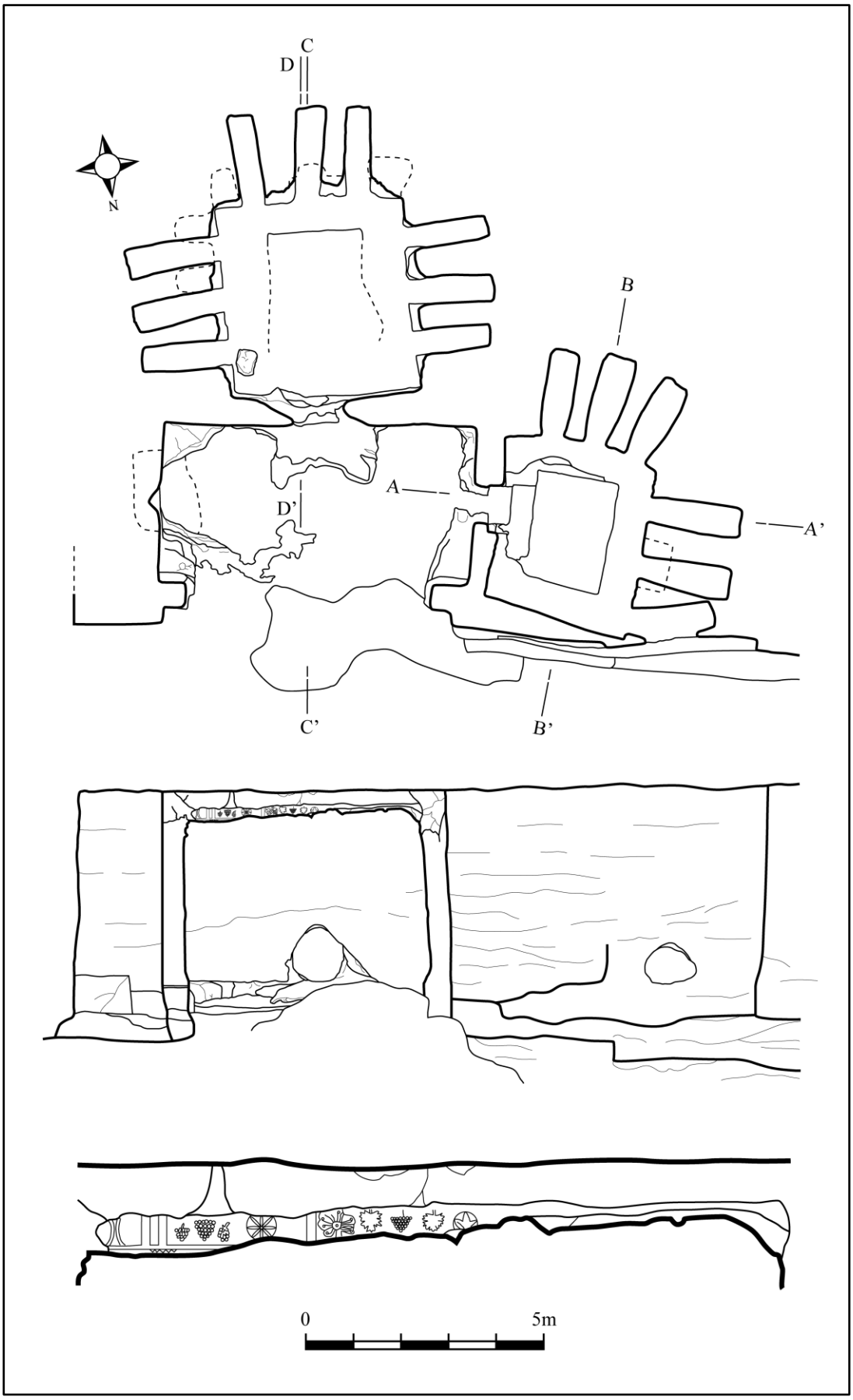


図 51. Tomb 1, Tomb 2, 平面図と立面図

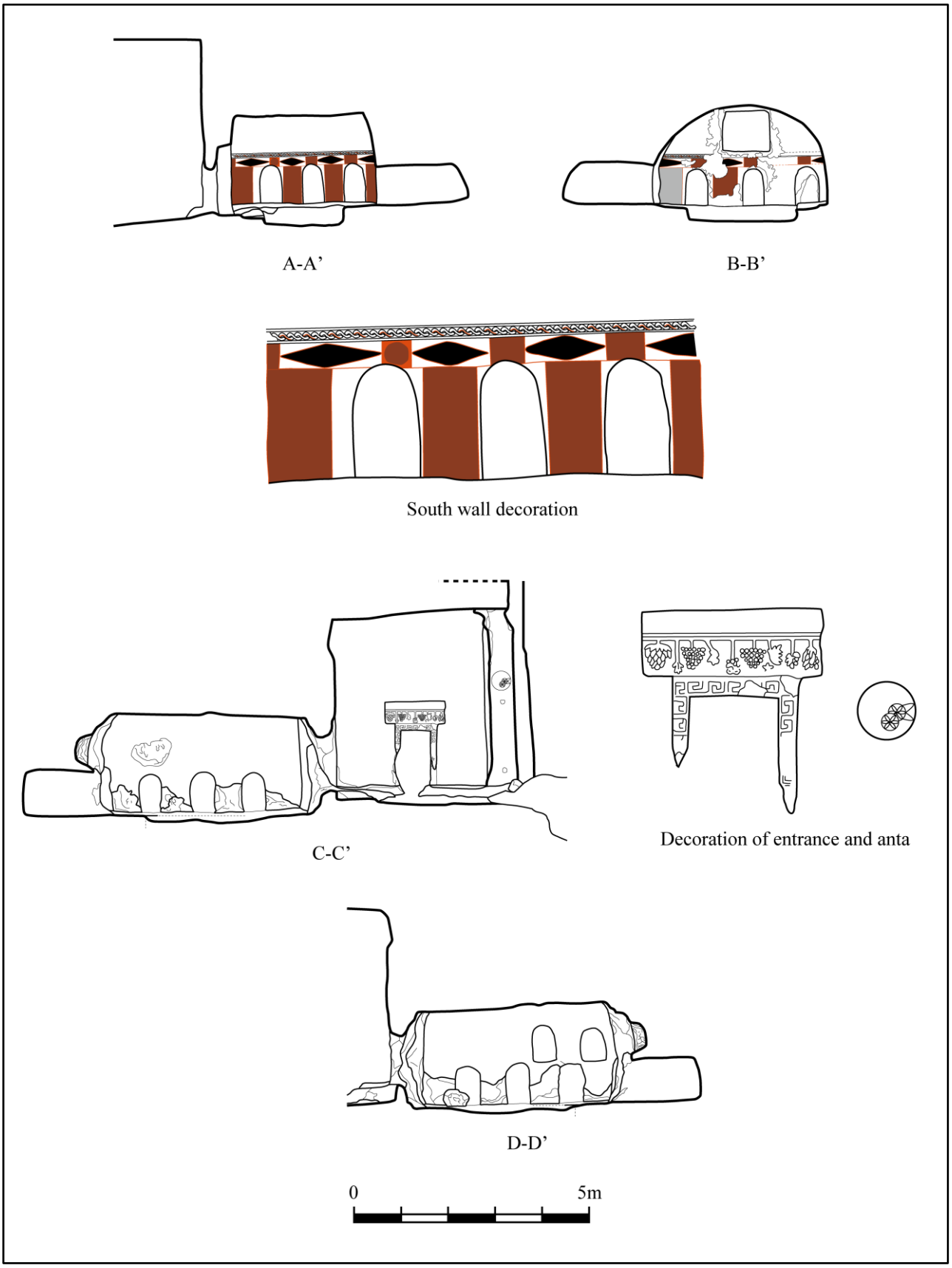


図 52. Tomb 1, Tomb 2, 断面図

図 53. Tomb 1, 左：西壁、右：北壁

図 54. Tomb 1, Tomb 2 の表採土器, 左：玄関、右：Tom1 のピット内残土

図 55. Tomb 2, 東壁

図 56. Tomb 3, ファサード

図 57. Tomb 3, 左：東壁、右：南壁

であろう。このような二階層のロクリは例が少なく、エルサレムでは 1 世紀のサンヘドリンの墓（Rahmani 1961）のみであり、上層に小型のロクリが作られる類例はみられない。また、母室の壁面が奥に湾曲するように作られており、下層のロクリの開口部が斜めに作られている点も珍しい特徴である。Tomb 2 の墓内では土器片が確認されず、前述の玄関由来の土器片が関連する遺物である。二階層のロクリと表採土器から、Tomb 2 も 1 世紀以降のローマ時代～ビザンツ時代に利用されていた墓であると考えられる。

Tomb 3 は西向きに入口が作られたロクリ墓である。石切場によって作られた岩壁の横側に入口が作られ、Tomb 1、Tomb 2 とは向きが異なっている。入口にはアーチ状のファサードが作られているが、西側部分は破損している（図 56）。母室の西壁も崩落しており、おそらく人為的に掘削されたことによって Tomb 3 の西側部分は全面的に破壊されている。母室には崩落した石や土が堆積していたため、Tomb 3 の母室の形態は判別できなかった（図 57）。東壁と南壁には標準型のロクリが 3 本ずつ作られており、漆喰やフレスコも見られない。西側の破壊された部分から土地所有者がごみを捨て焼却しているため、保存状態が良好であるとはいえないだろう。土器片は確認されず、Tomb 3 の年代は不明である。

Tomb 4 は約 2.2m×2.5mのロの字型の母室を持つロクリ墓である。入口にはアーチ状のファサードが作られており、さらに内側に四角形の枠が作られている（図 58）。Tomb 4 は、石切場によって作られた段差を階段のように利用しており、墓の入口は地表よりも高い岩壁に設けられている。入口と母室の天井の高さがほとんど同じであり、入口から 1mほど下った場所に母室の床面が位置している。東西の壁には 1 本ずつ、南壁には 2 本の標準型のロクリが作られ、漆喰の痕跡はみられない（図 58）。Tomb 4 の母室も破損しており、内部には石や土が堆積しているが、Tomb 3 よりも良好な状態であるといえる。母室の残土から 3 点の土器片を採集することができたが（図 58）、全て胴部の小さな破片であり、型式が判別できるようなものではなかった。胎土からはローマ時代～ビザンツ時代の土器片である可能性が高いが、Tomb 1、Tomb 2 と同様に特定の時代に絞り込むことは難しいだろう。表採土器から Tomb 4 は、ローマ時

図 58. Tomb 4, 左：ファサードと階段、右上：南壁、右下：Tomb 4 の表採土器（母室の残土）

図 59. Tomb 5, 左：南壁、右：西壁

図 60. Tomb 6, ファサード

図 61. Tomb 6, ファサード中央部の掘削跡

図 62. Tomb 6, 漆喰の床と入口

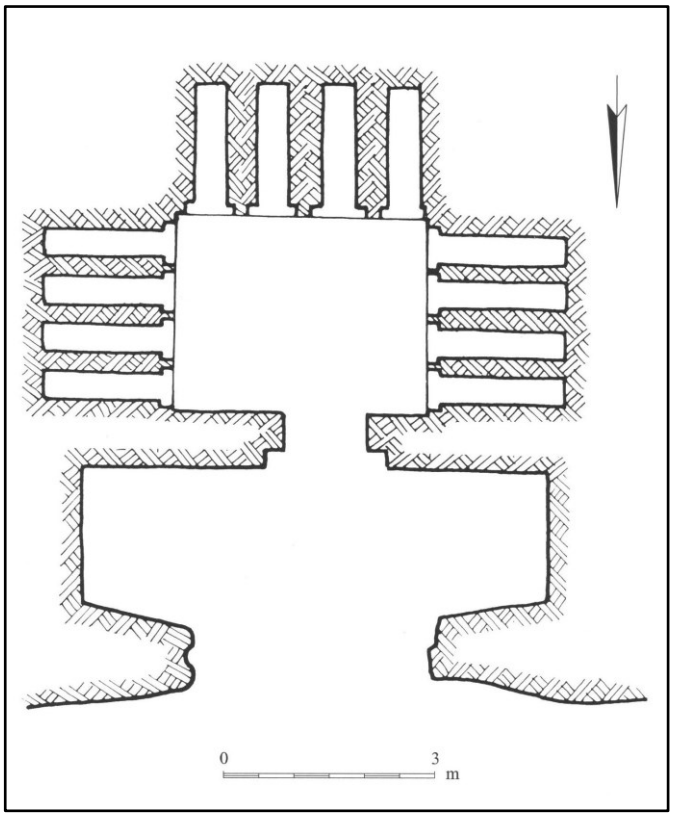


図 63. Tomb 6, 平面図（Magen 2008, Fig.10）

代～ビザンツ時代に利用されていた可能性があると考えられる。

Tomb 5 は最下段で唯一残存しているロクリ墓である。人為的な掘削によって、入口や母室の天井は破壊されており、周辺の地形も平らにならされている（図 59）。Tomb 5 の西側の掘削された岩盤には、別の墓のロクリの痕跡がみられることから、当時は最下段にも複数の墓が作られていたのであろう。大量の石や土が墓内に流入しているが、床面はある程度露出している状況であり、約 2.4m×2.5m のロの字型の母室であることが分かった。入口は北向きであり、残存している部分からは四角形の枠が作られていたことが読み取れる。Tomb 4 と同様に、入口と母室の天井の高さがほとんど同じであり、入口から 1m ほど下った場所に母室の床面が位置している。東壁と南壁には 3 本ずつ標準型のロクリが作られ、西壁は南側に標準型のロクリ、北側に小型のロクリが作られている。破損が著しいため判別が困難であるが、おそらく漆喰は塗られていなかったと考えられる。土器片は確認されず、Tomb 5 の年代は不明である。

Tomb 6 は、Tomb 1 と Tomb 2 と同様に建築装飾が施されたファサードを持つロクリ墓である（図 60）。ファサードはアンタ（付柱）とフリーズによって装飾されており、中央部分に柱が付いていた形跡は見受けられない。フリーズがメトープとトリグラフに区別され、葡萄やロゼット、花輪などの装飾が施されている点も Tomb 1 と Tomb 2 と同様である。フリーズの下には石組みの壁が作られているが、パレスチナ観光・遺跡庁によれば近代に改築されたものであるという。ファサードの破損した部分に切り石がはめ込まれていることやコンクリートが利用されていることからも、石組みの壁が後代のものであることは間違いないであろう。マゲンの踏査の際にはファサードの全面に石組みの壁が作られており、中心部に入口が設けられていたが、中央部のファサードと石組みの壁は盗掘者によって現在は破壊されている。これによって、ファサードの中央と左のフリーズは重機の跡が残るほど削り取られており（図 61）、現在はその部分の装飾を見ることはできない状況である。ファサードに続く玄関は、土で墓の入口の高さま

図 64. Tomb 7, 北壁の破損状況

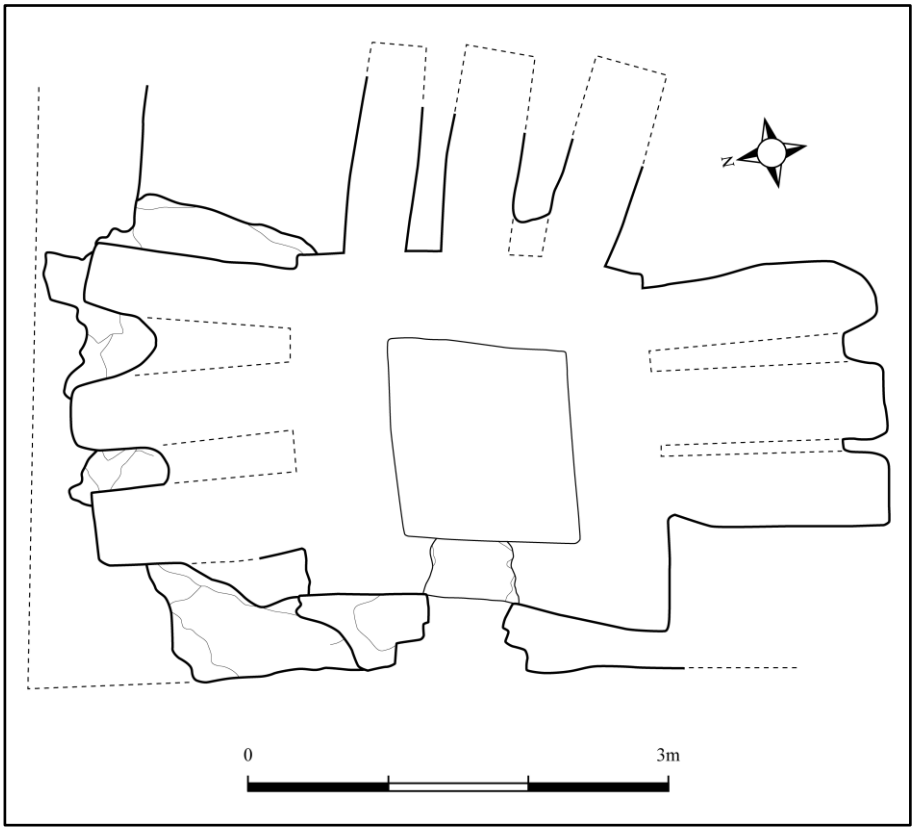


図 65. Tomb 7, 平面図

図 66. Tomb 4（下）と Tomb 8（上）の位置関係

図 67. Tomb 8, 開口部とアーチ状の枠

図 68. Tomb 8, 左：枠間の窪みと入口の段差、右：ロクリ内部の状況

図 69. Tomb 8 から西を望む

で埋められており、表面は厚さ 3ｃｍほどの漆喰の床で覆われている。墓の入口周辺は、盗掘者によって漆喰の床が破壊されており、現在は石や土が詰められているため、墓内に入ることは難しい状況であった（図 62）。石組みの壁よりも下に漆喰の床が位置していることから、壁を作る前に漆喰が塗られたと考えられる。石組みの壁と漆喰の床が同時期のものであるかは分からないが、漆喰の床も墓が放棄された後のものであることは明らかである。マゲンの踏査時には墓内に入ることができたようであり、マゲンのスケッチによるとピットのない母室の入口を除いた 3 方向に 4 本ずつ標準型のロクリが作られている（図 63）。しかし、マゲンは前述の Tomb 1 の母室に関して、ピットがあるにも関わらずスケッチではピットを描いていなかったため、Tomb 6 についても同様の可能性が考えられる。土器片は確認されなかったが、アンタ（付柱）とフリーズを持つファサードやメトープに施される装飾は Tomb 1 と Tomb 2 と類似しており、おそらく同時期の墓である可能性が高い。

Tomb 7 は、Tomb 3 と同様に西向きに入口が作られたロクリ墓である。入口にはアーチ状のファサードが作られており、さらに内側に四角形の枠が作られているが、大部分が崩落してしまっている。墓の北側は完全に崩落しており、ロクリの間の壁も壊れている部分が多い（図 64）。Tomb 4 や Tomb 5 と同様に、入口と母室の天井の高さがほとんど同じであり、入口から 1ｍほど下った場所に母室の床面が位置している。母室は約 2.5ｍ×2.7ｍのロの字型であり（図 65）、入口を除いた 3 方向に各 3 本ずつ標準型のロクリが作られている。南北の壁のロクリはロクリ間の壁や天井が崩れてしまっているが、開口部のアーチや壁の跡が残っていることからロクリと同定可能であった。母室の南壁は残存状態が良いが、漆喰の痕跡は確認されなかった。土器片は確認されず、Tomb 7 の年代は不明である。

Tomb 8 は、最上段に位置するロクリ単独墓である。Tomb 4 の真上に位置しており、石切場として利用されていない岩壁に入口が設けられている（図 66）。入口にはアーチ状に枠が作られており、内部にはさ

らに四角形の枠が設けられている（図 67）。これらの枠の間の約 40cm の空間は左右の壁に窪みがあり（図 68）、おそらく封石をはめ込むための空間であったと考えられる。アーチ状の枠がある床面から枠間の床面へは一段下がっており、そこからロクリの内部はさらに一段下がっている（図 68）。奥部の崩落によってロクリの内部は土が堆積しているため、ロクリ内部の床面は露出していないが、内部は二層構造であった可能性が高い。土器片は確認されず、Tomb 8 の年代は不明である。

今回の踏査で明らかになった情報から、アブードの墓地のロクリ墓は①Tomb 1 と Tomb 2、Tomb 6 のようなアンタ（付柱）とフリーズによって装飾されるファサードを持つ大型の墓、②Tomb 3～Tomb 5、Tomb 7 のようなアーチ状のファサードを持つ小型の墓、③Tomb 8 のようなロクリ単独墓の 3 種類に区別することが可能である。副葬品の情報がほとんど欠落してしまっているが、形態・装飾から考えると、①は特に裕福な家族（一族）の墓、②は中流階層の家族（一族）の墓である可能性が高いだろう。また、③はアブードの墓地で最も単純な形態の墓であるが、その立地を考慮すると①に相当する墓であると考えられる。Tomb 8 はアブードの墓地で最も高い岩壁に位置しており、ほとんどの全ての墓を見渡すことが可能である。また、他の墓からは、ギヴァット・ハブレハーなどが位置する近傍の丘しか見ることはできないが、Tomb 8 からは東のペタハ・ティクヴァの町やベングリオン空港を望むことができる（図 69）。このような特別な立地とロクリ単独墓が明らかに個人に向けて作られていることから、Tomb 8 はアブードの居住地における有力者の個人墓であると考えられる。

Tomb 5 の近傍に痕跡が残っているように、おそらくアーチ状のファサードを持つ小型の墓は、本来は各段に多数作られ、その中で強調されるようにアンタ（付柱）とフリーズによって装飾されるファサードを持つ墓が位置していたと考えられる。アブードの町の人々の身分や階層差などが墓の規模や装飾の違いに表されながらも、墓域内で共通する形態・装飾が用いられていることは、個々の墓における家族というまとまり以上の「共同体」の繋がりを感じさせる。一つの墓域で各墓に共通性がみられ、その中で装飾されたファサードを持つ大規模な墓が強調されているような事例は、1 世紀のサンヘドリア（Rahmani 1961; Kloner and Zissu 2007, 407）にもみられる。また、ローマ時代～ビザンツ時代初期におけるディアスポラのユダヤ人の墓地であったベト・シェアリム（Weiss 2010）では、より共同体としての意識が強まっており、墓は集合してカタコンベを構成し、一貫した形態・装飾で作られている。最も大規模で装飾が施されている墓は、ラビ・ユダ・ハナスィの墓であり、墓の共通性と裕福な家族（一族）の墓の強調はベト・シェアリムでも確認されている。1 世紀以降に家族以上の共同体の重視がユダヤ人の墓地において生じたことは明らかであり、歴史的な背景から考えて、ディアスポラ以降は各地でユダヤ人の共同体が成立し、より重要視されていったことは疑いない。墓内で行われた埋葬の方法は分からないが、アブードの墓が全て方形のロクリ墓であることやその共通性から、アブードの墓地はユダヤ人共同体のものであった可能性が高いであろう。

タハの報告によれば、アブードの町の考古学的踏査ではローマ時代、ビザンツ時代、十字軍時代などの考古学的証拠が確認されている（Taha 1997, 1）。ヘレニズム時代の遺構はアブードではみられず、アブードが居住地として発展していったのはローマ時代以降であるといえるだろう。アブードの墓は遺物がほとんど欠落してしまっており、正確な年代決定を行うことは難しい状況であるが、居住地の成立時期や表採土器、クアドロソリアや二階層のロクリ構造、フレスコの装飾、個々の墓同士の形態・装飾の共通性などから、ローマ時代以降且つほとんど同時期に作られた墓群であると考えられる。第二神殿時代に含まれるかどうかは、現在の考古学的情報から検討することは難しい。

3　キルベト・クルカッシュの墓地

キルベト・クルカッシュの墓地（図 70）は、ブルキンの約 1km 東に位置する。ブルキンは、ラマッラーからナブルスを結ぶルート 60 を約 28ｋｍ北進し、山間部の道を約 20ｋｍ西進した場所に位置する小さな町である。パレスチナ観光・遺跡庁の踏査では、ビザンツ時代の塔や十字軍時代の建造物、石切場、貯水槽（図 71）などが確認されている。ブルキンの町は丘の上部にあり、丘を下った位置に墓地が位置しているため、墓地から町を見ることはできない。墓地から約 200m 北東にはイスラエルの工場が作られており、このような状況から、アブードの墓地よりもパレスチナ観光・考古省による調査は行われておらず、現在の政治的状況から墓地で調査を行うこと自体が難しいようである。パレスチナ探査基金によって踏査が行われており（Conder and Kitchener 1882, 337-340）、6 基の墓の情報とスケッチが掲載されてい

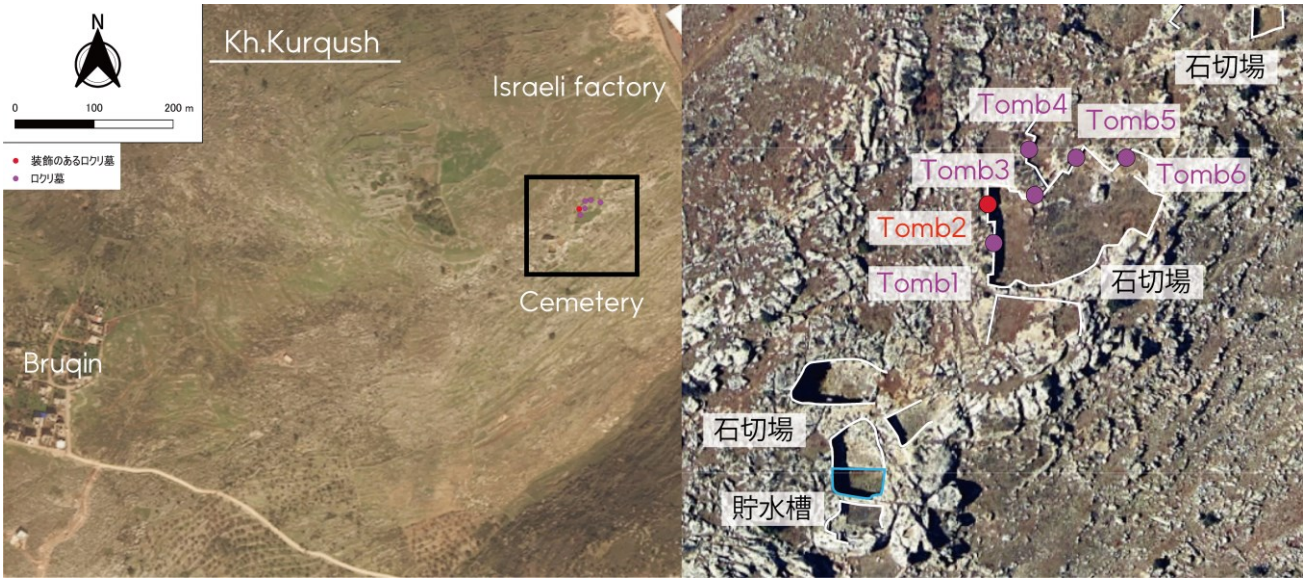


図 70. キルベト・クルカッシュの墓地の位置及び墓の分布（Mapbox、Geomolg より作成）

図 71. 貯水槽

図 72. 貯水槽北部の石切場

図 73. 墓地と石切場

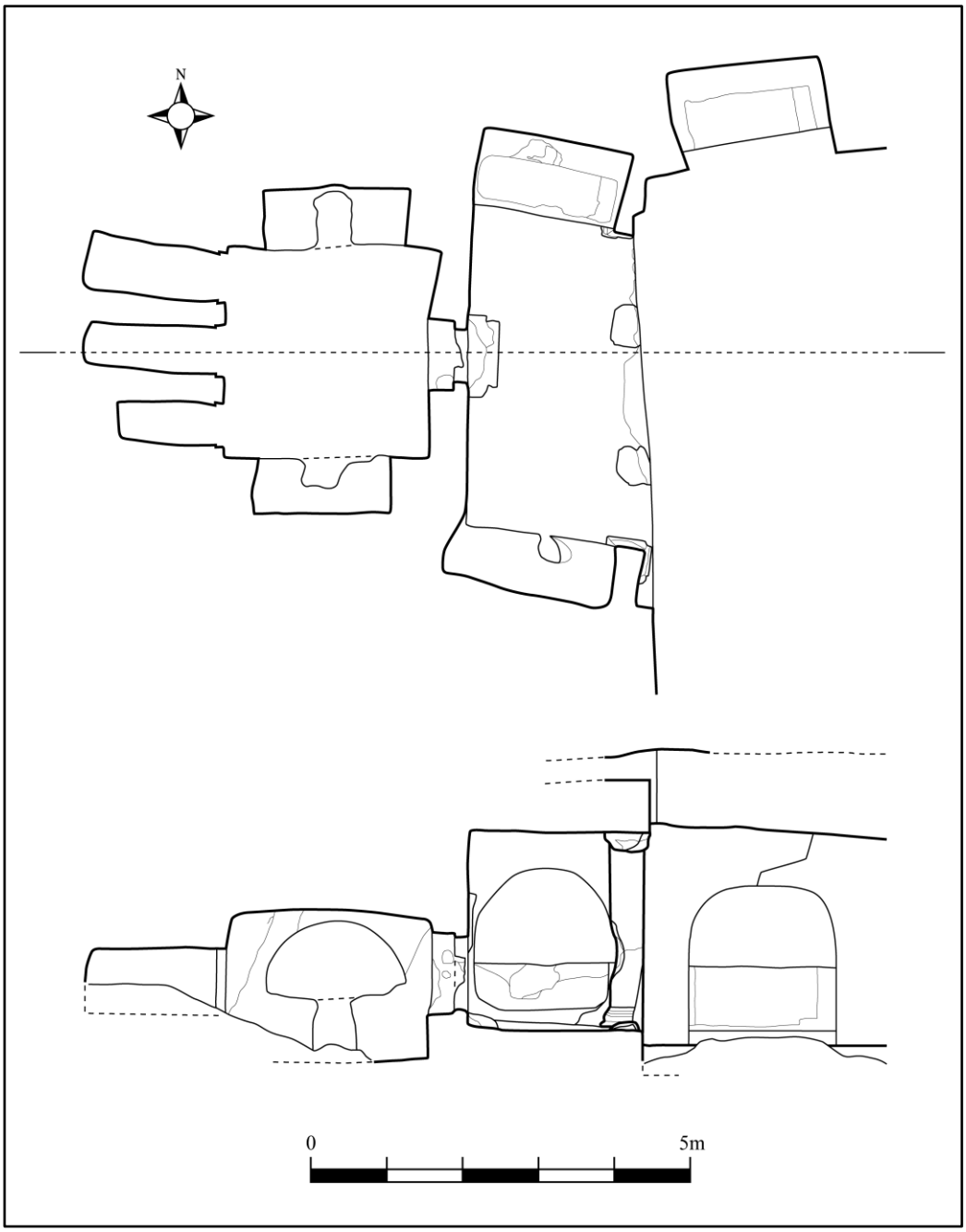


図 74. Tomb 2, 平面図と断面図

るが、詳細な位置や分布については記載されていない。Tomb 2 に関しては、イスラエルの研究者であるマゲンによって再度踏査・実測が行われているが（Magen 2008）、それ以外の墓に関しては報告がなされていない。

今回の踏査では 6 基のロクリ墓が確認された。アブードの墓地と同様に、墓の多くは石切場の壁面に作られており、石切場の年代は不明であるが、石切場として岩壁が利用された後に作られた可能性が高い。キルベト・クルカッシュの石切場はアブードよりも規模が大きく、なだらかな丘を横に広く掘削しているため、広範囲に分布している。石切場は複数みられるが、墓地は最も広い石切場の跡に位置しており、墓域が石切場によって四角く区画されているような形になっている（図 70、図 73）。この区画外に墓は分布しておらず、区画内且つほとんど同じ高さに墓はまとまって作られている状況であった。以下、各

墓の情報について記載し、墓の年代と形態を検討する。なお、墓の規模の違いから Tomb 2 についてまず記載する。

Tomb 2 は、建築装飾が施されたファサードを持つ、キルベト・クルカッシュで最も大規模なロクリ墓である（図 74）。ファサードはアンタ（付柱）とフリーズによって装飾されており、付柱間に二柱を配置する（distylos in antis）[45]ものであった[46]（図 75、図 76）。フリーズの中央には、ロゼットや花輪の装飾が施されている。ファサードの奥には玄関が設けられ、南北の壁にはそれぞれアルコソリアが作られている（図 77）。また、墓の前部の北側にもアルコソリアが設けられている。西側には墓の入口があり、アッティカ式の枠とリンテル[47]、コーニスによって装飾されている（図 78）。コーニスの中央上部は壁龕によって破壊されており、おそらく墓が放棄された後に改築が行われている可能性が高い。墓の入口の南の床面と北の壁面には小さな穴が作られており、封石をはめる際のストッパーの役割を果たしていたと考えられる。母室は約 2.8m×2.8mの平坦型の母室であり、西壁にはロクリが 3 本作られている。南北の壁にはそれぞれアルコソリアが作られ、その下には小型のロクリが設けられている。アルコソリアの床は破損しており、それによって下部のロクリの天井は崩落してしまっている。一つの母室に対して、墓の内部と外部に多数のアルコソリアが作られる例は他になく、キルベト・クルカッシュの Tomb 2 に特有の構造であるといえるであろう。墓内の残存状態は良好であるが、西壁のロクリと母室の床面は石や土が堆積しているため、正確な形態は不明瞭である。残土は西側のロクリから流れ込むような状態であるが、ロクリの奥部は崩落していないため、おそらく盗掘者の堀残しであると考えられる。床面付近は剥げてしまっているが、母室の壁面には漆喰が塗られている。キルベト・クルカッシュの墓地では、表採土器が確認されなかったため、遺物から墓の年代を推測することは難しいが、アルコソリアが利用されていることから 1 世紀以降の墓であると考えられる。

Tomb 1、Tomb 3、Tomb 4 は、同一のファサードの形態と内部形態を持っているロクリ墓群である（図 79-83）。ファサードは奥行のあるアーチ状であり、墓の玄関を兼ねている。東向きの入口は装飾のない単純なものであり、入口の前には段差が設けられている。Tomb 3 のファサードの隣には、Tomb 2 と同様に墓外にアルコソリアが作られており、おそらく Tomb 3 と合わせて利用されていたと考えられる。全ての墓で母室はアーチ状の天井を持つコの字型であり、ロクリは幅広型である。Tomb 3、Tomb 4 は約 2.3m×2.3mの母室であり、入口を除く 3 方向に各 2 本ずつロクリが作られている。Tomb 1 は横幅が少し狭く約 2.3m×2.1mの母室であり、入口正面に 1 本、左右の壁に各 2 本ロクリが作られている。また、Tomb 1 のみピットの壁面の入口側を除いた 3 方向にロクリが 1 本ずつ設けられている。全ての墓で漆喰は塗られておらず、残存状態は良好であるがピット内に石や土が堆積している状況である。Tomb 1 のように細かな違いはあるが、これらの墓はアブードの墓地よりも画一的に作られているといえるであろう。また、時間の都合で内部を確認することはできなかったが、Tomb 5 と Tomb 6 も同様に奥行のあるアーチ状のファサードを持つ墓であった（図 84）。Tomb 5 のみ、柱と石組みを模した浮彫がアーチに施されている。いずれの墓も年代を推定できるような特徴を持っていないため、墓の年代は不明である。

---

[45] 付柱間に二本の柱を配置する建築様式を distylos in antis と呼び、付柱間に一本の柱を配置する様式を stylos in antis と呼称する。ロクリ墓のファサードには存在しないが、付柱が施されない場合は柱の本数に従って distylos、stylos と呼ばれる。このような様式である場合は、その上部に基本的にエンタブラチュアが作られる。

[46] Tomb 2 の外部に関しては、太陽光によって写真が白飛びしており、細かい装飾を判別できるような 3D モデルの作成ができなかった。よって、本論ではマゲンの踏査（Magen 2008）の際の図面を合わせて掲載する。

[47] 2 つの支柱の上に水平に渡された構造を指す。まぐさ石とも呼ばれる。

図 75. Tomb 2，立面図

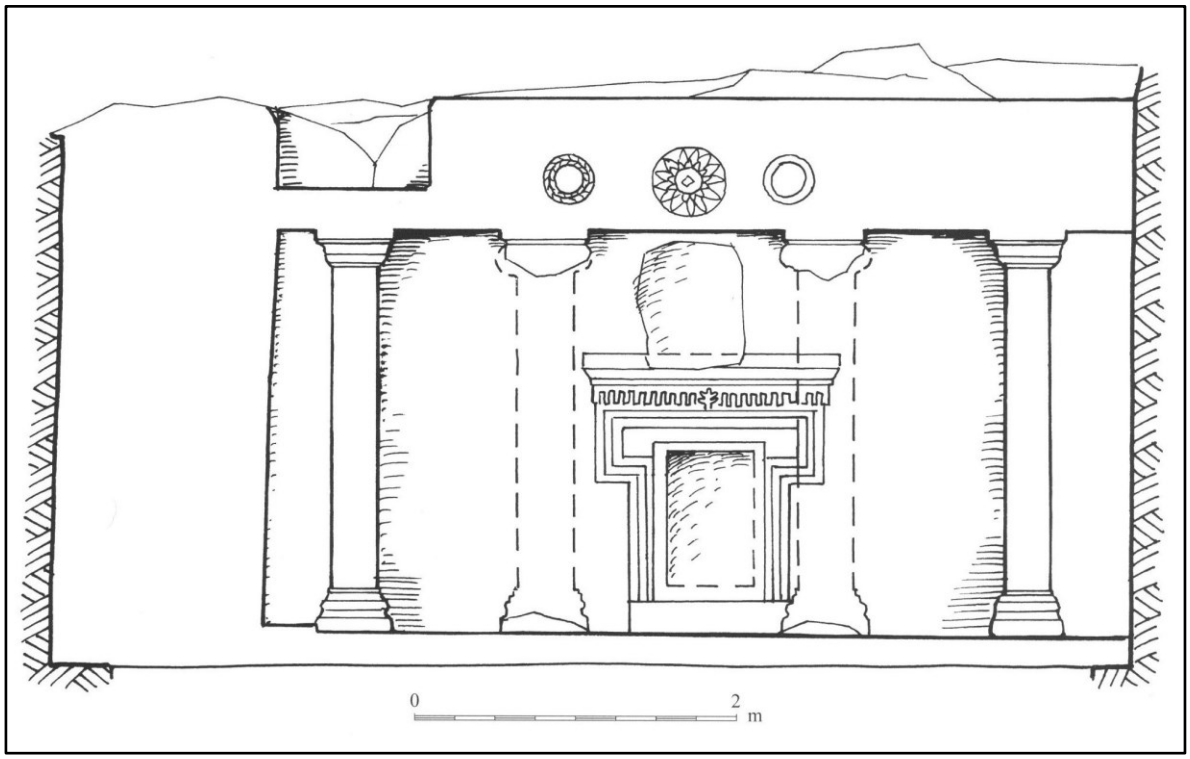


図 76. Tomb 2，立面図（Magen 2008, Fig.16）

図 77. Tomb 2, ファサードと玄関南壁のアルコソリア

図 78. Tomb 2, 墓の入口

図 79. 左：Tomb 1, ファサード　右：Tomb 2, ファサードとアルコソリア

図 80. Tomb 4, ファサード

図 81. Tomb 1, 西壁とピット

図 82. Tomb 3, 左：南壁、右：西壁

図 83. Tomb 4, 西壁とピット

図 84. 左：Tomb 5, ファサード　右：Tomb 6, ファサード

今回の踏査で明らかになった情報から、キルベト・クルカッシュの墓地は装飾された大規模な一つのロクリ墓とアーチ状のファサードを持つ小規模なロクリ墓群によって構成されることが分かった。Tomb 2 はアルコソリアから 1 世紀以降の墓であることは確かであり、Tomb 3 のようにアルコソリアが墓外で共伴している事例から考えると、周辺の小規模なロクリ墓群も同じ時期のものである可能性が高い。ブルキンの町の考古学的情報を考慮すれば、墓地の年代がヘレニズム時代にまで遡るとは考えられず、ローマ時代以降且つほとんど同時期に作られた墓群であると推測される。アブードと同様に、第二神殿時代に含まれるかどうかは、現在の考古学的情報から検討することは難しい。

アブードの墓地でみられた墓の共通性と裕福な家族（一族）の墓の強調は、キルベト・クルカッシュの墓地ではより顕著であり、墓が全て方形のロクリ墓であることを合わせて考えると、キルベト・クルカッシュの墓地は同様に 1 世紀以降のユダヤ人共同体のものであった可能性が高いであろう。アブードとキルベト・クルカッシュの墓地は、ユダヤ・サマリア地域間で大規模な墓地として知られている 4 遺跡のうち 2 遺跡であり、残る 2 遺跡について本論では踏査は行っていないが、マゲンによって踏査（Magen 2018）が行われている。アブードの南東に位置するキルベト・ティブナ、キルベト・クルカッシュの北に位置す

るカラワット・ベニ・ハッサンの両墓地は、それぞれ 1 世紀以降に作られたと考えられるギリシア建築様式の建築装飾を持つ大規模な墓のみ報告されているが、その周辺に小規模な墓がいくつか確認されている（Magen 2008, 141, 149）。両墓地の全体像は不明瞭であり、アブードやキルベト・クルカッシュのような共通性があるのかは分からないが、単独の墓ではなく類似した構成の墓地が少なくとも 1 世紀以降には各町に存在していることは、1 世紀以降のユダヤ人共同体の発展と関係しているであろう。

4　シンジルの墓地

シンジルは、ラマッラーの約 14ｋｍ北に位置する小さな町である。パレスチナ観光・遺跡庁の踏査では、十字軍時代の塔・教会、モスクが確認されている。シンジルの墓地は、町から約 3ｋｍ北西の丘に一つ目の墓地があり、約 1ｋｍ南西に二つ目の墓地が位置している（図 85）。町からなだらかな丘を登った丘の上部に墓地が位置しているため、墓地の上部からはシンジルの町を見ることが可能である（図 86）。墓地から約 2ｋｍ北西にはイスラエルの入植地であるマアレ・レボナが作られており、シンジルの墓地はパレスチナ自治区の町とイスラエルの入植地の中間に位置しているといえる。盗掘の報告を受けたことによる状況確認のための踏査はパレスチナ観光・遺跡庁によって何度か行われているが、墓地に関して考古学的調査はこれまで行われていない。

今回の踏査は一つ目の墓地を中心に行った。二つ目の墓地については悉皆的な踏査は行っていない。一つ目の墓地では 2 基のロクリ墓と 4 基のシャフト墓が確認された。2 基のロクリ墓は同じ斜面に位置しているが、離れた位置に作られている。2 基の間の斜面は、オリーブ畑によって広範囲に地形の改変が行われており、元々は 2 基以外にもロクリ墓が作られていたと思われる。シャフト墓は丘の頂上に位置しており、これらもオリーブ畑によってかなり破損している状況であった。二つ目の墓地では 3 基の横穴墓が確認された。いずれも崩落しており、内部の状況を確認することができなかったため、横穴墓の種類は分からない。一つ目の墓地、二つ目の墓地共に、アブードとキルベト・クルカッシュの墓地よりも残存状況は悪く、盗掘とオリーブ畑などの現在の土地利用によって損傷を受けている状態である。以下、各墓の情報について記載し、墓の大まかな年代を検討していく。

Tomb 1 は、西向きに入口が作られた約 3.8m×3.3mの母室を持つロクリ墓である（図 87）。玄関を有しているが、前面の損傷が激しく装飾のあるファサードを持っていたかは明らかでない（図 88）。半分ほど石や土が堆積しており、墓の入口も同様に埋まっている。入口はアーチ状の枠によって装飾されており、開口部の周りには四角形の浮彫が施されている（図 89）。墓の内部は全面的に崩落しており、床面には多量の堆積物があるため母室の形態は判別できない。また、ほとんどオリジナルの壁面は残っておらず、本来の母室は一回り小さいものであったと考えられる。北壁には 1 本の標準型のロクリ、東壁には 2 本の標準型のロクリ、南壁には 1 本の標準型のロクリと小型のロクリが作られているが、多くが崩落してしまっている（図 90）。崩落や浸食の影響もあるかもしれないが、Tomb 1 の作りはアブードやキルベト・クルカッシュの墓と比較して明らかに粗雑である。アブードやキルベト・クルカッシュでは墓の壁面は平らになるようにならされていたが、Tomb 1 ではそのような加工は墓の外面にしか施されていない。母室の残土から 2 点の把手、1 点の胴部の土器片を採集することができたが、小さな破片であり型式が判別できるようなものではなかった（図 91）。胎土からはローマ時代～ビザンツ時代の土器片である可能性が

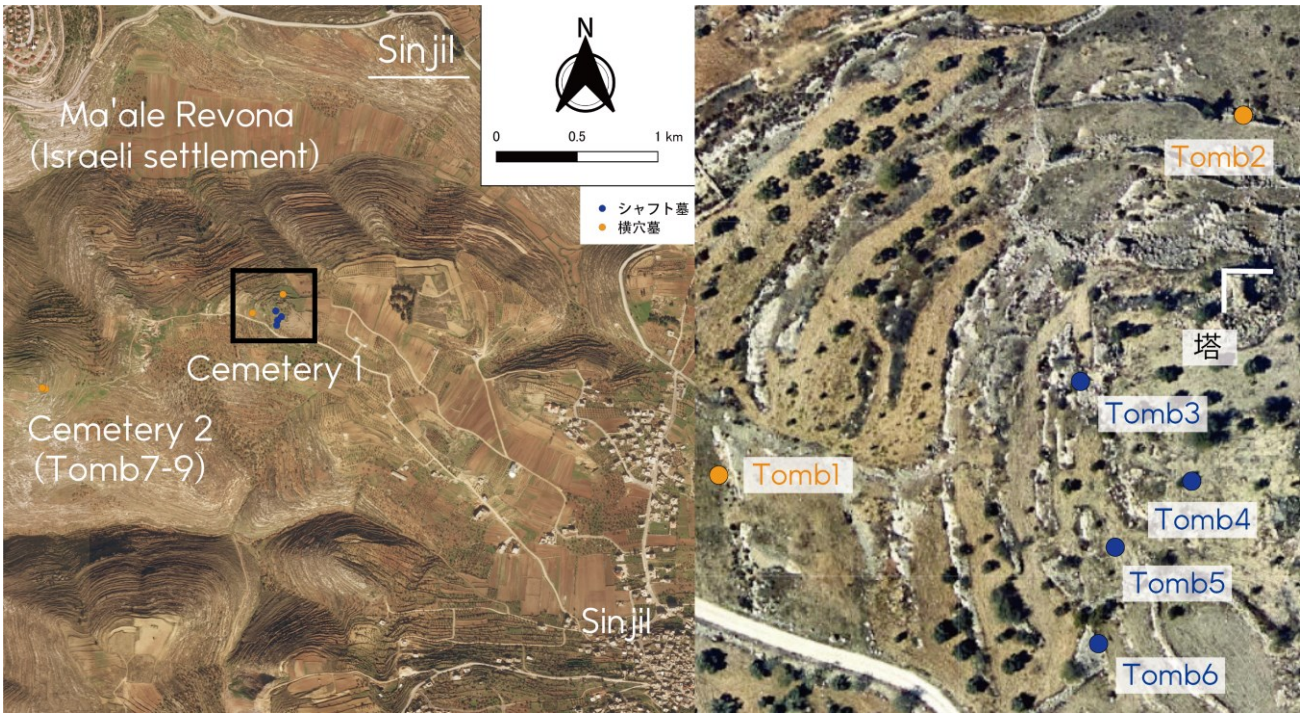


図 85. シンジルの墓地の位置及び墓の分布（Mapbox、Geomolg より作成）

図 86. Cemetery 2 からシンジルの町を望む

高いが、特定の時代に絞り込むことは難しいだろう。表採土器から Tomb 1 は、ローマ時代～ビザンツ時代に利用されていた可能性があると考えられる。

Tomb 2 は、北向きに入口が作られた約 2m×2m のコの字型の母室を持つロクリ墓である（図 92）。十字軍時代の塔の近くの斜面に作られており、岩壁を平らに切り取ったファサードを設けている（図 93）。ファサードと墓の入口に装飾は施されておらず、石や土が堆積しているため墓の入口は半分ほど埋まっている。Tomb 1 と比較すれば良好であるが、母室の天井や床面、壁の一部は崩落しており、床面には多量の石や土が堆積している。母室の天井は大部分が崩落してしまっているが、南壁に残る部分からはアー

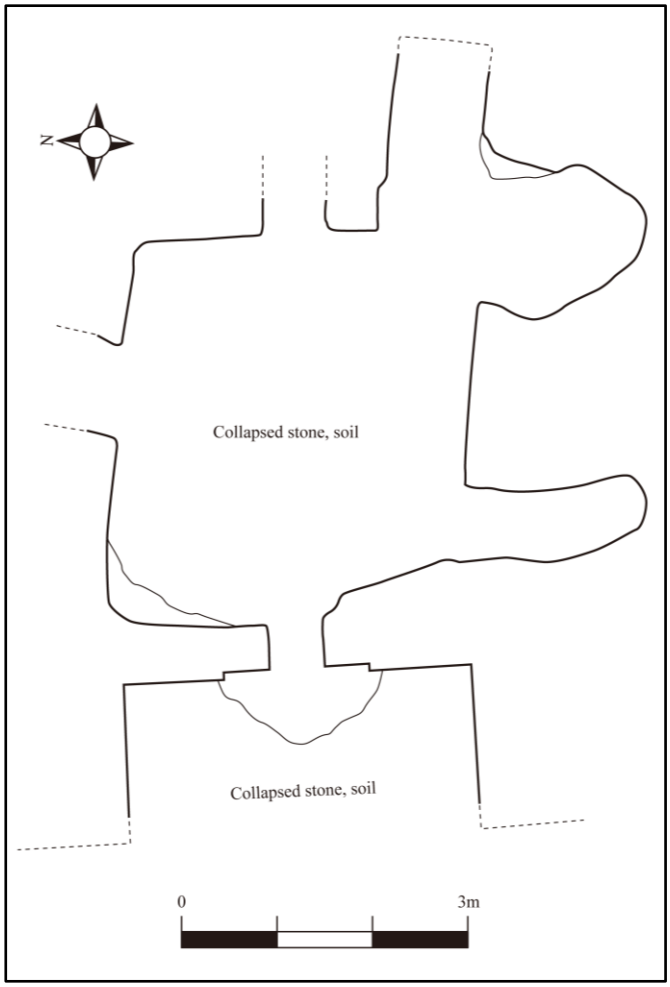


図 87. Tomb 1，平面図

図 88. Tomb 1，ファサード

図 89. Tomb 1，墓の入口

図 90. Tomb 1,北壁手前のロクリ

図 91. Tomb 1 の表採土器

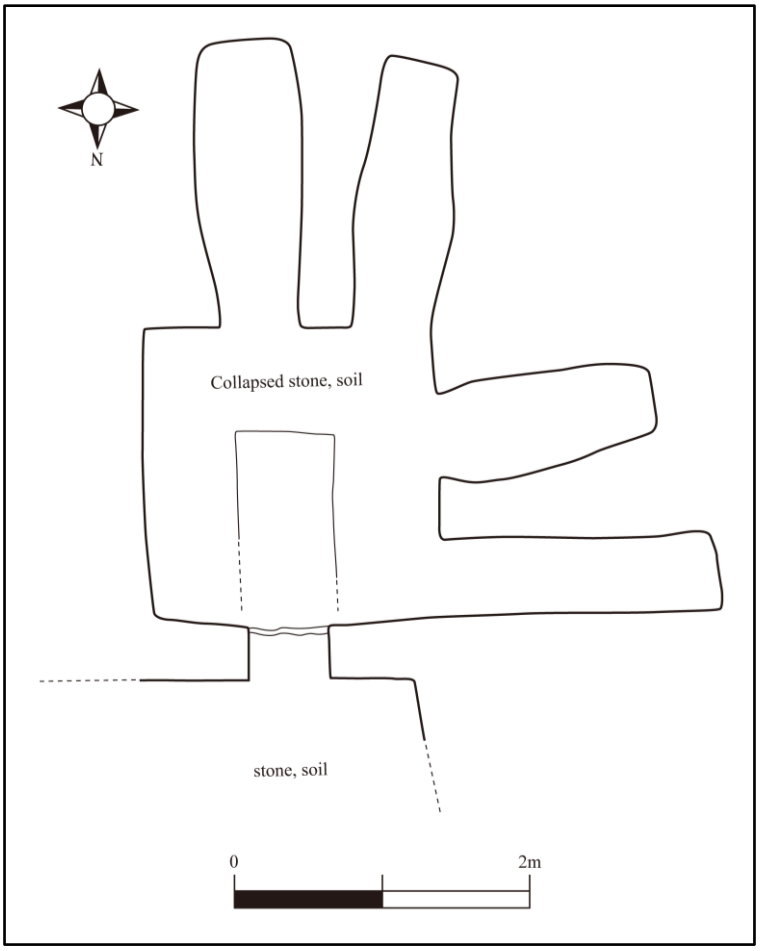


図 92. Tomb 2, 平面図

図 93. 十字軍時代の塔と Tomb 2

図 94. Tomb 2, 南壁

図 95. Tomb 2, 西壁奥のロクリ

図 96. Tomb 2 の表採土器, 左：玄関、右：母室内残土

図 97. Tomb 6, 開口部

図 98. Tomb 7, ファサード

チ状の天井であったことが分かる（図 94）。南壁には 2 本の幅広型のロクリ、西壁には標準型、幅広型のロクリが 1 本ずつ作られている。東壁にはロクリが作られていないが、これは墓の東側で岩壁が切れているためであるだろう。Tomb 1 と同様に墓の作りは粗雑であるが、ロクリの壁面を平らに調整している痕跡がみられる（図 95）。墓の玄関から 1 点の把手、母室の残土から 2 点の把手、3 点の胴部の土器片を採集することができたが、型式が判別できるようなものではなかった（図 96）。胎土からはローマ時代～ビザンツ時代の土器片である可能性が高いが、特定の時代に絞り込むことは難しいだろう。表採土器から Tomb 1 は、ローマ時代～ビザンツ時代に利用されていた可能性があると考えられる。

Tomb 3～Tomb 6 は、シャフト墓であるが内部の形態は不明である。Tomb 3～Tomb 5 は開口部を除いて埋まっており、Tomb 6 は開口部の途中から崩落している（図 97）。また、Tomb 6 は現代に再利用されている痕跡がみられる。円形の開口部を持つ地下式の遺構であることからシャフト墓と同定したが、内部形態や埋葬の痕跡を確認出来ていないため、これらが墓以外の遺構である可能性も考えられる。第二神殿時代のシャフト墓は開口部が長方形や楕円形であり（Tal 2003, 290）、これらの円形の開口部を持つ地下式の遺構がシャフト墓であれば、時代は青銅器時代から鉄器時代まで遡るだろう[48]。少なくとも Tomb 1 や Tomb 2 と関係する遺構でないことは明らかである。

Tomb 7～Tomb 9 は、二つ目の墓地の横穴墓である。一つ目の墓地とは別の丘に位置しており、いずれの墓も崩落や堆積物によって内部の形態を確認することはできなかった。ファサードの装飾もみられず、岩壁に入口が設けられているだけであり（図 98）、Tomb 1 や Tomb 2 よりも単純な墓であるといえるだろう。ベンチ墓・ロクリ墓の判別はできないが、その立地から一つ目の墓地と時期が異なると思われる。

今回の踏査で明らかになった情報から、シンジルの墓地がローマ時代～ビザンツ時代に利用されていた可能性の高い小規模な墓地であることが明らかになった。二つの墓地のいずれも装飾が施されたファサードを持つ墓は確認されず、ロクリ墓は粗雑な作り且つアルコソリア構造を持たない一般的なもので

[48] ロクリ墓とシャフト墓が隣接している墓地は、ベイティン遺跡（杉本他 2015）に類例がある。ベイティン遺跡ではシャフト墓は移行期青銅器時代のものであり、丘の頂上部に集中して分布している。

あった。アブードやキルベト・クルカッシュと比較して、シンジルの墓地は小規模なコミュニティのものであった可能性が高い。おそらく、アブードやキルベト・クルカッシュのような大規模な墓地よりも、シンジルのような小規模な墓地の方がより多く分布していると考えられるが、今回の踏査で分かったように、小規模な墓地の場合は残存状況が良好ではない。また、踏査による検出も困難であり、小規模な墓地の情報は大規模な墓地以上に欠落してしまっていることが想定される。

5　アイン・シニヤの墓地

アイン・シニヤは、ラマッラーの約 5.6ｋｍ北に位置する小さな村である。パレスチナ観光・遺跡庁の踏査では、ローマ時代のワインプレス、十字軍時代の塔や建造物が確認されている。村の約 1ｋｍ西には丘と深い谷が位置しており、丘の上部には十字軍時代の塔や建造物が広範囲に作られている。アイン・シニヤの墓地は、パレスチナ観光・遺跡庁によってその存在を確認されているが、墓の正確な位置や種類はこれまで調査がなされていない。

アイン・シニヤの墓地に関して、「十字軍時代の遺構のそばに位置する」という情報しか把握されていなかったため、今回の踏査では十字軍時代の遺構が位置する丘の上部、西側の谷の斜面を調査範囲として墓の踏査を行った。結果として、アイン・シニヤでは石切墓を確認することはできなかった。オリーブ

図 99. アイン・シニヤの位置及び踏査範囲（Mapbox より作成）

図 100. 十字軍時代の建造物

図 101. アイン・シニヤ西部の谷

畑による土地の改変の影響もあるが、夏季で草が茂り遺構の発見が困難であったことも要因である。地形としては石切墓を作ることに向いており、良好な石灰岩の岩盤が地表に露出している。踏査を行った範囲では墓のファサードの残骸や岩壁を垂直に切り出したような痕跡は確認されなかったため、おそらく岩壁に直接入口を設ける簡素な石切墓が中心の墓地であったと考えられる。墓が存在していることは確かであるため、今後さらなる踏査を行う必要があるだろう。

6　テル・エン・ナスベの墓地

テル・エン・ナスベはラマッラーのカフル・アカブ地区に位置するテル型遺跡である（図 102、図 103）。1926 年、1935 年にベーデによって発掘調査が行われ、鉄器時代の市壁や門、建造物、ヘレニズム時代の市壁（図 104）や建造物など、青銅器時代からビザンツ時代にかけての遺構が確認されている（McCown 1947）。テルの発掘に伴い、テルの北部・西部の墓地についても発掘調査が行われており、テルと合わせて報告書が刊行されている。テル・エン・ナスベの報告書によれば、鉄器時代のベンチ墓 3 基、ヘレニズム時代（前 1 世紀）のロクリ墓 2 基[49]（図 105）、ローマ時代のロクリ墓 2 基、後期ローマ時代～ビザンツ

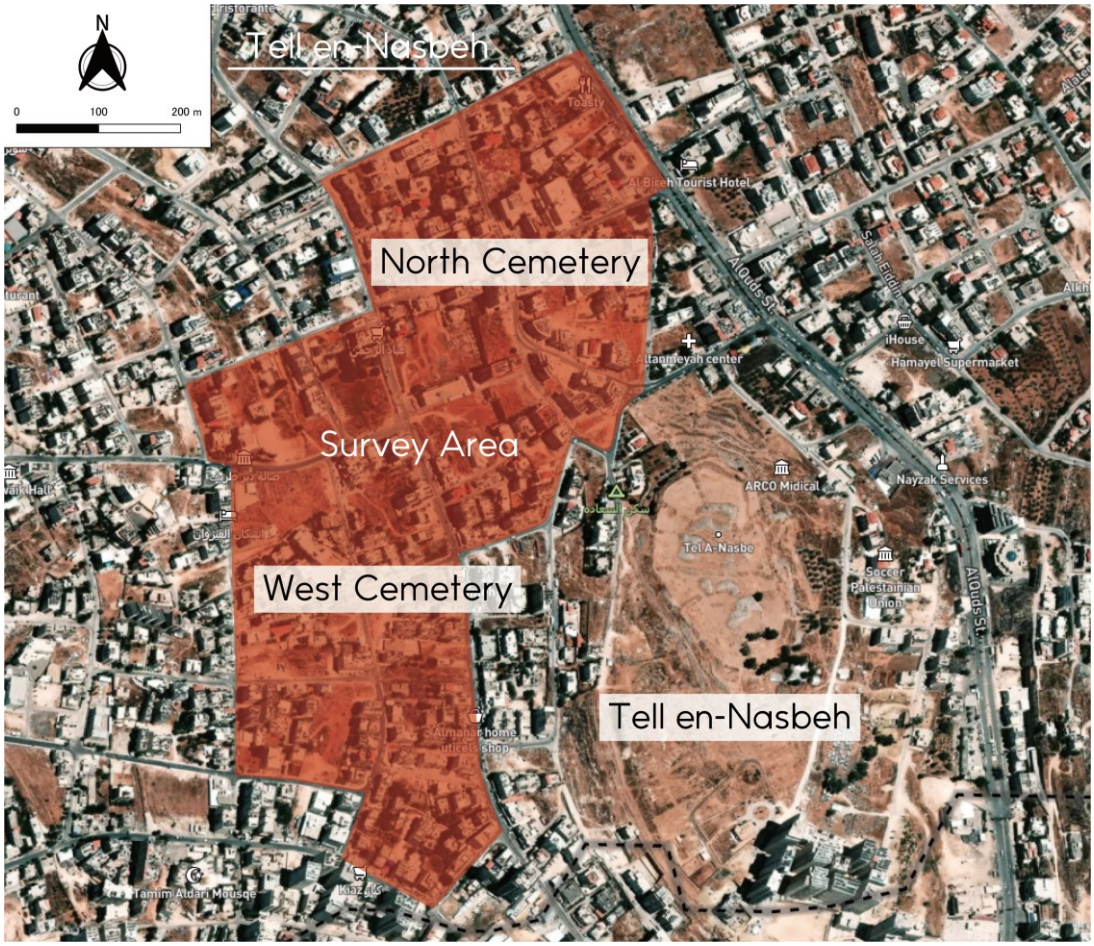


図 102. テル・エン・ナスベの位置及び踏査範囲（McCown 1947, Fig3、Mapbox より作成）

[49] Tomb 4 は出土土器とヘロデ・アルケラオスのコインから、Tomb 6 はヘロディアンランプから前 1 世紀が最も古い利用年代であると同定されている。

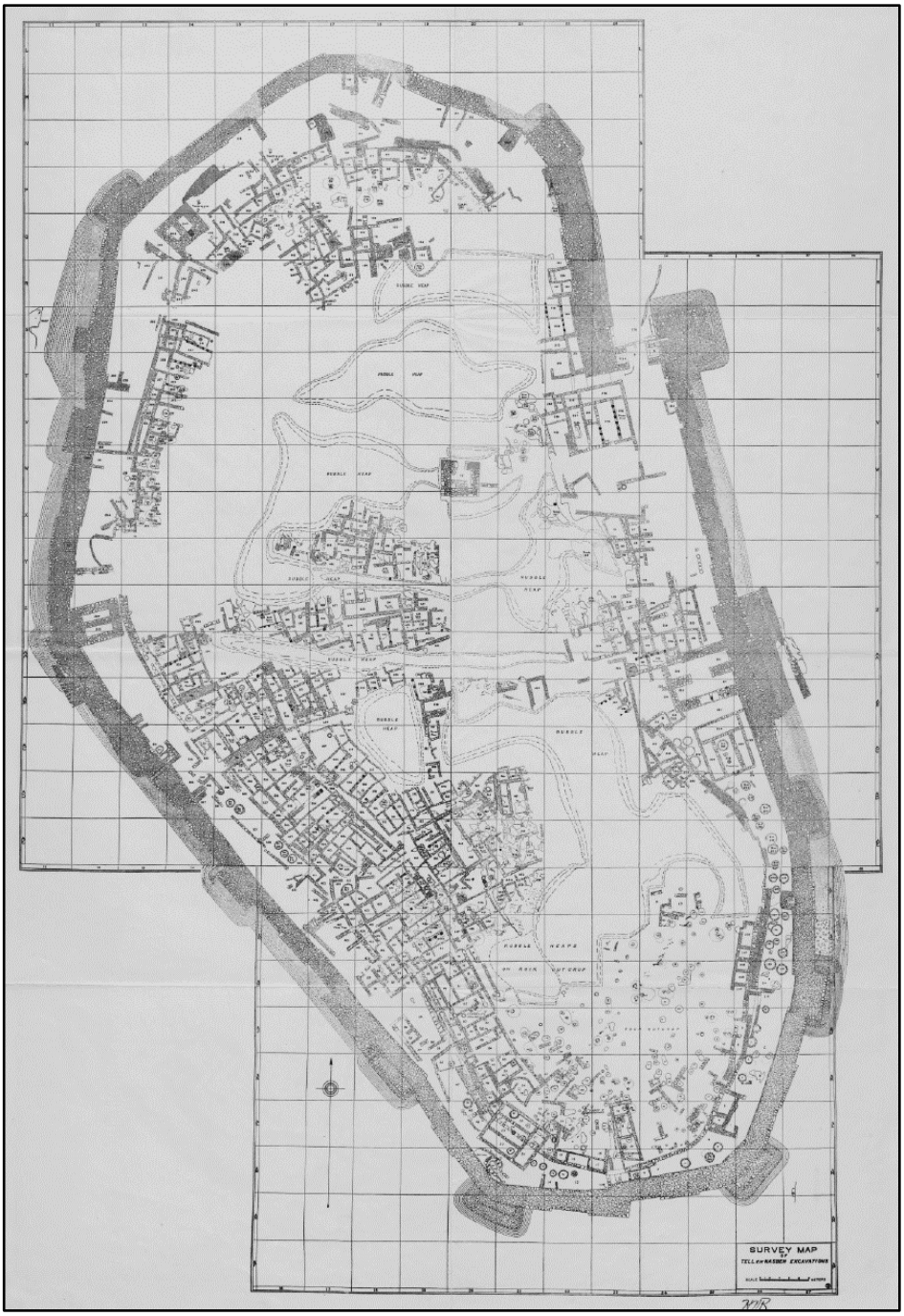


図 103. テル・エン・ナスベの平面図（McCown 1947, Pl.113）

時代の洞窟墓 1 基、石棺墓 17 基、ベンチ墓 2 基、ロクリ墓 2 基、アルコソリア墓 7 基について発掘調査が行われている（McCown 1947, 77-128）。これまでの墓地とは異なり、テル・エン・ナスベの墓地は発掘調査が行われている墓地であり、出土土器やコインによって年代決定が行われている。その一方で、1900 年代前半の段階で盗掘の被害があったようであり、一部の墓を除いて出土遺物に乏しい墓が大半であったようである。ベーデによる調査の後は、現在に至るまで墓地について調査は行われていないが、西部の墓地の近辺に位置する教会であるキルベット・シュワイカ（図 106）はパレスチナ観光・遺跡庁によって発掘調査が行われている。その際に周辺遺跡の踏査が行われたが、テル・エン・ナスベの墓地の大半は道路工事や宅地造成によって失われてしまったようである。

図 104. 鉄器時代からヘレニズム時代の市壁

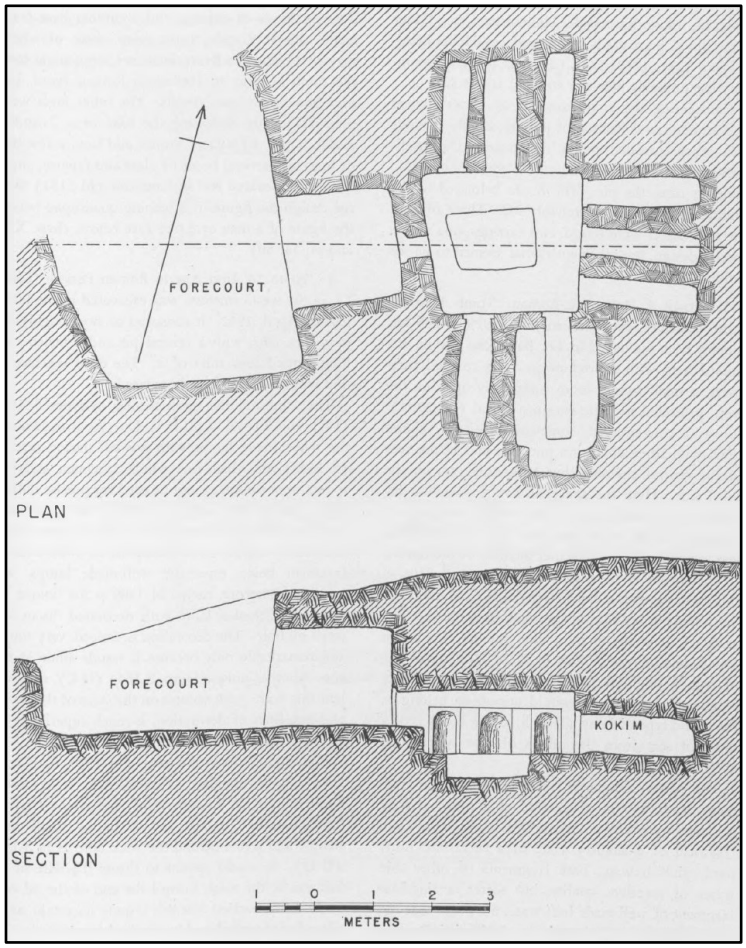


図 105. ヘレニズム時代（前 1 世紀）のロクリ墓, Tomb 4（McCown 1947, Fig.12）

図 106. 教会堂のアプス, キルベット・シュワイカ

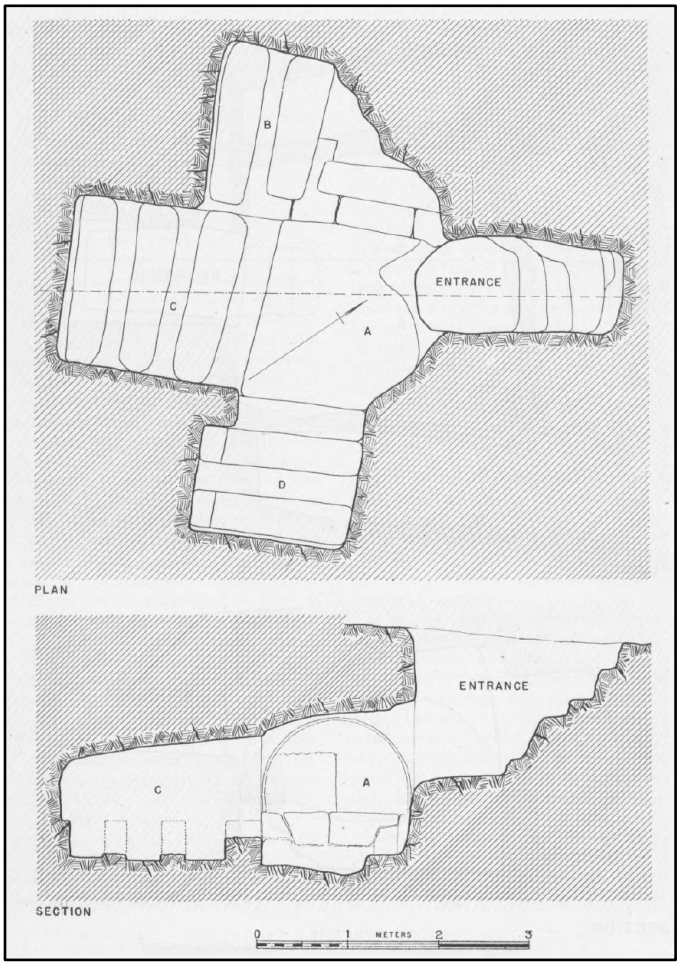


図 107. ビザンツ時代のアルコソリア墓, Tomb 19（McCown 1947, Fig.18）

このような状況から、テル・エン・ナスベの墓地に関しては、ベーデによって発掘された墓の現在の状態の確認、未発掘の墓の調査の二つを目的として踏査を行った。テル・エン・ナスベの報告書に示される墓地の位置が曖昧であったため、テル・エン・ナスベの北から西にかけて広いエリアを踏査の範囲とした。踏査の結果として、当時墓地であった場所はほとんど元来の地形を保っておらず、住宅や道路が作られており、残存している墓は一つも確認されなかった。ベーデが発掘を行った墓以外にも多数の墓が分布していたようであるが、それらは失われてしまったと考えてよいだろう。ベーデの報告の情報から考えれば、テル・エン・ナスベの墓地の主な利用時期はローマ時代～ビザンツ時代であり、アルコソリア墓がビザンツ時代に特有の複数の溝を連ねるタイプ（Kloner and Zissu 2007, 83）であることを考慮すると、第二神殿時代以降が墓地の最盛期だと考えられる。

7　パレスチナ自治区における考古学的踏査の結果と課題

本節の冒頭で述べたように、本研究の考古学的踏査は主として、ユダヤ・サマリア地域間の大規模な墓地と小規模な墓地の墓の形態、大まかな年代を明らかにすることを目的として行った。数か月間の踏査では、ユダヤ地域―サマリア地域間全体の傾向を把握できたとは言い難いが、パレスチナ自治区における墓の状態の把握と墓の形態、年代の傾向の一端を明らかにすることができた。

まず、墓の状態について述べる。本研究で踏査を行った墓地はいずれも盗掘の被害を受けており、遺物は全て持ち出され、時には墓自体も重機などによって損傷を受けていた。パレスチナ観光・遺跡庁の聞き取り調査やアル・フーダリエの研究（al-Houdalieh 2014; al-Houdalieh et al. 2017）で指摘されているように、パレスチナ自治区の墓は略奪・破壊によってほとんど考古学的文脈を失っているといってよいであろう。また、オリーブ畑や住宅など現在の土地開発も墓の破壊や消失の一因であり、パレスチナ自治区の人々の遺跡保存に対する意識の低さが関係しているといえる。本研究の考古学的踏査で得られた傾向として、装飾されたファサードを持つ墓を有する大規模な墓地は、盗掘や土地開発による損傷を受けながらも残存状態は良好であるが、小規模な墓地は破損が著しく、発見すること自体が非常に困難であった。また、大規模な墓地であってもテル・エン・ナスベの墓地のように、土地開発で消失してしまった墓地も確認された。おそらく、パレスチナ自治区の小規模な墓地や都市部に位置する墓地の中には、土地開発や盗掘による破壊によって消失したり、これまでの調査で未発見のものも少なからず存在するであろう。総じて、パレスチナ自治区の墓は全て完全に破壊されている状況ではなかったが、考古学的に同自治区の墓を取り扱う際には、ほとんどが盗掘・破壊された状態の悪い墓であることを考慮する必要があるといえる。

次に、墓の形態と大まかな年代について述べる。前述のように、本研究で踏査を行った墓はいずれも盗掘されており、出土遺物を欠いていた。しかし、アルコソリアやフレスコ、表採土器、墓地周辺の居住地の遺構の年代によって、年代を推測することは可能であった。この年代をもとに、本研究で踏査を行った墓を発掘調査に基づき年代決定が行われている他遺跡の墓と同列に扱うことは難しいが、少なくとも大半の墓地がローマ時代以降のものであると示すことができたのは重要な点である。幅の広い年代ではあるが、ヘレニズム時代とローマ時代以降を区別できることは、初期のロクリ墓の広がりを検討することに大きな意味を持つからである。テル・エン・ナスベを除いた墓地は、ハスモン朝成立以後にユダヤ人の居住域になった範囲に位置しており、居住地の遺構がローマ時代・ビザンツ時代・十字軍時代であること

と合わせて考えると、ローマ時代以降に成立・発展した居住地の墓地であることは間違いないだろう。対して、テル・エン・ナスベの墓地はヘレニズム時代からユダヤ地域に含まれており、居住地と一部の墓はヘレニズム時代に利用されている。このような傾向から考えると、ユダヤ・サマリア地域間の墓地の多くはローマ時代以降に成立したものである可能性が高いといえる。この踏査の結果と合わせて、ユダヤ・サマリア地域間の墓の分布傾向については、次節で検討したい。

踏査を行った墓の形態は、前章で設定した分類に合致したものであり、形態や装飾でエルサレムとの地域差は確認されなかった。また、ヘレニズム都市で利用されていた長方形や円形の母室は、エルサレムと同様に一例も確認されなかった。このような共通点がある中で、アブードやキルベト・クルカッシュの墓地でアルコソリアやクアドロソリアが確認されたことは特に重要な点である。前述のように、アルコソリアとロクリが共伴する事例はエルサレムでも少なく、1 世紀においてアルコソリアは普遍的な構造ではなかった。溝を持つアルコソリアが一般的になり、それらを連ねる独立したアルコソリア墓が東地中海岸南部地域に広がっていくのは、エルサレムが陥落し神殿が崩壊した後の 2 世紀以降である。エルサレムでも稀なアルコソリア、クアドロソリアが小さな町の墓地にまで普及していることを加味すると、アブードとキルベト・クルカッシュの墓地の成立が神殿崩壊後に位置づけられる可能性もある。前述のように、アルコソリアが 1 世紀以降に利用され始めた構造であることは確かであり、時代毎の傾向があるとはいえ特定の年代を示すことのできない母室とは異なり、墓の年代推定にあたって有用な構造であるといえるであろう。

本研究で行った考古学的踏査では、パレスチナ自治区の考古学的に困難な状況の中で、例え踏査であっても一定の情報を得ることが可能であることを示すことができた。これまでのパレスチナ自治区における墓の踏査については情報不足であり、この不足を補うことができる調査手法を確立できたことは今後の踏査に資するだろう。しかしながら、踏査による情報は限られたものであり、この情報によって推定された年代では第 2 章のような分析を行うことは難しい。この情報の不足を解消するためには、前節の最後で述べたように発掘調査を行う必要があるだろう。盗掘された墓であっても、例えばアブードやキルベト・クルカッシュのように、盗掘の際の残土が墓内や墓外に堆積している場合がある。このような残土の発掘を行えば、表採土器よりも良好且つ多量の土器片を得られる可能性が高い。また、シンジルで見られたように堆積物で埋まっている墓であれば、開いている墓よりも遺物が残存している可能性がある。このような発掘調査を行えば、出土遺物に基づく年代決定をすることができると考えられる。

情報不足を補うもう一つの方法として、パレスチナ観光・遺跡庁が管理している未報告の墓の情報の整理が挙げられる。発掘調査による遺物やローカスなどの情報が未整理の状態でパレスチナ観光・遺跡庁に保管されているため、これらの整理作業を行うことで一つ目と同様により多くの情報を得ることができるといえる。

いずれにせよ、現在パレスチナ自治区をフィールドにユダヤ人の墓について積極的に研究を行っている研究者はおらず、情報を積み重ねるためには新しく発掘調査を行う必要があると考えられる。しかし、パレスチナ自治区における墓の発掘調査を行うことは困難であるため、まず過去の発掘調査の成果からパレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布を読み解く必要がある。よって、次節では本節の踏査の成果と過去の発掘調査・踏査に基づく情報を合わせることで、ユダヤ・サマリア地域間における第二神殿時代後期の墓の分布を検討する。

第 4 節　パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布 ―ユダヤ・サマリア地域間の事例から

第 2 節で述べたように、パレスチナ自治区の中でもエリア A、B が主体の地域は、エリア C と比較してイスラエルによる調査・報告が少なく、特に情報が不足している地域である。とりわけ、ユダヤ・サマリア地域間の情報は少なく、第 3 節で行った踏査もこの地域の様相の一端を明らかにするために行った。前節の最後で述べたように、踏査を行った墓の幅のある年代推定は可能であり、過去の発掘調査・踏査の情報を合わせれば、ヘレニズム時代・ローマ時代といった幅の広い年代での分布の傾向を読み取ることができるだろう。よって本節では、踏査の成果とこれまでの情報を合わせることで、ユダヤ・サマリア地域間における第二神殿時代後期の墓の分布を検討する。これによって、パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布の一端を明らかにすると同時に、分布について現在の状況を考慮した議論を行うことが可能となる。なお、イスラエルによる調査が盛んであるパレスチナ自治区の他のエリアの分布は、次章で取り扱う。

墓の分布を検討するにあたって、まずユダヤ・サマリア地域間に位置する墓について情報を収集した。*Hadashot Arkheologiyot – Excavations and Surveys in Israel*、*Israel Exploration Journal*、*Palestine Exploration Quarterly*、*'Atiqot*、*IAA Report* の学術雑誌や発掘報告書について、loculi tomb、loculi、kokhim、burial cave、rock-cut tomb の用語が見られる報告・論文を集め、その後に墓の年代について検討を行った。本研究では第二神殿時代後期の墓について取り扱うため、前 2 世紀～1 世紀の期間に当てはまらない墓は対象外とした。また、ローマ時代やローマ時代からビザンツ時代としか同定できない墓については、前 1 世紀と 1 世紀を利用期間に含む可能性があるため「前 1 世紀以降の墓」として別枠で年代を設定した。その中で、アルコソリアやフレスコなど 1 世紀以降にみられる特徴を持っている墓は、「1 世紀以降の墓」と年代を設定した。

前 2 世紀～1 世紀の期間に当てはまる墓は、その年代が出土遺物によって同定されていなければ、対象から外した。ロクリ墓であること、建築装飾が施されたファサードを持つこと、オシュアリが利用されていることなどを年代決定の根拠としている墓がこれに該当する。ロクリ墓は第二神殿時代後期からビザンツ時代に至るまで利用されている墓であり、ロクリ墓であることは年代決定の基準にはならない。また、母室の形態によって年代決定を行っている報告は確認されなかったが、本研究の第 2 章で示したように母室の形態に時代毎の傾向はあるが、各時代に複数の母室タイプが併存しているため、母室の形態によって年代決定を行うことも難しいであろう。建築装飾が施されたファサードを持つことも第二神殿時代に限った特徴ではなく、第 1 章第 2 節で述べたように細部の装飾であっても年代決定の基準にはなりえない。オシュアリの存在は前 1 世紀末以降に墓が利用されていたことを示すことはできるが、第 2 章第 6 節で述べたように、利用の途中でオシュアリを使い始める場合があるため、墓の製作年代が前 2 世紀まで遡る可能性もある。このような理由から、これらを年代決定の基準としている墓は、年代不明に近い墓であるといえるであろう。また、パレスチナ探査基金による踏査（Conder and Kitchener 1881-1883）など、過去の踏査の情報はパレスチナ観光・遺跡庁によってデータベース化されているため、踏査の情報は提供頂いた情報を参照した。

これらの情報に基づいて、ユダヤ・サマリア地域間における第二神殿時代後期の墓の分布を確認する（表 12、図 108）。発掘調査によって前 2 世紀～1 世紀に利用されていることが明らかである墓地は、中

表 12. ユダヤ・サマリア地域間における第二神殿時代後期に属する墓地及び可能性のある墓地

遺跡名	墓のタイプ	墓の年代	母室形態	子室形態	墓の数	埋葬方法	装飾の施されたファサード	調査方法	調査報告
Dar ed-Darb	ロクリ墓	1世紀～ビザンツ時代	段型	標準型	1		○	踏査	Magen 2008
	クアドロソリア墓				1			踏査	
Kh.Kurukush	ロクリ墓	1世紀～ビザンツ時代	平坦型	標準型、小型	1		○	踏査	Conder and Kitchener 1881-1883; Magen 2008
			コの字型	幅広型	3				
	横穴墓(ロクリ墓？)				2		○(１基のみ)		
Kh.el-Qutt	ロクリ墓	１世紀	ロの字型	標準型	1			発掘調査	Raviv et al. 2016
			平坦型	標準型、小型	1	オシュアリ			
	ロクリのみ			標準型	1				
Duma	ロクリ墓	１世紀～ビザンツ時代	平坦型	標準型、幅広型	1			踏査	Hamran and Sion 1994
Sinjil	ロクリ墓	前１世紀～ビザンツ時代	コの字型	標準型、幅広型	1			踏査	
			不明	標準型、小型	1				
Aboud	ロクリ墓	1世紀～ビザンツ時代	ロの字型	標準型、幅広型・小型	4		○(１基のみ)	踏査	Conder and Kitchener 1882; Magen 2008
			平坦型？	標準型	1		○		
			ピットあり	標準型・小型	1		○		
			不明	標準型	1				
	ロクリ単独墓			標準型(Ｉb)					
Kh.Tibne	ロクリ墓	前１世紀～ビザンツ時代	ロの字型	標準型	1		○	踏査	Conder and Kitchener 1882; Magen 2008
Jifna	ベンチ墓	前２世紀	コの字型	四隅	1	集骨		発掘調査	Zelinger 2001
Beitin	ロクリ墓	前１世紀	コの字型	標準型、標準型(Ｉb)、小型	1	集骨、オシュアリ？		発掘調査	杉本他 2014; 杉本他　2015
Bil'in	ロクリ墓	前１世紀～ビザンツ時代	平坦型	標準型、小型	1			発掘調査	al-Houdalieh et al. 2017
Saffa	ロクリ墓	1世紀～ビザンツ時代	ロの字型	標準型、小型	2			発掘調査	al-Houdalieh 2014; al-Houdalieh et al. 2017
			平坦型	標準型、小型	1	集骨			
	アルコソリア墓				3				
Beit Ur al-Tahta	ロクリ墓	前１世紀	平坦型	標準型、幅広型	2			発掘調査	Peleg 2004
Tell en-Nasbeh	ロクリ墓	前１世紀	ロの字型	標準型、幅広型(Ⅱd)	1			発掘調査	McCown 1947
			平坦型	標準型、幅広型	1	集骨、オシュアリ			
		前１世紀～ビザンツ時代	ロの字型	標準型、小型	1				
Khirbet Beit Sila	ベンチ墓	前２世紀	コの字型	四隅	1	集骨		発掘調査	Batz 2003
Qalandiya	ベンチ墓	前２世紀	コの字型	四隅、なし	2			発掘調査	Magen 2004
En Perat	横穴墓	前１世紀			1			発掘調査	Freiman 2017

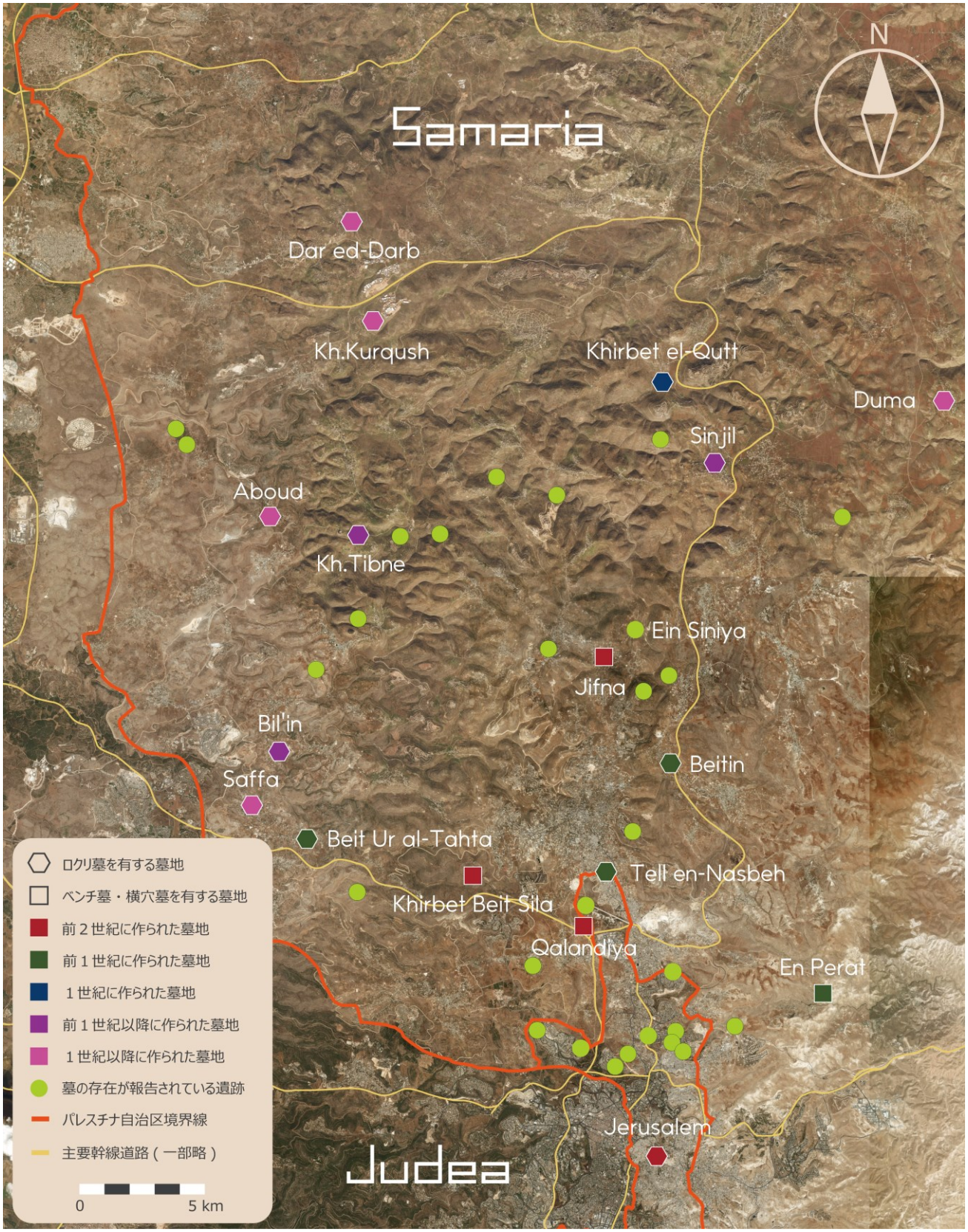


図 108. ユダヤ・サマリア地域間における第二神殿時代後期の墓地の分布（Mapbox より作成）

※「墓の存在が報告されている遺跡」については、パレスチナ観光・考古省より提供頂いたデータと位置情報を利用。その他は各報告書に記載されている位置情報を使用。

央山地の特に急峻な地域やシンジル以北のサマリア地域に近い地域にはほとんど分布していないことが分かる。空中写真から判別できるように、これらの地域に現在は中・大規模な町はなく、第二神殿時代後期においても主要な都市や町が置かれていたわけではない（Roll 1983, 139; Magness 2012, 69, 137）。分布の空白は情報の不足によるものではなく、第二神殿時代後期のこれらの地域において居住地が少なかったことが主な要因だと判断できるであろう。

これまで述べてきたように、ユダヤ・サマリア地域間の発掘調査が行われ、年代が明らかである墓は限られたものであったが、本章で行った踏査の結果と合わせると時代毎の傾向がみえてきた。前 2 世紀には、ロクリ墓はエルサレムにのみ確認され、カランディヤなどのユダヤ地域近辺でのみベンチ墓が利用されていた。前 1 世紀になると、ユダヤ地域のエルサレム以外へもロクリ墓が広がっていき、1 世紀にはユダヤ地域のみならず、ユダヤ・サマリア地域間でもロクリ墓が利用されるようになった。このようなロクリ墓の分布の拡大は、おそらくハスモン朝成立以降の領土拡張によってユダヤ地域以外にユダヤ人が入植したこと、それに伴ってユダヤ地域の中でもエルサレム以外の居住地が発展したことと関係しているであろう。前 1 世紀以降にユダヤ・サマリア地域間に作られた墓地のいくつかは、ハスモン朝時代以降の入植に伴って成立したものであると考えられるが、同時にエルサレムが陥落した後に各地に成立したユダヤ人共同体の墓地も含まれていることが推測される。現在の考古学的情報では、これらの墓地が第二神殿時代後期のものか、第二神殿時代以後のものかを区別することはできず、ユダヤ・サマリア地域間における前 1 世紀以降のロクリ墓の広がりは不明瞭だといえる。

また、前 1 世紀にロクリ墓が出現するベイティンやテル・エン・ナスベは、ジフナやカランディヤのように墓地の成立が前 2 世紀に遡る可能性が考えられる。ベイティンはオルブライトやケルゾーによるテル・ベイティンの発掘調査によって、ヘレニズム時代に大きな町が作られていたことが明らかになっている（Kelso 1968; Kelso 1993）。地理的にみても、ベイティンは東西南北の主要交通路の交点に位置しており、前 2 世紀の段階でユダヤ人の居住がなく墓地が作られていなかったとは考え難い。慶応義塾大学調査隊による分布調査では 50 基以上の横穴墓が確認されており（杉本　2014, 119）、発掘調査によって年代が明らかである墓はその中の 1 基（図 109）のみである。そのため、未発掘の横穴墓の中に前 2 世紀に作られた墓が存在する可能性はあるだろう[50]。テル・エン・ナスベも同様に、発掘調査によってヘレニズム時代に大きな町があったことが明らかになっており、ハスモン朝時代以前からユダヤ地域の下位の行政機関が置かれていたことが分かっている（Meyers and Chancey 2012, 23）。前述のように、テル・エン・ナスベも全ての墓の発掘調査が行われていないため、未発掘の墓の中に前 2 世紀に作られた墓が存在した可能性はあるが、墓地が現存していないため今後の調査で確認することは難しい。ベイティンについては発掘調査によって全容を解明することはできるが、現在の考古学的情報からは前 2 世紀の墓地であると結論付けることは難しいであろう。

前 1 世紀以降の墓の広がりに不明瞭な点はあるが、前 2 世紀にベンチ墓やロクリ墓などの石切墓の利

[50] ベイティンの既発掘の墓である RT49 では鉄器時代に特有のランプが出土しており、墓の内部の遺物が散乱する墓の前部の残土においても鉄器時代の土器が出土している（杉本 2014, 134）。杉本は鉄器時代のベンチ墓に特有のリポジトリが RT49 に確認されなかったことから、この墓が鉄器時代に作られた可能性が低いと指摘しているが（杉本 2015, 531）、本論の第 2 章 5 節及び図 37 で示したように、リポジトリが作られない場合も多い。出土土器から考えれば、ベイティンの RT49 が鉄器時代Ⅱ期にベンチ墓としてまず作られた可能性は高いだろう。RT49 は盗掘の被害を大きく受けていたため、正確な変遷を追うことは難しいが、おそらく前 2 世紀から前 1 世紀の間に鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓にロクリが付け加えられる形で成立したロクリ墓であると考えられる。

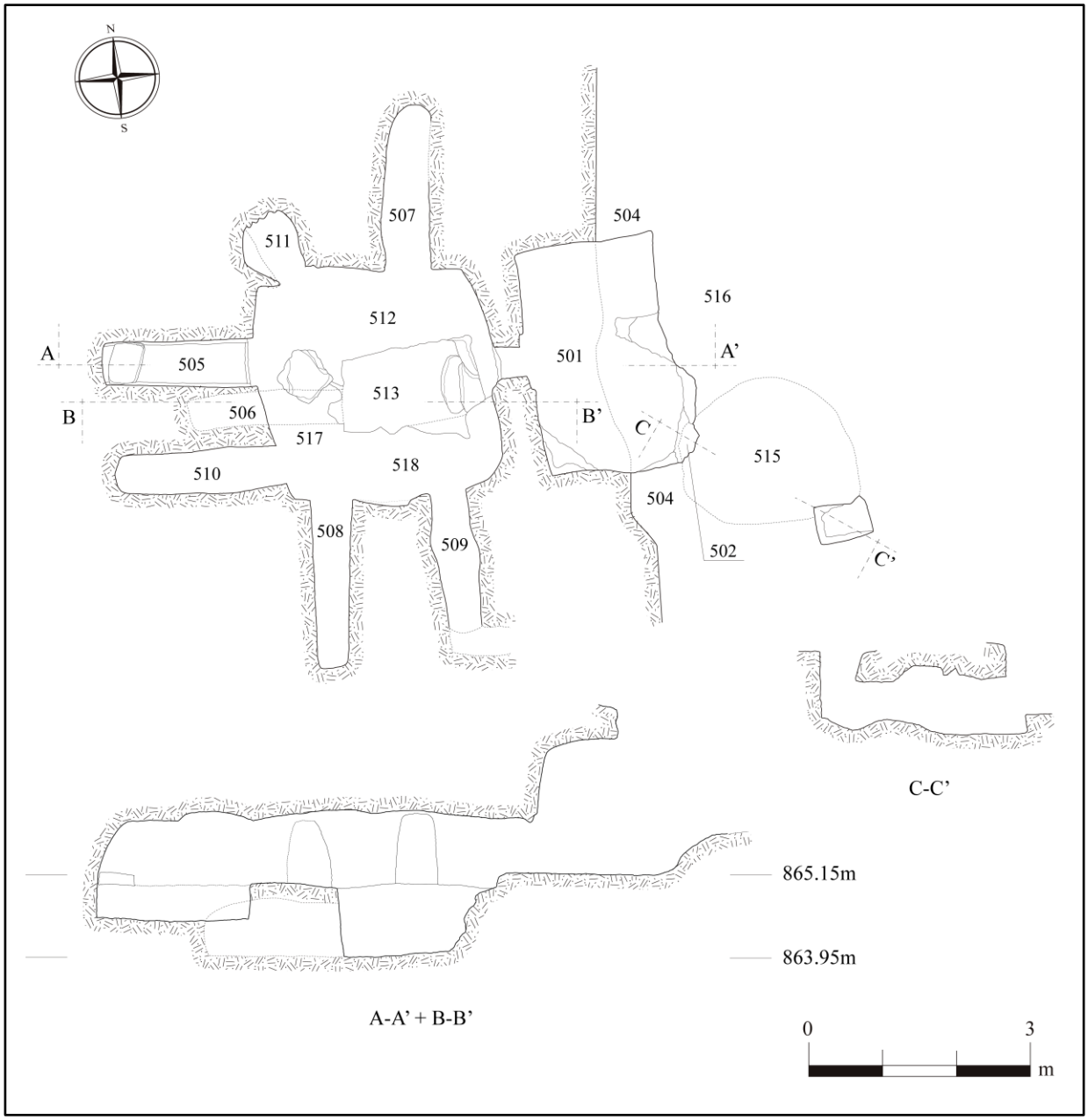


図 109. RT49, ベイティン

用がユダヤ地域周辺に限られることは明らかである。また、前 1 世紀以降のロクリ墓の広がり方からは、サマリア地域ではなくユダヤ地域から徐々に範囲を広げていることが読み取れる。パレスチナ自治区の情報不足によって不明瞭な部分はあるが、前 2 世紀の石切墓の分布は限定的であり、ユダヤ・サマリア地域間へロクリ墓が広がっていったのは前 1 世紀以降、特に 1 世紀以降であることは間違いない。サマリア地域やイドマヤ地域、沿岸部などの分布を検討しなければ結論付けることは難しいが、第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域におけるロクリ墓の拡散をユダヤ人が担っていた可能性が考えられる。

パレスチナ自治区、特にユダヤ・サマリア地域間の墓の様相はこれまで不明瞭であったが、考古学的踏査と分布状況の把握によって、少なくとも現在のパレスチナ自治区の考古学的状況を加味した議論ができるようになったといえる。ユダヤ・サマリア地域間における墓の分布の空白及び不足は、二つの要因によって生じている。一つ目は、ユダヤ・サマリア地域間における第二神殿時代後期の居住地の少なさであ

る。前述のように中央山地の急峻な地域には主要な街道もなく、そもそも居住地が少ない状況であった。石切墓は簡素な墓と違って、ある程度の規模の居住地がなければ成立し得ない墓であり、居住地が存在しない地域に石切墓が分布していないことは当然であるといえるだろう。急峻な地域に墓が存在しないとはいえないが、過去の悉皆的な踏査でもほとんど確認されていないことから、ユダヤ・サマリア地域間の急峻な地域において墓が少ないことは疑いない。

二つ目は、盗掘による情報不足である。ユダヤ・サマリア地域間の海岸平野に下っていく地域では、アブードなどの大規模な墓地やビリンのような小規模な墓地が多数分布していることが明らかになった。しかし、全ての墓が盗掘の被害を受けており、遺物を欠いている状況であった。特にビリンやサッファを除いた墓は盗掘者によって完掘されてしまっており、わずかな土器片が墓内や墓外に残っているのみであった。表採土器や墓の特別な装飾・形態などから、ヘレニズム時代とローマ時代の区別をつけることは可能であったが、盗掘による遺物不足の中での年代推定では、第二神殿時代とその後の時代の区別をつけることは不可能だと考えられる。これによって、ユダヤ・サマリア地域間では結果的に「ローマ時代～ビザンツ時代までのいずれかに属する墓」が大量に生じてしまっているのである。パレスチナ自治区の他の地域やイスラエルでも盗掘は行われているが、パレスチナ自治政府が文化財管理を行っているエリア A、B では、盗掘による被害が特に深刻であることがこの傾向に拍車をかけていると考えられる。このようなローマ時代～ビザンツ時代までのいずれかに属する墓は、ローマ時代～ビザンツ時代、十字軍時代といった大きな範囲での分布を読み取ることには利用できるかもしれないが、第二神殿時代後期の中でさらに細かい年代幅で分布を検討する際に利用することは難しいであろう。そのため、海岸平野に下っていく地域では、現在のパレスチナ自治区の状況による情報の不足を要因として、分布の空白及び不足が生じてしまっている。この不足は解消するべき問題点であるが容易に解決できるものではない。現状では、この問題を踏まえた上で、これらの墓地が前 1 世紀以降のロクリ墓が拡散していく流れの中に位置づけられる可能性があると述べるに留まるほかない。

第 5 節　おわりに

本章では東地中海岸南部地域におけるユダヤ人の埋葬のヘレニズム化を明らかにするため、現在のパレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布に関して検討してきた。パレスチナ自治区における墓の様相は時代に関わらず不明瞭であり、パレスチナ自治政府の墓に関する文化財管理の在り方についてもイスラエルより情報が不足していたからである。

過去の踏査・発掘調査の情報を整理することで、パレスチナ自治区における考古学的調査の状況をまず読み解いた。パレスチナ自治区の文化財について、パレスチナ自治政府による文化財管理が始まる以前の調査やイスラエルの所管であるエリア C の調査、学術調査などは報告がなされているが、パレスチナ観光・遺跡庁には、定期的に独自の雑誌や報告書を刊行する体制がなく、パレスチナ自治区側の報告はほとんど行われていない状況であった。また、行われている調査は発掘調査よりも踏査が多く、考古学的情報を得ることが難しいことも明らかになった。過去の調査報告の情報だけでは分布を検討することは難しく、特に「分布の空白」が現在の調査状況によるものか、第二神殿時代後期の状況によるものかを判別することはできなかった。こ

このような状況を踏まえて、次にパレスチナ観光・遺跡庁における聞き取り調査を行い、パレスチナ観光・遺跡庁による墓の調査・管理状況を検討した。パレスチナ観光・遺跡庁によって、過去の調査の情報を基にしたデータベースが作られており、パレスチナ自治区の遺跡について踏査レベルの情報は把握されていた。このデータベースをもとに管轄する地域の遺跡の数や状態を確認するプロジェクトが進められており、墓に関してもパレスチナ観光・遺跡庁による発掘調査や踏査が行われていた。しかし、墓は盗掘の主な対象となっており、パレスチナ自治区の墓の大半は遺物がない、もしくは極めて少なく、パレスチナ観光・遺跡庁も墓のおおよその年代を同定することしかできない状況であった。パレスチナ観光・遺跡庁による墓の発掘だけを目的とした調査はほとんど行われておらず、墓の救出調査、特に盗掘を受けたことによる墓の調査が最も多く行われていた。この調査に由来する未報告の墓は多数あるが、パレスチナ観光・遺跡庁の遺物や発掘調査に関わる情報の管理体制の不備によって、特定の墓に関する情報を探し出すことは困難な状況となっていた。パレスチナ自治区では墓に関する様々な調査が行われており、多くの墓が分布することが明らかとなったが、パレスチナ観光・遺跡庁から得られる情報を加えたとしても、パレスチナ自治区における墓の分布、特にイスラエルによる調査数が少ないユダヤ・サマリア地域間の分布の不足を解消することはできなかった。

そこで、本研究ではまずユダヤ・サマリア地域間の踏査を行なった。発掘調査とその成果の整理・報告を行うことが不足を解消するために最適であるが、踏査についても墓の図面や写真などの詳細な情報が不足しているためである。ユダヤ・サマリア地域間の大規模な墓地であるアブードとキルベット・クルカッシュ、小規模な墓地であるシンジル、アイン・シニヤ、ユダヤ地域の大規模な墓地であるテル・エン・ナスベについて考古学的踏査を行い、墓の形態や立地、周辺遺跡について記録し、大まかな墓の年代の推定を行った。結果として、盗掘の被害は深刻であり、表採土器でさえ十分な量はなかったが、墓自体は形態の判別ができる程度の被害に留まっている墓が多かった。一方で、特に小規模な墓地は盗掘や土地開発による破損が著しく、大規模な墓地であってもテル・エン・ナスベのように消失してしまっているものも確認された。墓が損傷している場合でも、アルコソリアなどの構造やフレスコ、表採土器によって、ほとんどの墓がローマ時代～ビザンツ時代、特に 1 世紀以降の墓地である可能性が高いことが明らかになった。

過去の調査の情報と本研究で行った踏査の情報を合わせることで、最後にユダヤ・サマリア地域間における第二神殿時代後期の墓の分布を検討した。細かい年代幅での分布を確認することは難しいが、分布からは、前 2 世紀から 1 世紀にかけてロクリ墓の分布がユダヤ地域より広がっていく傾向がみられた。ただし、第二神殿時代とその後の時代の区別をつけることが現在の情報からは困難であるため、前 1 世紀以降の分布の展開は不明瞭であった。中央山地の急峻な地域の分布の空白は、おそらく同地域における第二神殿時代後期の居住地の少なさが要因であり、この分布の空白は第二神殿時代後期当時の状況によるものであると考えられる。それと同時に、ユダヤ・サマリア地域間の一部の地域では、現在のパレスチナ自治区の状況による情報の不足を要因として、分布の空白及び不足が生じてしまっていると考えられる。ユダヤ・サマリア地域間の海岸平野に下っていく地域などでは、盗掘によって考古学的情報が不足しており、第二神殿時代後期の中で細かい年代幅で分布を検討する際には利用できない状況であるためである。

このように、本章では現在のパレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布に関して検討してきたが、過去の発掘調査・踏査の情報を加えたとしても、パレスチナ自治区の情報の不足を完全に解消

することは困難であった。しかしながら、全く不明瞭であったパレスチナ自治区の墓の状況・分布状況の一端が明らかになり、なぜ分布の空白及び不足が生じてしまっているかを把握できたことは、次章で東地中海岸南部地域における墓の分布を検討することに資するであろう。また、図 106 で示したように、前 2 世紀から 1 世紀にかけてユダヤ地域よりロクリ墓の分布が広がっていく傾向があることについても、東地中海岸南部地域における墓の分布を検討する際に考慮すべき点であるといえる。本章で得られた傾向と情報をもとに、次章では東地中海岸南部地域における墓の分布を明らかにし、第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬のヘレニズム化を考察する。

第 4 章 第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬のヘレニズム化

第 4 章　第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬のヘレニズム化

第 1 節 はじめに

本論では第 2 章でエルサレムにおけるヘレニズム化を検討し、第 3 章でパレスチナ自治区における墓の状況とユダヤ・サマリア地域間の分布の一端を明らかにしてきた。これによって、エルサレムのユダヤ人の埋葬におけるヘレニズムに対する相剋をもとにした議論を行うことができるとともに、現在のパレスチナ自治区の状況を踏まえた分布の議論を行うことが可能となった。よって、本章ではこれまでの内容を踏まえた上で、第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における墓の分布状況、墓の種類、埋葬方法を確認し、東地中海岸南部地域における多様な埋葬のなかにユダヤ人の居住域における埋葬を位置付けることで、ユダヤ人の埋葬のヘレニズムに対する相剋を考察する。

前章でユダヤ・サマリア地域間の分布を検討する際に明らかになったように、墓の分布には墓以外の情報も関係している。例えば、ユダヤ人のロクリ墓であれば、墓だけが独立して存在しているわけではない。その場所がユダヤ人の支配領域や居住域であり、墓を作ることが可能な地形や地質を持ち、ロクリ墓を利用する富裕層の人々が居住する規模の都市や町が近くに存在しなければ、ロクリ墓は作られない。簡素な埋葬であれば定住の必要はないかもしれないが、石切墓のような墓であれば、ある程度の居住地を構えなければ墓を作り管理することは難しい。また、平坦な地形で砂に覆われているような地域では、石切墓を製作すること自体が困難である。つまり、当時の支配領域・居住域や街道、地形・地質などを合わせて検討しなければ、墓の正確な分布の背景を捉えることはできないといえる。よって、次節では、まず第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における支配領域の変遷を整理し、ユダヤ人の墓が分布する可能性のある範囲について検討する。

第 2 節　第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における領域の変遷

アレクサンドロス大王の東征後、東地中海岸南部地域を支配に置くために、新しい都市の建設、または既存の都市をギリシアのポリスとして再設立する試みが行われた。このような都市として、サマリア（後のセバステ）、ベト・シェアン（後のスキトポリス）、バニアス、アッコ（後のプトレマイス）、ドル、ストラトンの塔（後のカエサリア）、ガザ、マレシャなどが挙げられる。ギリシア都市のネットワークは、商業や文化の分野でも互いに協力し合うことを可能とし、新しい文化を広げていく影響を持つようになった（Meyers and Chancey 2012, 14）。プトレマイオス朝時代になっても都市化、都市の改造は進んでいき、プトレマイオス朝の権力者は東地中海岸南部地域を支配し、税を徴収するために多くの兵士や商人などの役職者を派遣した。序章第 2 節で一部指摘したように、プトレマイオス朝時代には海岸平野やイドマヤ地域は発展したが、中央山地に関しては、少なくとも前 4 世紀から前 3 世紀の間はほとんど人がいない状態が続いていた。ユダヤ地域はエルサレムを中心としていたが、エルサレムでさえダビデの町と神殿の丘に限られた小さな居住地でしかなかった（Magness 2012, 71）。また、サマリアはギリシア人の入植地となり要塞化されたため（図 110）、元々居住していたサマリア人はシェケムに移動した（Magness 2012, 70）。

図 110. ヘレニズム時代の塔，サマリア（Tappy 2014, Fig.4.22）

図 111. アクラ要塞と考えられている要塞跡，エルサレム

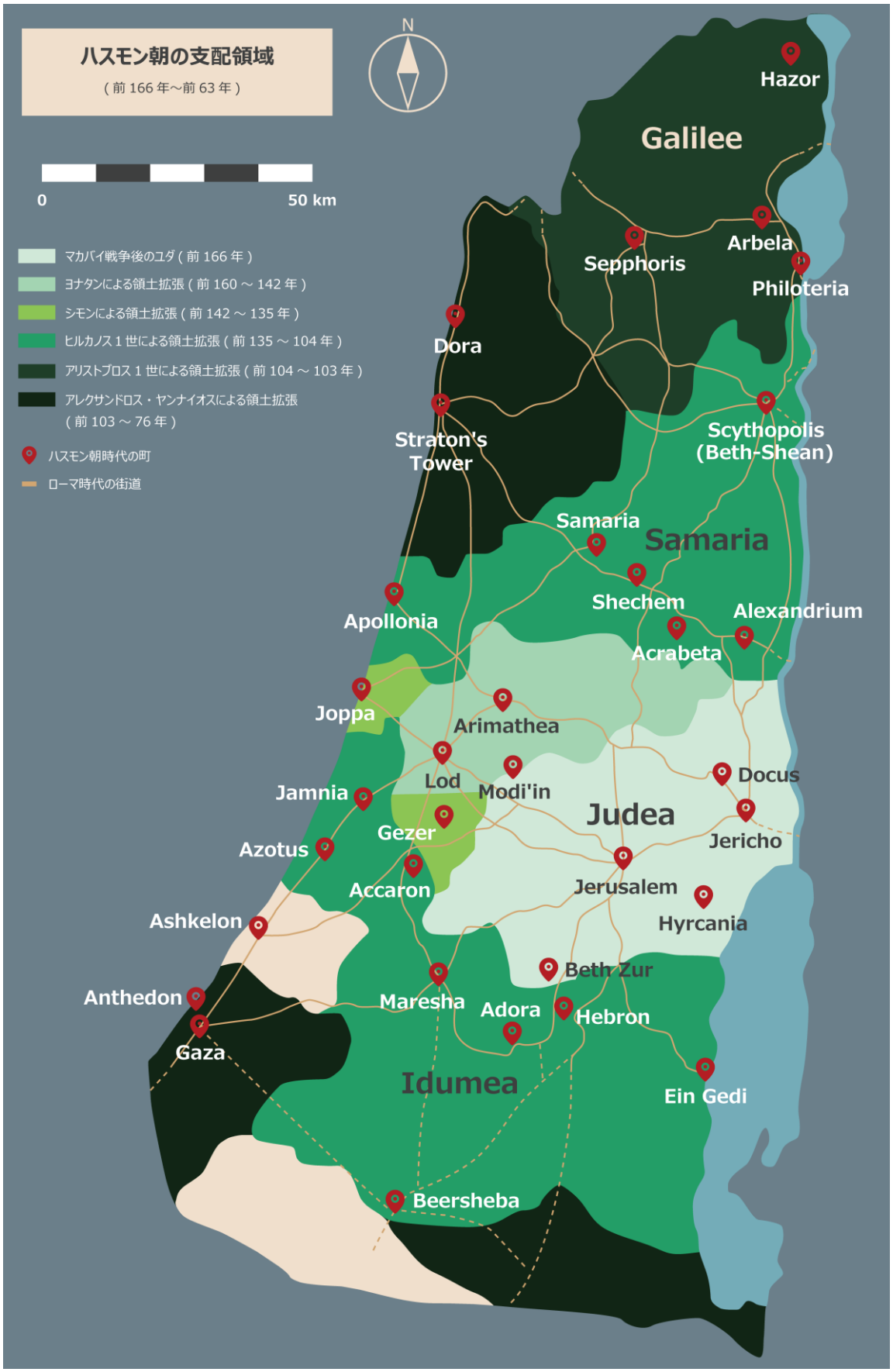


図 112. ハスモン朝の支配領域（Roll 1983; Magness 2012; Meyers and Chancey 2012 参照）

プトレマイオス朝とセレウコス朝のシリア・パレスチナの所有権をめぐる争いは 1 世紀以上も続き、セレウコス朝のアンティオコス 3 世がバニアスの戦いでプトレマイオス朝の軍を破り、この地域を支配するまで決着はつかなかった。東地中海岸南部地域はセレウコス朝の支配下に入ったが、ローマ帝国の台頭もあり、セレウコス朝はローマ帝国への対策に注力するようになった。前 2 世紀は政治的に急変した時期であり、東地中海岸南部地域は勢力図の変化の中に置かれることになった。このような政治的状況はヘレニズムの浸透を妨げるものではなく、個々の社会ではヘレニズムのどの側面を採用し、どの側面を拒否するかという対立が生じた。この対立はセレウコス朝下のエルサレムでもみられたが、セレウコス朝の支配が弱まったことで政治的権力や神官職を巡る内輪の派閥争いは、自治権の拡大という新たな政治的背景の中で展開されることになった（Meyers and Chancey 2012, 26）。アンティオコス 4 世はこの不安定な状況に対応するため、エルサレムに侵攻して神殿を略奪し、前 168 年にエルサレムを監視するための守備隊を置くアクラ要塞を建設したとされている[51]（図 111）。

このような状況下でマカバイ家が指導者として台頭し、前 167 年にはセレウコス朝に対するマカバイ戦争が起こった。ユダとその兄弟であるマタティアスが率いるユダヤ人部隊はエルサレムを奪還し、神殿の再奉献に成功したが、セレウコス朝との戦いは何十年も続くことになり、エルサレムの支配者は幾度も変わることになった。戦いはユダヤ地域に留まらず、ユダヤ軍は周辺地域に大規模な侵攻を行った。シモンが前 142 年頃にアクラの要塞からセレウコス朝の最後の守備隊を追放したことで、セレウコス朝からの半独立を果たしハスモン朝が確立した。セレウコス朝の脅威はあったものの、ハスモン朝は領土の拡張（図 112）に努め経済基盤を安定させていった。考古学的にマカバイ戦争から続く領土の変化を捉えることは難しいが、前 2 世紀後半から利用されるようになったミクヴェ（ユダヤ人の儀式用風呂）が伴う遺跡の状況からユダヤ人の居住地を同定することが可能である（Meyers and Chancey 2012, 31）。

セレウコス朝の脅威が減少したことを契機にハスモン朝のヒルカノス 1 世は領土の拡大に乗り出し、イドマヤ、サマリア、トランスヨルダンを征服した。ヒルカノス 1 世は領土の征服に伴って、非ユダヤ人のユダヤ化政策を推進し、ユダヤ教への改宗を迫り、受け入れられなければ追放した。例えば、マレシャはマカバイ戦争の際にユダヤ人の反乱に対する拠点として利用されたことを契機に衰退していたが、前 112 年にヒルカノス 1 世によって征服され、ユダヤ人が入植すると共にイドマヤ人はユダヤ教に改宗した。一方で、サマリア人はヤハウェを崇拝している人々であったが、ユダヤ人からは分裂主義者とみなされていたため、ヒルカノス 1 世は彼らを改宗させず、ゲリジム山にある神殿や集落、サマリアの都市を破壊した（Tappy 2014, 85）。このユダヤ化政策の動機は明らかでないが、セレウコス朝のヘレニズム化と非常に似ており、ユダヤ教を異民族の統一手段として利用したと考えるのが最も理にかなっているであろう（Magness 2012, 95）。ユダヤ化政策に加えて、ハスモン朝は各地にユダヤ人を入植させ、新しい集落を増やしていった。そのため、東地中海岸南部地域の大部分の人口は、ユダヤ人を中心として、改宗した異民族や異教徒が混在するものとなっていった。

アレクサンドロス・ヤンナイオスのもとでハスモン朝の領土は最大になったが、後のアリストブルス 2 世とヒルカヌス 2 世の兄弟の権力争いによる混乱によって、ローマ帝国の介入を許すことになった。東地中海岸南部地域はローマのシリア総督の統治下に置かれるようになり、パルティアの侵攻などを経て

[51] アクラ要塞に関する明確な考古学的証拠は発見されていないため、正確な場所は不明である。近年、エルサレムのギヴァティの発掘調査でセレウコス朝時代の塔や防壁を備えた要塞が発見され、この要塞がアクラ要塞である可能性が指摘されている（https://mfa.gov.il/MFA/IsraelExperience/History/Pages/Has-the-Acra-from-2000-years-ago-been-found-3-Nov-2015.aspx、参照 2021/10/20）。

図 113. ヘロディウム

親ローマ派であるヘロデがユダヤ人の王となり、前 37 年にはヘロデはこの地域を完全に掌握した。ヘロデはローマ文化に影響を受け、ローマの建築様式とヘレニズムの建築様式を合わせた大型建築物や公共建造物の建設を進めていった。ヘロデの建築事業によって、エルサレムやカエサリア、サマリアなどの都市が整備され、ヘロディウム（図 113）やマサダなどの要塞が作られていった。ヘロデの死後は息子たちに領土が分割され支配されたが、6 年にユダヤ地域はローマ帝国の直轄領となった。ハスモン朝時代の領土は、分割後もガリラヤ地域の拡大を除いてほとんど変わっておらず、領土の拡大より建築事業による各地域の充実に重きが置かれていたと考えられる。

すなわち、第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における歴史的変遷には、その内容を整理するといくつかの画期があることが分かった。一つはセレウコス朝時代である。同時代には、海岸平野、イドマヤ地域、サマリア地域にセレウコス朝の入植地が作られ、在地の人々とギリシア人が混在している様相であった。一方で、ユダヤ地域はセレウコス朝の支配下に置かれながらもギリシア人の入植地となっておらず、エルサレムに要塞が建設されたのはセレウコス朝時代の末である。このような状況から、セレウコス朝時代からハスモン朝が成立し安定するまで、ユダヤ人の墓の分布はエルサレムを中心とした狭い範囲に限られたことが推測される。また、海岸平野、イドマヤ地域、サマリア地域では、在地の人々とギリシア人の墓がそれぞれ確認されるであろう。

二つ目は、マカバイ戦争以後、特にヒルカノス 1 世以降のハスモン朝時代である。ハスモン朝は領土を広げ、海岸平野、イドマヤ地域、サマリア地域の大部分を征服した。これによって各地にユダヤ人の居住地が作られていき、ユダヤ人の居住範囲は大きく拡大することになった。居住地が安定しなければ石切墓のような墓が作られることもないため、おそらく居住地の成立と墓地の出現には時間的なずれがあったと思われる。つまり、前 2 世紀の末から進んだ領土拡張の影響は、前 1 世紀には墓の分布に明確に表

れる可能性が高い。また、ユダヤ人が領土を広げたことから、ハスモン朝時代以降はユダヤ人以外の墓が減少していくことが推測される。

最後に、ヘロデ朝時代である。東地中海岸南部地域におけるヘロデの建築事業による都市の充実は、エルサレム以外の都市にロクリ墓が広がっていくことをより加速させたと考えられる。また、ハスモン朝時代末期の居住域の拡大と発展の影響がヘロデ朝時代には墓の分布にも表れていくことが推測される。このように時代毎の支配領域の変化と都市や町の発展は、第二神殿時代後期の墓の分布状況と密接に関係していると考えられる。

第 3 節　地形、地質、居住地、街道からみる墓地の立地

東地中海岸南部地域の地理的区分は主として 3 つ分かれる（図 114）。海岸平野、中央山地、ヨルダンの谷である。中央山地は南北に渡って広がっているが、ガリラヤ山地の南に位置するエズレルの谷が海岸平野から横切り分断している。エズレルの谷を除いて東西を自由に往来できる場所はなく、海岸平野から東へ向かう際には必ず中央山地を横断する必要がある。中央山地の頂部には鉄器時代より都市や町が作られており、ユダヤ地域の中心的な都市であるエルサレムも中央山地に位置する（図 115）。麦やオリーブ、ブドウ、イチジク、ナツメヤシなどは東地中海岸南部地域で広く栽培されているが、段丘を利用したオリーブ畑は中央山地でよくみられる光景である（図 116）。

中央山地の東には東アフリカ大地溝帯の一部であるヨルダンの谷が広がっている。ヨルダンの谷は世界で最も低い地表であり、海岸平野に位置するテル・アビブは標高約 5m、中央山地のエルサレムは標高約 800mである一方で、ヨルダンの谷に位置するエリコ（図 117）は海抜下約 240mである。ヨルダンの谷にはガリラヤ湖、ヨルダン川、死海が位置しており、ガリラヤ湖は貴重な淡水源である。中央山地が地中海からの風を防いでいるため、ヨルダンの谷はほとんど雨の降らない乾燥地帯となっている。その一方で、ガリラヤ湖からヨルダン川沿いは肥沃で水が多く、特にガリラヤ地域は緑豊かな環境である。中央山地からヨルダンの谷にかけては急峻な斜面であり、現在でも蛇行した道路を下っていくような険しい道のりである。

地中海に面した海岸平野は、レバノンとの国境からガザまで広がる肥沃な平野部である（図 118）。古来より港や通商路が置かれた地域であり、現在もイスラエルの大都市が多く位置している。中央山地とヨルダンの谷に比べれば中央山地から海岸平野はなだらかであるが、現在でも東西に抜ける経路は少なく、急峻な地形による隔たりは存在している。海岸平野では特に麦やナツメヤシなど平地を利用した作物が多く栽培されており、中央山地の農業風景とは異なっている。

街道や都市の立地もこの地理的状況に密接に関係しているといえる。ローマ時代以前の街道に関しては、考古学的証拠はほとんどなく、その情報の多くを文献史料に頼っている。新約聖書やヨセフスの記載には、第一次ユダヤ戦争以前の道路建設や維持に関する記述は一切みられないが、タルムードにはユダヤ人の指導者が巡礼者のためにエルサレムの道の整備に努めていたことが示されている（Roll 1983, 139-140）。ローマ時代の街道については、マイルストーンや岩盤を削って作られた階段、地面に敷かれた砂利や石などの考古学的証拠が東地中海岸南部地域の至るところで確認されており、当時の街道の様相が復

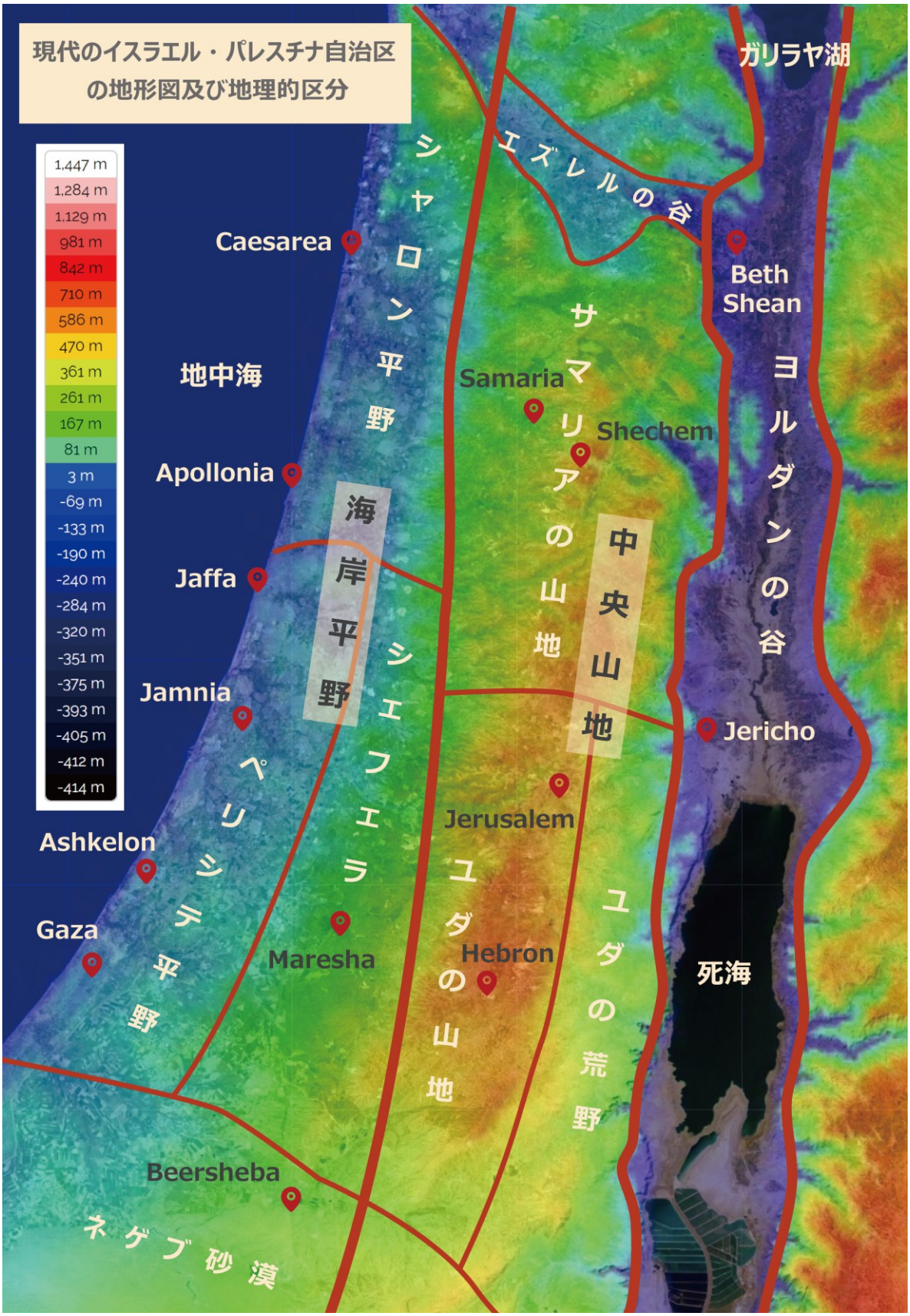


図 114. 現代のイスラエル・パレスチナ自治区の地形図及び地理的区分

（https://en-nz.topographic-map.com/maps/lbb3/Israel/より作成）

図 115. オリーブ山から旧市街を望む，エルサレム

図 116. 中央山地の景観，シンジル

図 117. テル・エリコからヨルダン川を望む

図 118. シェフェラの景観，マレシャ，聖アン教会

元されている（Roll 1983）。

ローマ時代の道路工事は、ユダヤ戦争に伴って急速な補給路、行軍路の整備の必要が生じたことに端を発しており、第一次ユダヤ戦争以降、大規模なプロジェクトとして徐々に進められていった。3 世紀の初頭には、東地中海岸南部地域の道路網は最大の発展を遂げ、南北・東西方向に街道が展開していた（図 119）。南北には、①カエサリア、アポロニア、ヤッファ、ヤムニア、ガザを通る沿岸の道路、②カエサリア、アフェック、リッダ、ベト・グヴリンを通り、中央山地に分岐を持つ道路、③レジオ、ジェニン、サマリア、シェケム、ゴフナ、エルサレム、ヘブロンを通り、中央山地の分水嶺上に位置する道路、④ティベリアス、ベト・シェアン、エリコを通り、エルサレムに抜けるヨルダンの谷に沿った道路の 4 つの街道が整備された。この南北の街道に交わるように東西にも街道が設けられた。海岸平野やヨルダンの谷の北部は都市同士を結ぶように緊密に街道が張り巡らされているが、中央山地は海岸平野やヨルダンの谷に下る街道がある一方で、東西方向の街道の数は多くはない。

ハスモン朝時代からローマ時代の都市や町（図 112、図 119）は、中央山地から海岸平野、ヨルダンの谷に下る斜面にはほとんど作られておらず、海岸平野の沿岸部とそれに近い内陸部、中央山地の分水嶺上、ヨルダンの谷の平野部に集中しており、分布に偏りがみられる。都市や町を結ぶ街道もそれに影響を受けており、南北の分水嶺上に都市や町が分布する中央山地の交通網は、他の地域と比較して発達しているとは言い難い。中央山地の東西の斜面に居住地が存在しないわけではないが、明らかに人口が少ない地域であると考えられる。このような地形、居住地、街道の情報から考えれば、墓の分布の空白が資料の不足とは異なる要因で生じている可能性が高いであろう。

また、これまでの情報を踏まえた上で、さらに地質を検討する必要がある（図 120）。中央山地と海岸平野のシェフェラは、石灰岩と白亜から構成される良好な岩盤を保有している地域である。マレシャでは「bell cave（鐘の洞窟）」（図 121）と呼ばれる石切場の跡が 800 基以上も存在しており、石灰岩は主な建築資材として利用されていた。エルサレムではチューロニアン期の岩盤から採石される特に白い石灰岩（メレケ、あるいはエルサレム石と呼ばれる）が様々な建築に重宝されてきた。この地域の地質と高低差のある岩壁を有する地形は、石切墓の構築に向いており、石切墓に限らずとも多様な種類の墓を構築することが可能な地域であるといえる。ヨルダンの谷は、ヨルダン川沿いは砂岩で構成されており、中央山地に近い西部は、中央山地と同様に石灰岩、白亜で構成されている。ヨルダンの谷も同様に石切墓の構築に適している地域であろう。一方で、シェフェラを除く海岸平野は、主として粘土、沈泥、砂で構成されており、これまでの地域と比べて石切墓に適している地質であるとは言い難い。シェフェラを除く海岸平野の地質と平坦な地形は、石棺墓などの墓に向いていると考えられる。鉄器時代の前 8 世紀末から前 6 世紀における埋葬タイプの分布（図 3）をみると、シェフェラを除く海岸平野では石棺墓、火葬、バスタブ棺など土葬が多く、石切墓は明らかに中央山地の遺跡に集中している傾向がある。ユダ王国にベンチ墓の分布が集中していることも影響しているが、沿岸部に石切墓がほとんど分布していないことは明らかである。鉄器時代の傾向を考えると、第二神殿時代後期にも同様にシェフェラを除く海岸平野に石切墓が少ないことが推測される。

第 2 節と本節で述べてきたように、支配領域や地形、地質、居住地、街道は墓の分布に大きく影響していると考えられる。盗掘による情報の不足やパレスチナ自治区の情報の不足の影響もあるが、第 2 節と本節で挙げた様々な要素によって墓の分布には偏りが生じる可能性が高い。墓の分布を解釈する際には、この偏りを踏まえて検討していく必要がある。

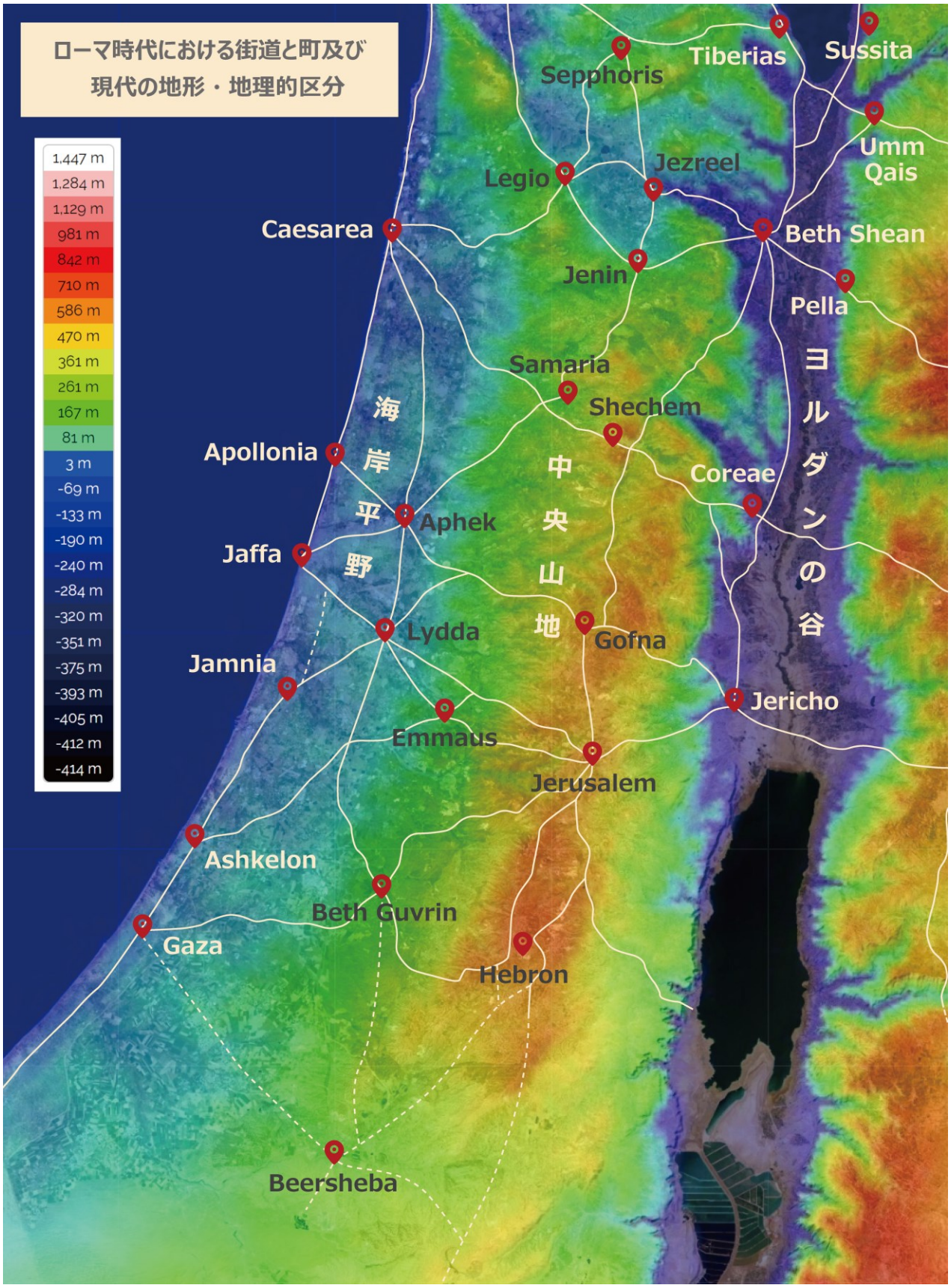


図 119. ローマ時代の街道と町及び現代の地形・地理的区分

（https://en-nz.topographic-map.com/maps/lbb3/Israel/; Roll 1983; Magen 2009 より作成）

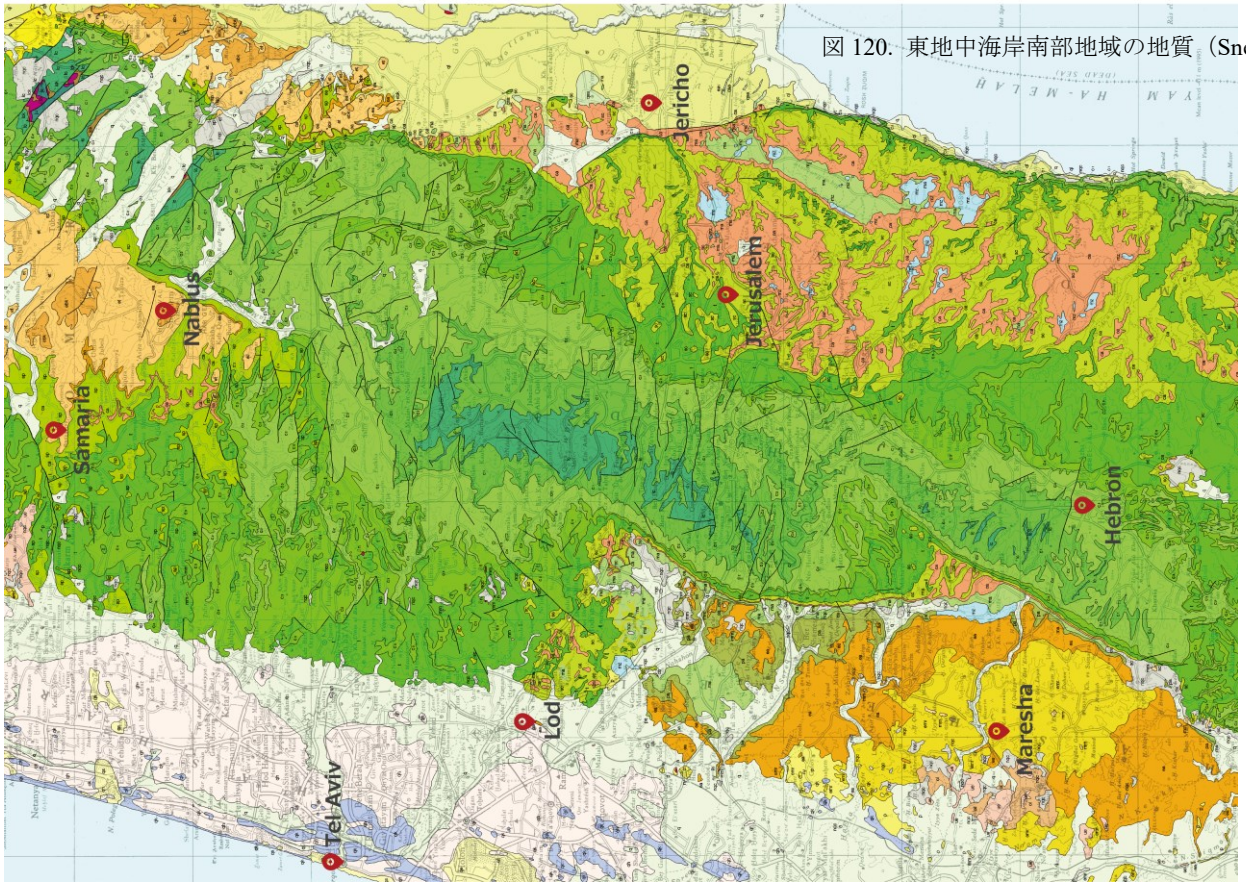


図 120. 東地中海岸南部地域の地質（Sneh et al. 1997, Sheet2

図 121. 鐘の洞窟（bell cave），マレシャ

第 4 節　前 2 世紀から 1 世紀の東地中海岸南部地域における墓の分布

1　前 2 世紀における墓の分布

これまでの節で墓の分布を検討するために必要な情報を整理できたため、本節から第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における墓の分布と形態を明らかにする。まず、第 3 章第 4 節と同様の方法で資料収集を行い、墓の年代の検討を行った。年代決定の基準に関しても第 3 章第 4 節と同じであるが、本章では前 2 世紀～1 世紀の期間に当てはまる墓を対象とし、ローマ時代やローマ時代からビザンツ時代としか同定できない墓については対象外とした。第 3 章で明らかになったように、これらの墓は前 1 世紀以降、1 世紀以降という曖昧な年代しか与えることができず、第二神殿時代後期の細かい単位で分布を検討する際に利用することが難しいからである。

東地中海岸南部地域へと対象地域を広げたため、分布を検討する前に、まず第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における墓の種類を整理し分類を行った（表 13）。東地中海岸南部地域の墓は、岩盤を掘り込んで作られる石切墓、地面を掘り作られる土坑墓、天然の洞窟を利用する洞窟墓の 3 つに大別される。石切墓は横穴式と竪穴式に細分され、横穴式の石切墓はロクリ墓、ベンチ墓、アルコソリア墓、横穴墓に区分される。横穴墓は、内部の形態が明らかでない時にも利用される用語であるが、本論では、ロクリやアルコソリアなどの壁龕構造やベンチを持たない母室のみで構成される墓を横穴墓と定義した。ロクリ墓に関しては、母室が方形である方形ロクリ墓、長方形である長方形ロクリ墓、母室を持たないロクリ単独墓にさらに分類された。竪穴式の石切墓はシャフト墓（図 122）のみであった。シャフト墓は移行

期青銅器時代より利用されているが、第二神殿時代に利用されているシャフト墓は形態や埋葬方法が異なっている。第二神殿時代のシャフト墓は、開口部が長方形や楕円形であり（Tal 2003, 290）、開口部の広さのまま竪穴が掘られ、底部が埋葬空間となる、または、底部に人が横たわることのできる程度の小さな横穴が作られる。地表や底部の横穴の開口部は、石板で閉じられる場合が多い。シャフト墓は伸展葬に利用される墓であり、基本的に個人が埋葬される。クムランで最も多く確認されていることから「クムラン型」（Zissu 1998）と呼称される場合もある。

土坑墓はピット墓（図 123）と石棺墓（図 124）に区分される。両者は形態、埋葬方法の点で似通っている墓であり、共に利用される遺跡もみられる。ピット墓は仰向けになった被葬者の大きさに合わせて穴を掘って作られた墓であり、個人の伸展葬に利用されていた。石棺墓も同様であるが、石板を内部に敷き詰めることで土中に石棺のような空間を作る点が異なっている。また、ピット墓とは異なり、開口部の上部には石板が置かれ閉じられている。前述のシャフト墓と合わせて、これらの墓は非常に簡素な個人墓であり、複数の墓が集合して墓地を形成している場合が多い。

これらの分類に基づいて、前 2 世紀の分布傾向を確認する。東地中海岸南部地域全体に目を向けてみても、前 2 世紀の墓地の数が非常に少ないことが分かった（表 14、図 125）。ペルシア時代からヘレニズム時代初期のエルサレムのユダヤ人は死者を土坑墓に埋葬していた（Zissu 1995: 170-172）とジスが述べているように、東地中海岸南部地域の大半の人々は土葬を行っていた可能性が高く、土坑墓が主体であったことが墓地として認識される遺跡の少なさの一因になっていると考えられる。土坑墓やシャフト墓はいずれも地表下に構築され埋め戻される墓であり、横穴式の墓よりも確認が困難なだけでなく、特に土坑墓などは考古学者の関心が低い遺構である点も調査事例が少ないことと関係している可能性がある。これらの墓は個人墓であるため、本来であればクムランの墓地（Eshel et al. 2002）のように石切墓以上に数多く存在するはずであるが、上記の理由からほとんど発見されていないものと思われる。前 2 世紀に限らず、ピット墓や石棺墓などの土坑墓やシャフト墓のような地表では確認できない個人墓は、調査・報告されている墓の数が実数と大きくずれている可能性があることには留意すべきである。

セレウコス朝時代のユダヤ人の居住域は後の時代よりも範囲が狭く、前 2 世紀のユダヤ人の石切墓もエルサレム近郊に集中している。母室の壁に複数のロクリを設ける構造とベンチ墓が結びついた方形ロクリ墓はエルサレムでのみ確認されるが、それ以外のユダヤ地域の石切墓はベンチ墓や横穴墓であった。前 2 世紀のエルサレムのヤソンの墓（Rahmani 1967）は祭司階層の一族の墓であり、これに代表されるように前 2 世紀にベンチ墓に母室の壁に複数のロクリを設ける構造が結びついたのがエルサレムであり、当初は富裕層の墓として採用されたことは疑いないであろう。横穴墓を除いて、ユダヤ地域の石切墓はいずれもピットのある母室、特にコの字型の母室を持つ墓であり、ピットのない母室はみられなかった。また、ロクリ墓とベンチ墓では集骨が行われており、前 2 世紀のユダヤ地域では家族を意識した埋葬習慣が保たれていたと考えて良さそうである。

ヨルダンの谷の死海沿岸部に位置するエン・ゲディでは、ロクリ単独墓[52]（図 126）が 2 基確認されているが、エン・ゲディはハスモン朝時代に成立した小作人の村であるため（Mazar et al. 1966, 4）、居住地の成立年代から墓の構築年代はセレウコス朝時代まで遡らないと考えられる。おそらくエルサレムとエ

[52] エン・ゲディのロクリは通常のロクリとは異なっている。ロクリは斜面には作られておらず、天井は開いている状態である。壁面は石で覆われ漆喰で固められており、天井には石板で蓋がされていた（Hadas et al. 1994, 2）。ロクリの開口部には、これらの石よりも大きい封石がはめられている。ロクリに石板が置かれる例はエルサレムでもみられるが、壁面を石で覆われているロクリはエン・ゲディとモディン（Zissu and Perry 2015）のみで確認される事例である。

表 13. 第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における墓の種類

石切墓	横穴式	ロクリ墓	方形ロクリ墓
			長方形ロクリ墓
			ロクリ単独墓
		ベンチ墓	
		アルコソリア墓	
		横穴墓	
	竪穴式	シャフト墓	
土坑墓		ピット墓	
		石棺墓	
洞窟墓			

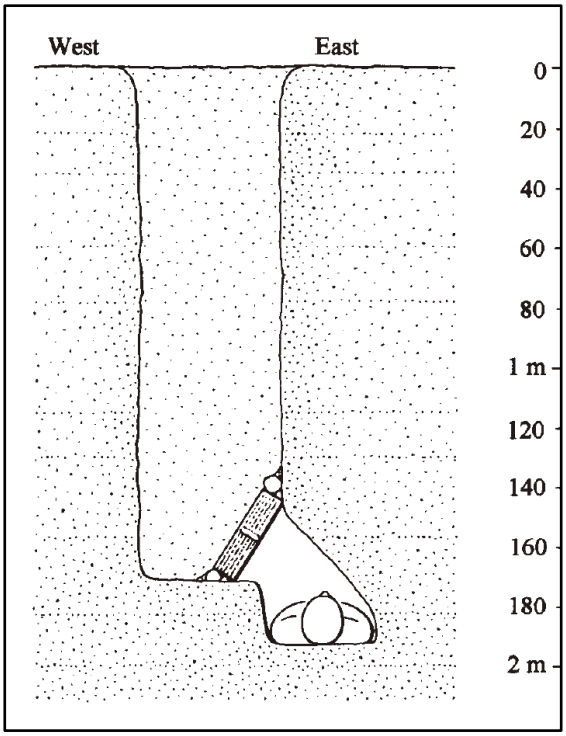


図 122. シャフト墓, キルベット・カゾーン, Grave N1（Poltis 2006, Fig.10.3）

図 123. ピット墓, ベト・ダガン, Grave 121（Jakoel and Nagar 2014, Fig.7）

図 124. 石棺墓, アズリカム　（Eisenberg-Degen et al. 2019, Fig.8）

ン・ゲディの墓地には時間的なずれがあるといえる。エン・ゲディでは多様な埋葬が確認されている。典型的なユダヤ人の埋葬であるベンチ墓と集骨もみられるが、最たる特徴として簡素な木棺と木製の食器を中心とした質素な副葬品を利用していることが挙げられる。木棺の多くは簡素な横穴墓や洞窟墓に安置されているが、上述のロクリ単独墓でも木棺による埋葬が行われている。エルサレムでは木棺による埋葬は利用されておらず（Kloner and Zissu 2007, 103-106）、共通するベンチ墓と集骨に関してもエン・ゲディでは頭蓋骨を入口に向ける特殊な方法（図 127）で再埋葬を行っているため、エン・ゲディに居住し

表 14. 前 2 世紀に作られた墓地

遺跡名	墓のタイプ	母室形態	子室形態	墓の数	埋葬方法	装飾の施されたファサード	調査報告
Samaria	長方形ロクリ墓	平坦型	標準型	2			Regev and Greenfeld 2013
Tel Hashash	石棺墓			4	伸展葬		Tal and Taxel 2010
Jifna	ベンチ墓	コの字型	四隅	1	集骨		Zelinger 2001
Modiʻin	横穴墓			1	集骨		Tendler et al. 2019
Kh. Beit Sila	ベンチ墓	コの字型	四隅	1	集骨		Batz 2003
Qalandiya	ベンチ墓	コの字型	四隅、なし	2			Magen 2004
Jerusalem	方形ロクリ墓	コの字型	標準型(Ⅰa、Ⅰb)、幅広型(Ⅱa、Ⅱb)、小型	15	集骨	○	第 2 章参照
		ロの字型		2			
	ベンチ墓	コの字型	四隅	4	集骨		Bahat 1982; Zissu and Ganor 1997; Kloner 1995; Kloner 2003
		外周型	四隅	1			Re'em 2001
		ロの字型	なし	1			Kloner 1980
Azrikam	石棺墓			1	伸展葬		Eisenberg-Degen et al. 2019
Tel Goded	長方形ロクリ墓	段型	標準型	1			Sagiv et al. 1998
Maresha	長方形ロクリ墓	平坦型	標準型	1	伸展葬		第 2 章参照
		段型	標準型	4			
ʻEn Gedi	ロクリ単独墓		標準型	2	木棺、木棺内での集骨		Hadas et al. 1994; Ganor and Ganor 2016
	ベンチ墓	ロの字型	四隅	1	集骨(頭部の向きが一定)		
		コの字型	壁面(B2)	1	集骨		
	横穴墓			4	木棺、集骨		
	洞窟墓			1	木棺、木棺内での集骨		

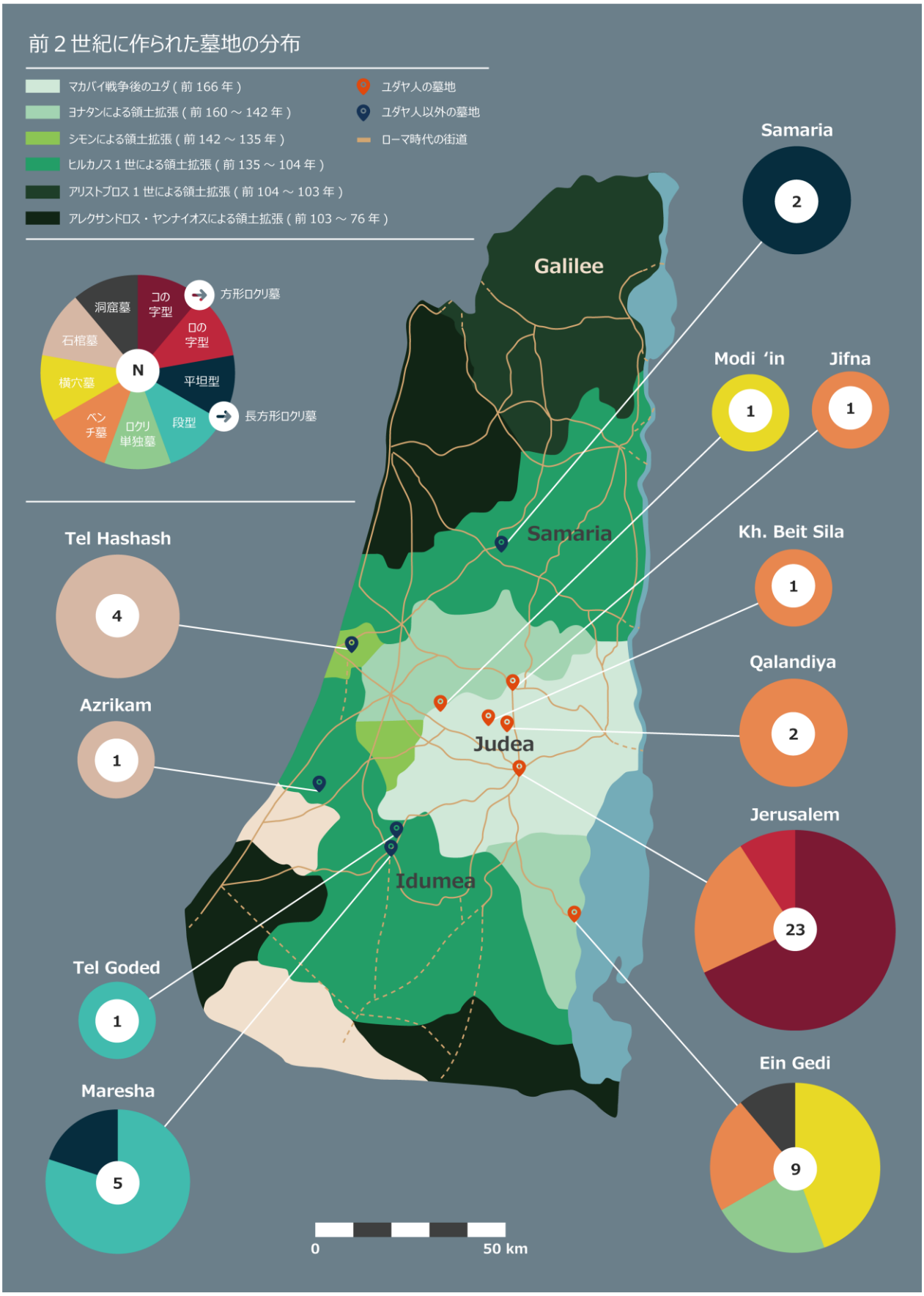


図 125. 前 2 世紀に作られた墓地の分布

（https://en-nz.topographic-map.com/maps/lbb3/Israel/; Roll 1983; Magen 2009、表 14 より作成）

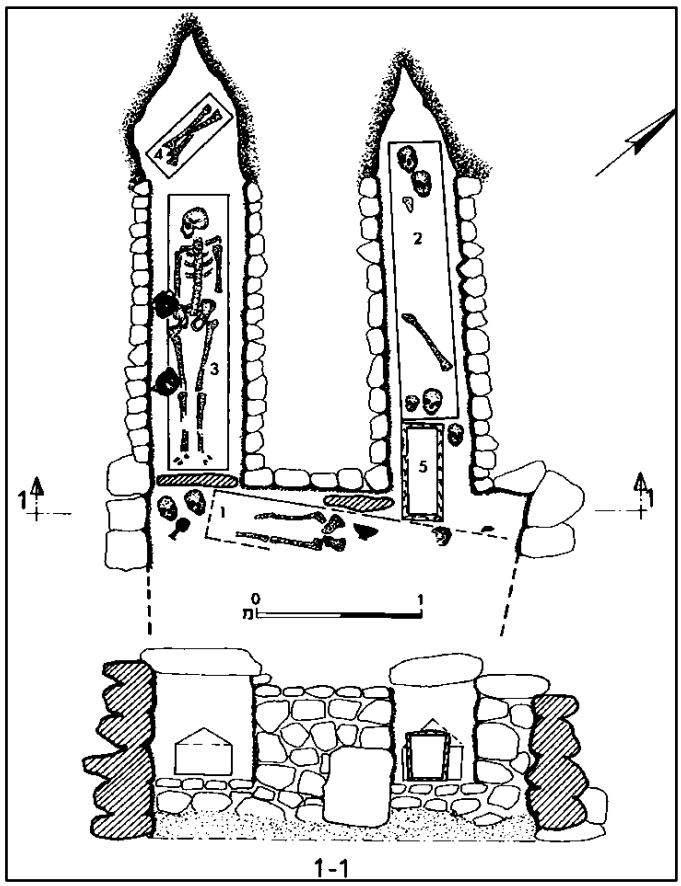


図 126. ロクリのみで構成される墓, エン・ゲディ, Tomb 4
（Hadas et al. 1994, Plan.4）

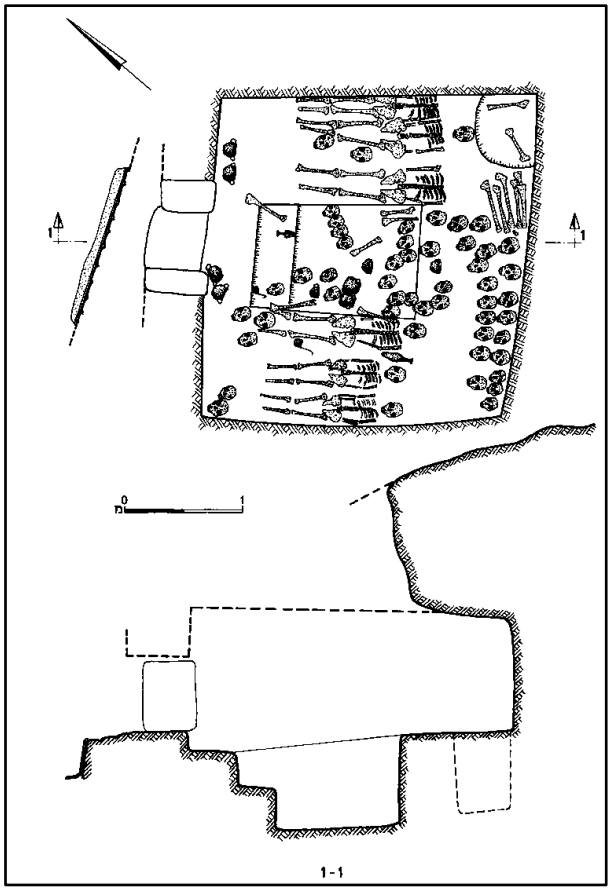


図 127. ベンチ墓, エン・ゲディ, Tomb 2
（Hadas et al. 1994, Plan.2）

ていた人々はエルサレムの人々とは異なる埋葬習慣を持っていたと考えられる。一方で、木棺が集骨にも利用されていること、横穴墓や洞窟墓で木棺が同じ空間に重なるように安置されている点はヘレニズム都市で行われていたような個人の区別を重視する埋葬とは異なっている。エルサレムやその周辺でみられる埋葬とは異なる点もあるが、家族を基盤とした埋葬であることは共通している。こうした基本的な埋葬の意味を共有しながらも、前 2 世紀後半には同じ石切墓であっても中央山地と死海沿岸部のユダヤ人の間には差異が生じていたといえる。

サマリア地域やイドマヤ地域では、各地域の中心的な都市にのみ長方形ロクリ墓が確認された（図 128）。これらの墓はいずれもピットを持たない墓であり、ほとんどの墓がピットを持つというユダヤ地域の傾向とは異なっている。イドマヤ地域のマレシャ、テル・ゴッドやサマリア地域のサマリアは、ギリシア人やフェニキア人の入植地であり、テル・ゴッドやサマリアは被葬者が明らかでないが、おそらくギリシア人やフェニキア人入植者の墓であると考えられる。前 2 世紀の長方形ロクリ墓は、周辺地域への進出の足掛かりとしたギリシア人やフェニキア人の大規模な入植地に伴うものであるといえるだろう。一方で、沿岸部は港などが設けられ発展していたが大規模な入植地が作られたわけではなく、海岸平野では地形・地質的な要因も絡んで石切墓は構築されず、そのため石棺墓が主体となる状況が続くことになった。

前 2 世紀の墓地の分布を検討した結果として、前 2 世紀のユダヤ人の埋葬の在り方は家族を基盤とするという点でエルサレムと同様であり、第 2 章で明らかになった鉄器時代Ⅱ期の埋葬を意識的に採用しているということを補強する結果であった。エルサレムも含めて、鉄器時代Ⅱ期の墓であるベンチ墓が

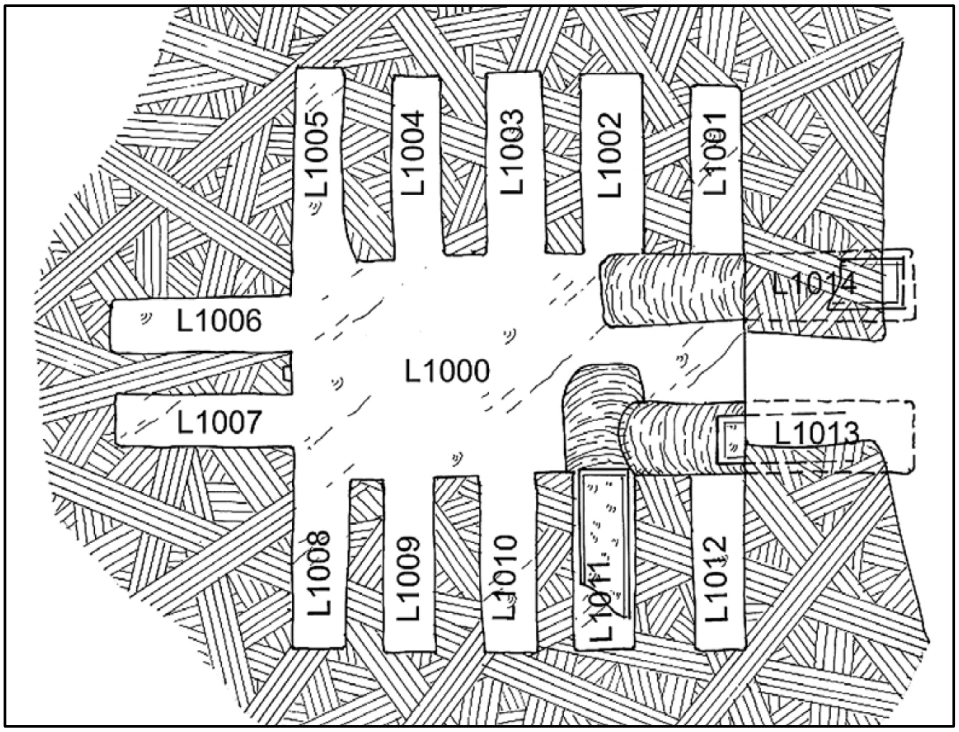


図 128. 長方形ロクリ墓, サマリア, T10（Regev and Greenfeld 2013, Fig.6）

前 2 世紀になり再利用だけではなく新しく構築されていることは、ユダヤ人がベンチ墓を自らの伝統的な埋葬として認識し採用した証左だといえる。エルサレムと同様に、ユダヤ地域全体でもヘレニズム都市に特有の大規模な長方形ロクリ墓は一例も確認されなかったため、前 2 世紀のユダヤ地域では墓の形態・埋葬方法・死生観の点で、ヘレニズムの影響は限定的であったといえるであろう。おそらくこれには、ユダヤ地域にセレウコス朝の大規模な入植地が作られていなかったことも影響している。前 3 世紀から前 2 世紀の東地中海岸南部地域における長方形ロクリ墓は、ギリシア人やフェニキア人の入植に伴って同地域に導入されており、大規模な入植の有無が長方形ロクリ墓の有無に関係している。ロクリ墓の利用は各地域の中心的な都市に限られており、それゆえに大規模なギリシア人やフェニキア人の都市がないユダヤ地域に長方形ロクリ墓が作られず、ヘレニズムの直接的な影響を埋葬に関して受けなかったのだと考えられる。

2　前 1 世紀における墓の分布

本章第 2 節で述べたように、前 2 世紀末にはサマリアやマレシャはヒルカノス 1 世によって征服され、各地にユダヤ人居住地（入植地）が作られはじめた。居住地が安定しなければ石切墓のような墓が作られることもないため、このハスモン朝の領土拡張が墓地の様相に表れてくるのはやや遅れて前 1 世紀になると考えられる。入植地が陥落したことにより、前 1 世紀のこの地域にギリシア人やフェニキア人の長方形ロクリ墓を有する墓地はなくなり、ほとんどはユダヤ人の墓地となった（表 15、図 129）。前 2 世紀よりもエルサレムの墓数が著しく増加し、エリコのようにエルサレム以外にも十数基のロクリ墓を有する墓地が出現し始めた。ユダヤ人居住域の拡大と発展に伴い、ユダヤ地域全体でロクリ墓が広く利用さ

表 15. 前 1 世紀に作られた墓地

遺跡名	墓のタイプ	母室形態	子室形態	墓の数	埋葬方法	装飾の施されたファサード	調査報告
Hagosherim	方形ロクリ墓	コの字型	標準型	1	集骨		Ovadiah 1999
Shechem	方形ロクリ墓	ロの字型	標準型	1			Magen 2009
Kh. el-Bira	方形ロクリ墓	コの字型	標準型	1	集骨、オシュアリ		Elisha 2015
Shoham	方形ロクリ墓	平坦型	標準型	1	オシュアリ		Badhi and Torgë 2000
Bet Dagan	ピット墓			1	伸展葬		Jakoel and Nagar 2014
Beitin	方形ロクリ墓	コの字型	標準型(Ⅰa、Ⅰb)、小型	1	集骨、オシュアリ？		杉本他 2014; 杉本他　2015
Modi'in	方形ロクリ墓	平坦型	標準型、小型	4	集骨、オシュアリ	○	Onn and Weksler-Bdolah 2006; Toueg 2015; Zissu and Perry 2015
	ロクリ単独墓			1	集骨、伸展葬		Tendler 2019
Beit Ur al-Tahta	方形ロクリ墓	平坦型	標準型、幅広型	2			Peleg 2004
Tell en-Nasbeh	方形ロクリ墓	ロの字型	標準型、幅広型(Ⅱd)	1			McCown 1947
	方形ロクリ墓	平坦型	標準型、幅広型	1	集骨、オシュアリ		
El-Maghar	方形ロクリ墓	段型	標準型、小型	1			Zissu 2007
Jericho	方形ロクリ墓	コの字型	標準型、小型	3	木棺、集骨、オシュアリ		Hachlili & Killebrew 1999; Taha 2011
		ロの字型	標準型、小型	1			
		平坦型	標準型	1			
	ロクリ単独墓		標準型	9	木棺		
En Perat	横穴墓			1			Freiman 2017
Jerusalem	方形ロクリ墓	コの字型	標準型(Ⅰa、Ⅰc)、幅広型(Ⅱa、Ⅱc、Ⅱd)、小型	45	集骨、オシュアリ	○	第 2 章参照
		ロの字型		12			
		外周型		8			
		平坦型		16			
		段型		3			
Horbat 'Illin	横穴墓			1			Weksler-Bdolah 2012
Qumran	シャフト墓			56	木棺、伸展葬		de Vaux 1953; Steckoll 1968; Hachlili 1993; Puech 1998; Eshel et al. 2002; Avni 2013
Beit Nattif	ロクリ単独墓		標準型、小型	12			Zissu and Klein 2011
Bethlehem	方形ロクリ墓	コの字型	標準型、小型	1	オシュアリ		Dinur 1986

Kh. esh-Shari'a	方形ロクリ墓	ロの字型	標準型	2			Zissu 2000
ʻEn el-Ghuweir	シャフト墓			17	伸展葬		Bar-Adon 1977
Rosh Tzurim	ロクリ単独墓		標準型	1			Peleg & Feller 2004
	ベンチ墓	ロの字型	四隅	1	集骨		
	横穴墓			1			
Horbat Qerumit	横穴墓			1			Zissu & Greenhut 2004
Horbat ʻIllit	方形ロクリ墓	平坦型	標準型	2			Greenhut 2007
Horbat Brugin	ベンチ墓	コの字型	壁面(B2)	1	集骨		Zissu et al. 2013
Kh. el-Basha	方形ロクリ墓	平坦型	標準型	3			Zissu 1999
Tel Zif	ベンチ墓	コの字型	四隅	1	集骨		Baruch and Kapitaikin 1997

れるようになっただけでなく、イドマヤ地域や海岸平野にもユダヤ人墓地が作られるようになった。

前 2 世紀にはエルサレムとその北部ではベンチ墓が構築されていたが、前 1 世紀にはベンチ墓はテル・ジフなどのユダヤ地域南部・イドマヤ地域で構築されるのみとなった。前 1 世紀のユダヤ人の墓の多くは方形ロクリ墓となり、すでにロクリ墓がユダヤ人を表象する墓になっていたと考えられる。ハスモン朝時代以降の他の物質文化の傾向として、アバディとレゲブは、集落の数と規模で著しい成長をしているにも関わらずユダヤ地域で輸入品・高級品の土器が激減していることから、ハスモン朝時代になり特定のヘレニズム要素が拒絶されはじめていたことを指摘している（Abadi and Regev 2020）。これはヘレニズムを否定するということではなく、鉄器時代より続く系統である一つ折りランプが鉄器時代から利用されているピットを持つ石切墓から出土することがエルサレム近郊で顕著になっているように、ハスモン朝の安定した統治に向けてアイデンティティを確立する文化的特徴として鉄器時代の物質文化の一部を意図的に強調したためであるとアバディとレゲブは述べている（Abadi and Regev 2020, 260-264）。このような土器との関係も合わせて考えると、ユダヤ人の方形ロクリ墓が数を著しく増やし分布範囲を拡大していることから、ハスモン朝時代には母室の壁に複数のロクリを設ける構造はヘレニズムの要素ではなく、ユダヤ人を表象する文化的特徴として定着していったことは疑いないであろう。

分布範囲を広げたユダヤ人墓地では、多くが方形ロクリ墓である点は共通しているが、地域差も表れてきている。エルサレム周辺のユダヤ地域では、エルサレムと同様にピットのある母室を持つロクリ墓が中心的に利用されていた。一方で、海岸平野やイドマヤ地域、ユダヤ地域の西部・南部では、平坦型の母室を持つロクリ墓が過半数を占める。埋葬方法が明らかでない墓地が多いが、ショハムやモディン（図 130）ではオシュアリが利用されており、前 1 世紀のエルサレムと同様にオシュアリとそれに伴う新しい母室形態の採用が東地中海岸南部地域の他の墓地でも起こっている。エルサレム以外では悉皆的な踏査・発掘調査が行われておらず、未発掘の墓が各墓地に多量に存在するため、個々の墓地におけるロクリ墓の母室形態の割合について検討することは難しいが、オシュアリと平坦型の母室がユダヤ人居住域で利用され始めるようになり、同時に前 1 世紀になっても集骨とピットのある母室を利用する墓地があったことは確かであろう。

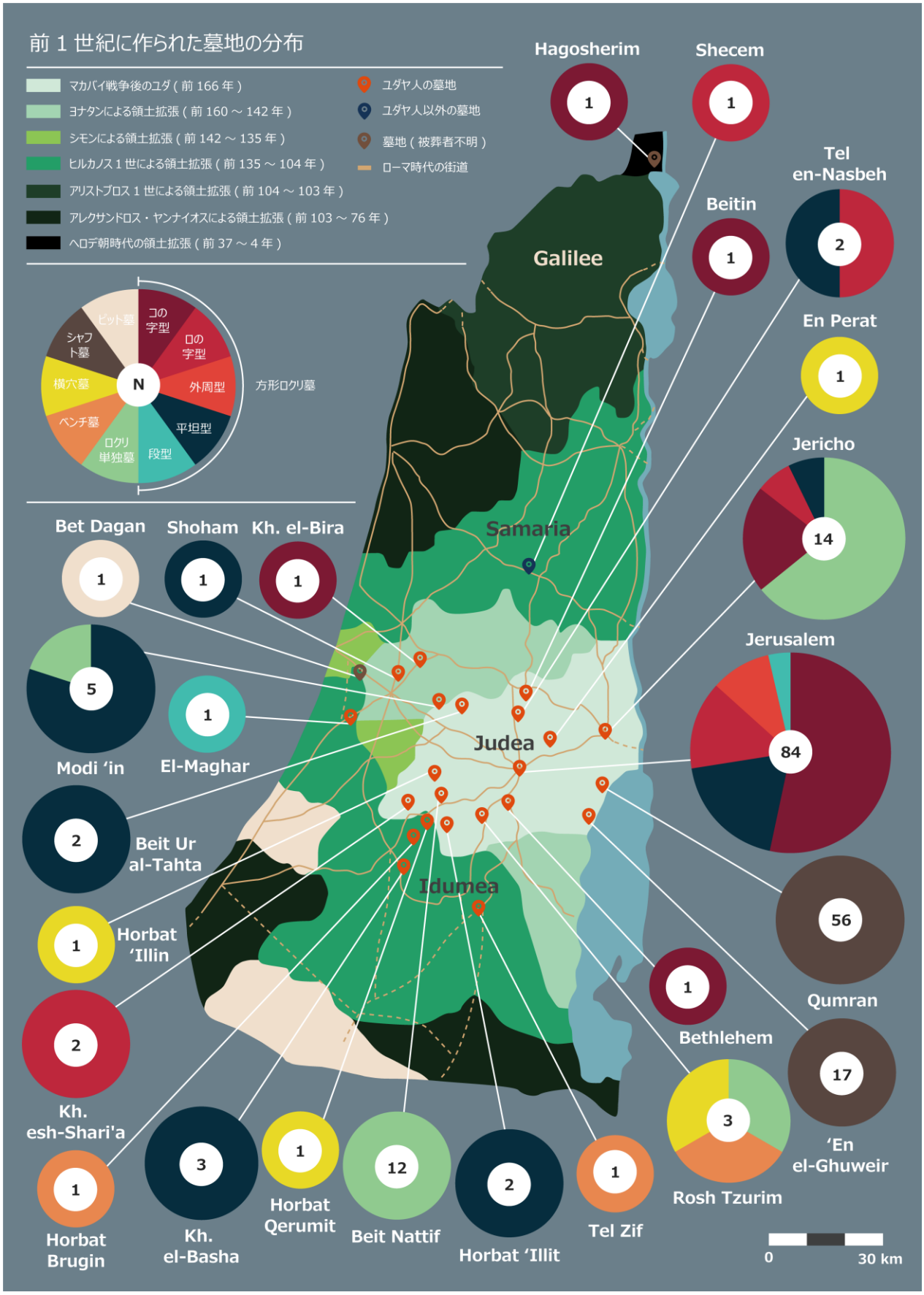


図 129. 前 1 世紀に作られた墓地の分布

（https://en-nz.topographic-map.com/maps/lbb3/Israel/; Roll 1983; Magen 2009、表 15 より作成）

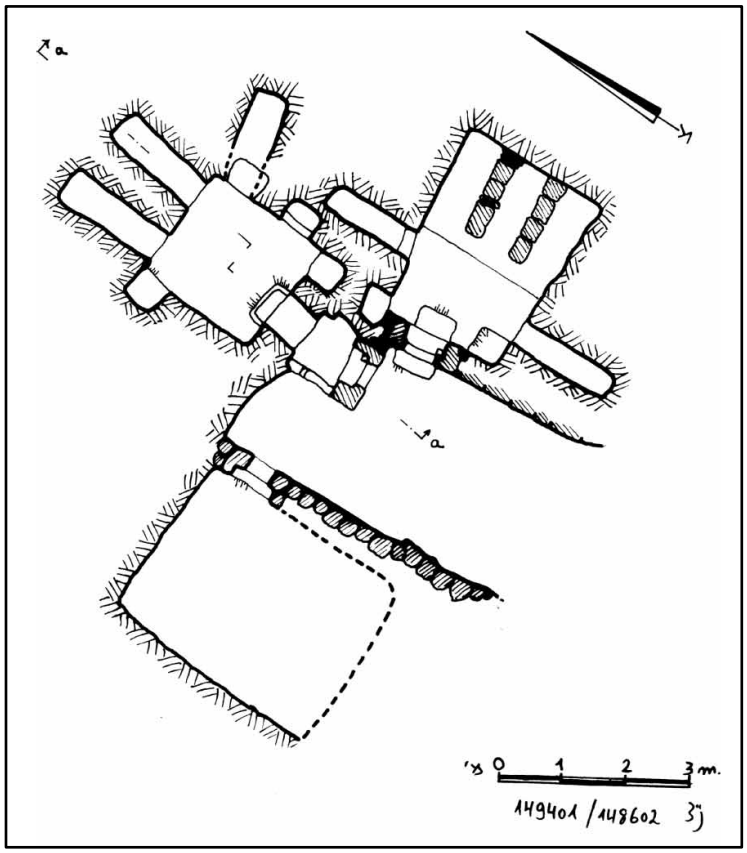


図 130. 方形ロクリ墓, モディン　(Zissu and Perry 2015, Fig.14)

セレウコス朝時代からハスモン朝時代の町や集落について、考古学的に明らかになっているとは言い難いが、このようなロクリ墓の増加、分布範囲の拡大とオシュアリの普及からは、前 1 世紀にある程度の規模のユダヤ人居住地が各地で確立していることが読み取れる。土坑墓やシャフト墓とは異なり、ロクリ墓の「1 基」は一つの家族、あるいは一族と結びつき、オシュアリは高級品であったため、オシュアリを利用するロクリ墓があるということは富裕層のユダヤ人の家族がその場所に居住していたことを示すことになる。また、オシュアリの工房はエルサレム周辺に存在していた可能性が高く、エルサレムから離れた町では学校や工房で訓練を受けた旅回りの職人が製作を請け負っていたと考えられている（Hachlili 2005, 355-356）。オシュアリの存在は、出土した遺跡がエルサレムを中心とした職人の移動範囲に含まれていることを示すであろう。

一方で、ユダヤ人の墓はロクリ墓だけではなかったことにも目を向ける必要がある。単純な横穴墓はいくつかの墓地で確認されており、前述のようにベンチ墓も構築されている。特にクムランやエン・エル・グウィア、エリコが位置するヨルダンの谷の墓地群は、中央山地や海岸平野のユダヤ人の墓地とは異なった様相を示している。クムランでは 1177 基のシャフト墓が確認されており（図 131、132）、そのうち 56 基について発掘調査が行われ年代が明らかとなっている（Eshel et al. 2002, 143; Hachlili 2005, 13-20）。墓の数に対して発掘調査の数が少なく、これらが全て第二神殿時代の墓かどうかは明瞭でないが、横穴式の石切墓が確認されずシャフト墓のみが利用されている墓地であることは明らかである。クムランのシャフト墓はほとんどが同じ南北軸上に配置されており、多くの墓で伸展葬が行われている。また、前 2 世紀のエン・ゲディと同様に一部の墓では木棺が利用されている。クムランの南に位置するエン・エル・グウィアでも同様に南北軸上に配置されたシャフト墓が利用されている。これらの墓地はユダヤ教の分

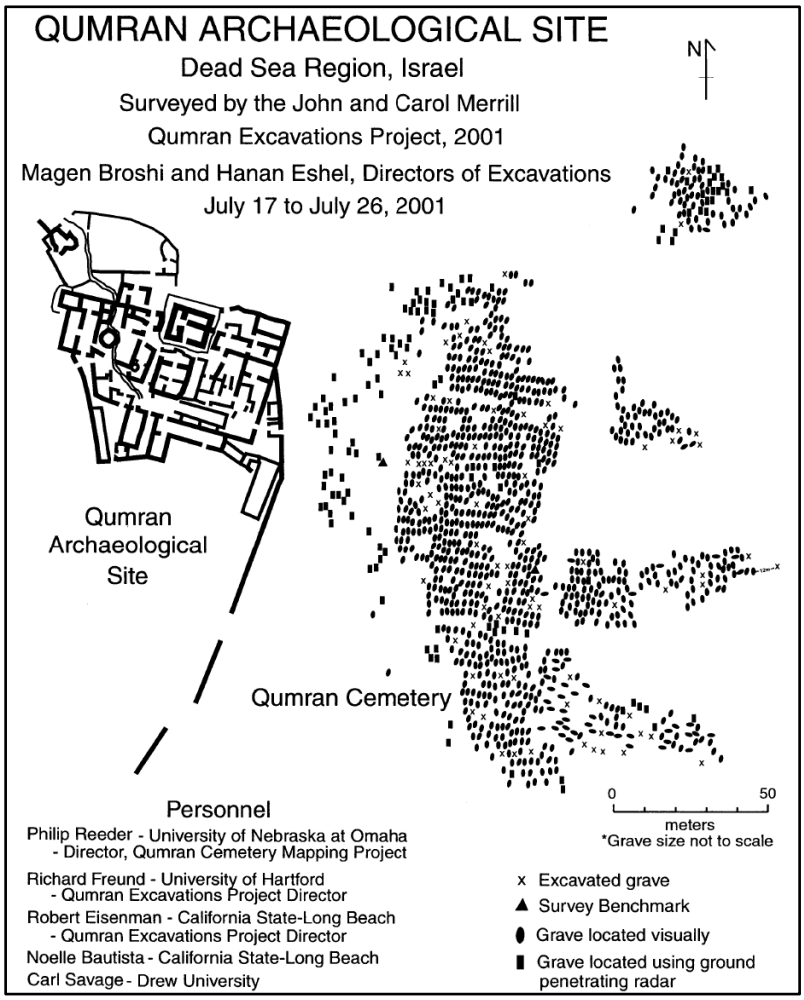


図 131. クムランの墓地（Eshel et al. 2002, Map.3）

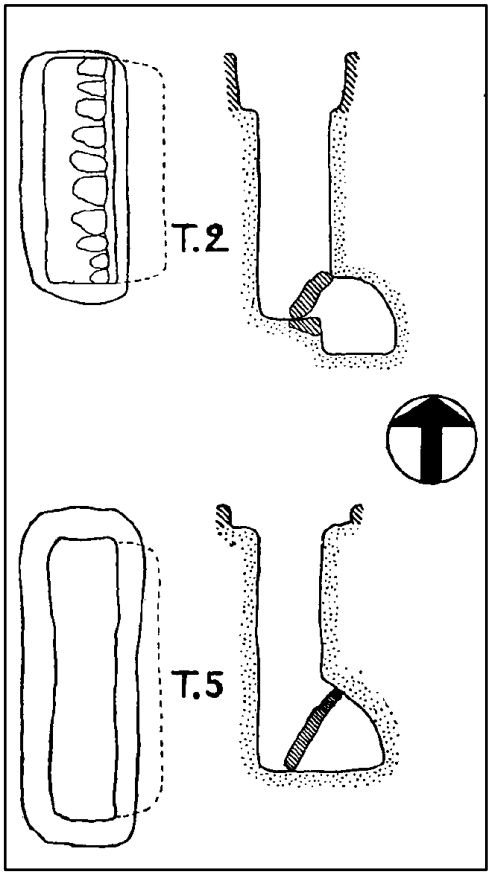


図 132. シャフト墓, クムラン

（de Vaux 1953, Fig.5）

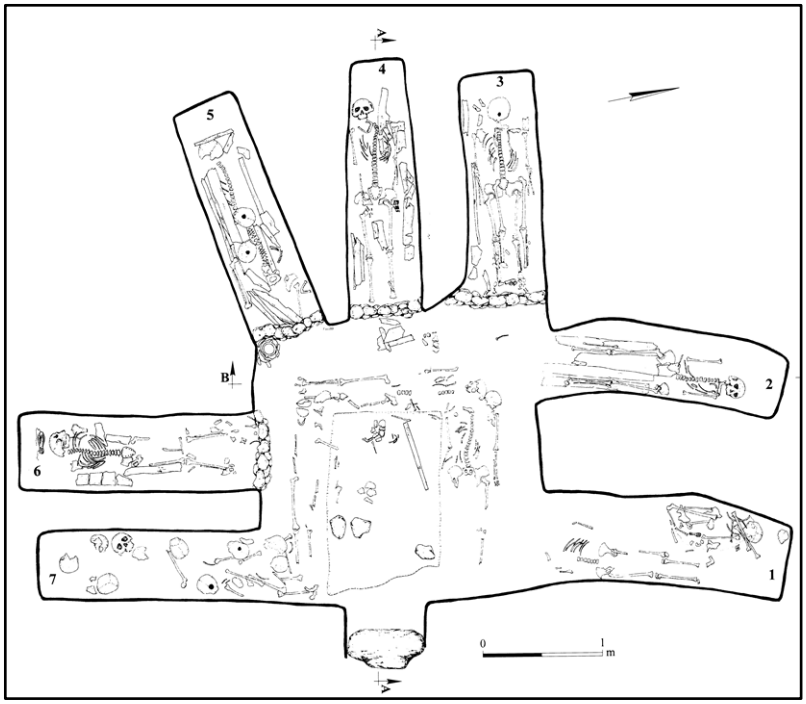


図 133. D-27, エリコ　（Hachlili and Killebrew 1999, Fig. II .55）

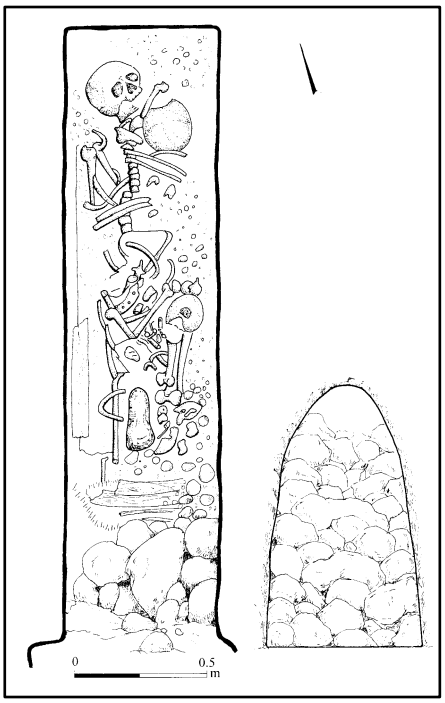


図 134. D15, エリコ

（Hachlili and Killebrew 1999, Fig.II.48）

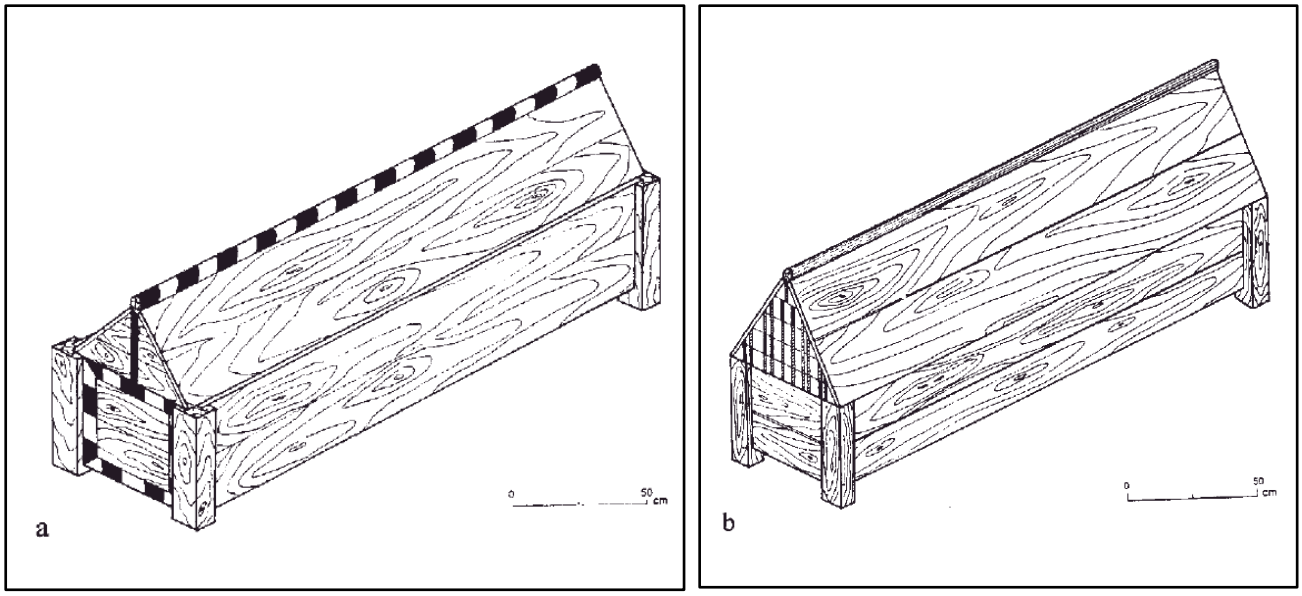


図 135. 木棺 59、78, エリコ（Hachlili 2005, Fig.Ⅲ-3 改変）

派であるエッセネ派のものではないかと議論がなされているが、発掘調査が行われた墓の数が少なく、副葬品や人骨の残存状態が良好ではないことから、解決されていない問題である（Hachlili 2005, 472）。しかし、オストラカや壺に記されたヘブライ語の碑文によって、クムランがユダヤ人の居住地であることは証明されており（de Vaux 1954, 229）、これらの墓地がユダヤ人のものであることは明らかである。また、クムランやエン・エル・グウィアでは、家族との関係を示すような遺物はなく、個人の埋葬が集まって構成される墓地であるため、おそらく共同体としての墓地である。少なくとも、前 1 世紀の死海沿岸部では、中央山地や海岸平野の家族を意識した埋葬とは異なる埋葬が行われていたことは事実であろう。また、正確な年代は明らかでないが、おそらく第二神殿時代後期に同定されるシャフト墓群がエルサレムのベト・ザファファ（Zissu 1998）で確認されており、宗派か身分・階層の違いかどうかは不明瞭であるが、シャフト墓を構築する集団がユダヤ人の中に存在したようである。

エリコではシャフト墓は構築されていないが、木棺の利用がクムラン、エン・ゲディと共通している。また、他のユダヤ人墓地と同様に方形ロクリ墓（図 133）が構築されている一方で、ロクリ単独墓（図 134）も多数構築されている。エリコ以外の中央山地の墓地でもロクリ単独墓は構築されているが、エリコではそれが木棺（図 135）による個人埋葬と結びついていることが特徴である。ハクリリとキルブリューは、エリコでは木棺による伸展葬が最も早期の埋葬方法であり、他の墓地とは違い木棺による伸展葬を行うためにロクリが導入された可能性が高いと述べている（Hachlili and Killebrew 1999, 167）。エリコのロクリ墓でも集骨が行われているため、ハクリリとキルブリューの指摘をそのまま受け入れることは難しいが、少なくとも前 1 世紀のエリコのロクリ墓には、木棺による埋葬に適した機能があったことは確かであろう。木棺は第二神殿時代ではフェニキアやエジプトに例があるが、エリコでみられる木棺による伸展葬の由来は明らかではない。ハクリリとキルブリューは、木棺とロクリ単独墓による個人埋葬を復活信仰と関連付けているが（Hachlili and Killebrew 1999, 175）、文献史料・考古資料共に木棺に関する情報は少なく、木棺と復活信仰の関わりを示す直接的な証拠はみられない。

ヨルダンの谷に位置する墓地群に関しては明らかでない点も多いが、同地域に居住するユダヤ人が中央山地や海岸平野のユダヤ人とは異なった埋葬習慣を持っていたことは確かである。一方で、このよう

な埋葬習慣の違いは、ヘレニズムを含め異文化の埋葬習慣の影響で生じたものではない可能性が高い。クムラン、エン・エル・グウィアにみられるシャフト墓は、前述のように移行期青銅器時代から東地中海岸南部地域全体で利用されていた墓であり、周辺地域に由来するものではない。木棺に関しても、ヨルダンの谷に位置する墓地群で利用されている木棺と周辺地域の繋がりを示すような証拠はみられない。アレキサンドリアやマレシャのロクリ墓では木棺は利用されておらず、木棺が最も多く確認されているエリコでは木棺が集骨と併用されていること、長方形ロクリ墓ではなくロクリ単独墓であることなど、墓の形態や埋葬プロセスもヘレニズム都市のロクリ墓とは異なっている。

おそらく、前 1 世紀になり、ユダヤ人の墓地の中で墓の形態・埋葬習慣の違いが顕著に現れている一つの要因は、宗派や思想の違いであると考えられる。序章 2 節で述べたように、ヘレニズム時代からハスモン朝時代にかけてユダヤ人に考え方の違いが生じていたことは事実である。プトレマイオス朝時代、セレウコス朝時代には、ヘレニズムの影響力に対してヘレニズムを推進する派閥、伝統を維持する派閥が生じた。ハスモン朝時代には、ハスモン朝が大祭司と王権の地位を世襲化したため、ハスモン家による地位の独占が問題となり、それをきっかけにユダヤ教自体に様々な分派が生じ、バビロニア捕囚後の共同体再建の頃とは異なり、ユダヤ人の中でも思想の違いが顕著になっていた。墓の形態・埋葬習慣の違いをユダヤ教の分派や思想の違いに考古学的に関連付けることは現在の情報からは困難であるが、ユダヤ人が多様な考えを持つようになったことが墓の形態・埋葬習慣の違いに影響していることは充分に考えられるであろう。

3　1 世紀における墓の分布

1 世紀になると前 1 世紀の分布範囲に加えて、ガリラヤ地域やサマリアの山地にもユダヤ人墓地が作られている（表 16、図 136）。1 世紀のユダヤ人の墓地の拡大は、ヘロデ朝時代のガリラヤ地域・サマリア地域の発展と拡大に伴うものであると考えられる。前 1 世紀の段階で、ヘロデ朝時代の領土拡張によって支配領域となった地域に、ハゴシュリムの 1 基のみであるが方形ロクリ墓が確認されており（図 126）、おそらく前 1 世紀末からガリラヤ地域へもロクリ墓が広がっていたと思われる。また、イドマヤ地域のマレシャ近郊には多数の墓地が集中しており、前 1 世紀以降（特に 1 世紀以降）にユダヤ人がマレシャのロクリ墓を集骨とオシュアリによる再埋葬を墓内で行う形で再利用している（Oren & Rappaport 1984, 151-153）ことを合わせて考えれば、1 世紀にはマレシャ周辺に多数のユダヤ人が入植していたことが読み取れる。前 1 世紀と同様に、1 世紀の墓地のほとんどはユダヤ人の墓地であり、ユダヤ人が東地中海岸南部地域におけるロクリ墓の担い手になっているといえるであろう。前 4 世紀から前 2 世紀はギリシア人やフェニキア人が入植に伴う形でロクリ墓を西アジアへと広めていったが、前 1 世紀以降はユダヤ人が東地中海岸南部地域において同じ役割を果たしているのである。

第 2 章 6 節で明らかになったように、エルサレムでは 1 世紀になるとピットのないロクリ墓が過半数となるが、エリコではピットのあるロクリ墓が未だに過半数であり、ピットのあるロクリ墓を有する墓地は東地中海岸南部地域全体で広く確認される。一方で、前 1 世紀と同様に、イドマヤ地域、ユダヤ地域の西部・南部では、平坦型の母室を持つロクリ墓（図 137）を有する墓地が多い。前述のように、エルサ

表 16. 1 世紀に作られた墓地

遺跡名	墓のタイプ	母室形態	子室形態	墓の数	埋葬方法	装飾の施されたファサード	調査報告
Tel Par	方形ロクリ墓	平坦型	標準型	1			Massarwa 2016
	石棺墓			1			
I‘billin	方形ロクリ墓	ロの字型	標準型、幅広型	2	集骨、オシュアリ		Feig and Hadad 2015
	横穴墓			1			
Yafi'a	方形ロクリ墓	ロの字型	標準型	1			Muqari 1999
Horbat Indur	方形ロクリ墓	平坦型	標準型、幅広型	1	集骨、オシュアリ		Barshad 2004
Jatt	長方形ロクリ墓	ロの字型	標準型、小型	1			Masarwa 2004
		平坦型	標準型、幅広型(Ⅱa、Ⅱd)	4			Porath et al. 1999
Ibthan	方形ロクリ墓	コの字型	幅広型	1	集骨		Ganor and Avganim 1999
Samaria	方形ロクリ墓	平坦型	標準型(Ⅰa、Ⅰb)、幅広型	4			Sion 1993
Kh.el-Qutt	方形ロクリ墓	ロの字型	標準型	1			Raviv et al. 2016
		平坦型	標準型、小型	1	オシュアリ		
	ロクリ単独墓		標準型	1			
Ben Shemen	方形ロクリ墓	ロの字型	標準型	1	オシュアリ		Porath 1990
		外周型	標準型	1			Yekutieli et al. 2016
Modi‘in	方形ロクリ墓	平坦型	標準型、幅広型	2	集骨、オシュアリ		Re'em 2008; Tendler et al. 2019
Jericho	方形ロクリ墓	コの字型	標準型、幅広型、小型	3	木棺、集骨、オシュアリ	○	Hachlili & Killebrew 1999; Taha 2011
		ロの字型		7			
		平坦型		3			
Mishmar David	方形ロクリ墓	ロの字型	標準型	1			Klein and Rotstein 2017
Jerusalem	方形ロクリ墓	コの字型	標準型(Ⅰa、Ⅰb)、幅広型(Ⅱa、Ⅱd)、小型	16	集骨、オシュアリ	○	第２章参照
		ロの字型		10			
		外周型		5			
		平坦型		40			
		段型		4			
	アルコソリア墓			11	集骨、オシュアリ		Kon 1947; Avigad 1954; Avni and Greenhut 1996; Kloner amd Zissu 2007
Horbat ‘Illin	方形ロクリ墓	平坦型	標準型、幅広型	1	オシュアリ		Weksler-Bdolah 2012
	横穴墓			1	集骨		
Horbat Zefiyya	方形ロクリ墓	平坦型	標準型、小型	2	オシュアリ		Nahshoni et al. 2002

Horbat ʻAtrabba	方形ロクリ墓	コの字型	標準型	1	オシュアリ		Klein and Klein 2018
Horbat Lavnin	方形ロクリ墓	平坦型	標準型	1			Zissu 2001
	アルコソリア墓			1			
Tel Goded	方形ロクリ墓	平坦型	標準型、小型	1	オシュアリ		Sagiv et al. 1998
		ロの字型	標準型	1			
Giv'at Seled	方形ロクリ墓	平坦型	標準型	1			Kloner 1991
	アルコソリア墓			1			
Kh. el-'Ein	方形ロクリ墓	平坦型	標準型、幅広型	1			Zissu 2005
Iyye Nahash	方形ロクリ墓	平坦型	標準型	1	集骨、オシュアリ		Zissu 2000
Beit ʻAnun	方形ロクリ墓	コの字型	幅広型	1	オシュアリ		Magen 2008
	ベンチ墓	コの字型	四隅、ピット	1			
Hebron	方形ロクリ墓	コの字型	標準型、小型	1			Batz and Peleg 2002

レム、エリコ以外の墓地では悉皆的な調査が行われていないため、母室形態の割合を現在のデータから論じることは難しいが、前節でも述べたように、オシュアリと平坦型の母室がユダヤ人居住域で利用され始めるようになり、同時に集骨とピットのある母室を利用する墓地があったという前 1 世紀の様相が、1 世紀に続いていると考えてよいであろう。また、方形ロクリ墓がユダヤ人の主たる墓であることは明らかであるが、ロクリ単独墓やベンチ墓、横穴墓は少数でありながらも 1 世紀に至るまで利用され続けており、第二神殿時代後期のユダヤ人の埋葬習慣は、ミシュナの埋葬規定とは異なり、必ずしも一律に規定されていたわけではないと考えられる。前節でヨルダンの谷の墓地群に関して論じたように、ユダヤ人が多様な考えを持つようになったことが、墓の形態・埋葬習慣の違いの背景にあると推測される。

1 世紀のエルサレムではアルコソリア墓が出現し、ギヴァット・セレドやホルバト・ラヴニンなどの墓地でもアルコソリア墓は確認されるが、他の墓地ではアルコソリア墓はほとんどみられない。加えて、第 2 章 6 節で述べたように、エルサレムではアルコソリアとロクリが同一の母室内で共に利用される墓が確認されているが、そのような墓は他の墓地では確認されない。また、前 2 世紀から 1 世紀にかけて、装飾の施されたファサードはエルサレム以外では前 1 世紀のモディン、1 世紀のエリコ（図 138）の各 1 基の墓でのみ利用されており[53]、おそらく経済規模や身分・階層の差から、第二神殿時代後期にはほとんどエルサレムでしか利用されていない要素があったと考えられる。このような結果から、第 3 章で取り扱ったアブードやキルバト・クルカッシュの装飾の施されたファサードを持ち、アルコソリアを有する墓は、2 世紀以降の墓である可能性が高いであろう。

[53] 前 1 世紀のモディンのロクリ墓（図 128）のファサードは切石を積み上げて作られている。エルサレムではスコープス山西斜面と旧市街西部に 1 基ずつ同様のファサードが確認される（Kloner and Zissu 2007, 49）。エリコの Tomb H には大規模な服喪のための空間（mourning enclosure）が墓の入口に設けられ、墓のファサードは人が座るベンチや階段などと一体化している（Hachlili and Killebrew 1999, 45-50）。これらのファサード、墓の外部の構造にはギリシア建築様式の装飾は施されておらず、そのようなファサードを持つ第二神殿時代後期の墓地はエルサレムに限られるといえるだろう。このような点からも、アブードやキルバト・クルカッシュのギリシア建築様式装飾の施されたファサードを持つ墓は、第二神殿時代以降の墓であると考えられる。

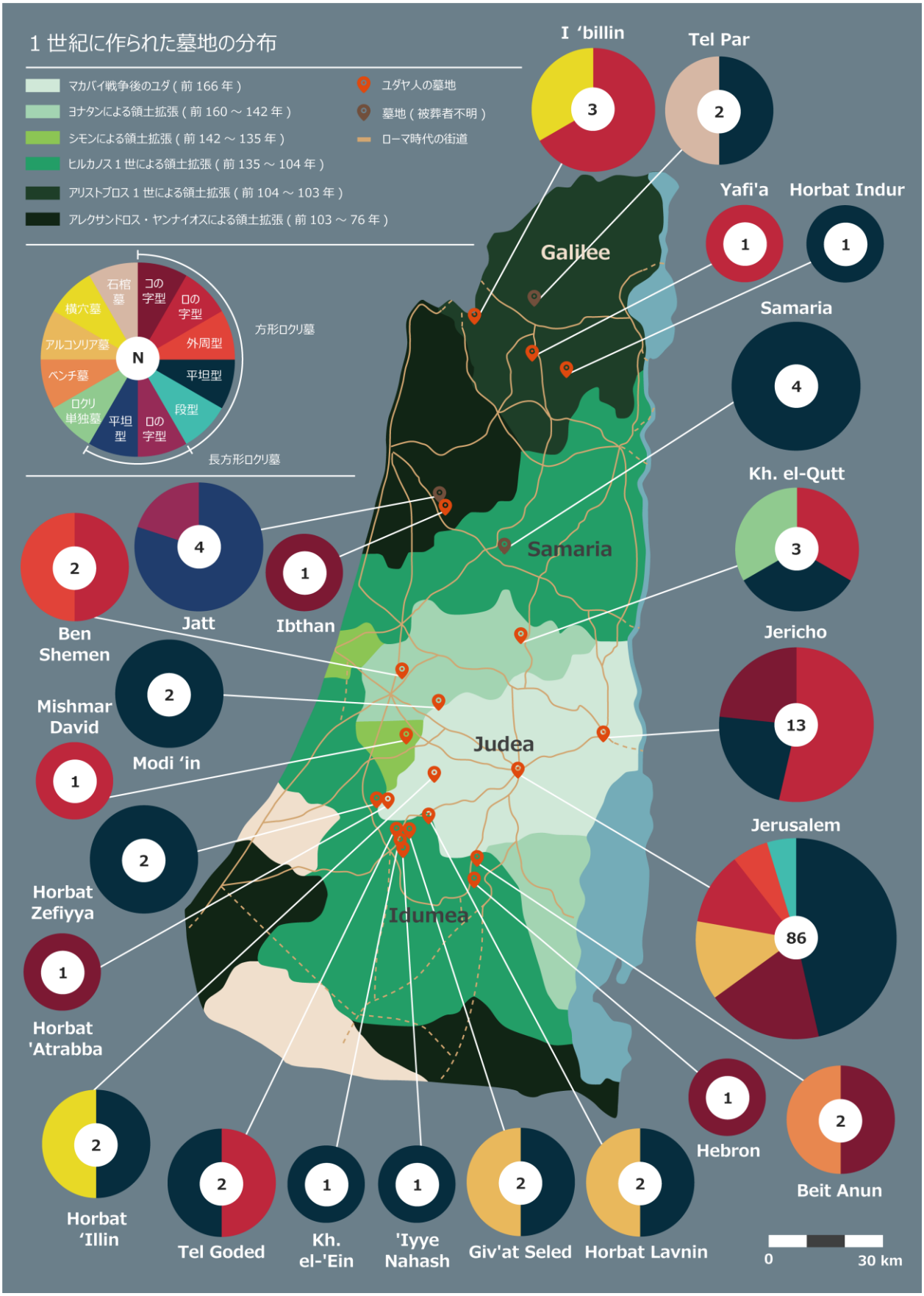


図 136. 1 世紀に作られた墓地の分布

（https://en-nz.topographic-map.com/maps/lbb3/Israel/; Roll 1983; Magen 2009、表 16 より作成）

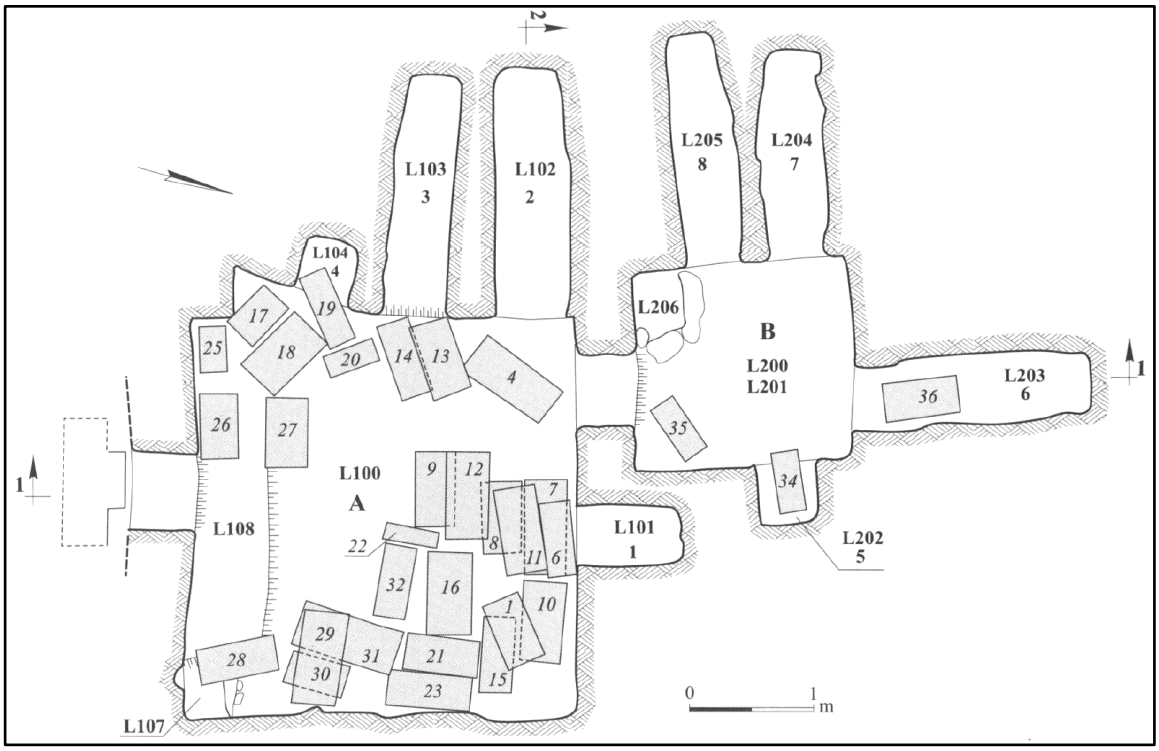


図 137. 平坦型の方形ロクリ墓, ホルバト・ゼフィヤ（Nahshoni et al. 2002, Plan.3 改変）

1 世紀のサマリアでは平坦型の母室を持つ方形ロクリ墓が 4 基確認されたが、埋葬方法が明らかでなく、被葬者を同定できるような遺物もみられなかった。ヘロデ朝時代以降のサマリア（セバステ）は、ユダヤ人以外の人々が居住している都市であり（Magness 2012, 182）、サマリアの墓地はおそらくユダヤ人の墓地ではない。サマリアに近いジャットでは、前 1 世紀以降の墓地として唯一長方形ロクリ墓が確認された（図 139）。ロクリの上部に被葬者の名前が書かれている点はマレシャと共通しているが、ピットがみられる点や墓の作りがやや粗雑である点は異なっている。ジャットでも埋葬方法が明らかでないため、これらの長方形ロクリ墓で伸展葬による個人埋葬が行われていたのか、再埋葬が行われていたのかは不明である。ヘブライ語とギリシア語の銘文から、ジャットの墓地はユダヤ人の墓地であると指摘されているが（Porath et al. 1999, 168）、同じ理由からマサルワはサマリア人の墓地であると述べている（Masarwa 2004）。ユダヤ人と同様に第二神殿時代後期のサマリア人は、ヘブライ語、アラム語、ギリシア語の 3 つの言語を使用しており（van der Horst 2001, 178）、銘文の言語から被葬者を同定することは難しいであろう。ジャットの西に位置するカエサリアは、サマリアと同様にヘロデによって整備され発展した都市であり、ユダヤ人以外の人々が多数居住し、ユダヤ人は少数であった（Magness 2012, 171）。加えて、ローマ時代からビザンツ時代のジャットの集落ではサマリア人が居住していたことが明らかになっている（Safrai 1982, 257-258）。居住地の情報から考えれば、ジャットの墓地はサマリアと同様にユダヤ人の墓地でない可能性が高い。サマリアやジャットの墓地がユダヤ人から影響を受けて作られたものであるのか、前 2 世紀に作られたサマリアやマレシャの墓地の様相が継続しているのか結論付けることは難しい。しかし、前 1 世紀にサマリア人の居住地であるシェケムで方形ロクリ墓が確認されている（表 15、図 129）事例と合わせると、3 遺跡という少数ではあるがユダヤ人以外でもサマリア人たちがロクリを有する墓を構築していた可能性が考えられる。考古学的情報からは明らかでないが、ハスモン朝のユダヤ化政策によって異教徒の埋葬がユダヤ化していった可能性も考えられるだろう。

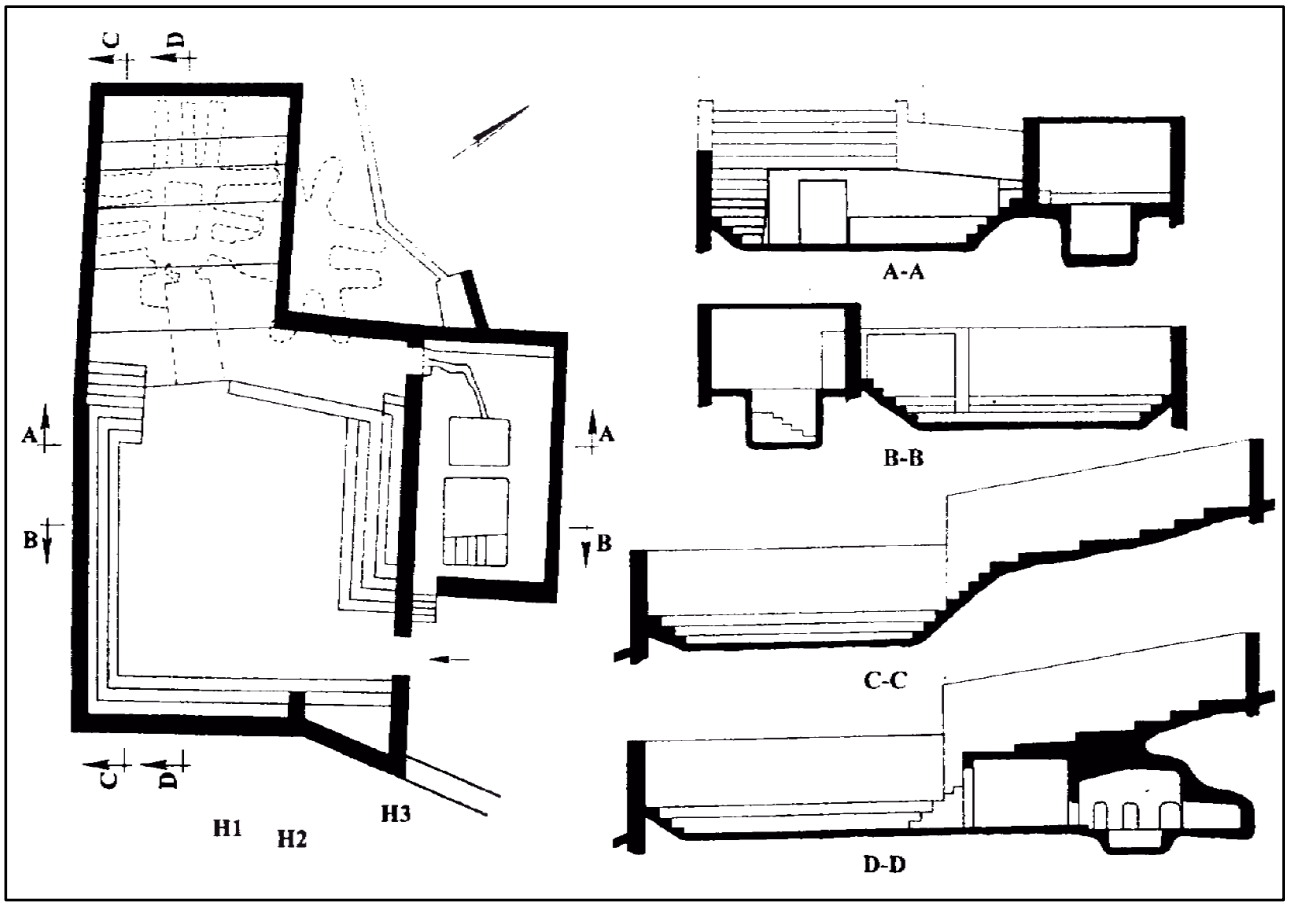


図 138. 墓の外部構造（mourning enclosure），エリコ, Tomb H（Hachlili 2005, Fig. II -19）

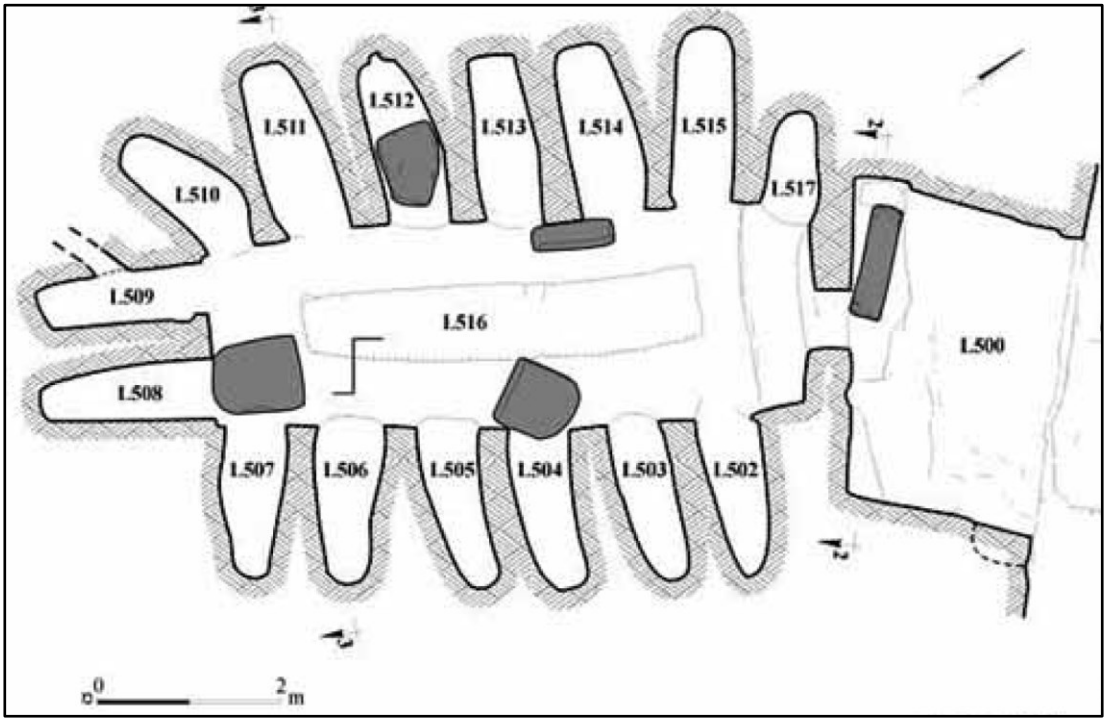


図 139. ロの字型の長方形ロクリ墓, ジャット（Masarwa 2004, Fig.1 改変）

前 2 世紀から 1 世紀にかけて、おそらく地形・地質的な要因から石切墓は中央山地を中心に分布しており、海岸平野の特に地中海に近い地域では石切墓はほとんど構築されていない。沿岸部では港や居住地の多さに反して、土坑墓がわずかに確認されているのみであり、本節 1 項で述べたように、土坑墓は調査・報告されている墓の数が実数と大きくずれている可能性がある。おそらく、地中海沿岸部では、死海沿岸部のシャフト墓で構成される共同墓地のように、ピット墓や石棺墓の共同墓地が利用されていたと考えられる。現在の考古資料からは地中海沿岸部の埋葬習慣を明瞭に読み解くことは難しいが、家族を基盤とした埋葬とは異なる埋葬が行われていた可能性がある。また、全ての時代に共通するが、ロクリ墓は都市や町、街道沿いに主として分布しており、第 3 節で検討したように分布の空白が生じている地域がある。おそらく小規模な集落では海岸平野と同様に土坑墓が構築されていたと考えられるが、同様の理由から現在の考古学的情報から小規模な集落の埋葬習慣について指摘することはできない。

第 5 節 おわりに

本章では、第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における墓の分布を明らかにし、ユダヤ人の埋葬のヘレニズム化を考察してきた。前 2 世紀の段階で、ユダヤ人居住域の中で母室の壁に複数のロクリを設ける構造とベンチ墓が結びついているのはエルサレムだけであり、それ以外の墓地ではベンチ墓や横穴墓が構築されていた。長方形ロクリ墓や個人埋葬はユダヤ地域にはみられず、ギリシア人、フェニキア人の入植地のみで利用されていた。第 2 章で明らかになったエルサレムの傾向と合わせて考えると、前 2 世紀のユダヤ人の埋葬におけるヘレニズムの影響は限定的であり、エルサレム以外のユダヤ地域の墓地ではベンチ墓が新しく構築され、鉄器時代Ⅱ期の埋葬習慣が採用されていた。一方で、ユダヤ地域では家族を意識した埋葬習慣という点は共通しながらも、ハスモン朝時代になるとエン・ゲディのように木棺による埋葬などユダヤ地域の典型的な集骨とは異なる埋葬が行われる墓地が出現し始めた。

前 1 世紀になると、ハスモン朝の領土拡大の影響で各地にユダヤ人居住地が作られ、既存の居住地も発展していき、それに伴うようにユダヤ地域全体でロクリ墓が広く利用されるようになり、イドマヤ地域や海岸平野にもユダヤ人墓地が作られていった。その一方で、ギリシア人、フェニキア人の入植地が陥落したことから、長方形ロクリ墓を有する墓地はなくなり、東地中海岸南部地域における墓地のほとんどはユダヤ人の墓地となった。前 2 世紀にエルサレムで成立した方形の「ユダヤ人のロクリ墓」は、前 1 世紀にはユダヤ人居住域の中で確立し、ユダヤ人を表象する墓になっていた。エルサレムでは前 1 世紀末からオシュアリが採用され、それに伴い平坦型の母室が増加し始めるが、エルサレム以外の墓地でもオシュアリと平坦型の母室が採用され始めた。ロクリ墓と同時に、前 1 世紀になってもベンチ墓や横穴墓は構築されていたが、その一方でヨルダンの谷の墓地群では中央山地とは異なる埋葬が主として行われていた。このような墓の形態・埋葬習慣の違いは、ヘレニズムを含め異文化の埋葬習慣の影響で生じたものではない可能性が高く、ユダヤ人の宗派や思想の違いが要因の一つとして考えられる。ヘレニズムの影響力やハスモン朝の地位の世襲化に対して、ユダヤ人の中でも思想の違いが生じていたためである。墓の形態・埋葬習慣の違いをユダヤ教の分派や思想の違いに考古学的に関連付けることは現在の情報からは困難であるが、ユダヤ人が多様な考えを持つようになったことが墓の形態・埋葬習慣の違いに影響していることは充分に考えられるであろう。

1 世紀になると前 1 世紀の分布範囲に加えて、ヘロデ朝がガリラヤ地域・サマリア地域に発展したことに伴い、ガリラヤ地域やサマリアの山地にもユダヤ人墓地が作られた。前 4 世紀から前 2 世紀はギリシア人やフェニキア人が入植地に伴う形でロクリ墓を西アジアへと広めていったが、前 1 世紀以降はユダヤ人が東地中海岸南部地域において同じ役割を果たしたのである。方形ロクリ墓を主たる墓としながらも、ユダヤ人の埋葬は 1 世紀になっても多様であり、前 1 世紀とあわせて考えると第二神殿時代後期のユダヤ人の埋葬習慣は、ミシュナの埋葬規定とは異なり、必ずしも一律且つ厳格に規定されていたわけではないといえる。前 1 世紀からはユダヤ人以外の人々の方形ロクリ墓の利用が確認されているが、1 世紀にはカエサリア・サマリア（セバステ）間でおそらくユダヤ人以外の人々によって長方形、方形ロクリ墓が利用されていた。これについては、ハスモン朝のユダヤ化政策によって異教徒の埋葬がユダヤ化していった可能性も考えられるであろう。また、海岸平野や小規模な集落では、おそらく土坑墓が構築されていたと考えられるが、前 2 世紀から 1 世紀を通じて考古学的情報は少ない状況であった。

前 2 世紀のエルサレムのユダヤ人は、ヘレニズムによってもたらされた「異文化の墓」に向き合うこととなったが、母室の壁に複数のロクリを設ける構造を伝統的な再埋葬の発展に利用し、ベンチ墓と結びつけることでユダヤ人独特の方形ロクリ墓を成立させた。エルサレム以外の居住地のユダヤ人は、前 2 世紀には母室の壁に複数のロクリを設ける構造を取り入れておらず、鉄器時代Ⅱ期の墓であるベンチ墓を自らの埋葬として採用した。つまり、ヘレニズムに向き合う中で初期のユダヤ人の埋葬のヘレニズム化は非常に限定的なものであったのである。

ハスモン朝が成立し安定し始めた前 1 世紀以降には、かつてのヘレニズム化に似通ったプロセスで東地中海岸南部地域の「ユダヤ化」が進んでいき、それに伴いユダヤ人は方形ロクリ墓の拡散者となった。ユダヤ人の方形ロクリ墓はユダヤ人居住域の中で確立し、オシュアリという新しい埋葬方法が採用されながらも、家族を意識した再埋葬が行われる方形ロクリ墓は、ユダヤ人を表象する墓になっていた。前 1 世紀以降は東地中海岸南部地域におけるヘレニズムの影響力は減少し、ユダヤ人の埋葬についてヘレニズム都市に典型的な埋葬、異文化の埋葬の影響はみられないが、オシュアリの採用や墓の形態・埋葬習慣の多様性など変化が生じた。第 2 章 6 節で述べたように、オシュアリの採用の要因については、復活信仰や富の蓄積、ヘレニズムの個人に対する認識の影響が可能性として考えられ、埋葬習慣の多様性については、前述のように、ヘレニズムの影響力やハスモン朝の地位の世襲化に対して起こったユダヤ人の思想の違いが要因の一つである可能性がある。しかし、いずれの場合も墓の形態・埋葬習慣の違いを解釈するための明確な根拠に欠けているため、母室の壁に複数のロクリを設ける構造のように、オシュアリの採用や墓の形態・埋葬習慣の多様性の要因を考古資料や文献史料から示すことは難しい。少なくとも、これらはユダヤ人とヘレニズムという関係よりも、律法の解釈の違いのようにユダヤ教あるいは自らの在り方を問うたというユダヤ人の中での変化である可能性が高いであろう。

終章　結論

終章 結論

本論は、第二神殿時代後期においてヘレニズムに直面することになったユダヤ人が、どのようにそれに向き合い自らの文化・思想を形作っていったのかを埋葬に関する考古学的研究から明らかにすることが目的であった。「ユダヤイズムとヘレニズム」は古代ユダヤ教研究における一つの大きなテーマであり、古代ユダヤ教が成立していく中で、どの程度ヘレニズムの影響を受けているのかを検討することは、現在のユダヤ教やキリスト教の再解釈と理解に繋がる。このテーマについては、これまで文献史料研究が中心であり、考古資料からユダヤイズムとヘレニズムの関係を探る研究は数少ない。一方で、これまでのイスラエル・パレスチナ自治区の考古学的調査によって、考古資料による情報は多量に蓄積されている状況である。よって、本論では、考古資料に軸足を置いた研究によってユダヤイズムとヘレニズムの相克を検討することにした。

ユダヤ人の埋葬は、鉄器時代Ⅱ期から第二神殿時代後期に至るまで、バビロニア捕囚を間に挟むが一連の流れに位置づけられる。そのため、ヘレニズムの影響を受ける前のユダヤ人独自の埋葬習慣を把握し比較する目的で、第一神殿時代を含め第二神殿時代後期までの埋葬を概観し、研究の整理を行った。鉄器時代Ⅱ期には横穴式の石切墓であるベンチ墓が主として利用されており、研究はベンチ墓に集中していた。とりわけ家を模した墓の形態と集骨による再埋葬に関して多くの研究が行われていた（Mazar 1976; Barkay 1994; Faust and Bunimovitz 2008; Osborne 2011）。ベンチ墓には死後も家族が共に在るというユダ王国の人々の死生観が込められており、その形態と埋葬方法は家族・一族に重きを置いていたという指摘がなされている（Faust and Bunimovitz 2008, 162）。

バビロニア捕囚時代からプトレマイオス朝時代のユダヤ地域では、鉄器時代Ⅱ期に製作されたベンチ墓が再利用されたが、セレウコス朝時代になると新しいタイプの石切墓であるロクリ墓がエルサレムに出現した（Kloner and Zissu 2007, 71）。それ以前にロクリは既に周辺地域の墓で採用されており、ユダヤ人のロクリ墓の起源は研究の争点の一つであった。また、ロクリ墓は多様な要素から構成されており、埋葬方法や副葬品、墓のファサードや内部形態など多岐に渡る研究が行われてきた。ここでは、そうした第一神殿時代～第二神殿時代後期の埋葬に関するこれまでの研究を整理した結果、内部形態の研究の不足、定量的な研究の不足、ロクリ墓の研究がエルサレムとエリコを中心とした議論になっていることが問題点として挙げられた。

これらの問題を解決するため、本論ではまず第 2 章で、前 2 世紀におけるエルサレムのロクリ墓と同時期のヘレニズム都市のロクリ墓、鉄器時代II期のベンチ墓との墓の形態を中心とした比較を行った。そして、第二神殿時代後期のエルサレムにおける埋葬の変遷を明らかにし、エルサレムのユダヤ人が埋葬に関してどのようにヘレニズムに向き合ったのかということを検討した。

ヘレニズム時代におけるエルサレムとヘレニズム都市のロクリ墓の比較では、エルサレムにおける前 2 世紀のロクリ墓は内部形態、墓に入るまでの構造、埋葬習慣の点で、ヘレニズム都市のロクリ墓とは異なっていたことが明らかになった。前 2 世紀のエルサレムのロクリ墓は、地表の外部構造を服喪の空間として利用し、集骨に適した母室、ロクリによって家族埋葬を行う墓であり、新しい構造であるロクリに関してもアレキサンドリアやマレシャのロクリ墓における遺体を埋葬するプロセスを含めて採用されたものではなく、単にロクリの形態の借用もしくは模倣に過ぎないと考えられる。エルサレムの初期ロクリ墓におけるヘレニズムの影響は限定的であったといえるであろう。

一方で、エルサレムにおける前 2 世紀のロクリ墓と鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓の比較では、ピットのある母室、特にコの字型の母室と埋葬方法、家族を意識した死生観という点で強い共通性があることが明らかになった。前 2 世紀のロクリ墓のロクリは集骨に適した独自の変化を遂げており、このような集骨のための子室はベンチ墓にもリポジトリとして一定数確認された。このことから、ユダヤ人はロクリに影響を受けて、リポジトリを母室の 3 辺に配置するように変化させ、且つ一次埋葬と二次埋葬の両方を行うことができるようにしたことで、集骨による埋葬をより円滑に行えるように改善したと考えられる。

エルサレムにおけるロクリ墓の変遷の検討から、前 1 世紀末から 1 世紀にかけてユダヤ人の埋葬に大きな変化が生じていることが明らかになった。前 2 世紀にみられた家族を意識した埋葬習慣は時代を通して継続しているが、前 1 世紀末にオシュアリが利用されるようになったことに伴い、母室の形態は平坦型が過半数を占めるようになり、アルコソリアなど新しい構造がみられるようになった。再埋葬が行われる小型石棺は周辺地域に例がなく、考古学的な情報からは、ユダヤ人のオシュアリがヘレニズム都市の埋葬方法に直接的に影響を受けたものではないと考えられる。また、埋葬プロセスと埋葬空間という点で、ヘレニズム都市の埋葬習慣とユダヤ人のオシュアリの習慣は異なっている。従来の研究では、オシュアリの採用要因として復活信仰や富の蓄積が挙げられており、また、ユダヤ人の家族を意識した埋葬に個人が表面化してきたことからは、ヘレニズムの個人に対する認識がユダヤ人の考え方へと影響を与え、その結果がオシュアリの採用に表れているとも解釈できるかもしれない。しかし、考古資料・文献史料からこれらを直接的な根拠を持って示すことは難しく、オシュアリの採用について明確な要因を決定づけることはできない。少なくとも、考古資料に基づく情報からは、ユダヤ人とヘレニズムという関係で考えるべきではなく、ユダヤ人の再埋葬の発展として捉えるべきであろう。エルサレムのロクリ墓にみられる傾向から、埋葬がユダヤ人にとって自らのアイデンティティを形成する重要な要素であったことが分かった。

第 3 章と第 4 章では東地中海岸南部地域におけるユダヤ人の埋葬のヘレニズムに対する相剋を明らかにすることを目的に、墓の分布状況の検討を行った。東地中海岸南部地域は現在イスラエルとパレスチナ自治区に分かれているが、パレスチナ自治区の墓に関する考古学的情報は、イスラエルと比較して不足しており、パレスチナ自治政府の文化財管理の状況も不明瞭な状況であった。よって、第 3 章ではパレスチナ自治区で聞き取り調査、考古学的踏査を行い、パレスチナ自治区における墓の調査・管理状況と墓の考古学的情報を把握し、パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布を検討した。

過去の踏査・発掘調査の情報を整理した結果、パレスチナ自治区の調査の多くは踏査であり、考古学的な情報を得ることが難しいものが多かった。加えて、墓は盗掘の主な対象となっており、パレスチナ自治区の墓の大半は遺物がない、もしくは極めて少なく、パレスチナ観光・遺跡庁も墓の年代をほとんど同定できない状況であった。また、パレスチナ観光・遺跡庁も墓の発掘調査を行っているが、定期的に独自の雑誌や報告書を刊行する体制がなく、そのほとんどが未報告・未整理の状態であり、それらの情報を活用することは困難であった。このような状況によって、特にイスラエルによる調査数が少ないユダヤ・サマリア地域間の墓に関する情報は不足しており、同地域の分布の不足を解消する必要があることが分かった。

発掘調査とその成果の整理・報告を行うことが、この不足を解消するために最適な手法であるが、踏査についても墓の図面や写真などの詳細な情報が不足しているため、本研究ではまずユダヤ・サマリア地域間の踏査を行うことにした。ユダヤ・サマリア地域間の大規模な墓地であるアブードとキルベット・ク

ルカッシュ、小規模な墓地であるシンジル、アイン・シニヤ、ユダヤ地域の大規模な墓地であるテル・エン・ナスベについて考古学的踏査を行い、墓の形態や立地、周辺遺跡について記録し、大まかな墓の年代の推定を行った。結果として、盗掘の被害は深刻であり、表採土器でさえ十分な量はなかったが、アルコソリアなどの構造やフレスコ、土器から、ほとんどの墓がローマ時代～ビザンツ時代、特に 1 世紀以降の墓地である可能性が高いことが明らかになった。

考古学的踏査で得られた情報は、細かい年代幅での分布に活用することは難しいが、過去の調査の情報を合わせることで、ユダヤ・サマリア地域間における第二神殿時代後期の墓の分布を検討できるようになった。分布からは、前 2 世紀から 1 世紀にかけてロクリ墓の分布がユダヤ地域から周辺地域に広がっていく傾向がみられたが、第二神殿時代とその後の時代の区別をつけることが現在の情報からは困難であるため、前 1 世紀以降の分布の展開については推測の域を出ないものとなった。ユダヤ・サマリア地域間における分布の空白は、パレスチナ自治区の情報の不足も一因であったが、同時に居住地の少なさや地形という点で第二神殿時代当時の影響も受けていることが考えられた。

第 4 章では、第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における墓の分布状況、墓の種類、埋葬方法を把握し、東地中海岸南部地域における多様な埋葬の中にユダヤ人の居住域における埋葬を位置付けることで、ユダヤ人の埋葬のヘレニズムに対する相剋を考察した。墓の分布を正確に把握するため、支配領域、地形、地質、居住地、街道から墓地の立地をまず検討し、その情報を踏まえた上で第二神殿時代後期の墓地の分布状況を確認した。

前 2 世紀の段階では、母室の壁に複数のロクリを設ける構造とベンチ墓が結びついているのはエルサレムだけであり、それ以外のユダヤ人居住域の墓地ではベンチ墓や横穴墓が利用されていた。前 2 世紀のユダヤ人の埋葬に対するヘレニズムの影響は限定的であり、むしろエルサレム以外の墓地ではベンチ墓が新しく製作され、鉄器時代Ⅱ期の埋葬習慣が採用されていた。長方形ロクリ墓や個人埋葬はギリシア人やフェニキア人の入植地でのみ確認され、地形・地質的な要因から海岸平野では石棺墓が利用されていた。

前 1 世紀になると、ハスモン朝の領土拡大の影響で各地にユダヤ人居住地が作られ、従来の居住地も発展していき、それに伴うようにユダヤ地域全体でロクリ墓が広く利用されるようになり、イドマヤ地域や海岸平野にもユダヤ人墓地が作られていった。方形ロクリ墓は、前 1 世紀にはユダヤ人居住域で確立し、ユダヤ人を表象する墓になっていた。一方で、前 2 世紀のクムランでは中央山地とは異なる埋葬が行われており、前 1 世紀のヨルダンの谷の墓地群では中央山地とは異なる埋葬が主として行われ、ユダヤ人の墓地の中で墓の形態・埋葬習慣の違いが特にみられるようになった。この一つの要因は、ヘレニズムを含め異文化の埋葬習慣の影響ではなく、宗派や思想の違いであると考えられた。墓の形態・埋葬習慣の違いをユダヤ教の分派や思想の違いに考古学的に関連付けることは現在の情報からは困難であるが、ユダヤ人が多様な考えを持つようになったことが墓の形態・埋葬習慣の違いに影響していることは充分に考えられるであろう。

1 世紀には前 1 世紀の分布範囲に加えて、ヘロデ朝時代のガリラヤ地域・サマリア地域の発展と拡大に伴って、ガリラヤ地域やサマリアの山地にもユダヤ人墓地が作られていった。前 1 世紀以降には、かつてのヘレニズム化と似通ったプロセスで東地中海岸南部地域の「ユダヤ化」が進み、それに伴ってユダヤ人はロクリ墓の拡散者となっていったといえるであろう。ユダヤ人の埋葬は 1 世紀になっても多様であり、前 1 世紀とあわせて考えると、第二神殿時代後期のユダヤ人の埋葬習慣は、ミシュナの埋葬規定とは異

なり、必ずしも一律に規定されていたわけではないと考えられる。少なくとも、これらはユダヤ人とヘレニズムという関係よりも、ユダヤ教あるいは自らの在り方を問うたというユダヤ人の中での変化である可能性が高いであろう。

序章で述べたように、バビロニア捕囚から帰還したユダヤ人は、第二神殿時代の長い期間を通してユダヤ人独自の思想・文化を確立させてきた。後世に文書化されたミシュナにはロクリ墓がユダヤ人の墓として規定されていることから、最終的にロクリ墓をユダヤ人の典型的な墓としていることは明らかであるが、そこにヘレニズムがどの程度介在しているのかということが重要な争点であった。本論でこれまで検討してきた内容から、当初は鉄器時代Ⅱ期の埋葬習慣を伝統的なユダヤ人の埋葬として据えていたことは疑いないであろう。ベンチ墓から発展した方形ロクリ墓は、母室の壁に複数のロクリを設ける構造という点でヘレニズムの埋葬習慣の影響を受けながらも、家族を意識した死生観のもと行われる再埋葬という根幹ともいえるところは変えなかった。

その一方で、第二神殿時代後期を通じてユダヤ人の埋葬は多様であり、特に前 1 世紀のヨルダンの谷の墓地群の墓の形態と埋葬習慣は、中央山地や海岸平野のユダヤ人とは異なっていた。また、前 1 世紀末からオシュアリが採用され、ユダヤ人の主たる埋葬方法も変化した。方形ロクリ墓と異なる墓やオシュアリは、ヘレニズムを含め異文化の埋葬習慣とは結びつかないため、ユダヤ人が多様な考えを持つようになり、ユダヤ教あるいは自らの在り方を問うたというユダヤ人の中での変化の結果である可能性が高いであろう。前 1 世紀にユダヤ人を表象する墓となった方形ロクリ墓は、家族を意識した死生観のもと行われる再埋葬という点に関しては、埋葬方法がオシュアリへと変化しても前 2 世紀とは変わっておらず、総じて、第二神殿時代後期のユダヤ人の埋葬におけるヘレニズムの影響は限定的であったと考えられる。

本論ではユダヤ人の埋葬のヘレニズムに対する相剋を議論してきたが、このテーマに関しては未だに様々な課題があるといえる。第 3 章で検討したパレスチナ自治区とイスラエルに共通している問題であるが、盗掘の被害によって墓の年代や埋葬方法が明らかでない墓が多く、本論で行った分布の検討が第二神殿時代後期の全ての墓を取り扱えているとは言い難い。これは研究方法の改善では解決できない問題であり、例えば年代不明の墓が含まれる墓地の悉皆的な発掘調査によって、推定年代を与えるなどしか方法はないだろう。年代不明の墓の年代を同定することは難しいが、新たに発掘調査を行い墓地や墓の数を増やすことで、この問題の一部は解消できると思われる。今後パレスチナ自治区とイスラエルで墓に関する発掘調査が行われていくことで、本論で示した第二神殿時代後期の墓地の分布はより当時の状況を反映したものとなっていくであろう。パレスチナ自治区に関しては、ユダヤ人の墓に関する積極的な調査が行われているとは言い難いため、今後の研究の中で発掘調査やさらなる踏査を行う必要がある。

また、本論は第二神殿時代後期のユダヤ人の埋葬を対象としているが、エルサレムが陥落しユダヤ人が各地に離散した後の埋葬も重要である。パレスチナ自治区、イスラエルの墓に関して本論で資料収集を行った中で、エルサレム周辺を除いてエルサレム陥落以降のローマ時代、ビザンツ時代の墓の報告が最も多くみられた。エルサレムが陥落し各地にユダヤ人共同体が作られていく中で、おそらくエルサレムから各共同体へと墓地が分散していったのであろう。第二神殿時代後期は、ユダヤ人が経済的・文化的に発展していく中でヘレニズムに向き合っていたが、離散後のユダヤ人は再びエルサレムを失い、各地の共同体を強化していく中でローマの文化に向き合っていくことになった。ユダヤイズムとヘレニズム

という観点からは少し外れるが、ユダヤ人と異文化との関係は形を変えて紀元後も続いていったのである。第二神殿時代後期に一貫していた家族を意識した埋葬が離散という困難な状況の中で維持されていたのか、それとも変わってしまったのかということは、ユダヤイズムとヘレニズムの関係を考えることと同様に現在のユダヤ教の再解釈、理解に繋がるといえるであろう。第二神殿時代に限られないユダヤ人の埋葬研究を展望しつつ、本論を終えることとしたい。

参考文献

Abadi, O.Y. and Regev, E. 2020: “Folded Wheel-made Oil Lamps, Standing Pit Burial Caves and Judaean Ethnic Identity in the Hasmonean Period,” *Palestine Exploration Quarterly* 152:3, 248-272

Abahre, J.S.H. 2021: “Reforming Tourism and Archaeology Education in Palestine to Meet Industry Expectations,” *Journal of Teaching in Travel & Tourism*, 1-20

Abu Raya, R. and Weissman, M. 2013: “A Burial Cave from the Roman and Byzantine Periods at‘En Ya‘al, Jerusalem,” *‘Atiqot* 76, 11-14

Abu Raya, R. and Zissu, B. 2000: “Burial Caves from the Second Temple Periods on Mount Scopus, Jerusalem,” *‘Atiqot* 40, 1-12

Adawi, Z. 2013: “A Burial Cave and an Agricultural Terrace at Khirbat el-Mughram in the Shu‘afat Neighborhood, Jerusalem,” *‘Atiqot* 76, 1-9

Adawi, Z. and Baruch, Y. 2012, “Jerusalem, Nahal Azal,” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 124

al-Houdalieh, S. H. 2014: “Tomb Raiding in Western Ramallah Province, Palestine: An Ethnographic Study,” in: Crawford, SW (ed.), *Up to the Gates of Ekron: Essays on the Archaeology and History of the Eastern Mediterranean in Honor of Seymor Gitin*, 95–110.

al-Houdalieh, S. H., Bernbeck, R. and Pollock, S. 2017: “Palestinian Looted Tombs and their Archaeological Investigation,” *Journal of Eastern Mediterranean Archaeology & Heritage Studies* 5-2, 198-239

Amit, D. & Yezerski, I. 2001: “An Iron Age II Cemetery and Wine Presses at an-Nabi Danyal,” *Israel Exploration Journal* 51-2, 171-193

Adriani, A. 1934: *Annuario del Museo Greco-Romano, vol. 1 [1932-1933]. Alexandria:Whitehead*, Morris

Adriani, A. 1952: *Annuaire de Musée Gréco-Romain, vol. 4 [1940-1950]. Alexandria: Whitehead*, Morris

Adriani, A. 1963: *Repertorio d'arte dell'Egitto greco-romano: Serie C, [architettura e topografia]*, Italy

Avigad, N. 1954: *Ancient Monuments in the Kidron Valley*, Jerusalem

Avigad, N. 1956: “The Necropolis,” in: Avi-Yonah, M.(ed.) *Sepher Yerushalayim(The Book of Jerusalem)*, Jerusalem, 320-348

Avigad, N. 1967: “Jewish Rock-cut Tombs in Jerusalem and in the Judean Hill Country,” Eretz Israel 8, 119-142

Avigad, N. 1971: “The Burial-Vault of a Nazirite Family on Mount Scopus.,” *Israel Exploration Journal* 21, 185-200

Avigad, N. 1976: “Jerusalem: The Tombs of Jerusalem,” *New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land II*, 627-641

Avigad, N. 1984: Jerusalem, "The City Full of People." In: Shanks, H. and Mazar, B.(ed.), *Recent Archaeology in the Land of Israel*, Jerusalem, 129-40

Avni, G. 2013: “Who Were Interred in the Qumran Cemetery? On Ethnic Identities and the Archaeology of Death and Burial,” *Qumran Revisited: A Reassessment of the Archaeology of the Site and its Texts*, 125-136

Avni, G. and Greenhut, Z. 1996: *The Akeldama Tombs: Three Burial Caves in Kidron Valley*, Jerusalem

Badhi, R. and Torgë, H. 2000: “Shoham (East; B),” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 111, 58

Bahat, D. 1982: “Burial Caves on Giv²at Hamivtar,” *‘Atiqot* 8, 35–40

Bar-Adon, P. 1977: “Another Settlement of the Judean Desert Sect at 'Ein el-Ghuweir on the Dead Sea.” *Bulletin of the Anglo-Israel Archaeological Society* 227, 1–25

Barag, D. 1978: “Óanita, Tomb XV: A Tomb of the Third and Early Fourth Century CE,” *‘Atiqot* 13, 1–60.

Barag, D. 2003: “The 2000-2001 Exploration of the Tombs of the Son of Hezir and Zecharias,” *Israel Exploration Journal* 53, 78-110

Barkay, G. 1992 The Iron Age II-III, in Ben-Tor, A.(ed.), *The Archaeology of Ancient Israel*, New Haven CT, 302-373

Barkay, G. 1994: “Excavations at Ketef Hinnom in Jerusalem,” in: Geva, H (ed.), *Ancient Jerusalem Revealed*, Jerusalem, 85-110

Barkay, G. 1994: “Burial Caves and Burial Practices in Judah in the Iron Age,” in: Singer, I.(ed.), *Graves and Burial Practices in Israel in the Ancient Period*, Jerusalem: 96-164

Barkay, G. 1999: “Burial Caves and Dwellings in Judah during the Iron Age II: Sociological Aspects,” in Faust, A. and Maeir, A. M. (ed.), *Material Culture, Society and Ideology: New Directions in the Archaeology of the Land of Israel*, 96-102

Barkay, G. 2000: “Excavations at Ketef Hinnom in Jerusalem,” in: Geva, H(ed.), *Ancient Jerusalem Revealed*, Jerusalem, 85-106

Barkay, G., Kloner, A. and Mazar, A. 2000: “The Northern Necropolis of Jerusalem during the First Temple Period,” in: Geva, H (ed.), *Ancient Jerusalem Revealed*, Jerusalem, 119-127

Barshad, D. 2004: “A Burial Cave at Ḥorbat Indur, on the Slopes of Giv‘at Ha-Moré,” *‘Atiqot* 46, 15-25

Baruch, Y and Adawi, Z. 2017: “Jerusalem, Umm Tuba,” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 129

Baruch, Y., and Kapitaikin, A. 1997: “Winepresses, Caves and Tombs near Tel Zif,” *‘Atiqot* 32, 99–108

Baruch, Y. and Eirikh-Rose, A. 2014: “Jerusalem, Sanhedriya,” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 126

Baruch, Y. and Ganor, A 2008: “Jerusalem, Khirbat ‘Addasa,” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 120

Batz, S. 2003: “A Second Temple Period Cemetery at Khirbet Beit Sila,” in: Bottini, G.C., Di Segni, L. and Chrupeata, L.D.(ed.), *One Land - Many Cultures; Archaeological Studies in Honour of Stanislao Loffreda OFM*, Jerusalem, 111-123

Batz, S. and Peleg, Y. 2002: “Ḥevron, Qiryat Arba',” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 114, 111-112

Baughan, E.P. 2016: “Burial Klinai and Totenmahl?,” *Dining and Death: Interdisciplinary Perspectives on the ‘Funerary Banqyet’in Ancient Art, Burial and Belief*, 195-218

Be’eri, R. 2015: “Jerusalem, Mount of Olives,” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 127

Berlin, M. A. 1997: “Archaeological Sources for the History of Palestine: Between Large Forces: Palestine in the

Hellenistic Period," *The Biblical Archaeologist* 60-1, 2-51

Berlin, M. A. 2002: "Power and Its Afterlife: Tombs in Hellenistic Palestine," *Near Eastern Archaeology*, 65-2, 138-148

Bloch-Smith, E. 1992: *Judahite Burial Practice and Beliefs about The Dead*, JSOT Press

Breccia, E. 1912: *La Necropoli di Sciatbi*, Cairo

Broshi, M. and Finkelstein, I. 1992: "The Population of Palestine in the Iron Age II," *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 287, 47-60

Broshi, M. and Gibson, S. 2000: "Excavations along the Western and Southern Walls of the Old City of Jerusalem," in: Geva, H(ed.), *Ancient Jerusalem Revealed*, Jerusalem, 147-155

Conder, C.R. and Kitchener, H.H. 1881-1883: *The Survey of Western Palestine: Memoirs of the Topography, Orography, Hydrography, and Archaeology*, London

Contenau, G. 2000: "Mission archéologique à Sidon(1914)," *Syria* 1, 16-55

de Vaux, R. 1953: "Fouilles de Khirbet Qumran-Rapport préliminaire," *Revue Biblique* 60, 83–106

Dinur, U. 1986: "Bethlehem," *Excavations and Surveys in israel 5*, 15-16

Elisha, Y. 2015: "Khirbat el-Bira," *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 127

Eisenberg-Degen, D. Aladjem, E. and Talis, S. 2019: "Azriqam, Giv'ati Pumping Station," *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 131

Eshel, H. 1987: "The Late Iron Age Cemetery of Gibeon," *Israel Exploration Journal* 3-1, 1-17

Eshel H., Broshi, M., Freund, R., and Schultz B. 2002: "New Data on the Cemetery East of Khirbet of Qumran," *Dead Sea Discoveries* 9-2, 135–165

Faust, A. 2000: "The Rural Community in Ancient Israel during the Iron Age II," *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 317, 17-39

Faust, A. 2009: "Tel ªEton", 2006–2007," *Israel Exploration Journal* 59, 112–119

Faust, A. and Bunimovitz, S. 2003: "The Four Room House: Embodying Iron Age Israelite Society," *Near Eastern Archaeology* 66, 22-31

Faust, A. & Bunimovitz, S. 2008: "The Judahite Rock-Cut Tomb: Family Response at a Time of Change," *Israel Exploration Society* 58-2, 150-170

Fedak, J. 1946: *Monumental Tombs of the Hellenistic Age: A Study of Selected Tombs from the Pre-Classical to the Early Imperial Era*, Toronto

Feig, N. and Hadad, S. 2015: "Roman Burial Caves at I ʿbillin," *'Atiqot* 83, 93-123

Fine, S. 2000: "A Note on Ossuary Burial and the Resurrection of the Dead in First Century Jerusalem," *Journal of Jewish Studies* 51, 69-76

Fischer, M. and Tal, O. 2003: "Architectural Decoration in Ancient Israel in Hellenistic Times: Some Aspects of Hellenization," *Zeitschrift des Deutschen Palästina-Vereins(1953-)*, Bd. 119, H. 1, 19-37

Forester, G. 1978, "Architectual Fragments from Jason's Tomb Reconsidered," *Israel Exploration Journal*, 28, 154-156

Freiman, E. 2017: "En Perat," *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 129

Galling, K. 1936: "Die Necropole von Jerusalem," *Palästina Jahrbuch des Deutschen Evangelischen Institut*, 70-

106

Ganor, A. and Avganim, A. 1999: “Ibthan,” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 109, 46

Ganor, A. and Ganor, S. 2016: “A Burial Cave from the Second–First Centuries BCE near 'En Gedi,” *‘Atiqot* 84, 65-78

Gershuny, L.T. and Zissu, B. 1996: “Tombs of the Second Temple Period at Giv‘at Shapira, Jerusalem, ” *‘Atiqot* 30, 45-59

Geva, H. 1994: *Ancient Jerusalem revealed*, Jerusalem

Gidon, G., Klein, E. and Hadad, I. 2020: “Jerusalem, Mount of Olives,” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 132

Gitin, S. 2015: *The Ancient Pottery of Israel and its Neighbors from the Iron Age through the Hellenistic Period*, Jerusalem

Grafman, R. 1970: “Herod’s Foot and Robinson’s Arch,” *Israel Exploration Journal* 20, 60-66

Gershuny, L.T. and Zissu, B. 1996: “Tombs of the Second Temple Period at Giv‘at Shapira, Jerusalem, ” *‘Atiqot* 30, 45-59

Greenhut, Z. 2007: “Horbat ʿIllit,” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 119

Gruen, S. M. 2016: *The Construct of Identity in Hellenistic Judaism*, Berlin

Goldenberg, G., Klein, E., Hadad, I. and Ganor, A. 2020: “Jerusalem, Peace Forest,” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 132

Hachlili, R. 2003: “Burial Practices at Qumran,” *Revue de Qumrân*, 16-2, 247-264

Hachlili, R. 2005: *Jewish Funerary Customs, Practice and Rites in the Second Temple Period*, Leiden

Hachlili, R. and Killebrew, A.E. 1999: *Jericho, The Jewish Cemetery of the Second Temple Period*, Jerusalem

Hadas, G., Sheffer, A. Werker, E., Carmi, I., Segal, D., Arensburg, B. and Belfer-Cohen, A. 1994: “Nine Tombs of the Second Temple Period at 'En Gedi,” *‘Atiqot* 24, 1-14

Hamran, A.R. and Sion, O. 1994: “Duma,” *Excarvations and Surveys in Israel*, 14, 142

Hengel, M. 1981: *Judaism and Hellenism: Studies in Their Encounter in Palestine During the Early Hellenistic Period*, Philadelphia

Humbert, J.B. and Chambon, A. 1994: *Fouilles de Khirbet Qumrân et de An Feshkha I*, Fribourg

Jakoel, E. and Nagar, Y. 2014: “Bet Dagan, Ha-Havazzelet St,” *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel*, 126

Jidejian, N. 2000: “Greater Sidon and its "Cities of the Dead",” *National Museum News*, 10, 15-24

Kagan, E.D. 2012: “Jerusalem, Sheikh Jarrah,” *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 124

Kelso, S. L. 1968: *The Excavation of Bethel(1934-1960): William F. Albright, Director 1934, James L. Kelso, Director 1954, 1957, 1960, Joint Expedition of the Pittsburg Theological Seminary and the American School of Oriental Research in Jerusalem*, *The Annual of the American Schools of Oriental Research* 39

Kelso, S. L. 1993: “Bethel,” in Stern, E(ed.), *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land 1*, Jerusalem, 192-194

Klein, E. and Klein, A. 2018: “Horbat ʿAtrabba,” *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 130

Klein, E. and Rotstein, U. 2017: “Mishmar David,” *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 129

Klein, E., Sapir, N., Goledenberg, G. and Goldenberg, A. 2017: "Jerusalem, Akeldama," *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 129

Kloner, A. 1980: "A Tomb of the Second Temple Period at French Hill, Jerusalem," *Israel Exploration Journal* 30, 99-108

Kloner, A. 1982: "Jerusalem: Mt. Scopus," *Explorations and Surveys in Israel* 1, 56

Kloner, A. 1991: A Burial Cave from the Early Roman Period at Giv'at seled in the Judean Shephela, *'Atiqot* 20, 159-163

Kloner, A. 1995: "Jewish Burial Customs in the Hasmonean Period," in: Amit, D. and Eshel, H.(ed.), *Idan 19: The Hasmonean Period*, Jerusalem, 211-218

Kloner, A. 1996: "A Tomb with Inscribed Ossuaries in East Talpiyot, Jerusalem," *'Atiqot* 29, 15-22

Kloner, A. 2001-2002: "Iron Age Burial Caves in Jerusalem and its Vicinity," *Bulletin of the Anglo-Israel Archaeological Society* Vol.19-20, 95-118

Kloner, A. 2003a: *Maresha Excavations Final Report I: Subterranean Complexes 21, 44, 70*, Jerusalem

Kloner, A. 2003b: *Survey of Jerusalem—The Northwestern Sector: Introduction and Indices*. Jerusalem

Kloner, A. and Davis, D. 2000: "A Burial Cave of the Late First Temple Period on the Slope of Mount Zion," in: Geva, H (ed.), *Ancient Jerusalem Revealed*, Jerusalem, 107-110

Kloner A. and Gat J. 1982: "Burial Caves in East Talpiyot," *'Atiqot(HS)*8, 74–76

Kloner, A., Regev.D. and Rappaport, U. 1992: "A Hellenistic Burial Cave in the Judean Shephelah," *'Atiqot* 21, 27-50, 175-177

Kloner, A. and Yezerski, I. 2020: "A Late Iron Age Rock-Cut Tomb on the Western Slope of Mount Zion, Jerusalem," *'Atiqot* 98, 1-24

Kloner, A. and Zelinger, Y. 2007: "The Evolution of Tombs from the Iron Age through the Second Temple Period," in: Crawford, SW(ed.), *Up to the Gates of Ekron: Essays on the Archaeology and History of the Eastern Mediterranean in Honor of Seymor Gitin*, Jerusalem, 209–219.

Kloner, A. and Zissu, B. 2007: *The Necropolis of Jerusalem in the Second Temple Period*, Leuven

Kon, M, 1947: *The Tombs of the Kings*, Tel Aviv

Kuhnen, H.P. 1990: *Palästina in griechisch-römischer Zeit*, Munich

Landvatter, P.T. 2013: *Identity, Burial Practice, and Social Change in Ptolemaic Egypt*, University of Michigan

Lipschits, O. and Oeming, M. 2006: *Judah and the Judeans in the Persian Period*, Indiana

Magen, Y. 2004: "Qalandiya: A Second Temple Period Viticulture and Wine Manufacturing Agricultural Settlement," in: Magen, Y. (ed.), *The Land of Benjamin*, Jerusalem, 75-76, 82-83

Magen, Y. 2008: *Judea and Samaria Researches and Discoveries*, Jerusalem

Magen, Y. 2009: *Flavia Neapolis, Shechem in the Roman Period, vol.1*, Jerusalem

Magness, J. 2012: *The Archaeology of The Holy Land, from the Destruction of Solomon's Temple to the Muslim Conquest*, New York

Masarwa, A. 2004: "Jatt," *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 116

Massarwa, A. 2016: "Tel Par （East）," *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 128

Mazar, A. 1976: "Iron Age Burial Caves North of the Damascus Gate, Jerusalem," *Israel Exploration Journal* 26,

1-8

Mazar, A. 1990: *The Archaeology of the Land of the Bible, 10,000-586 BCE*, London

Mazar, B. 1973: *Beth Shearim: Report on the Excavations during 1936-1940*, Jerusalem

Mazar, B., Dothan, T. and Dunayevsky, I. 1966: *En-Gedi: The First and Second Seasons of Excavations 1961-1962*, Jerusalem

McCown, C.C. 1947: *Tell en-Naṣbeh: Excavated Under the Direction of the Late William Frederic Badè, Vol. 1: Archaeological and Historical Results*, Berkeley and New Haven

Meyers, E.M. 1970: "Secondary Burials in Palestine," *The Biblical Archaeologist*, 33-1, 1-29

Meyers, E.M. 1971: *Jewish Ossuaries: Reburial and Rebirth*, Rome

Meyers, E.M. 2014: "The Use of Archaeology in Understanding Rabbinic Materials: An Archaeological Perspective," *Talmuda de-Eretz Israel* 73, 303-320

Meyers, E.M. and Chancey, M.A. 2012: *Alexander to Constantine Archaeology of the Land of the Bible Volume3*, Yale University Press

Muqari, A. 1999: "Yafi'a(A)," *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 110, 30-31

Nahshoni, P., Zissu, B., Sarig, N., Ganor, A. and Avganim, A. 2002: "A Rock-Cut Burial Cave from the Second Temple Period at Ḥorbat Ẓefiyya, Judean Shephelah," *'Atiqot* 43, 49-71

Onn, A. and Weksler-Bdolah, S. 2006: "Khirbat Umm el-'Umdan," *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 118

Oren, E.D. and Rappaport, U. 1984: "The Necropolis of Maresha–Beth Govrin," *Israel Exploration Journal* 34, 114–53.

Osborne, J.F. 2011: "Secondary Mortuary Practice and the Bench Tomb: Structure and Practice in Iron Age Judah," *Journal of Near Eastern Studies* 70-1, 35-53

Ovadiah, R. 1999: "A Burial Cave of the Hellenistic and Early Roman Periods at Hagosherim," *'Atiqot* 38, 33-47

Noshy, I. 1937: *The Arts in Ptolemaic Egypt: A Study of Greek and Ptolemaic Influences in Ptolemaic Architecture and Sculpture*, London

Peleg, Y. 2004: "Beit Ur al-Tahta," *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 116

Peleg, Y. and Feller, Y. 2004: "Rosh Zurim," *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 116

Perrot, G. and Chipiez, C. 1885: *Histoire de l'art dans l'antiquité, III, Phénicie—Cypre*, Paris

Peters, J.P. and Thiersch, H. 1905: *Painted Tombs in the Necropolis of Marissa (Marêshah)*, London

Poltis, K.D. 2006: "The Discovery and Excavation of the Khirbet Qazone Cemetery and Its Significance Relative to Qumran," in: Humbert, J. and Zangenberg, J.(ed.) *Qumran: The Site of the Dead Sea Scrolls: Archaeological Interpretations and Debates*, 213-219

Porath, Y. 1990: "A Jewish Burial Cave near Ben Shemen," 'Atiqot*: Hebrew Series*, 161-164

Porath, Y., Yannai, E. and Kasher, A. 1999: "Archaeological Remains at Jatt," *'Atiqot* 37, 1-78

Puech E. 1998: "The Necropolises of Khirbet Qumran and Ain el-Ghuweir and the Essene Belief in Afterlife," *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 312, 21–36

Rahmani, L.Y. 1961: "Jewish Rock-Cut Tombs in Jerusalem," *'Atiqot* 3, 93-120

Rahmani, L.Y. 1967: "Jason's Tomb," *Israel Exploration Journal* 17, 61-100

Rahmani, L.Y. 1980: “A Jewish Rock-cut Tomb on Mount Scopus,” *‘Atiqot* 14, 49-54

Rahmani, L.Y. 1994: *A Catalogue of Jewish Ossuaries in the Collection of the State of Israel*, Jerusalem

Raviv D., Har-Even B., & Tavger A., 2016: “Khirbet el-Qutt – A Fortified Jewish Village in Southern Samaria from the Second Temple Period and the Bar Kokhba Revolt,” *Judea and Samaria Reseaech Studies* Vol.25, 17-35

Re'em, A. 2001: Two Second Temple Period Burial Caves in Abu-Tor, Jerusalem. *‘Atiqot* 42, 3–8, 319–20

Re'em, A. 2008: “Horbat Kelah,” *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 120

Regev, D. 2017: “The Power of the Written Evidence,” Mediterranean Archaeology Vol.30, 19-50

Regev, D. and Greenfeld, U. 2013: “New Finds from the Samaria-Ssebaste Necropolis,” in: Tekokak, M.(ed.), *K. Levent Zoroğlu’na Armağan Studies in Honour of K. Levent Zoroğlu*, Istanbul, 541-568

Reich, R. 2000: “The Ancient Burial Ground in the Mamilla Neighborhood. Jerusalem,” in: Geva, H(ed.), *Ancient Jerusalem Revealed*, Jerusalem, 111-118

Renan, E. 1871: *Mission de Phenicie*, Paris

Roll, I. 1983: “The Roman Road System in Judaea, The Jerusalem Cathedra,” *Studies in the history, archaeology, geography and ethnopgraphy of the Land of Israel* vol.3, 136-162

Rothschild, J.J. 1952: “The Tombs of Sanhedria – Ⅰ,” *Palestine Exploration Quarterly* 84, 23–28.

Rothschild, J.J. 1954: “The Tombs of Sanhedria – Ⅱ,” *Palestine Exploration Quarterly* 86, 16–22.

Safrai S. 1982: “The Jewish Settlement in the Galilee and Golan in the Third and Fourth Centuries,” in Baras, Z., Safrai, S., Tsafrir, Y. and Stern, M. (ed.), *Eretz Israel from the Destruction of the Second Temple to the Muslim Conquest 1: Political, Social and Cultural History*. Jerusalem., 144–179

Sagiv, N., Zissu, B. and Avni, G. 1998: “Tombs of the Second Temple Period at Tel Goded, Judean Foothills,” *‘Atiqot*, 35, 7-21

Schreiber, T. 1908: *Die Nekropole von Kôm-esch-Schukâfa: Ausgrabungen und Forschungen*, Leipzig

Scurlock, J. 2000: “167 BCE: Hellenism or Rrform?,” *Journal for the Study of Judaism in the Persian, Hellenistic, and Roman Period* 31-2, 125-161

Seligman, J. 2014: “Jerusalem (Hellenistic, Roman, and Late Antique), Archaeology of,” in: Short, C (ed.), *Encyclopedia of Global Archaeology*, New York: Springer, 4198-4208

Sion, O 1993: “Sebastiya,” *Excavations and Surveys in Israel*, 12, 37-38

Smith, P. and Zias, J. 1980: “Skeletal Remains from the Late Hellenistic French Hill Tomb,” *Israel Exploration Journal* 30, 109-115

Sneh, A., Bartov, Y., Weissbrod, T. and Rosensaft, M. 1997: *Geological Map of Israel, 1:200,000 Isr. Geol. Surv. (4 sheets)*, Jerusalem

Sneling, A. 2010: “The Geology of Israel within the Biblical Creation-Flood Framework of History:2.” *The Flood Rocks, Answers Research Journal* 3, 267-309

Solimany, G., Abu Raya, R. and Reich, R. 2011, “A Burial Cave from the Early Roman Period on Diskin Street, Jerusalem,” *‘Atiqot* 65, 93-103

Steckoll S.H. 1968: “Preliminary Excavation Report on the Qumran Cemetery.” *Revue de Qumran* 6, 323–336

Stern, E. 1962: “Measures and Weights,” *Encyclopaedia Biblica* 4, 846-852

Strange, J.F. 1975: “French Hill Excavation 1970-1: Late Hellenistic and Herodian Ossuary Tombs at French Hill,

Jerusalem," *Bulletin of the American Schools of Oriental Research*, 219, 39-68

Sussman, V. 1982: "A Burial Cave near Augusta Victoria," *'Atiqot* 21, 46-48

Taha, H. 1997; "A Salvage Excavation at the 'Abudiyah Church in Abud," *Liber Annuus*, 47, 359-374

Taha, H. 1998; "A Byzantine tomb at the village of Rammun," *Liber Annuus* 48, 335-344

Taha, H. 2003: "A Byzantine tomb at Atara," in: Bottini, G.C., Di Segni, L. and Chrupeata, L.D.(ed.), *One Land - Many Cultures; Archaeological Studies in Honour of Stanislao Loffreda OFM*, Jerusalem, 87-110

Taha, H. 2011: "Archaeological Excavations in Jericho, 1995-2010," R*ome «La Sapienza» Studies on the Archaeology of Palestine & Transjordan* 7, 269-304

Taha, H. and Kooij, G.V.D. 2014: *Tell Balata: Changing Landscape*, Ramallah

Taha, H. and Qleibo, A.H. and Daibes, K. 2012: *Jericho - A Living History - Ten Thousand Years of Civilization*, Ramallah

Tal, O. 2003: "On the Origin and Concept of the Loculi Tombs of Hellenistic Palestine," *Ancient West and East* 2/2, 288-307

Tal, O. and Taxel, I. 2010: "A Re-Appraisal of the Archaeological Findings at Tel Hashash: On the Archaeology of the Yarqon Estuary from Classical Times to Late Antiquity," *Palestine Exploration Quarterly* 142-2, 95-126

Tappy, R.E. 2014: "A Visitor at Samaria and Sebaste," in: Wagemakers, B.(ed.), *Archaeology in the Land of 'Tells and Ruins'*, Oxford, 73-87

Tendler, A.S., Terem, S. and Eshed, V. 2019: "Typical and Atypical Burial in the Late Hellenistic–Early Roman Periods at Horvat Ashun – Modi'in Hills," *Highland's Depth* 9, 15-40

Toueg, R. 2015: "Modi'in," *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 127

Tufnell, O. 1953: *Lachish III. The Iron Age*, London

Tzaferis, V. 1970: "Jewish Tombs at and near Giv'at ha-Mivtar, Jerusalem," *Islael Exploration Journal* 20, 18-32

Ussishkin, D. 1993: *The Village of Silwan. The Necropolis from the Period of the Judean Kingdom*, Jerusalem

van der Horst, P.W. 2001: "The Samaritan Languages in the Pre-Islamic Period," *Journal for the Study of Judaism in the Persian, Hellenistic, and Roman* 32-2, 178-192

Veltri, G. 1998: "On the Influence of "Greek Wisdom": Theoretical and Empirical Sciences in Rabbinic Judaism," *Jewish Studies Quarterly*, 5, 300-317

Venit, M.S. 1988: "The Painted Tomb from Wardian and the Decoration of Alexandrian Tombs." *JARCE* 25, 71-91.

Venit, M.S. 2002: *Monumental Tombs of Ancient Alexandria*, United Kingdom

Weksler-Bdolah, S. 2012: "Horbat 'Illin (Upper): Rock-Cut Installations from the Late Hellenistic and Early Roman Periods, and Remains of a Settlement from the Byzantine and Early Islamic Periods," *'Atiqot* 71, 13-75

Weiss, Z. 2010: "Burial Practices in Beth Sheʿarim and the Question of Dating the Patriarchal Necropolis," in: Magness, J., Schwartz, S. and Irshai, O.(ed.), *Follow the Wise: Studies in Jewish History and Culture in Honor of Lee I. Levine*, 207-231

Wolff, R. S. 2002: "Mortuary Practices in the Persian Period of the Levant," *Near Eastern Archaeology* 65-2, 131-137

Vitto, F. 2000: "Burial Caves of the Second Temple Period in Jerusalem: Mount Scopus, Giv'at Hamivtar, Neveh

Ya'aqov," *'Atiqot* 40, 65-121

Yeger, D. 2016: "Jerusalem, Wadi el-Joz," *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 128

Yekutieli, Y., Ben-Yishai, Y. and Harpak, T. 2016: "Ben Shemen," *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 128

Yezerski, I. and Hazerim, K. 2013: "Typology and Chronology of the Iron Age II–III Judahite Rock-cut Tombs," *Israel Exploration Journal* 63, 50-77

Zelinger, Y. 2001: "A Jewish Burial Cave at Jifna," in: Eshel, Y.(ed.), *Judea and Samaria Research Studies: Proceedings of the 10th Annual Meeting*, 108-113

Zertal, A. 1992: *The Manasseh Hill Country Survey: The Shechem Syncline*, Tel Aviv

Zias J. 1992: "Human Skeletal Remains from the Mount Scopus Tomb," *'Atiqot* 21, 97–103.

Zissu B. 1995: *The Necropolis of Jerusalem in the Second Temple Period. New Discoveries 1980*, Jerusalem

Zissu, B. 1998: ""Qumran Type" Graves in Jerusalem: Archaeological Evidence of an Essene Community?," *Dead Sea Discoveries* 5-2, 158–171

Zissu, B. 1999: "Khirbet el-Basha," *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 110. 99-102

Zissu, B. 2000: "Khirbet esh-Shari'a," *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 111, 104-105

Zissu, B. 2000: "'Iyyé Naḥash," *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 111, 80

Zissu, B. 2001: "Horbat Lavnin," *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 113

Zissu, B. 2005: "A Burial Cave with a Greek Inscription and Graffiti at Khirbat el-'Ein, Judean Shephelah," *'Atiqot* 50, 27-36

Zissu B., 2007: "A Burial Cave from the Second Temple Period at El-Maghar on the Southern Coastal Plain," *Buletin of the Anglo- Israel Archaeological Society* 25, 9-17.

Zissu, B., and Ganor, A. 1997: "Jerusalem—Abu Tor." *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 107, 87–88

Zissu, B., Ganor, A., Klein, E. and Klein, A. 2013: "New Discoveries at Horvat Burgin in the Judean Shephelah: Tombs, Hiding Complexes, and Graffiti," *Palestine Exploration Quarterly* 145-1, 29-52

Zissu, B. and Greenhut, A. 2004: "Horbat Qerumit, Survey," *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 116

Zissu, B. and Klein, E. 2011: "A Rock-Cut Burial Cave from the Roman Period at Beit Nattif, Judaean Foothills," *Israel Exploration Journal* 61-2, 196-216

Zissu, B. and Kloner, A. 2015: "The Necropolis of Hellenistic Maresha Judean Foothills, Israel," *Hypogea 2015 - Proceedings of International Congress of Speleology in Artificial Cavities*, 100-114

Zissu, B. and Perry, L. 2015: "Hasmonian Modi'in and Byzantine Moditha: A Topographical–Historical and Archaeological Assessment," *Palestine Exploration Quarterly* 147-4, 316-337

杉本智俊他　2014：「二〇一三年度ワディ・タワヒーン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』83:2/3, 119-138

杉本智俊他　2015：「二〇一三年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』84:1-4, 523-536